機動戦士ガンダムSEED~Forgotten War ~

caribou

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

Ｃ．Ｅ．７０、第一次連合・プラント大戦、通称”ヤキン・ドゥーエ戦役”開戦。

ニュートロンジャマーとモビルスーツの登場により劣勢に立たされた地球連合は、ザフトに対抗すべく自らもモビルスーツ開発に着手。

大西洋連邦はその一環として、特別評価試験部隊〈ラプターファングス〉を組織した。

地球連合軍の主力モビルスーツの開発を目的とするこの部隊には、大西洋連邦、ユーラシア連邦、東アジア共和国から精鋭を招集。

訓練校を首席卒業した大西洋連邦所属のパイロット、ウォルト・マクミランも、その一人だった。

これは歴史の闇に忘却された、とある『真実』の記録である。

目次

guide
登場組織・登場人物 1
メカニック設定 5
世界観設定 9
prologue
プロローグ 13
episode01
第一話 19
第二話 29
第三話 40
episode02
第四話 52
第五話 62
第六話 68
第七話 74
episode03
第八話 80
第九話 86
第十話 91
第十一話 98
第十二話 104
第十三話 111
第十四話 119
第十五話 125

第十六話 130
第十七話 136
第十八話 143
episode04
第十九話 154
第二十話 162
第二十一話 171
第二十二話 181
第二十三話 189
第二十四話 198
第二十五話 206
第二十六話 212
第二十七話 217
episode05
第二十八話 226
第二十九話 235
After the mission
ボブの夏休み 241

guide

登場組織・登場人物

組織紹介

●技術研究開発局

大西洋連邦の兵器研究、開発を担う部署。大西洋連邦製のモビルスーツ開発を担当しているのもこの部署である。

フェイズシフト装甲などの特殊技術においてはプラントの開発局を凌ぐ技術力を有している。

●特別評価試験部隊〝ラプターファングス〟

技術研究開発局所属の試験部隊。連合初の量産型モビルスーツGAT―01A1《ダガー》の試験のため設立された。

旧プラント理事国である大西洋連邦、ユーラシア連邦、東アジア共和国の3ヶ国から、パイロット、メカニックに至るまで精鋭を招集した部隊。

これは、大西洋連邦製のモビルスーツの配備に際し、その開発力、性能を他国に示すための措置でもある。

《ストライクダガー》の正式配備によるパイロットの錬度不足を解消するため教導部隊としての任務に従事することとなる。

●中央作戦群

大西洋連邦・統合参謀本部直属の軍事組織。通常の部隊指揮系統と異なり各司令部の隷下ではなく参謀本部からの直接の命令で行動する。そのため通常の部隊よりも高い権限を有しており、ある程度の自由裁量を認められている。

組織の特性上、軍内部でも特に優れた能力を持つ者が配属されるエリート部隊だが参謀本部直属であるが故に議会からの直接的な影響を強く受ける任務が多く、〝政治家の駒〟、〝議会の狗〟などと揶揄される。

●第３０５特務試験小隊”ラーミナ”
中央作戦群所属の試験部隊。ギリアン・ダレル大佐が総責任者を務める計画を推進中だが詳細は不明。すでに多数の試験型モビルスーツを有している。

登場人物紹介
技術研究開発局・特別評価試験部隊”ラプターファングス”
●ウォルト・マクミラン
本作の主人公で階級は少尉。コールサインはラプター０４。
大西洋連邦のパイロット訓練校を首席で卒業したエリート。
卒業直後、特別評価試験部隊”ラプターファングス”に配属となる。
カナダ出身。
●ケイ・ハヤミ
階級は少尉。コールサインはラプター０５。
東アジア共和国・太平洋方面軍から出向。
日系でフランクな性格。甘党。
●ミーリャ・シャロノワ
階級は少尉。コールサインはラプター０６。
ユーラシア連邦・ロシア西部方面軍から出向。
ロシア中部の出身。穏やかな性格から新任組のまとめ役となることが多い。

●ハンフリー・ルース
階級は大尉。コールサインはラプター０１。
大西洋連邦所属で”ラプターファングス”の隊長。
北米のコロラド州出身。軍人気質で自他ともに厳しいが部下からは慕われる良き指揮官。
●イエンスン・リー

階級は中尉。コールサインはラプター０２。
東アジア共和国・中部方面軍から出向。部隊のナンバー2。
中国北部の出身。非公式の賭けに手を染めるなど真面目とは言い難い性格だが面倒見が良い。
●レオンス・ヴィアン
階級は中尉。コールサインはラプター０３。
ユーラシア連邦・西欧方面軍から出向。
フランス東部の出身。新任を部隊の足手まといと見なしているためあまり良い感情を抱いていない。二枚目で操縦技術に関しては部隊でトップクラスのため基地の女性からの人気も高い。
●チヨ・アーウィン
階級は中尉。部隊の整備班長。
大西洋連邦所属で北米のミシガン州出身。
明るく面倒見のいい性格から部隊の母的立場。
●ボブ・アブドゥル
部隊の整備兵。
大西洋連邦所属で北米のニューヨーク州出身。
ウォルトと同じランドルフの訓練校の整備科を卒業。当時からウォルトとは馬が合い親友の間柄。

中央作戦群・第３０５特務試験小隊”ラーミナ”
●フィーリア・ブラウン
階級は少尉。コールサインはラーミナ０１。
第３０５特務試験中隊”ラーミナ”のテストパイロット。
非常に高いモビルスーツ操縦技術を有しており、ダレルが進める『計画』に深く関わっているようだが詳細は不明。
●ディック・リーヴス
階級は大尉。
”ラーミナ”の指揮官。
ダレルとともに『計画』を推進中。
●ギリアン・ダレル

階級は大佐。
”ラーミナ”を組織した張本人で『計画』の総責任者。

メカニック設定

○モビルスーツ

●ＧＡＴ―Ｘ０１Ａ１《ダガー》

『ラプターファングス』が評価試験を行っていた《１０５ダガー》の試作機。

三機が生産され、その装甲は二十世紀の傑作制空戦闘機の試作機をモチーフにライトグレーとオレンジのツートンに塗装されている。

●ＧＡＴ―０１Ａ１ＭＤ

ＧＡＴ―０１Ａ１の先行量産型。

大戦中、二十機が生産されたが、より安価で生産性の高いＧＡＴ―０１《ストライクダガー》の量産が優先されたため本格的な量産は戦後になった。

大戦中期、『ラプターファングス』に新たに配備された三機は教導隊として部隊を機能させるために送り込まれた機体で、この三機は試作機と同じくライトグレーとオレンジのツートンにリペイントされていた。試作機との間に大きな性能差はないが、ＯＳの更新が図られている。

型式番号のＭＤはＭａｎｕｆａｃｔｕｒｉｎｇ　Ｄｅｍｏｎｓｔｒａｔｉｏｎ『製造実証』の意。

●ＧＡＴ―０１Ｄｏｐ《ロングダガー》ＯＰ計画仕様

ＧＡＴ―０１Ｄ《ロングダガー》に、ジェネレーターの改修を施した実験機。ジェネレーターの強化により、総合性能は向上しているものの、代償として稼働時間が短縮されている。

オーガスト・ノーランから第３０５特務試験小隊へと秘密裏に提供された。

●ＧＡＴ―０１《ストライクダガー》東アジア共和国仕様

基本性能は同一だがカラーリングがライトグレーとオリーブドラブのツートンへと変更されている。

大陸の最前線や、沖縄基地への配備がすすめられている。

○航空機

●F―7G《スピアヘッド》海軍仕様

《スピアヘッド》の海軍仕様。現場のパイロットからは《シースピア》の愛称で呼ばれることが多い。ランディングギアの強化、主翼の大型化と折り畳み機構の追加など、艦載機としての性能が付与されている。低速域での安定性確保を目的にした主翼の大型化だが、結果的に音速域での機動力向上にも一役かっており、E型譲りの優れたアビオニクスとの相乗効果でE型と比べて若干の運動性の向上が見られる。

本来《スピアヘッド》は垂直離着陸能力を有するが、燃料節約のため発艦はカタパルトにて行う。また、燃料枯渇時の着艦対策としてアレスティングフックも追加されている。

G型は単座型であり複座型のH型も存在する。

○艦艇・

●ドワイト・?・アイゼンハワー級モビルスーツ搭載型航空母艦『アイゼンハワー』

アイゼンハワー級空母の一番艦。大西洋連邦海軍太平洋艦隊第3艦隊に所属する。モビルスーツ搭載型空母へと改修され、モビルスーツと航空機の同時運用を可能とした、世界で初めての航空母艦。愛称は『アイク』。

カタパルトは航空機、モビルスーツそれぞれ2基ずつ、計4基を備える。

試験航海も兼ねて『ラプターファングス』を初めとした大西洋連邦モビルスーツ部隊を沖縄へと送り届ける。

●　長門型ミサイル駆逐艦『長門』

長門型ミサイル駆逐艦の一番艦。イージスシステムを搭載し、高い対空戦闘力を有する。東アジア共和国の新型艦で艦名は日本の地名に由来する。

大西洋連邦のデモイン級を設計のベースとしており、その発展強化型ともいえる艦。

イージスシステムにより非常に高い艦隊防空能力を備えるが、

ニュートロンジャマーの影響により、その力を最大限発揮するのは難しくなった。しかしながら、早期警戒機などを介することで、これまでと遜色ない正確なデータリンク射撃が可能なため、東アジアにおける重要な戦力の一つとなっている。

エイプリルフールクライシス後に建造された長門型は、対モビルスーツ戦能力の強化が施されると同時に、ステルス能力の一部がオミットされており、最適化が図られている。このタイプは加賀型と呼ばれ、長門型と区別されている。

長門の名を継ぐ艦としては四代目。三代目長門は再構築戦争時に日本で運用されていた護衛艦である。

兵装

２５ｍｍ対空機関砲×３基

Ｍｋ―８２多目的ＶＬＳ×前部両舷各１基（３２セル）、後部１基（４０セル）

Ｍｋ―７４多目的発射管×両舷６基

２５０ｍｍ速射砲×１基

加賀型ミサイル駆逐艦『加賀』

加賀型ミサイル駆逐艦のネームシップであり、エイプリルフールクライシス後に建造された長門型三番艦以降の艦型。

東アジア海軍における次世代駆逐艦として建造された長門型だが、ザフトが地球に投下したニュートロンジャマーにより、過剰なステルス能力は無用の長物と化した。

さらに、モビルスーツの登場により、従来の戦闘艦は窮地に立たされることとなる。

戦闘艦に搭載されている近接防御火器の類は、航空機やミサイルを迎撃するには十分な威力を発揮するが、航空機に比べ厚い装甲を持つモビルスーツを迎撃するとなると、その威力不足が囁かれたのだ。

水上艦の対モビルスーツ戦能力の不足を重く見た地球連合は、艦のステルス性と武器システムの見直しを決定。

具体的には、ニュートロンジャマー影響下では過剰と思われるステ

ルス能力のオミットと、モビルスーツを迎撃可能な火器群の搭載である。

これを受けて、新たに建造される長門型の三番艦は、ステルスに関する電子機器を簡略化。代わりに武器管制システムをより強力な物に換装、近接防御火器の大口径化と増設を図った。さらに、大西洋連邦の艦でも、水上艦ではまだ一部の艦にしか搭載されていないエネルギー収束火線砲、すなわちビーム兵器の搭載を小口径ながら実現した。

こうして完成した長門型三番艦は、その艦名から加賀型として長門型と区別されるようになったのである。

後に長門型の武装もこの仕様に改修され、名実ともに加賀型と並ぶ東アジア最強クラスの戦闘艦となった。

兵装

２５ｍｍ対空機関砲×３基

７５ｍｍ対空自動機関砲システム『イーゲルシュテルン』×２基

Ｍｋ―８２多目的ＶＬＳ×前部両舷各１基（３２セル）、後部１基（４０セル）

Ｍｋ―７４多目的発射管×両舷６基

２２０ｍｍ連装ビーム砲×１基

世界観設定

世界観設定

●地球連合

Ｃ．Ｅ．７０年に国際連合の発展的解消を経て誕生した国家連合体。

Ｃ．Ｅ．７１年時点では、プラント理事国である大西洋連邦、ユーラシア連邦、東アジア共和国を中心とし、南アフリカ統一機構、南アメリカ合衆国などが加盟している。

加盟国における共同軍事作戦などでは、各軍の指揮系統は地球連合軍として統一され、その場合は地球軍、連合軍などと呼ばれる。地球連合軍の総司令部はアラスカ基地に存在し、アラスカ統合最高司令部、通称「ジョシュア（ＪＯＳＨ―Ａ：ｊｏｉｎｔ　Ｓｕｐｒｅｍｅ　Ｈｅａｄｑｕａｒｔｅｒｓ―Ａｌａｓｋａ）」と呼ばれる。

《地球連合に属する主な国家》

○大西洋連邦

アメリカ、カナダ、メキシコ、イギリス、アイルランド、アイスランド、グリーンランドなどによる連邦国家であり、首都はワシントンＤ．Ｃ：。

反コーディネイター感情が強く、ブルーコスモスを初めとした反コーディネイター主義者を国内に多く抱えている。企業の重役や連邦議会の議員といった人物にも、ブルーコスモスは存在しており、政治的な影響力は非常に強い。

自国で開発した兵器を地球連合軍の主力兵器として輸出しており、重要な外貨の入手元となっている。

○ユーラシア連邦

ロシア、ＥＵ諸国による連邦国家で、首都はブリュッセル。

大西洋連邦、東アジア共和国と並び、地球連合でも強い発言権をもち、軍事力も高い。

旧西側諸国と旧東側諸国でコーディネイターに対する偏見に差が

あり、ロシア及び東欧に位置する地域では、大西洋連邦ほどではないにしろ依然コーディネイターへの疑念は強い。
アクタイオン・インダストリー社と共同で、独自のモビルスーツ開発計画を進めている。しかしながら、地球連合軍の主力モビルスーツに《ダガー》系列が選定されたため、現在計画は凍結か否か審議中。
○東アジア共和国
日本、中華人民共和国、朝鮮民主主義人民共和国、大韓民国、モンゴル、台湾など極東地域が集合した共和国。首都は台北。
大西洋連邦、ユーラシア連邦と並ぶプラント理事国のうちの一つであり、地球連合での発言力も強い。
プラント理事国である他二国と比べると、コーディネイターに対する偏見は少ない。
工業力が高く、地球連合軍における兵器生産の多くの割合を担っている。
〈大西洋連邦に属する組織〉
○大西洋連邦軍
大西洋連邦の国防軍。陸海空宇宙軍の他に、その軍種を地域別、機能別に統合した統合軍としての指揮・運用能力も持つ。
地球連合軍の中でも最大規模の軍事力を保有しており、その主力といっても過言ではなく、『地球圏最強の軍隊』などと渾名される。
また、地球連合のなかでも最初にモビルスーツの開発に成功しており、技術力も非常に高い。
大西洋連邦軍に所属する部隊
・特別評価試験部隊〝ラプターファングス〟
兵器開発を担う国防省直轄の組織、技術研究開発局所属の試験部隊。地球連合軍における主力モビルスーツの開発を目的として設立された。対ザフトのための決戦兵器的側面をもつモビルスーツの開発を担うため、パイロットはもちろんのことメカニックに至るまで、トップクラスの精鋭が所属している。そのため、部隊には出向という形でユーラシア連邦、東アジア共和国の各軍からもパイロットが派遣されている。これは、当時モビルスーツの本格配備に対して懐疑的な

見方が大勢を占めていた地球連合各国へ、テストパイロットを通じて、その性能を効率的に伝達するための措置であったと言われる。
余談ではるが、新概念兵器であるモビルスーツに対する不信感を拭うことができない両国から、それぞれエース級といっても差支えない精鋭が派遣されたのは、両国の軍首脳部にも、モビルスーツに興味を示す者が少なからず存在した証左と言えよう。
このような背景から、〝ラプターファングス〟は各国の政治的思惑が集約される、非常に政治色の強い部隊となった。
モビルスーツの基礎技術の確立が完了した後は、連合軍内部でも突出した錬度を買われ、演習における各部隊のアグレッサーを担う教導隊としての活動が主になる。しかし、その所属は変わらず技術研究開発局にあり、これは教導任務を通してモビルスーツの部隊単位での運用ノウハウをよりスムーズに蓄積することで、モビルスーツの戦術・戦技研究へと活かすためである。
〝ラプターファングス〟という部隊名の由来は、大西洋連邦のシンボルであるハクトウワシ、ひいては地球連合を＜猛禽＞に例え、本来猛禽類には存在しない＜牙＞をモビルスーツに例えることで、『地球連合軍には存在しなかったモビルスーツを新たに配備する』という大西洋連邦国防省の思惑が込められている。
・中央作戦群
大西洋連邦軍における最高機関である統合参謀本部直属の独立部隊。通常の部隊指揮系統と異なり各司令部の隷下ではなく参謀本部からの直接の命令でのみ行動する。そのため通常の部隊よりも高い権限を有しており、ある程度の自由裁量を認められている。
その任務は要人警護からテロ組織の殲滅、果ては非正規戦まで多岐にわたるが、いずれも政治色が強く通常部隊では任務遂行上問題がある場合が多いことから〝政治家の駒〟、〝議会の狗〟などと他の部隊からは揶揄される。
シンボルはハクトウワシと交差した二振りの剣。これはハクトウワシが大西洋連邦議会、二振りの剣はそれぞれ秩序と正義を象徴している。

・第３０５特務試験小隊〝ラーミナ〟

中央作戦群所属の試験部隊。改修を施した独自の実験用モビルスーツを多数配備しており、その改修はいずれもＡＨＩのオーガスト・ノーラン氏によるもの。

ギリアン・ダレル大佐が総責任者を務める『Ｐ計画』を遂行中だが、その全容は未だ謎に包まれている。

prologue
プロローグ

北米大陸・テキサス州　地球連合軍・大西洋連邦・北方軍　ランドルフ基地

ひどく殺風景な廊下が続いている。その廊下がどこまでも続いているような、途方もない錯覚が覆いかぶさってくるようだった。そんな風に思ってしまうのは、全てここ数日の苛立ちのせいだと自分を納得させながらウォルト・マクミラン少尉は機械的に歩を進めた。

基地の幹部クラスの執務室が存在するN―4エリアはウォルトが普段過ごしているB―2エリアとは違う、どこか冷え切った生活感のない雰囲気を漂わせていた。それは、B―2との僅かな外見的差によるものではないだろう。

そう感じてしまうのも、自分自身の苛立ちのせいかもしれない、とウォルトは頭の片隅で思った。

彼の苛立ちの理由。それは、本人にも明らかだった。

八日前、ウォルトはこの基地のパイロット訓練校を首席で卒業し、少尉として任官した。しかし、その後ウォルトに言い渡されたのは部隊への配属ではなく、基地内待機だった。

ウォルトの同期達は皆、翌日にはそれぞれの配属先へ向かった。

現在地球連合は《プラント》との戦時下にあり、一人でも多くの兵士を必要としている。そんな中で一人、明確な理由も伝えられず、基地内待機を命ぜられそのまま一週間以上もなんの沙汰がないという状況にウォルトは焦り、その焦りが苛立ちへと還元されているのだった。

「たく、いったいどうなってんだよ…」

ウォルトは無意識の内に呟いていた。

訓練校を卒業、しかも首席だったにも関わらずこの扱いはどう考えても普通ではない。では、何故今自分はこんな目に合っているのか。そして、何故自分は今このエリアに呼び出されたのか。そのことを

ウォルトは繰り返し考えてみたがそれらしい答えは結局思い浮かばない。
ただ今言えることは、このタイミングでＮ―４エリアに呼び出されたということはこの不当な待遇となんらかの関係があるということだけだった。
ウォルトは不意に一つの扉の前に立ち止った。観音開きのその扉は簡素ながらも他の部屋にはない装飾が施されている。
ウォルトは扉を軽くノックした。
「ウォルト・マクミラン少尉、出頭しました」
扉に向かいそう告げると、部屋の中から落ち着いた返事が返ってきた。
「入りたまえ」
ウォルトは基地司令執務室の扉を開いた。

※

Ｃ．Ｅ．７０、〝血のバレンタイン〟の悲劇によって、地球、《プラント》間の緊張は、一気に本格的武力衝突へと発展した。
誰もが疑わなかった、数で勝る地球軍の勝利。が、当初の予測は大きく裏切られることとなった。
ザフトが独自に開発した人型機動兵器《モビルスーツ》。ニュートロンジャマーの影響で有視界戦闘を余儀なくされた地球軍は《モビルスーツ》の機動力の前に大敗を重ねていくことになる。
そして遂には、ザフト軍の地球への本格侵攻を許してしまう結果となった。《モビルスーツ》は重力下でも戦闘機や戦車には不可能な立体的な機動を可能とし、地球軍を翻弄した。　追い詰められた地球軍は自らも《モビルスーツ》の開発に着手。大西洋連邦主動のこの計画は《Ｇ兵器開発計画》と呼ばれることとなった。この計画は《モビルスーツ》開発のノウハウが大西洋連邦になかったために、難航したものの、オーブ連合首長国のモルゲンレーテ社の技術協力によりＧＡＴシリーズと呼ばれる試作《モビルスーツ》を完成させた。
しかし、このシリーズはその高性能と引き換えにコストの高騰という問題が表面化することになる。さらに、計画がザフトに露見、五機

のＧＡＴシリーズのうち四機がザフトの精鋭、クルーゼ隊に奪取されるという事件が起きた。
それとほぼ時を同じくしてＧＡＴシリーズをベースにした量産機の開発が始まることになる。そして、その量産機のテストパイロットとして大西洋連邦は各国の優秀なパイロットを招集、特別評価試験部隊〈ラプターファングス〉を創設した。
これは、後の地球の運命を左右した、《モビルスーツ》による戦いと、定められた宿命に命を懸けて挑んだパイロット達の記録である。

※

北米大陸・カリフォルニア州　地球連合軍・大西洋連邦・北方軍
エドワーズ基地
蒼天を黄土色の大地がくっきりと縁取り、地平線を形作る。地球が球体であることを知覚できるほどの広大な荒野を乾いた風が微かに撫でた。
その大地を三つの巨大な人型が悠然と闊歩する。淡灰色と橙色を基調にしたその人型はすっきりとした直線で構成され、頭部はバイザー型のカメラと左右に突き出たアンテナが目を引く。
ＧＡＴ―Ｘ０１Ａ１《ダガー》。通称《１０５ダガー》と呼ばれる大西洋連邦が本格的な量産を前提に開発した新型モビルスーツだ。
その中の一機、三番機のコクピットでレオンス・ヴィアン中尉は変わり映えしない乾燥したカリフォルニアの風景を、何を思うでもなく眺めていた。
不意に通信回線が開き、ウィンドに無表情な男性オペレーターの顔が映し出される。
『ＣＰ（コマンドポスト）よりラプター各機、１Ｇ下での長時間歩行試験の全項目消化を確認。帰投を許可する』
表情の通り感情を抑えた声でオペレーターが告げる。
『ラプター０１了解。エドワーズ基地へ帰投する』
精悍な顔立ちの壮年のパイロットが静かに答えた。ヘーゼルの瞳は鋭い眼光を湛え精悍な顔立ちに更なる凄みを付与している。
〈ラプターファングス〉の隊長であるハンフリー・ルース大尉だ。

『これでやっとこの風景ともおさらばできますね』
ラプター02、イエンスン・リー中尉の呆れたような表情がウィンドに現れる。
『乾ききった大地はもううんざりなんで、そろそろ蒼い海でも拝みたいもんですよ』
『その前にヒヨッコ共の教育が残っているだろ。もう少しこの風景と付き合うことになりそうだな』
リーの愚痴にルースが冗談めいた口調で答える。いつも通りの上官と先輩の会話にレオンスは黙って耳を傾ける。
『少しは使える奴らだといいんですがね』
レオンスは今日中には新人が到着するということを思い出し、軽く表情を歪めた。
新人の相手などできればしたくはない。しかし、部隊での立場上その役目が自分に回って来ることは明らかだった。
『お前はどうだ、ヴィアン中尉。どんな新人が来ると思う?』
出し抜けにルースが話しを振る。表情を慌てて繕いながらレオンスはそれに答えた。
「どうでしょうね。隊長が引き抜いたのなら既にご存じなのでは?」
『私が見たのは経歴だけだ。直接話したわけではないから人間まではわからんよ』
ルースのパイロットを見抜く目は本物だ。その為、新人がパイロットとして優秀なことは間違いないだろう。しかし、新人という時点でレオンスにとっては面倒な相手以外の何物でもなかった。
『もしかして、あれじゃないか?』
リーの機体が示す方向をレオンスも確認する。西の空から小型の兵員輸送機が接近していた。やがて、輸送機は高度を下げ、エドワーズ基地への着陸態勢に入った。

※

「少尉はどこの訓練校のご出身なのですか?」
軍用四駆を運転しながら迎えの下士官がウォルトに話しかける。

輸送機からこの迎えの四駆に乗り換えてからというもの、ウォルトは下士官の質問攻めにあっていた。
「テキサスのランドルフだ」
終わる気配のない質問に、少しうんざりしながらもウォルトは律儀に答えた。それを聞くと下士官は表情を輝かせながらウォルトを見た。
「ランドルフって教育・訓練軍団の本拠地じゃないですか！そこを首席で卒業ってことは文字通り連合軍で最高のパイロットってことですよね!?」
抑えきれない興奮を前面に押し出しながら下士官はさらに瞳を輝かせる。
首席で卒業という情報をウォルトは教えた覚えがなかったが既に知っているということは自分の存在がこの基地で多少なりと話題になっていたのかもしれない、とウォルトは推測した。そして、自分がこの基地でどのように思われているのか少し興味が湧いてきていた。
「さあな、随分と派手な評価だが、俺は一体この基地でどう思われてるんだ？」
それとなく質問を返す。
「連合製の新型モビルスーツに乗ることになったエリートパイロットだって基地では噂になってますよ」
その台詞にウォルトは二月前の出来事を思い出す。
ランドルフ基地の司令に呼び出された日、ウォルトは基地司令直々にこの任務を受領した。地球連合の次期主力兵器のテストパイロット。それが彼に与えられた任務だった。
それから二か月間ウォルトはモビルスーツの運用方法、操縦技術などを徹底的に教育され、やっと今日エドワーズ基地に降り立ったのだ。
旧世紀の時代から数々の新型兵器のテストを行ってきたエドワーズ基地は一種の憧れの対象でもあった。そこにテストパイロットとして配属されることはウォルトにとっても、栄典だった。
「あ、少尉！見てください！あれですよ、少尉が乗るモビルスーツ

は」
下士官が右手を示しながら叫ぶ。
そこには18メートルはあろうかという巨大な三機の人型が基地の発着場にゆっくりとランディングする光景があった。スリムなシルエットはザフト製のそれとは明らかに違う雰囲気を放っている。
淡灰色と橙色のツートンで塗装されたそのモビルスーツはカリフォルニアの陽光を浴びて黄金色に煌めいている。ウォルトはその鮮烈な光景に一瞬目を奪われた。

ｅｐｉｓｏｄｅ０１

第一話

北米大陸・カリフォルニア州　地球連合軍・大西洋連邦・北方軍
エドワーズ基地

外部モニターに照らされた薄暗いコクピットの風景、すでに体に馴染んだシート、自らの手足の一部とさえいえる操縦桿とフットペダル。

そのすべてが〈彼女〉に常人でいう自室にいるような安心感を与えていた。

「見つけた…」

静寂が支配するコクピットで〈彼女〉の微かな呟きが不意にその静寂を破る。

〈彼女〉が駆る機体は徹底的に無駄を排した肉体のごとく細身でその装甲は黒く塗り固められている。漆黒の巨人――――ＧＡＴ―０１《ストライクダガー》はその呟きに呼応するように前進を開始した。

目前には二機の《ジン》。翼を模したようなスラスターは天使のそれを想起させる。

だが今の〈彼女〉は敵機の姿などに興味はない。そこにあるのは〈彼女〉にとって、ただの殲滅すべき敵でしかないのだ。

漆黒の《ストライクダガー》の接近に気付いた《ジン》の７６ｍｍ重突撃機銃がこちらを指向する。

しかし《ジン》がそれを撃つ瞬間は訪れなかった。《ジン》のマシンガンから７６ｍｍ弾が放たれるよりも一瞬早く漆黒の機影がその銃身をビームサーベルで溶断したのだ。

もう一機の《ジン》が僚機を援護しようと７６ｍｍ弾を《ストライクダガー》の背後から撃ち散らすがその機影を捉えることはできない。

まるで背後さえも見えているような最低限の機動で《ストライクダ

ガー》は砲弾を回避してしまう。
そして次の瞬間には《ジン》の格闘戦範囲内に滑るように侵入し、未だその機動に対応できていない敵機を神速の斬撃で屠る。
ようやく重斬刀を抜いたジンが反撃にでようとするが〈彼女〉にとってその動きはスローモーションにも等しい愚鈍さだった。
《ジン》の重斬刀が漆黒の装甲を捉えるより数瞬早く《ストライクダガー》のビームサーベルが《ジン》の胸部を袈裟懸けに切り裂いた。
その瞬間《ストライクダガー》の運動エネルギーはゼロと化し、一瞬の硬直が生まれた。
それを狙ったかのごとく潜んでいた最後の《ジン》が《ストライクダガー》に背後から斬りかかる。
しかし〈彼女〉は焦らなかった。
《ストライクダガー》は機体の負荷を最低限に抑えるためにその左主腕のシールドを投棄。サーベルを逆手に持ち替え背後の《ジン》のコクピットを正確に貫く。
結局一撃も与えることができないまま《ジン》は沈黙した。
〈彼女〉が機体ステータスを確認すると強度保障を大幅に超過した機動を強いられた両脚部、両主腕に過負荷の表示が閃いている。
『ＣＰ（コマンドポスト）よりラーミナ０１、格闘戦機動プログラムＢ終了。別命あるまで待機せよ』
「了解」
〈彼女〉は短くこたえる。常人なら少なからず肉体的ダメージを負うはずの高Ｇ機動をやってのけたにも関わらず、〈彼女〉は呼吸一つ乱さない。
「はあ…、やはりこの機体では私の理想には程遠いか……」
静かな呟きがコクピットの薄闇に溶けるように伝播した。

※

着任の手続きを一通り済ませると、担当官は試験部隊が使っている第３ブリーフィングルームへ向かうようにウォルトに告げた。
（大方、着任の挨拶といったところだろう）
まだ基地内を把握できていないウォルトは、所々にある案内板と担

当官が渡してくれたブリーフィングルームへの道順を示したメモを見比べながら歩いた。
基地の雰囲気はランドルフ基地とさして変わらず戸惑うことはないが、その敷地面積は段違いだった。
司令部ビルのみでこの大きさでは基地全体のスケールはかなりのものだろう。
「さすがは北米最大の兵器開発基地だな」
その広大で複雑な構造に辟易しながらもウォルトは確実に歩を進める。
しかし、メモと案内板に誤差が生じ始めていることにウォルトが気付くのにさほど時間はかからなかった。
「おいおい、さっきの階段を上がればブリーフィングルームはすぐのはずだろ……」
ウォルトは焦りも隠さずに我知らず呟いた。
四階への階段を上がってすぐ左側にブリーフィングルームはあるとメモには示してある。
しかし、ウォルトが上った階段の左側にあったのは便所だった。
(案内板が間違っているとは思えない。だとするとこのメモが間違っているのか…?)
ウォルトは辺りを見回すが人影はない。ブリーフィングルームの位置を人に尋ねるのは無理そうだと判断すると、ウォルトは元来た階段を降り始めた。
(たく、着任早々ブリーフィングに遅れるなんて冗談じゃねえぞ…)
そのせいで先任に目を付けられる状況などもってのほかだ。
焦燥感に追い立てられながらウォルトは小走りで元来た道を戻る。
最悪の場合、担当官にもう一度確認するしかない。
「おいッ!そこの!」
二階への階段に差し掛かったところで背後からかけられた声にウォルトは気づいた。
反射的に振り向くと若いアジア系の男が自分に駆け寄ってきていた。黒髪で年齢はウォルトとさして変わらないだろう。

階級章から男が少尉であることを確認する。
「お前、《ラプターファングス》の新任だな？」
「はッ、本日より着任致しましたウォルト・マクミラン少尉であり……」
階級が同じとはいえ初対面の相手であるためあえて丁寧な言葉づかいを心掛ける。
しかし、最後まで言い終わる前にアジア系の少尉はその言葉を遮った。
「そうか！お前が連邦のトップエリートか！」
アジア系の少尉が少し日焼けした顔に人懐っこい笑みを浮かべる。
「俺はケイ・ハヤミ。お前と同じ《ラプターファングス》の新任だ、よろしくな」
言い終わるのと同時にケイは右手を差し出した。
「あ、ああ。よろしく」
つい数十秒前に出会ったとは思えない、なれなれしすぎる態度にウォルトは戸惑いつつも差し出された右手を握り返した。
「ところでウォルト」
ケイの表情が今までの陽気な態度からは想像もできない程に神妙な面持ちに切り替わっていることにウォルトは気づいた。それに対し、ウォルトも意識せず表情を引き締めた。
「ブリーフィングルームは何処だ？」
ウォルトの緊張した表情と空気はその一言で一気に霧散した。さらに我知らず、締まりのない声を出してしまったことにウォルトは気づかなかった。
「はぁ？」
ケイの真剣な表情と質問内容が一致せずウォルトは呆気にとられる。
もっともウォルトも人のことを言える状況ではなかったのだが。
そんなウォルトにかまわずケイは続ける。
「なんせ初めての基地だから何処がどこだかさっぱりでな」
頭を掻きながら恥ずかしそうにケイは笑った。

そんなケイの態度に呆れながらもウォルトは少し安心していた。
（どうやら俺だけじゃなかったみたいだな）
だが、結局のところ道のわからない者がいくら集まろうとブリーフィングルームの位置がわかるはずはない。自分も実は迷っていたなどとは今更言いたくはないがこのさい、言わなければどうしようもないことも事実だった。ウォルトは意を決して話を切り出す。
「実は俺も道に……」
「おい、貴様等」
背後から再び声をかけられる。静かな声だがそこには確かな威圧のニュアンスがあることをウォルトは感じ取り振り返る。
そこには赤毛の男がいた。端正な顔立ちだが青い瞳には侮蔑の色がありありと浮かんでいる。歳はウォルトたちより一回り程上に見える。階級章は中尉だ。
その態度を不審に思いながらもウォルトは、「はい」と答える。
「着任早々先任の手を煩わせるとはいい度胸だな」
赤毛の男が口を開く。
（先任…ってことは、コイツは《ラプターファングス》のパイロットか…）
「本日より着任します、ウォルト・マクミラン少尉であります」
「同じく、ケイ・ハヤミ少尉であります」
先任への礼節として敬礼とともに名乗る。
「《ラプターファングス》のレオンス・ヴィアン中尉だ」
答礼しながら男――――――レオンスが名乗る。相変わらず憮然とした態度だ。
敬礼を解きながらレオンスが口を開いた。
「ブリーフィングが始まる直前に何故こんなところをうろついているのかを問いただしたいところだが、今は時間がない。黙って俺についてこい」
レオンスはそれだけ言うと踵を返しさっさと歩き出す。ウォルトとケイは一瞬、互いに顔を見合わせたが、二人ともレオンスの後についてゆくしかなかった。

第3ブリーフィングルームもやはり他の基地と大差ない造りだった。縦三列、横四列で計十二個の机付の椅子が並べられ正面には大きなモニターが授けられている。特に珍しくもないブリーフィングルームだ。

しかし、その十二個の席は今、ウォルトを含んでも五人分しか埋まっていない。そのため少し広めにウォルトには思えた。

最前列の席にはレオンスともう一人、坊主頭の男が座っている。見たところケイと同じアジア系のようだ。階級章が中尉であることから先任の一人だろう。レオンスとは対照的に崩れた雰囲気でなにやら隣のレオンスに話しかけている。

そしてウォルトは二列目の席に付いていた。この席順から見るに二列目は恐らく新任の席のようだ。

右隣にはケイ、左には欧米人の女性が座っている。ウォルト達がここに来たときにはすでに彼女は席に付いていた。栗色の艶やかな髪を後ろで一つに結っており、髪と同じ色の瞳はまっすぐ正面に向けられている。その表情はどこかリラックスしているようで、さっぱりとした印象をウォルトは感じていた。

一通り部隊の人間の確認を終え、ウォルトが退屈しかけた時ブリーフィングルームのドアが開き一人の男が入ってきた。

長身にがっしりとした体形で短めの金髪はオールバックでまとめられている。いかにも軍人然とした風貌だ。

男はモニターの前まで進み出ると口を開いた。

「新任の諸君、特別評価試験部隊《ラプターファングス》へようこそ」

堅物めいた見た目に反して男は芝居がかった口調でそう言った。

「まずは先任の紹介からいこうか。まず私はハンフリー・ルース大尉だ。この部隊の隊長を務めている」

隊長が面倒な堅物でなかったことにウォルトは少し安心した。

「次にイェンスン・リー中尉。彼はこの部隊の次席指揮官だ」

坊主頭が後ろのウォルト達を一瞥し「よろしく」とだけ言った。

「その隣の二枚目がレオンス・ヴィアン中尉だ。すでに世話になっ

た者もいるようだな」
　レオンスは腕を組んだまま動かない。ルース大尉はその態度に対してか溜息を洩らしながら続ける。
「次に新任の紹介だ。向かって左からケイ・ハヤミ少尉、ウォルト・マクミラン少尉、ミーリャ・シャロノワ少尉だ」
　ウォルトを含む新任の三人が立ち上がり先任に向かって敬礼する。先任も答礼するがそれは非常に軽い敬礼のようにウォルトには思えた。
「さて諸君、挨拶も一通り済んだところで早速本題だ」
　新任組が着席するとルースはブリーフィング――――――というよりは新任に対する現状説明を始めた。
「貴様等も知っての通りこの部隊は連合の次期主力兵器、ＧＡＴ―Ｘ０１Ａ１、《ダガー》の試験部隊である。我々の任務は当然この機体を一刻も早く完成させ、前線に送り届けることだ」
　ウォルトは我知らず無言で頷く。
「しかし、新任の諸君は《ダガー》の評価試験をする必要はなくなった」
「な…!?」
　その一言にウォルトは息をのんだ。
「ま、待ってください隊長！では我々は…」
　ウォルトは抑えきれず席を立ちあがり、抗議の声を上げた。
「マクミラン少尉、貴様の発言を許可した覚えはないぞ」
　ルースがウォルトを睨みつける。先ほどまでのフレンドリーなイメージとは真逆な、軍人の瞳だった。
「も、申し訳ありません」
　我に返りウォルトは席に座りなおした。だがルースの宣告にウォルトは到底納得していなかった。
　ウォルトが訓練校を卒業し、ここに来る間の一か月、同期の仲間たちは既にザフトとの戦闘に駆り出されている。すでに戦死した者もいるだろう。そんななかウォルトだけが安全な後方でモビルスーツについてのノウハウを学んでいた。

新型兵器のテストパイロットに選抜されたことは素直に誇らしかったが前線で戦う仲間たちに対する後ろめたさがあったのもまた事実だった。かといってウォルトのモチベーションは決して低くはなかった。前線で戦えないのなら新型機を少しでも早く完成させ、前線に配備することで仲間たちが生き残るための一助とするしかない、と考えたからだ。

ルースの言葉はウォルトが前線の仲間たちに対して唯一報いる術を根底から覆す言葉に他ならなかったのだ。

ケイとミーリャの表情を窺うが二人とも黙って聞いているだけで得に変化はない。

（どうして黙っていられるんだよ……）

そんな二人にウォルトは苛立ちを覚えた。

それを気にするそぶりもなくルースは説明を続ける。

「その理由は大きく分けて二つだ。一つは《ダガー》が既に実戦に耐えうる性能と信頼性を獲得していること。つまりは既に完成の域に達しているということだ」

その事実はウォルトを更に苛立たせ、そして困惑させた。

（ならどうしてわざわざ俺達を招集したんだ!?完成しているのならすぐにでも量産体制を整えるべきだろう！）

「もう一つは《ダガー》が連合の次期主力機の座から降ろされたためだ」

表情を一切変えずルースは言い放った。

（おいおい、冗談じゃねえよ。だったら今更どうしようってんだよ…？）

「隊長、質問の許可を」

ここまで一切言葉を発していなかったミーリャが右手を挙げる。内心はやはり納得していなかったのか表情がわずかに強張っているようにウォルトには思えた。

「許可する」

「完成までこぎつけた機体を今更主力機から外すということは、既にその代替案があるということでしょうか？」

確かにここまで進んだ計画をただ中止で済ますことはありえない。少なくとも今の連合の兵器だけではモビルスーツに対抗することは難しい。ならば、その代替案がすでに用意されていると考えるほうが普通なのだ。

「心配するな。代替案は既に用意されている」

ルースは新任を見渡しながら言う。

「国防省はダガーの生産スケジュールを議会に提出したが議会はその生産数に納得しなかった。どうやらモビルスーツに対する数々の大敗は政治家の皆さんには相当なトラウマになっていたようだな」

モビルスーツとモビルアーマーのキルレシオは一説には3：1、場合によっては5：1とも言われている。地上での陸戦兵器ならこの差はさらに広がるだろう。

この状況を打開するには一機でも多くのモビルスーツを配備するしかない。議会がモビルスーツの存在に神経質になり、数を揃えたがるのも解らない話ではなかった。

「そこで国防省は《ダガー》の生産性及びコスト面の更なる見直しを踏まえ、再設計した機体であるＧＡＴ―０１《ストライクダガー》を主力機として再提出し議会を納得させたというわけだ」

「つまり《ストライクダガー》は《ダガー》のダウングレード機ということになります。その場合、性能面に問題はないのでしょうか？」

ミーリャが質問を重ねる。

「たしかに装甲材質などを初めとしたいくつかの面では《ダガー》に一歩劣ることになるし、最大の特徴であるストライカーパックシステムもオミットされているが、それでも《ストライクダガー》の総合性能は現用のザフト製モビルスーツを凌駕している。その点は問題ない」

ルースは淀みなく答えた。

「了解しました」

納得したようにミーリャの強張った表情がほぐれた。

「さて本題に戻ろう」

ルースも元のフレンドリーな雰囲気を取り戻していた。

「貴様らが新たにこの部隊に配属された理由はモビルスーツの急な配備が新たな問題を招いたためだ」
「問題…？」
今度はケイが眉をひそめて呟いた。
「《ストライクダガー》の制式化により連合は当初の《ダガー》を上回る数のモビルスーツを揃えることに成功した。しかし、そのせいでパイロットの育成が追い付かなくなりつつある」
新型兵器、しかも全く新しい概念の兵器を配備するのだ。そのパイロットの育成は急務だろう。しかし、その配備があまりに急に、そして相当数が揃ってしまったためにその教育が追い付いていないのだ。
（必死で数を揃えた結果がこれじゃあ皮肉だな…）
「そこで我々に下された任務は、モビルスーツ部隊のアグレッサー役だ」
ルースの言葉に新任組は息を呑んだ。
「『連合の最精鋭として、モビルスーツ部隊を教導せよ』これが我々に下された任務だ」
教導部隊、それはつまり連合のモビルスーツ部隊における最強の称号に他ならなかった。

第二話

北米大陸・カリフォルニア州　地球連合軍・大西洋連邦・北方軍
エドワーズ基地
新任着任後初のブリーフィングが終了し、先任達は先にブリーフィングルームを後にした。今残っているのはウォルトを含めた新任の三人だけである。
「俺らも行くか」
先任の退出を見送った後、ケイがウォルトに言った。
「ああ、そうだな」
短く答えウォルトも廊下に歩き出そうとしたときケイが思い出したように振り返った。
何やら考え事でもしているのかミーリャは黙って座ったままだ。ブリーフィング中のリラックスした表情と打って変わって真剣そのものの表情だ。
「確かミーリャだったよな、俺はケイ・ハヤミ。よろしく」
（またいきなり呼び捨てかよ…）
ウォルトの時といい今といいケイはこういう男なのだとウォルトは再確認した。
しかしミーリャはそれを気にする素振りも無く席を立ち表情を和らげた。
「改めてミーリャ・シャロノワよ、よろしく」
「ウォルト・マクミランだ。よろしく、シャロノワ少尉」
ミーリャに続いてウォルトも名乗る。
「どうせ階級も同じなんだし新任同士でしょ？ミーリャでいいわ」
ファミリーネームで呼んだことを指摘されウォルトは戸惑ったがミーリャの言う通りだとも思った。同僚同士でそこまで気を使っていたらこの先面倒でもある。
「あ、ああわかった、ミーリャ」
ウォルトが納得したことを確認しミーリャは微笑んだ。
「とりあえず格納庫（ハンガー）に行こうぜ、話はそれからだ」

ケイは廊下に向き直り歩き出した。
「そうね、明日の予定もあるし機体の調整を急がないとね」
明日の予定――――――――それはブリーフィングで告げられた演習内容の事だった。
「教導隊としての任務に従事するにはまず部隊練度、ひいては連携精度を高める必要がある。よって明日のカリキュラムでは親睦を深めるためちょっとしたレクリエーションを行う。先任、新任に分かれての実機模擬戦だ」
それが明日の演習内容だった。加えて、その演習までに自分の《ダガー》の調整を済ませておけという命令も受けていた。
（やっと俺のモビルスーツに触れるのか）
モビルスーツに関する教育を二か月間受けていたにも関わらずウォルトは一度もモビルスーツに触れたことがなかった。精々、シュミレーターによる基礎操縦訓練が限度で、未だウォルトは自分がこれからモビルスーツに乗るということに実感が持てていなかった。
しかし基地の格納庫（ハンガー）には既にウォルトの《ダガー》が搬入されている。その事実は格納庫（ハンガー）に向かうウォルトの歩幅を無意識のうちに広くしていた。

※

「なあ、いい加減その仏頂面なんとかしろよ」
レオンスの隣を歩いていたリーがからかうような口調で告げてきた。
「新任相手にすねたってどうしようもないだろう？ガキ臭いだけだぞ？」
リーがレオンスの顔を覗き込む。
「別にすねてなどいません。今更あんなお荷物になるような新任が配属されたことに納得がいかないだけです」
レオンスはリーと目を合わせないようにしながら言った。
「仕方ないだろう、司令部は俺達に教導隊をやれって言ってきてるんだ。まさか一個小隊だけではアグレッサーは務まらないだろ？」
たしかに一個小隊での教導任務など効率が悪すぎる。しかしレオ

ンスが納得できないのはそこではないのだ。
「だとすれば余計に新任などを配属する理由はないように思えますが？教導隊は並みの部隊を上回る技術が要求されます。であれば、もっと経験豊かな熟練パイロットを配属したほうが理にかなっていると思います。それこそ中尉や隊長のようなパイロットを選べばよかったんです」
「お、それは俺を誉めてるのか？そうかそうか、やっとお前も上官を敬うようになったか」
リーはにやけながらも続ける。
「というかお前、新任の経歴ちゃんと見たか？シャロノワとハヤミは実戦経験済みでそれなりの戦果を上げてる。マクミランにしても実戦経験こそないものの訓練校トップの成績だ。あいつらに評価を下すのは明日の模擬戦の後でも遅くはないだろう？」
たしかに実戦経験の有無がパイロットの良し悪しに直接関わるわけではない。実際にその力を見極めるには早計といえる。しかし、書類上のデータのみで評価を下すつもりもレオンスにはなかった。
「とりあえずは明日の模擬戦に期待してみますよ」
心にもない台詞をレオンスは呟いた。
「なんなら賭けるか？」
暇さえあれば整備兵達との非公式な賭け事に興じているリーらしい発想だ。もしかしたら既に明日の模擬戦について整備兵達と賭けているのかもしれない。
「なら俺は新任が『一機も撃墜できずに負ける』に賭けます」
「じゃあ俺は『あの小僧がお前を撃墜する』方に賭けるよ」
相変わらずニヤニヤしながらリーはレオンスをからかう。
しかし、リーの目は笑っていない。レオンスはこの上官の真意を見極めることができずに無視して歩みを進めることしかできなかった。

※

ガントリーに屹立する《ダガー》はウォルトが発着場で見た時の印象とはだいぶ違っていた。
最初の印象はどこか有機的なフォルムで兵器とはかけ離れたデザ

インに思えた。だが今、ウォルトの目の前にある機体は兵器特有の重厚感と力強さを湛えている。
「資料は目を通したけどザフトの《ジン》とは随分違うのね」
最初に口を開いたのはミーリャだった。たしかに全体的に細身なシルエットはジンとは大きく異なっている。しかし、細いというよりは引き締まっている印象でそのシルエットは鍛え上げられたアスリートの身体つきを想起させた。
「むしろ《ジン》よりイケてるな」
ケイも《ダガー》を見上げながらその印象を述べる。ウォルトもケイの意見に同意だった。
「たしかに《ジン》よりも洗練されたフォルムに思えるな」
「当たり前じゃないか！ザフトのモビルスーツなんかに負けないよ！」
格納庫の喧騒のなかでもよく響く声が三人にかけられた。
振り向くとそこには整備兵用の繋ぎを着た四十代くらいの恰幅のいい女性が立っていた。
「アンタ達だろ？ファングスに新しく着任したエリートってのは」
三人は着任して何度か繰り返してきた敬礼と自己紹介をしようとした。
「ここでは敬礼なんかいいんだよ。アタシは堅苦しいのが苦手でね」
女性は笑いながら三人を制す。
「とはいえ、自己紹介はしないとね。チヨ・アーウィン技術中尉だよ、ファングスの整備班長を務めてるからよろしくね」
「ケイ・ハヤミ少尉です」
「ミーリャ・シャロノワ少尉です」
「ウォルト・マクミラン少尉です」
チヨは三人の顔をまじまじと覗き込むと静かにうなずいた。
「三人ともいい顔してるね。流石若いだけあるよ」
この言葉に三人は返答に困った。
「あの、なんのことでしょうか？」

ケイが尋ねる。
「アンタ達のモビルスーツを見上げる顔だよ。自分では気づかないかもしれないけど相当嬉しそうな顔してるよ」
そう言ってチヨは三人の肩を力強く叩く。少し痛いほどだ。
「班長！確認お願いします！」
《ダガー》の陰からチヨを呼ぶ声が響く。
「おっとアタシはそろそろ行くよ。なんせ今日からはアンタ達の機体の面倒も見ないとだからね、仕事が倍に増えちまったよ」
そんなことを言いながらチヨは《ダガー》の整備に戻って行った。
三人はチヨのテンションの高さに呆気にとられている。
ふとケイがウォルトを振り向く。
「俺、そんな嬉しそうにしてたか？」
たしかにケイの瞳は子供のように輝いている。
「たしかに嬉しそうに見えるな」
そう答えたウォルトの顔も緩んでいる。
「どうやらやっと本物に乗れるっていう期待は私だけじゃないみたいね」
ミーリャが二人を見比べながら告げる。
《ダガー》に対する期待を確かめ合った三人はそれぞれの乗る機体へと向かった。

※

モハーヴェ砂漠を相変わらずの乾いた風が吹き抜ける。わずかな植物が風にそよいでいる以外に動くものはなく、数十メートルはあろう岩山が無数に屹立していた。
ありのままの自然ともいうべきその風景のなかに明らかな人工物が三つ岩山に並ぶように立っていた。
白と橙色のツートンの人型――――――《ダガー》のコクピットでウォルトは通信回線を開いた。
「ラプター０４よりコマンドポスト、Ｂ小隊、状況開始位置に移動完了」
『コマンドポストよりラプター０４、状況開始まで現座標にて待機

せよ』
「ラプター０４了解」
ウォルトはオペレーターに短く答えると回線を切った。そのかわりにＢ小隊の二人に回線をつなぐ。オペレーターのウィンドウが消えた代わりにケイとミーリャのウィンドウが立ち上がる。
「ラプター０４より各機、準備はいいか？」
ウィンドウの二人に問う。
「ラプター０５、いつでもいいぜ」
「ラプター０６、問題ないわ」
二人ともリラックスしているようで焦りの色はない。それでいて緩みすぎているわけではなく適度な緊張感がその表情には漲っていた。
（初の実機演習でいきなり模擬戦とは隊長も無茶を言ってくれる）
そう思いつつもウォルトには素直に負けてやるつもりもなかった。もちろん先任達の方が《ダガー》に長く乗っている以上新任は圧倒的に不利だ。しかしその程度の実力差で負けるのならウォルト達がここに呼ばれた意味がないのだ。自分達の存在意義を証明するためにも、そして連合最強のモビルスーツ教導部隊としてやっていくためにも。
演習開始までまだ少し時間があることを確認するとウォルトは二人に目を向けた。
「ポジションの確認だが俺が前衛、０５、０６が後衛で間違いないな？」
『それでＯＫだ』
『ええ、間違いないわ』
事前のミーティングで決めたポジションはウォルトが前衛を引き受け、ケイとミーリャが後衛を務めるというものだった。
先任の技量が新任を上回っているのが確実な以上それを覆すには数で有利な状況を作るしかない。
そこで格闘戦適正の高いウォルトを囮として切り込ませ、散開した相手を後衛の二人が各個撃破を狙うという作戦を選んだのだ。

『しかし先任殿は素直に乗ってくれるかねえ』
ケイがおどけた様子で言う。
「さあな、乗ってこなかったらあとは個人の裁量で迎撃するしかない。けど、個人の技量も連携精度もあっちが上だ。勝率は格段に下がるな」
『勝率と言うからには勝つつもりなのね？』
ミーリャが悪戯っぽい笑みで訪ねてくる。
「もちろんだ。それともミーリャは負けるつもりで来たのか？」
『あら、私だってやるからには勝つつもりよ』
にっこりと微笑みミーリャが答える。しかしその笑みにはパイロット特有の凄みが滲んでいるようにウォルトには思えた。
『奇遇だな、俺も先任達に一杯くわせてやりたいと思ってたところだ』
ケイも口角を不敵に吊り上げる。
「決まりだな。俺たちが役立たずじゃないってことを証明してやろうぜ」
ウォルトの言葉にケイとミーリャも頷いて見せる。
再びウォルトが時間を確認すると演習開始まですでに一分を切っていた。
『コマンドポストよりＢ小隊各機、状況開始まで五十秒。機体の最終チェックを』
「ラプター０４、了解」
ウォルトは機体のステータスチェックをコクピットの計器類にざっと目を通し報告する。
「ラプター０４、異常なし」
少し間があって二人の報告もレシーバーからウォルトの耳に入る。
『ラプター０５、いつでも行けるぜ』
『ラプター０６、問題ありません』
『コマンドポスト了解。オンタイムです。Ｂ小隊、状況を開始してください』
オペレーターが演習開始を告げるとウォルトは主脚歩行でゆっく

りと機体を前進させた。
後衛の二機がそれぞれ最良のポジションにつく。
ミーリャの機体は誘い出した敵を狙撃するため高台に陣取るが相手側からは死角となりその位置を把握できない。
さらにケイの機体もミーリャの狙撃ポイントから７００メートルほどの位置に機体を潜り込ませている。
二機ともジェネレータを静穏モードに設定しているため相手方から見つけるのは困難だ。
後衛が各々のポジションを確保したことを確認しつつウォルトは索敵を始める。
（俺達にとって敵にとられたくない位置は…）
ウォルトは相手方の動きを予測しつつ怪しいポイントをいくつか割り出した。その一つに機体をブーストジャンプで一気に接近。モビルスーツ一機を隠すのに最適な岩場を確認するがそれらしい反応はない。
（ハズレか…。だとすると）
最新の情報を踏まえコンピュータが敵の位置を一つに絞り込む。ウォルトはそのポイントを確認するため機体を反転させる。
しかし、それと同時にコクピットに敵機の急接近をつげる警告音が鳴り響いた。
ウォルトは考えるよりも早く機体にショートバックブーストを促した。スラスターの力を借りて一気に《ダガー》が後退する。
次の瞬間ウォルトの《ダガー》がいた地点に無数の弾痕が５２ｍｍ弾によって穿たれた。
外部モニターの端に機関砲を放ちながら岩場の陰から接近する機影が映し出される。
「ラプター０４、バンデット０１エンゲージ!!」
回避機動を取りながらウォルトもそれに応射。しかし敵機は匠に岩を盾にしながら距離を詰めてくる。
「くっそッ!」

呻きをもらしながらも砲弾を回避するがバンデット０１は巧妙な砲撃でこちらの回避パターンを絞り込んでくる。
（逃げに徹すれば囮程度務まると思ったが甘かったか!?）
数的優位を確保して敵を確実に減らすはずが今ウォルトを追っている敵は一機。残りの二機はまだ姿を現さない。
しかもその一機にすらウォルトは抑え込まれつつある。なにもかもがウォルトにとって計算外だった。
しかしウォルトはこの状況を悲観することはしなかった。
「敵が出てこないならコイツを墜とすだけだ!!」
この相手を撃墜できれば結果的にこちらの数的優位を確保できるのだ。スラストリバースで一気にバンデット０１の背後に回り砲撃を浴びせる。
だが敵はそれを予想していたように瞬時に機体反転。ウォルトと正対し砲撃をシールドで弾く。その滑らかな機動に無駄はない。ウォルトは敵機の技量の高さを再認識する。
（そう簡単にはやらせてくれねえよな…！）
敵が腰のビームサーベルを引き抜き距離を詰めてくる。
「くッ！格闘戦でケリをつける気か…!?」
５２ｍｍの砲撃で弾幕を張るも相手はそれを最小限の機動で躱す。回避しきれない弾もシールドで的確に防がれ、あっという間にウォルトの格闘戦範囲内に侵入してきた。
外部モニターに《ダガー》が迫る。ウォルトも兵装をサーベルに切り替えるが間に合わず右手のライフルが切断された。
「この野郎!!」
続けざまに迫る斬撃をシールドで受け止めつつ空いた右主腕でサーベルを抜刀する。その勢いのまま抜刀斬りの要領で反撃。敵機はそれをバックステップで回避し再び距離をとる。
二機の《ダガー》が睨み合い一瞬の膠着がそこに生じた。
「さすがに強えな…」
ウォルトはサーベルを構え直す。対するバンデット０１もサーベルを脇に構える。

（守って駄目なら、攻めるしかないよな……！）
ウォルトの《ダガー》がスラスターの唸りとともに地面を蹴りつけ加速する。ウォルトは強引な機動で相手の《ダガー》の懐に機体をねじ込みサーベルを一閃した。
バンデット０１はその一撃を一歩下がることで紙一重のところで回避し反撃のサーベルを繰り出す。ウォルトもそれをサーベルで弾くがすぐさま次の斬撃が迫る。
二機の《ダガー》のサーベルが拮抗し激しい干渉光がコクピットを照らす。
『連邦のエリートと言ってもその程度か…』
不意に相手のパイロットから通信が入る。
（接触通信!?敵側との交信は禁じられてるはずだろ…？）
相手を威圧するニュアンスのその声はレオンス・ヴィアンのものだった。
レオンスの《ダガー》がさらに一歩踏み出しウォルトを追い詰める。
（ヤバい…押し斬られる！）
機体の扱いでは勝てないと判断したウォルトは咄嗟にシールドを投棄。空いた左腕でもう一方のサーベルを抜き放つ。だがウォルトの機動を予測してかそれすらも躱され反撃を受ける。かろうじて回避するがもはや相手の斬撃を凌ぐので精一杯だ。レオンスの技術に圧倒されて攻勢に移ることができない。
「ちくしょう…！」
ウォルトが呻く。
次の瞬間、防戦のわずかな隙を突きレオンスの《ダガー》が一気に視界を侵食してくる。放たれた一撃をサーベルで弾く、しかし続けざまの斬撃によって左腕のサーベルの基部が溶断される。
「ぐッ！」
瞬時にスラスターを焚きなんとか敵の格闘戦範囲外に離脱。致命的な一撃は回避したが完全に抑え込まれている。
「クソがぁッ！こんなんで負けられるかよ!!」
サーベルを構え直しレオンスの《ダガー》の左側面に回り込み再接

近をはかる。格闘戦範囲ギリギリでウォルトの《ダガー》はサーベルを一閃。レオンスはサーベルをシールドで受け止め、残った右腕のサーベルを振るう。
瞬間ウォルトはレオンスがサーベルを振るうよりも早く機体を一歩下がらせる。
レオンスのサーベルが空を斬る。鋭い一撃だがそれ故に隙も大きい。
「もらったぁッ!!」
その一瞬の硬直をウォルトは見逃さなかった。フットペダルを踏み込みスラスターの勢いをも借りてサーベルを横に薙ぎ払う。その一撃は確実にレオンスの機体のコクピット部分を薙いだかのようにみえた。
(勝った!)
ウォルトは勝利を確信した。だが次の瞬間外部モニターに表示されたダイアログにウォルトは言葉を失う。
〝被撃墜判定〟
ウォルトの《ダガー》は動力部への被弾により大破と認定された。

第三話

地球連合・大西洋連邦・北方軍・エドワーズ基地
「まさかあそこまで手も足も出ないとはな…」
ディスペンサーからカップに注がれた二人分のコーヒーを片方ミーリャに渡しながらケイは肩をすくめた。
「ありがとう」とミーリャがコーヒーを受け取る。
格納庫の待機所でケイとミーリャの二人は先ほどの実機模擬戦を振り返っていた。結果は新任側の全滅による戦闘終了。完全敗北だった。
「ウォルトがヴィアン中尉と一騎打ちに出るとは思わなかったよ」
ケイが自分のコーヒーに砂糖を手慣れた手つきで一袋入れる。
「そうね。でもウォルトの操縦技術は中尉に劣っているわけではなかったわ」
「たしかにな。アイツの操縦技術は予想以上だった」
ケイは二袋目の砂糖をコーヒーに投入する。その光景にミーリャは眉を顰めた。
「けど、誘い出されていたのは結局ウォルトの方だった」
ミーリャの反応にまったく気づかずケイは神妙な面持ちだ。
「たしかにそうだけど彼だけに非があるわけじゃないわ」
ブラックのコーヒーを口に運びながらミーリャが答える。
「わかってる。後衛のクセにウォルトをバックアップできなかった俺らの責任でもある」
先の模擬戦、ウォルトはレオンスの《ダガー》との一騎打ちに臨んだ。おそらくはその一機を撃墜して数的優位を確保しようとしたのだろう。しかし新任チームと同じく身を隠していた先任の狙撃によりウォルト機は撃墜。数的優位を奪われ、さらに操縦技量でも劣っている新任チームは各個撃破され、あっという間に全滅したのだ。
「ヴィアン中尉の機動、あれは完全に計算されたものだったわ。常に私たちの援護が届かない位置にウォルトを追い込んでいたのに私たちは一騎打ちを止めもしないで黙って見ていることしかしなかっ

た。むしろ非があるのは私たちの方よ」
ミーリャが俯くようにコーヒーの注がれたカップを眺める。
「そうだよなあ」
溜息交じりにケイは答えるしかできない。
「そういや、そのウォルトはどうしたんだ？模擬戦の後から姿を見てないけど…」
暗くなってしまった雰囲気に耐えられずケイは話題の方向を当のウォルトに修正する。
「彼も自分のせいで負けたと思っているのかもしれないわね」
「食事時にでも話してみようぜ」
そう言いながらケイは砂糖をすでに二袋投入したコーヒーに三袋目を投入、さらにはミルクも三つ注いだ。
「ねえ…ケイ、それ…」
ミーリャがたまらずケイのカップを呆気にとられた目で見る。
「ん？なんだ？」
特に気にするそぶりもなくケイはそのコーヒーとは言えなくなった〝液体〟を美味そうに飲んだ。

地球連合ではモビルスーツの実戦投入に先駆けて軍の形態の大規模改変を余儀なくされていた。その一つが基地や艦船でモビルスーツを運用するための改修作業である。エドワーズも例外にもれず基地の一画にモビルスーツ用の大規模格納庫群を急ピッチで建設中だった。
巨大な人型という特殊な兵器であるモビルスーツの格納庫は戦闘機のそれよりも大きなスペースを必要とし、それを複数の基地に建設するのはモビルスーツ自体を配備する以上に費用がかかり連合首脳陣の悩みの種の一つとなっていた。
しかし現場の人間にとってそんなことは気にすることでもないし、気にしたところでどうにもならないことだ。
そんなエドワーズの大規模格納庫群とそれに隣接する滑走路を一望できる小高い丘にウォルトは腰を下ろしていた。

宿舎にいてもなんだか落ち着かず基地の敷地を当てもなくうろついた末に見つけたのがこの丘だった。
芝が植えられており、カリフォルニアの砂漠の真ん中としては潤っている印象でウォルトはそれが気に入っていた。憩いの場というほどのものでもないが基地内にしては開放的な雰囲気のあるこの場所は基地の人々にも人気がありそうだがウォルトのほかに人影はない。宿舎からは少し距離があり、かといって車を使うほどでもないのがその理由か。結局は皆ここまで来るのが面倒なのである。
そんな事情をウォルトは知らなかったが一人になれるというのも気に入った理由の一つだ。
西に大きく傾いた陽に照らされた滑走路には格納庫建設用の資材を積んだC―42輸送機がランディングしてくるところだった。
だがその解放感に身を浸していても今のウォルトの内心が穏やかになることはなかった。
迫りくるレオンスの《ダガー》がウォルトの脳裏に去来する。
（畜生…）
レオンスの機動は最初から計算され尽したものだった。後衛の死角にウォルトを追い込み釘付けにする。その策にまんまと嵌ったウォルトはリーの狙撃で呆気なくやられた。さらにその間にルースが後衛の二人を発見し三機に追い詰められたケイとミーリャもほどなく撃墜された。
（全部俺のミスだ…）
もっと冷静にレオンスの動きに、対局に気を配れなかったことを悔いる。
自分さえもっと上手く動けていれば負けることはなかったという思いがウォルトの心に重く圧し掛かった。
『連邦のエリートといってもその程度か…』
レオンスの言葉がよみがえる。
（腕の差だけじゃねえ…俺にはまだ足りない物が多すぎる……！）
それを克服するにはどうすればいいか。そのことに思考が傾きかけたときだった。

「何をしているんだ？」
背後から不意に声をかけられた。澄んだ女の声だ。
ウォルトは声につられるように振り向く。
そこにはすらりとした体格の銀髪の女が一人立っていた。白く透き通るような整った顔立ちはウォルトよりわずかに幼く見える。だが感情らしいものが見えない瞳はまるで翡翠のようだった。その瞳はただ静かにウォルトを見下ろしている。
（なんだ、この女？階級章は…少尉か…）
軍人としての癖で階級章を確認し同僚であることに少し安堵する。所属を示す腕章には鷲と交差した二振りの剣。エドワーズ所属のウォルトとは異なる中央作戦群を示すエンブレムだ。
中央作戦群――――――それは参謀本部直属の部隊で軍の中でも特に優れた者が属するエリート部隊だった。
（〝議会の狗〟が何故こんなところに…？）
いつもなら礼儀として敬礼くらいしたかもしれないが今のウォルトにはそこまで気が回らなかった。とりあえず立ち上がる。
「いきなりなんの用だ？」
訳が分からず聞き返す。
「いや…こんなところで何をしているのかと思っただけだ」
瞳と同じく感情を感じさせない声で女は返す。
「特になにも……ここにいるのになにか理由が必要なのか？」
ウォルトは苛立ちを抑えながら答えた。一人になりたくてここに来たのにわざわざ声をかけてくるお節介がいるとは思わなかったのだ。
「違う、そういうことじゃない。模擬戦で負けたのに敗因の洗い出しもしないでこんな所で油を売っている余裕があるのかと聞いている」
（この女、模擬戦を見てやがったのか…）
「敗因なら分かってるさ。俺が調子に乗って前に出過ぎたから負けたんだ」
「あの敗北がお前だけの責任とは思わないが、それならどうして即

刻その改善に動こうとしないんだ？」
女のどこか上からの発言はウォルトの精神を逆なでした。
「そんなことは分かってるんだ！だから俺は……！」
そこまで言ってウォルトは言いよどむ。こんなことで声を荒らげるなどただの八つ当たりでしかないと気づいたのだ。
（くっそ…知りもしない女になに言い訳してるんだ俺は…！）
「すまん、怒鳴ったのは謝る。俺もこれから仲間のところに戻って反省しようと思ってたとこだ」
怒鳴られたことを女は気にしていない様子で相変わらず瞳には感情が感じられなかった。
「そうか、なら早く行ったほうがいい。またな、ウォルト・マクミラン」
それだけ言うと女は何事もなかったかのように去って行った。
「なんなんだ、アイツ……」
ウォルトは呆気にとられたまま立ち尽くす。その頭上を基地から離陸した新たなC―42が飛び去って行った。

「お前にしては随分とあの小僧にてこずったみたいだな？」
ニヤニヤしながらリーがレオンスの肩を揺する。
デブリーフィングの後、新任組はそそくさと第3ブリーフィングルームを出ていきルースも報告書を司令部に提出するため行ってしまった。そのためブリーフィングルームにはレオンスとリーの二人だけが残される形となっていた。
「俺としてはあのまま放置してお前が撃墜されるのを眺めるのも悪くなかったんだがそれじゃつまらんからな」
〝つまらない〟とはおそらく賭けのことを言っているのだろう。今に始まったことではないがこの次席指揮官は不真面目とまではいかないまでも真面目とはとても言い難い服務態度だった。レオンス自身に影響がなければ別に構わないのだが自分を賭けの対象にされるのは当然あまりいい気分ではない。
「あの程度の相手ならたとえ中尉の援護がなくても負けることはあ

りませんでしたよ」
リーにちらりと目線を傾ける。
「ホントかあ？あんときお前危なかったじゃないか」
「中尉がどう思おうと中尉の勝手ですがあの程度の相手なら自力で捌けました」
実際わざと隙をみせたらウォルトはまんまとそれに乗ってきた。あそこからカウンターでウォルトを撃墜することはレオンスには容易なことだったのだ。
「まあ俺はどっちでもいいがね。ところで…」
リーのニヤついていた目に怪しい光が宿る。
「結局のところアイツらに対するお前の評価はどうなんだ？結果は奴らの惨敗だったが、だから不合格ってわけじゃないんだろ？」
不意にこういう重要な話題を持ち上げるところがこのイェンスン・リーという男の侮れないところだ。先ほどとはうってかわってその目には有無を言わさぬ迫力がある。
レオンスは軽く姿勢を正して慎重に口を開いた。
「たしかに俺はあの新任たちを侮っていたようです。数の有利を活かして攻めたのもあり、シャロノワ少尉とハヤミ少尉はすぐに撃墜できました。ですが、俺単機で相手をした場合そのいずれにも苦戦を強いられたでしょうね。各国のエース級パイロットを集めただけはある。足りないものといえば大局を見る目とそれを活かす経験でしょう」
レオンスはリーの瞳を改めて見据えた。
「個人での技術は合格と言っていい。しかし教導隊というにはまだまだ連携精度が足りていません。今のままでは使えないと考えます、これが俺の評価です」
レオンスの評価を聞いたリーはフッと鼻を鳴らした。
「相変わらず厳しい評価だな。アイツらは今まで単機で訓練してきたんだ、連携が足りてないのは当たり前だろう」
先ほどまでの眼光が嘘のようになりを顰めリーの表情が再びほぐれる。

「その辺は俺たちがこれから面倒を見てやろうぜ？」
「そのつもりです。だからと言って手加減する気はないですが…」
それだけ言うとレオンスは席を立ちあがる。
「もちろんだ。徹底的に扱いてやろう…なんせ連合には悠長に構えてる時間はない」
立ち上がるレオンスを見上げながらリーが言う。
「そうですね…俺たちは負けるわけにはいきませんから」
レオンスはブリーフィングルームを一人、後にした。
「そうだ…俺は負けるわけにはいかない……」
廊下を少し歩いたところでレオンスは静かに呟く。その呟きを聞くものはそこにはいない。ただ廊下を歩く自分の足音だけがやけに大きくレオンスの耳にこびりついた。

なんとか気持ちを切り替えたウォルトは夕食を摂るため食堂に足を運んだ。
食事のトレイを受け取ると食堂内を見渡す。数百人規模で収容できる広い食堂だがエドワーズにはこの規模の食堂がほかにも幾つか設置されている。そのため、夕飯時でも基地職員でごった返すというほど混み合うことはなく目当ての人物もすぐに見つかった。
「ここ空いてるか？」
ウォルトはケイの隣の席を示しながら尋ねた。向かい側にはミーリャもいる。
口の中いっぱいにパンを詰め込んでいたためモゴモゴと要領を得ないケイに代わってミーリャが「空いてるわよ」とにこやかに答える。
「悪いな」
ウォルトはケイの隣の席にトレイを置き、腰を下ろした。
やっとパンを飲み下したケイが口を開く。
「たく…デブリーフィング終わった途端にいなくなりやがって」
「すまん…少し頭を冷やしたくてな」
ウォルトは二人に何も言わずにいなくなったことを素直に詫びた。
「模擬戦のことを色々と考えてたんだ」

「まあそんなこったろうとは思ったがな」とケイ。
ミーリャは黙って聞いている。
「率直に言う。さっきの模擬戦、あれは俺が出しゃばりすぎたせいで負けた、済まない」
二人に向かってウォルトは頭を下げた。二人はなにか含んだようにウォルトと互いの顔を見合わせる。
「今後はもっと全体を意識した展開を心がけようと思う」
頭を下げたままウォルトが宣言するとその肩に軽い衝撃が走る。
「なに偉そうなこと言ってんだよ」
ケイがウォルトの肩をたたいていた。
「お前ひとり頑張ったって勝てるわけないだろ？」
ウォルトの顔をケイは覗き込むように見る。
「ヴィアン中尉がお前を引っ張り出そうとしたのはもうわかってるだろ？そして俺たちはその術中に引っかかったんだ。だからお前ひとりのせいじゃない」
「いや…だけど…」
ウォルトは言いかけるが今度はミーリャに遮られる。
「私たちがあなたを援護できなかったのも敗因よ。中尉の狙いにもっと早く気づいて注意を促していればもっと上手く対処できたはずでしょ？」
ミーリャの言葉にうんうんと頷きながらケイは続ける。
「そういうことだ。だからおあいこだろ」
ケイはニッと口角をつり上げる。
「それでも納得いかないってんなら、お前のトレイのプリンを俺にくれればいいと思うぜ？」
ケイはウォルトのトレイに乗っているデザートのプリンを指で示す。
「たく…プライマリースクールのガキかよ…」
呆れつつもウォルトはプリンをケイのトレイに置いてやる。
「マジでくれるのか!?サンキュー！」
ケイは嬉しそうにさっそくプリンをウォルトから受け取ったス

プーンで口に放った。
ミーリャもそれを呆れて眺めている。
その視線に気づいてかケイが「コレは俺のだぞ！」とミーリャに対して息巻く。
「別に構わないわよ、子供扱いしないでほしいわ」
ミーリャは食事を再開する。ウォルトはここにきて初めて自分が腹ペコであることに気づき、ミートローフを一口放り込んだ。
「少ししょっぱいな…」
それがウォルトのこの食堂の料理に対する感想だった。

「お前、ウォルトか!?」
食事を続けていたウォルトに背後から声がかけられた。低い割に暗さを感じさせない声は聞き覚えのあるものだった。その声の主にウォルトは記憶を辿るまでもなく思い当った。
「その声はボブか…」
振り返ると同時にウォルトは声の主に言い放った。
そこには驚きの表情を浮かべた丸い体系の黒人の男が山盛りのオムライスのトレイを持って立ち尽くしている。少し小柄だが横に広い体躯はかつてウォルトが訓練校にいたころの技術科の友人のそれだった。
「おいおい、マジかよ!?」
ボブは遠慮など知らないかのようにウォルトの隣に山盛りオムライスを置くとどっかりと腰を下ろす。
「ランドルフからエリートが着任したってのは聞いてたがまさかお前とはな！」
先ほどまでの驚きとはうってかわって笑いながらウォルトに語りかける。
「俺だってお前がここにいるなんて思わなかったよ」
旧知の友との予期せぬ再会でウォルトは柄にもなく舞い上がっていた。そんなウォルトの肩をケイがつつく。
「知り合いか？」

ミーリャにいたってはボブに警戒の眼差しを向けている。
「そうだな、紹介するよ」
気を取り直してウォルトは二人にボブを紹介する。
「訓練校で同期だったボブ・アブドゥルだ。もっとも技術科だがな」
ケイとミーリャはそれぞれボブに軽く自己紹介をする。
「紹介にあった通りボブだ、よろしくなお二人さん」
ボブは二人と軽く握手を交わす。
「で、お前はどこの所属なんだ？」
自己紹介を軽く済ませるとウォルトはボブに尋ねた。
「なんだ知らなかったのか？俺もお前らと同じ『ラプターファングス』の整備班だぜ？」
「整備班との顔合わせにはいなかったようだけど…」
ミーリャが怪訝な表情で返す。まだ不信に思っているのかもしれない。
「あ…そうだ、俺顔合わせのとき腹下してトイレにこもってたんだ」
大笑いしながらボブはミーリャの問いに答えた。
「班長に大目玉くらってまいったぜ」
そんなことを言いながらボブはオムライスにケチャップをたっぷりとかけ、口の中にかき込んだ。
「たく…こんなとこまで来てまた会うとはな。しかも同じ部隊とは…腐れ縁ってのはこういうのを言うんだろうな……」
ウォルトは呆れるように、だがどこか楽しげにオムライスをかき込む丸い友人を眺めた。

※

エドワーズ基地の一画。中央作戦群が占有するエリアの高級士官用執務室に二人の男がいた。
一人は執務机の革張りチェアに座る痩せた男。白髪交じりのため頭髪は灰色になりつつあり衰えを感じさせる。
もう一人の男は白髪の男とは対照的に長身で連合の軍服に包まれた肉体は細身ではあるが鍛え上げられており隙の無い出で立ちだ。灰色の瞳はまるで凍てついた刃のような冷たく鋭い輝きを放ってい

る。
「ブラウン少尉の試験記録は極めて良好です。あとは機体の到着と実戦試験を待つばかりです」
長身の男――――ディック・リーヴスはこの執務室の主である白髪の男に告げた。
「しかし機体の到着時期を鑑みるに最終調整は試験に間に合わない可能性が高いと思われます」
黙って聞いていた白髪の男がリーヴスに問いかける。
「実戦試験の時期はすでに決定済みかね？」
「今後の戦況次第で多少前後する可能性はありますが概ね調整済みです。詳細は提出した資料をご確認ください」
リーヴスは男の問いに答えながら執務机の上の資料を目で示す。男はその資料をめくる。
「今のところ計画は順調というわけか」
「議会の正式な承認が出るのもそう遠くはないかと」
「うむ、そういえば…」
思い出したように男は顔を上げる。
「特別評価試験部隊の様子はどうだね？新任が到着したとの話だが」
「は、新任の配属に伴い、まずはその新任の錬成を図るものかと」
リーヴスは特別評価試験部隊〝ラプターファングス〟の動向を報告した。
「一月もしないうちに彼等は教導任務に駆り出されるでしょう。それまでに部隊錬度を底上げしておく必要があります」
「モビルスーツの数をなまじ増やしたばかりにパイロットの教育が追い付かんとは皮肉な話だな」
男は再び資料に目をおとしながら興味なさげに呟いた。
「その現状も含めて大佐の計画がこの戦争の行く末を決めるのです。そうでありましょう」
リーヴスはその冷たい眼を男に向ける。
「そうだな…そうでなくてはならん…」

大佐と呼ばれた男――――ギリアン・ダレルは資料から顔を上げようとはしなかった。
「報告は以上です」
数瞬の沈黙のあとリーヴスが言った。
ダレルは「ああ、下がって構わん」とリーヴスに退出を促す。
「では、失礼します」
敬礼の後リーヴスは執務室を出た。
「行く末を決める…か、我ながら随分と嵩にかかった言い回しをしたものだ」
リーヴスのつぶやきは誰もいない廊下に静かに染み渡った。いや、だれかいたとしても聞こえはしなかっただろう。そのぐらい静かな呟きだった。
リーヴスが望む《行く末》、それはまだ闇の彼方にあった。

ｅｐｉｓｏｄｅ０２
第四話

超高層ビル群を焼け付くような夏の太陽が照らす。湿度を多く含んだ大西洋からの風とヒートアイランド現象のせいで体感温度は実際よりも高いだろう。

マンハッタンの摩天楼の一画を鋭い機動でＧＡＴ―０１Ａ１ＭＤ《ダガー》が擦過する。それを背後から追うようにアスファルトの地面には５２ｍｍの弾痕が穿たれていく。

《ダガー》はビルとビルの曲がり角で地面を蹴りつけ急旋回。交差点のアスファルトを捲りあげながら５２ｍｍ弾を躱し死角へと滑り込んだ。

その間、一発の砲弾が《ダガー》のライトグレーとオレンジの塗料を抉り取りその下の鉛色の装甲を露出させた。

なんとか機体を敵の砲撃からビルの陰に潜ませたウォルトは機体のダメージを確認する。

左脚部の塗料剥離、及び右肩部に軽度の損傷。

「まだやれるな…」

ウォルトは味方機への回線を開いた。

「ラプター０４よりラプター０６。敵を引っ張り出す、カバー頼む！」

『ラプター０６、了解よ』

ラプター０６――――ミーリャの落ち着いた応答がレシーバーから帰ってくる。

「ラプター０５、おびき出した相手を二機で無力化、そのまま一気に残りの二機に仕掛ける！それまでは０６と一緒にカバーだ！」

『０５、了解！』

ラプター０５――――ケイもいつも通りの応答だ。

「よし、いくぞ!!」

ウォルトの《ダガー》がスラスターを焚きビルの陰から再び躍り出

た。５２ｍｍの弾雨がそれを追う。
戦域マップ上では敵機もウォルト機に狙いを絞ろうと迫ってくるがそれをケイとミーリャが射撃で牽制し足をとめる。
「この程度なら……!!」
ウォルトは機体を捻り砲撃を躱しながらスロットルを全開に叩き込む。それに応じた《ダガー》のスラスターが唸りを上げさらなる加速を促した。

「良くなってきたんじゃないか？ウォルト」
ウォルトがシュミレータから降りると早速ケイが歩み寄ってきた。
「まあ少しはマシになってないといい加減マズイだろ」
ヘルメットを脱ぎながらケイの問いに答える。じっとりと汗ばんだ肌が外気にさらされ心地よい。
「そうマイナスに捉えるなって。最初に比べりゃ相当動けるようになってると思うぞ？」
「けど結局はまだ一度も先任機を撃墜できないまま負けだぜ？」
「あ、いやあ…まあ……」
ウォルトの言葉にケイが言いよどむ。
「ウォルトが思っているほど悪い成績じゃないんじゃないかしら」
不意に女の声がケイの弁護に入った。
見るとミーリャがアップにした栗色の髪をふわりと揺らしながらウォルトとケイの会話に入ってきた。
「最初の演習に比べると全機撃墜までのタイムは四倍以上に伸びているわ。元々先任との間には技量の差があるわけだしそれが確実に縮まっているってことなんじゃない？」
ミーリャは朗らかな笑みをたたえながらウォルトを見る。
ウォルトが着任してから二週間。新任、先任に分かれての演習が繰り返されている。いまだに一勝どころか撃墜すらできてはいないが新任の撃墜による演習終了までのタイムは確実に伸びてきていた。
「そんなにすぐに先任の腕前を超えられるならそれこそ〝ラプターファングス〟なんていらないと思うわよ？」

その言葉にウォルトも反論ができなくなる。
「まあそう焦ることも無いってことだな！」
ケイがその場をまとめるようにウォルトとミーリャの肩に手を乗せる。完全に良いとこ取りだ。
「たく…調子いいことばっかり言いやがって…」
ウォルトはケイを呆れたような目で見る。
たしかに最初の模擬戦に比べれば成長できてはいるのだろう。そしてそんなにすぐに先任に追い付けるなら教導隊など不要だという主張も理解できる。しかしそれでは駄目なのだという思いもウォルトの中には渦巻いていた。
教導隊という立場上そこには並の部隊を超える錬度が要求される。そしてそれを獲得するのにこれ以上時間をかけていたのでは先に戦場に赴いていった同期の仲間たちに顔向けできない。戦況は今も悪化の一途を辿っているのだ。
「とりあえずさっさと着替えてデブリーフィングに行こうぜ」
ウォルトはさっさと踵を返し、シュミレータ―室を出る。
「真面目だねえウォルトさんは…」などと言いながらもケイもウォルトに続く。
「そう言うあなたもね」
ミーリャも嘆息しつつケイの後を追った。
結局のところ焦りを覚えているのはケイもミーリャも同じなのだった。ウォルトは気を使ってくれた仲間に内心感謝する。
演習の疲労とそれに対する焦りで重くなった足と心を引きずるようにしてウォルトはドレッシングルームへの廊下を歩いた。

報告書を作成し終えたルースは基地司令部ビルの休憩所に足を運んだ。
廊下の一画に設えられた休憩所には三人掛けの古びたソファーが三つテーブルを囲むように設置してある。休憩所の二面を占める窓からは夜の帳が降り始めたエドワーズの滑走路が一望できる。
古びたソファーの一つにルースはどっかりと腰を下ろすと軍服の

胸ポケットから煙草を取り出し火を点けた。
勤務の終わり、ルースはここで一服するのが習慣となっていた。これと言って趣味の無いルースのささやかな楽しみの一つである。
ルースは口から煙を吹きながらテーブルの上の灰皿を手元に引き寄せる。灰皿に軽く灰を落としていると規則正しい軍靴の足音が近づいてくることにルースは気づいた。
見ると大西洋連邦の軍服に身を包んだ女だった。
艶やかな黒髪を後ろでまとめており整った顔立ちにはアジア系の血筋が色濃く表れている。右の首筋から頬にかけて特徴的な桜色の痣が浮かんでいるがそれは彼女の美貌を損ねるどころか妖艶な雰囲気を付与しており神秘的な印象を見るものに与えていた。
「よう、レナ。久しぶりだな」
ルースはアジア系の女に軽く手を上げて見せた。
「あなたもここに配属されていたのねハンフリー」
アジア系の美女――――レナ・イメリアが軽く微笑んで見せる。
「お前こそロサンゼルスで教官やってたんじゃないのか？」
ルースは意外そうに幼馴染の女パイロットに問いかけた。
「先日まではたしかにそうだったわ。でも次の作戦で私も実戦部隊の指揮をまかされてね、それに伴ってこっちに異動してきたのよ。教官まで戦闘に駆り出すなんて相当人材に窮してるようね」
またもモビルスーツパイロット不足の現実を突きつけられてルースは肩の荷が重くなる思いだった。
しばらく世間話をした後、レナが不意に核心を突いてきた。
「あなたの部隊は教導隊に転換らしいじゃない。演習の記録（ログ）を見たけど随分苦労しているようね」
さすがに教官を務めていただけあってレナは演習記録を見ただけで〝ラプターファングス〟の状況を見抜いてしまった。
たしかに新任たちは成長している。しかし先任と連携を組むにはまだ錬度不足といえる状況だ。先任と同レベルとはいかなくとも、もうひと押し錬度を上げておきたかった。
「やはりそう思うか…。それじゃあレナ教官、お前から見て新任ど

もにはなにが足りてないと思う？」
ルースは率直に聞いた。少し考えてからレナが答える。
「柔軟性かしら。彼らはセオリーに固執しすぎているせいで突発的な状況に対応できていない。いきなり新人に臨機応変な対応を心がけろといっても難しいけれど教導隊としてやっていくなら早急にクリアしておいた方がいいと思うわ」
「なるほど…柔軟性か…」
ルースは今までの演習内容を思い浮かべた。たしかに新任の動きは一辺倒で状況に追い付いていない節があった。その上戦術も読みやすい。
「そこを重点的にやっていくか…」
ルースはこれからの演習方針を決定した。
「ところで、礼ってわけじゃないが一杯どうだ？ロスほどじゃないだろうが此処（エドワーズ）の歓楽街もなかなかだぞ」
ルースは気分転換も兼ねてレナに酒でも奢ってやろうという気になった。
「ごめんなさい、悪いけどまだ片づけなきゃならない書類があるのよ」
レナは苦笑しつつ答える。
「そ、そうか…」
ルースは軽く肩を落として見せる。
「仕方ない、今日は一人で飲むか…」
「悪いわね」
「気にするな、まあそっちも頑張れよ」
短くなった煙草の火を灰皿に押し付けつつルースはソファーから立ち上がる。
外は完全に陽が落ちて滑走路は誘導灯の明かりでしかその存在を確認できなかった。
デブリーフィングの後、夕食にはまだ早いのでウォルトは『例のハンガー裏の丘』に向かっていた。

エドワーズに来て最初の模擬戦の日から考え事や一人になりたいとき、暇を持て余してしまったときなどたびたび此処を訪れるようになった。何度も来るうちウォルトにはここが自分の育ったカナダ・トロントの郊外にある小さな丘に雰囲気が近いことに気づいた。

ウォルトが通っていたハイスクールの裏手にあったその丘からは慣れ親しんだトロントの街並みが広く見渡せた。なんということのないトロントの街並み。しかしそれを眺めるのがいつの間にか楽しみになっていて放課後暇さえあれば一人で丘に上がり街をながめたものだ。

そんな思い出を内心懐かしみながらウォルトは丘の頂上を目指す。いつもと同じように太陽が西に沈み始めていた。

頂上が見えるところまで来るとそこには珍しく人影があった。すらりとした細い立ち姿からそれが女であるとわかる。あまり人のいないはずのここに先客がいたことにウォルトは驚いたがそれが誰かを見定めたときウォルトの心臓に妙な高ぶりが感じられた。

カリフォルニアの温暖な風にふわりとなびく綺麗な銀色の髪は西日をうけて金糸のような色彩を放っている。

丘の上にいたのは最初にここに来た時どこからともなく表れ、ウォルトに声をかけてきたあの銀髪の女だった。

あの時と同じくグレーのカーゴパンツに大西洋連邦仕様のジャケット姿だ。

基本的にウォルトと同じ服装だが所属を示す部隊章だけがエドワーズ所属のウォルトとは違い、猛禽と二本の剣が交差した中央作戦群のエンブレムとなっている。

ウォルトは目の前の光景が夢か幻なのではないかと疑った。

前にここで会ったとき彼女はどこからともなく現れ、何事もなかったように去って行った。それから今日まで一度もその女とは出会わなかった。

そのためウォルトには彼女と話した数分間が妙に現実味に欠けていて、あれが本当に現実だったのか疑問を抱き始めていたのだ。もしかしたら憔悴した気分のせいで自分は訳の分からない妄想に浸って

いたのではないかと。
しかしその女が再びウォルトの前に現れた。しかも前と同じ場所で。
これが現実であることを確かめるためにウォルトは彼女に声をかけてみることにした。
「よう、また会ったな」
なんと声をかけようか迷ったがとりあえずは軽く手を上げてみせた。
ウォルトが歩み寄ると彼女は一瞬警戒した目でこちらを見咎めたがウォルトだとわかるとその翡翠のような瞳から警戒の色が消え失せた。
「ああ、お前かウォルト・マクミラン」
相変わらずどこか上からの態度だ。しかし前ほど腹は立たなかった。変わりに中央作戦群所属なのだからこんなものだろうという納得した気持ちにさせられる。中央作戦群はエリートが集められた部隊のため通常の部隊に対して偉そうな態度をとる者が多いのだ。
「お前もよくここに来るのか？」
ウォルトが質問を浴びせる。
「いや、以前お前に会ったとき以来だ。だが私もここの空気を気に入ってしまったようだ。時間を持て余していた時ふとここに来たくなった」
ウォルトはこの女がここを気に入ったなどと言ったことが意外に思えた。無表情で感情に欠けた彼女がここの雰囲気を理解できるとは思わなかったのだ。
「どうかしたのか？」
ウォルトの意外そうな表情に対してか女が問いかける。しかし相変わらずその白く整った顔には感情らしきものが確認できない。ただ淡々と思ったことを口にしているだけだ。
「い、いや…なんでもない」
いくらこの女に感情らしきものが見えないといっても流石に「あまりに無表情なお前がこの場所を気に入るなんて思わなかった」などと

は言えなかった。
『黙っていれば美人』などという言葉があるがコイツはその逆だなとウォルトは思った。色白で整った顔立ちは間違いなく可愛い、あるいは美人の域に達しているのにその顔に表情の機微が無いせいでどこか人間離れした雰囲気をまとっているのだ。そのせいで〝可愛い〟という印象は薄れ、作り物めいた顔という印象が先行してしまう。
まるで〝３ＤＣＧ〟で構成されたかのような女は「そうか」とだけ答えると格納庫と滑走路、そして砂漠がどこまでも続く風景を眺めながら再び黙ってしまった。
（やべえ…。気まずいぞ……）
ウォルトは声をかけたはいいが自分とこの女に共通の話題が一切無いことに今更ながら気づいてしまった。もっとも、気まずいと感じているのはウォルトの方だけかもしれないが。
（なんか良い話題は無いのか……!?）
ウォルトは内心自問した。しかし心の中の自分も沈黙を貫いたまま答えてはくれない。
ウォルトは元々お喋りな方ではなく誰かと話す場合も聴く側であることが多かった。そのためいきなり共通の話題が一切無い相手に話しかけるなど難易度が高すぎたのだ。
深く考えず声をかけてしまった自分をウォルトは内心責めた。
ウォルトが一人悩んでいるのを知ってか知らずか女がウォルトの方に向き直った。
「お前の部隊の調子はどうなんだ？」
不意に問いかけられた。
「え？部隊？」
いきなりの問いだったためウォルトは質問の意味を理解できていない。
「前に会ったときは惨憺たるありさまだったろう。あれから少しは成長できたのか？」
女はウォルトの混乱に気づいたのか質問を詳しく噛み砕いてくれた。

「あ、ああ。そのことか」
ウォルトはやっと質問を理解する。少し考えた後ウォルトは口を開いた。
「そうだな、前よりはマシになってると思う。けど、まだまだ使い物になるレベルじゃない。どうしたら更に上の結果を…先任を撃墜できるのか分からねえんだ」
女は黙って聞いている。
「正直一対一ならそう簡単に負けることは無いはずだ。連携も上手くいってきている。だがいつも最終的には先任に追い詰められそのまま何もできずに負けちまう。これ以上どこをどう改善すりゃいいんだろうな」
ウォルトは何故か女に問いかけていた。こんなことを聞いてもどうしようもないと分かっているはずなのに。
「つまり、あまり上手くいっていないと？」
女の問いかけにウォルトは「ああ」と頷くことしかできない。
「お前が負ける理由、教えてやってもいいが…」
女の言葉にウォルトは俯いていた顔を上げた。
「教えてやってもいいがお前はそれでいいのか？実戦で戦うには人から教わるだけでは駄目だ。それではいずれ対処しきれないときが訪れる」
女はウォルトを真っ直ぐに見据える。
「そんなことでは実戦には通用しないし生き残ることもできない。違うか？」
「ああ……そうだな」
「それがわかったならもう少し努力してみることだ。恐らく答えはそう遠くないところにあるはずだ」
ウォルトには努力しろと言われてもこれ以上どうしたらいいのか分からなかった。しかし何故かその意見に抗おうという気は起きない。もう少し頑張ってみようと思ってしまっているのだ。女の言葉の妙な説得力にウォルトはいつの間にか従ってしまっていた。
「そうだな…また明日も演習はあるんだ。努力のしようなんていく

らでもあるはずだよな」
　ウォルトの言葉に女は微かに口元を歪めた。それは普通の人間なら笑みと呼べるかどうかあやしい微かな変化だったがウォルトにはたしかに笑っているように感じた。ウォルトはこの女の人間らしい感情を初めて目の当りにした。
（なんだ…やっぱり可愛いじゃねえか……）
ウォルトは女の顔に見入ってしまっていた。
「なんだ…？」
女は自分の顔をじっと眺めるウォルトから少し後ずさる。
「あ、いや…ありがとな」
ウォルトは女に感謝の言葉を述べていた。
「なんかまだ頑張れそうな気がするぜ」
「礼などいい。結局私はお前に何一つ教えていないしな」
「それでもいいさ。それじゃあ俺は先に戻るぜ」
ウォルトは踵を返し隊舎のほうに歩き出す。そこで大事なことを思い出し再び女を振り返った。
「なあ…そういえば俺、お前の名前聞いてなかったよな？お前は俺の名前を知ってるんだろ？ならお前の名前も聞いておいていいか？」
女はしばらく黙ってウォルトを見ていたが不意にその名前を口にした。
「フィーリア・ブラウンだ」
それを聞くとウォルトはフィーリアに満足気に笑って見せた。
「またなフィーリア」

「名前を呼ばれたのはいつぶりだろうか……」
丘に一人残されたフィーリアは遠ざかっていくウォルトの背中を静かに眺めた。

第五話

北米カリフォルニア州　地球連合軍・大西洋連邦北方軍エドワーズ基地

特別評価試験部隊〝ラプターファングス〟は演習前のブリーフィングの最中だった。

ブリーフィングルームのいつもの席でレオンスは、隊長であるハンフリー・ルース大尉の説明を黙って聞いていた。もちろんレオンスの隣にはリー、後ろには新任が陣取って同じくルースの説明する演習内容を聞いている。

今回の演習は実機を使っての模擬戦ということだった。前回の模擬戦以来実機での演習は二週間以上行われていない。それを考えると教導部隊としての本格的な任務開始が近いことは容易に想像できた。

「模擬戦でのチーム分けだが、今回は変則的なものになる」

ルースの意外な言葉にレオンスは少し驚いた。今までは先任と新任に分かれての演習ばかりだったためここにきてチームを変えてくるとは思わなかったのだ。

「今回の模擬戦に俺は参加しない。よってチーム構成は二対三となる」

ルースの言葉を受けてブリーフィングルームに、一同の動揺が広がるのをレオンスは感じた。レオンスもその編成に疑問を覚えたが同時に高揚も感じていた。

多少腕を上げてきたとはいえまだまだ自分たちとは錬度に差がある新任を、一方的に撃墜するのにもうんざりしてきていたのだ。それに比べれば今回の編成はレオンスにとって少しは楽しめるモノと言えた。恐らくルースは自分が抜けることで新任たちにハンデを与えるつもりなのだろうとレオンスは考えた。

「今回の編成を発表する。Ａ分隊、リー中尉、ハヤミ少尉、シャロノワ少尉」

Ａ分隊の編成にレオンスは目を見開いた。リーが新任二人と組む。

そしてルースは模擬戦に参加しない。そうするとレオンスのチーム編成は自ずと知れた。
「B分隊、ヴィアン中尉、マクミラン少尉」
先ほど以上の動揺がブリーフィングルームに波及した。
〝ラプターファングス〟のモビルスーツ格納庫にはガントリーに収まった六機の《ダガー》が、三機ずつ向かい合うように立っている。レオンスがパイロットスーツに着替えて格納庫へ向かうと、そこにはすでにウォルト・マクミランの姿があった。
機体の整備状況の確認でもしているのか黒人の丸い整備兵となにやら話している。レオンスはそれを素通りして格納庫の奥にある自分の《ダガー》へ向かって歩いた。
自機のタラップを上がろうとすると背後から「中尉」と声をかけられた。
レオンスが振り向くとウォルトが敬礼してきていた。
「なんだ?」
レオンスは短く答える。
「自分ではまだ中尉についていけるかわかりませんがよろしくお願いします」
そう言うとウォルトはレオンスに頭を下げてきた。
「くだらないことを気にするな。足手まといにならなければいい」
ウォルトを見下ろしつつそれだけ言うと、レオンスは再びタラップに足をかけ《ダガー》のコクピットに身体を滑り込ませた。
レオンスの姿がコクピットの中に消えると、ウォルトは頭を上げつつ軽く溜息をついた。正直に言うとウォルトは今回の編成には大きな不安を抱えていた。
(なんでわざわざ隊長はこんな編成を…)
レオンスがウォルトを目の敵にしているのはウォルト自身にも明らかだ。それをルースが分かっていないとは考えにくかった。にもかかわらずウォルトとレオンスを組ませ、さらには数的不利まで課してくるということはなんらかの考えがあってそうしたのだろう。し

かしルースの思惑はウォルトにはさっぱり分からなかった。
チームを組む相手としてレオンスには礼を尽くしたつもりだが、それを相手がどう思ったのかも分からない。
ウォルトも自分の機体へと体を向けると自分に歩み寄ってくる二人のパイロットスーツに気づいた。ケイとミーリャだ。
「いやあ、面白い編成になったな！」
ケイが楽しげに語りかけてきた。
「なんだかんだ言って俺たちが敵同士になるってのは初めてだからなあ。改めてお手並み拝見と行かせてもらうぜ」
「たくっ…簡単に言うよな…。こちらとチームワークの上に数の不利まで抱えてるんだぜ？これでやれって言う方が馬鹿げてるよ」
うんざりしつつケイに返す。
「まあ不利なときほどその人の真価が試されるって言うし良いんじゃない？」
ミーリャは相変わらずニコニコとして二人の間に入る。
「大西洋連邦のエリートを相手にできるなんて滅多に無いチャンスだから楽しみだわ」
ミーリャの言葉に本来この二人は大西洋連邦の軍人ではないことをウォルトは思い出させられた。
「なら俺もユーラシアと東アジアのエースの実力を楽しみにしておくよ…」
溜息とともにウォルトは二人に告げる。
「それといつものことだが負ける気は無いぜ？」
その言葉にケイとミーリャは満足な笑みを浮かべながらそれぞれの機体へと向かっていった。
メインコンソール、各種計器モニターに明かりがともり、続いて外部モニターが格納庫内の風景を映し出す。
モニターの数値が正常であることを確認すると、ウォルトはメインジェネレーターに火を入れた。
モビルスーツのエネルギーは主に電気を使っているため、スラスターなどの推進器を使わなければその巨体の割にはエンジンの回転

音は静かだ。その微かな振動をシートを通して確認するとウォルトはスピーカーに機動完了を告げた。
　その報告に呼応してウォルトの《ダガー》がガントリーから解放され、格納庫のハッチがゆっくりと開く。ハッチの隙間から強烈な陽の光が入り込みウォルトは目を細める。その一瞬後にはセンサーが自動的に光源を調節し、白一色だった光の中にエドワーズ基地の誘導路が現れた。
『〝ラプターファングス〟、Ａ分隊、出るぞ』
　リー率いるＡ分隊の《ダガー》三機がハッチをくぐり誘導路へと出てゆく。
『同じくＢ分隊、出る。マクミラン、遅れるなよ』
「ラプター０４了解！」
　先にハッチをくぐったレオンスに続き、ウォルトの機体も格納庫からカリフォルニアの大地へと踏み出した。
　ルースを除いた五機の《ダガー》が誘導路に揃うと、データリンクが更新され演習区域の座標が外部モニターのウィンドウに表示される。その座標は奇しくもウォルトがエドワーズに着任して初の実機演習を経験したエリアだった。
『久しぶりの実機演習（ホンモノ）だ。各機気合い入れてかかれよ！続け！』
　リーの機体がスラスターの轟音とともに高く飛び上がる。それに続いてケイとミーリャのダガーもスラスターの力を借りて勢いよく離陸していく。
　Ａ分隊が全機離陸するとレオンスも無言で機体を離陸させた。Ａ分隊の三人よりも滑らかな機動だ。
　それに遅れまいとウォルトもスロットルをアイドル位置から跳躍位置へと移動させフットペダルを踏み込む。同時に《ダガー》のメインスラスターが唸りをあげ、その巨体をロングジャンプの機動へと乗せた。

　エドワーズ基地・第６モニタールーム
「フィーリア・ブラウン少尉、出頭いたしました」

フィーリアは薄暗いモニタールームへと足を踏み入れた。
モニタールームには管制卓につく数人の中央作戦群所属のオペレーターと、長身の男が一人立っていた。
直立不動の姿勢にも関わらず隙が感じられない長身の男はちらりとフィーリアの方を振り返った。
薄暗いなかでモニターの明かりを受けた男の顔は、特徴的な高く尖った鼻と肉の削げ落ちた頬が強調され、その隙の無い出で立ちに不気味な雰囲気を付与していた。
「待っていたぞ少尉。まずは見たまえ」
リーヴスはモニターを顎で示した。
「リーヴス大尉、これは…」
促されるままフィーリアもモニターの映像に目を移した。
「これが今の連合のモビルスーツ部隊の実力だ」
モニターに映されているのは演習区域へと移動するため、ロングジャンプ中の五機の《ダガー》だった。複数のカメラで撮影しているため数種類のアングルから捉えられている。
おそらく演習の記録を撮るための無人機からリアルタイムで送られてくる映像だろう。この《ダガー》の所属である〝ラプターファングス〟の指揮所にも同じ映像が送信されているはずだった。
演習のログを閲覧するには本来それなりのレベルの、セキュリティクリアランスが必要となる。リアルタイムともなれば当の部隊の関係者でもなければ見るのは不可能だ。
しかしフィーリアが所属する中央作戦群・第３０５特殊実験開発部隊〝ラーミナ〟は、その埒外にいた。統合参謀本部のお墨付きを得ているこの部隊には、本来閲覧を許されない機密情報も閲覧可能な権限が与えられている。
この映像もその権限の枠内でしかないのだ。
モニターに映し出される五機の《ダガー》のうちの最後尾に位置する機体に、自分でも知らぬ間にフィーリアの注意は向けられていた。機体の左肩部装甲には１０４の機体番号が強烈な日差しを受けながらも、その存在を主張していた。

事前に〝ラーミナ〟に降りてきていた情報によれば、１０４号機のパイロットはウォルト・マクミランだった。

昨日、ウォルトがフィーリアにみせた屈託のない笑顔が脳裏を過る。

フィーリアはモニターの中の１０４の数字を注視し続けた。しかし自分の隣でモニターを眺めているリーヴスも同じ機体に視線を向けていることに彼女は気づかなかった。

第六話

大西洋連邦北方軍エドワーズ基地　第８演習区域

『ラプター０３よりラプター０４、これより作戦を説明する』

演習開始地点に到着してすぐにウォルトのヘルメットイヤフォンから、レオンスの声が流れてきた。

「は、はい！」

突然の通信にウォルトは慌てて返事をする。レオンスはそれをまったく意に介さぬように、淡々と説明を始めた。

『まず演習開始と同時にお前は俺から距離を取れ』

「え…？」

レオンスの言葉にウォルトは思わず歯切れの悪い返事を返してしまった。

『なんだ？』

ムッとしたようにレオンスが聞き返してくる。

「あ、いえ…しかし、数で負けている以上戦力の分散は避けた方が良いのでありませんか？」

『たしかにこの状況での戦力の分散はセオリーに反する。だが戦力をまとめれば勝てるのか？』

「それは…」

ウォルトはなんと返すべきか迷った。たしかに二機をまとめたところで相手は三機。数の不利は変わらない。勝てる確率も低いままだ。

『守りに入ったとしても消耗するだけで勝つことはできない。ならば一機を守り、一機を攻めに回す』

「その場合自分はどちらを担当すれば…？」

疑問を残しつつ尋ねる。

『それは相手の動き次第で決まる。恐らくＡ分隊も部隊を分けてくるはずだ。基本的には一対一の方が攻めに入る。ただし、三機全ての位置を把握するまでは守りと索敵に専念しろ。無理に攻めようとすれば残りの一機に隙を突かれる』

レオンスの作戦はこれまでウォルトたち新任が演習で行ってきた作戦に似ていた。ウォルトの作戦をベースに数的不利を考慮に入れて再構成されている。

『一機を確実に仕留めることに専念し戦況を安定させる。そこからは各個の腕次第だ』

「もしも一機の撃墜に手間取った場合はどうしますか？」

『撃墜する相手を絞る必要はない。三機確認した段階で反転、僚機が相手をしている敵に奇襲をかければいい』

かなり無茶な作戦だとウォルトは思った。だが三対二という状況で勝ちを狙うなら、多少無茶をしなければ勝てないとも思った。

「ラプター04、了解」

先ほどとは違いはっきりとした返答をウォルトはレオンスに返した。

エドワーズ基地　〝ラプターファングス〟占有指揮所

15メートル四方の空間に管制卓が雛壇状に並び、正面には大型のメインモニターが備えられている。エドワーズの中央作戦司令室に比べれば大きいとは言えないが、それでも一部隊に与えられる指揮所としては破格の待遇だ。

その指揮所の最上部にハンフリー・ルースは立っていた。正面のモニターには演習区域の俯瞰図と、無人機によって捉えられたA分隊、B分隊それぞれの《ダガー》の映像が映し出されている。俯瞰図にはA分隊を示す赤い三つの三角形と、B分隊を示す青い二つの三角形が相対する形で表示されていた。

「全機、演習開始位置に着きました」

オペレーターが報告してくる。

「よし、演習開始！」

ルースが演習開始を宣言するとA、Bそれぞれを担当するオペレーターがその旨を各分隊に伝える。それに呼応して赤と青の五つの三角がじりじりと動き出した。一見ゆっくりとした動きに見えるが、無人機からの映像を見るとそれぞれの《ダガー》はスラスターを使い、か

なりの速度で移動している。
そのなかでもＢ分隊の三角はその先端を互いに逆方向に向け散開の機動をとった。
三対二の不利な状況で戦力を分散させることは愚作としか言いようがないが、それに気付かないほどレオンスもウォルトも馬鹿ではないだろう。
それでも、それを選ぶということは彼らに何かしらの策があるようにルースには見えた。
Ａ分隊には数を活かした戦闘、Ｂ分隊には数の不利を覆す戦闘をさせるのが目的の今回の演習だが、Ｂ分隊は早速その不利を覆しに来たのだ。
ルースは青い二つの三角形を眺めると口角を微かに吊り上げた。
「お前たちの『力』、確かめさせてもらうぞ」

エドワーズ基地　第８演習区域
演習開始と同時にウォルトはスラスターを焚きレオンスの《ダガー》から距離をとった。
索敵をしながら移動するがセンサーにはまだ敵の反応は無い。
（まずは敵を誘い込むか…）
ウォルトは岩山の間を縫うようにして敵がいると思われるポイントに侵攻を開始する。先に発見されると厄介なので、排熱、駆動音を極力抑えた静穏機動だ。
やがて《ダガー》のセンサーが一機の反応を捉えた。戦術マップ上に敵の位置が示される。
岩山の陰となっているため、まだ視認できないが、十時方向、距離８００メートルの地点だ。レオンスの読み通り、どうやらＡ分隊も部隊を分けているらしい。
（こちらが一機ということはヴィアン中尉の方は二機か…？）
「０４より０３、バンデット０１エンゲージ」
ウォルトは敵機発見をレオンスに伝える。するとヘルメットイヤフォンから、『了解』を意味する通信機をクリックするノイズだけが

帰ってくる。
敵に察知されないよう慎重にライフルで狙える位置に移動する。この機体が陽動である可能性を考慮して、ウォルトはレオンスが接敵するまで待機することにした。
（仕掛けた瞬間、前みたいに不意を突かれるのはゴメンだからな…）
やがてウァルトの《ダガー》は相手の背後を外部モニターに捉えた。その挙動を見るにまだ相手はこちらには気づいていないらしい。
ウォルトがバンデット０１をレティクルに収めた瞬間、イヤフォンからレオンスの声が響いた。
『０３より０４、バンデット０２、０３エンゲージ！攻勢に移れ！』
「了解!!」
データリンクに残りの二機の位置も更新される。
（ヴィアン中尉の方はやはり二機、当たりだ…！）
ウォルトは５２ｍｍ機関砲の引き金に指を引き絞った。激しい砲声とともに５２ｍｍ砲弾がバンデット０１に殺到する。
しかしバンデット０１はこちらの位置を知っていたかのように反転、砲弾をシールドで適格に弾いてしまった。
「くそ…！気づかれていた!?」
間をおかず敵機も機関砲を応射。ウォルトはそれを、機体を横に滑らせることでギリギリ回避する。
ウォルトの焦りを感じ取ったかのように敵の《ダガー》は兵装をサーベルに切り替え、急接近してきた。その動きには一切の迷いが無い。
兵装の切り替えが間に合わないと判断したウォルトは敵機のサーベルをシールドで受け止めた。
同時にフットペダルを踏み込み機体に急後退を促す。背後から覆いかぶさる強烈なＧに耐えながらウォルトはライフルを左腕に持ち替え右腕にはサーベルを握らせた。
バンデット０１は間髪いれずに突っ込んでくる。
「この野郎ッ！」
振り下ろされたサーベルをシールドで受け流しつつ、自らもサーベ

ルを横に薙ぎ払う。後退が間に合わないと判断したのかバンデット０１はそれをシールドで受け止めた。同時に次の斬撃がウォルトを襲う。

繰り出された斬撃をウォルトもシールドで受け止める。二機の《ダガー》が組み合う形となった。

『お前はやはりいい腕をしているな』

相手の《ダガー》から接触通信で声が届く。飄々とした軽いノリの声はイエンスン・リーのものだった。

「お褒めに預かり光栄です。中尉こそコチラの動きに気づいていたのですか…？」

『お前らが二手に分かれるだろうとは思っていたからな。網を張っていたんだよ』

作戦を完全に読まれていたことに舌打ちし、ウォルトは頭部バルカンを発射した。敵はメインカメラを避けようと一瞬怯む。その隙にスラスターを点火。リーの《ダガー》を振りほどき背後に回り込む。

ウォルトは《ダガー》の後ろ姿にサーベルを振り下ろすが、振り向きざまのサーベルに弾かれてしまった。

ウォルトはならば、と左腕のライフルのトリガーを引き絞る。

ライフルの砲口が火を噴き５２ｍｍの砲弾を吐き出した。しかしそれすら読んでいたようにリーの《ダガー》はスラスターを全開にし、上空へと逃れた。

リーの《ダガー》も腰からライフルを抜き地上のウォルトに向けた。

文字通りの弾の雨がウォルトを襲う。上空からの砲撃にウォルトはその動きを封じられた。シールドで致命的な被弾は避けているものの、長くはもたないだろう。

「畜生ッ！」

弾の雨から逃れるべくウォルトは機体に急加速をかけた。

ケイ・ハヤミとミーリャ・シャロノワが駆る二機の《ダガー》は新任とは思えない鮮やかな連携を見せていた。

バンデット０２が接近戦でレオンスに仕掛けバンデット０３は一

定の距離を保ちながら隙を見つけて砲撃を加えてくる。
格闘戦のさなかに味方誤射（フレンドリーファイア）をせずに、自分の機体だけを狙う度胸と技量はレオンスの予想を大きく上回っていた。
「伊達に実戦を経験してはいないということか…」
レオンスは敵の斬撃を右腕のサーベルで受けつつ左腕のライフルを連射した。
至近距離で放たれたライフルをバンデット０２はギリギリシールドで受ける。その隙にレオンスは機体を急旋回させバンデット０３へ急接近を図る。
「ならばコイツから相手をしてやる」
バンデット０３は交戦の意思を示すように腰のサーベルを抜き放った。

第七話

大西洋連邦北方軍・エドワーズ基地　〝ラプターファングス〟占有指揮所

「リー中尉相手に互角とは…マクミラン少尉、やはり、かなりの腕ですね」

Ｂ分隊担当のオペレーターがメインモニターから目を離さずに呟いた。

「ああ。レオンスを相手にしてもアイツの機動はそれに見劣りしなかったからな…。パイロットとしての技量は俺以上かもしれんな」

ルースは模擬戦を見ての正直な感想を漏らした。

メインモニターでは四つの画面に分割された映像が、模擬戦の様子をリアルタイムで映し出している。そのなかでもウォルトとレオンスの《ダガー》は脅威的な粘りを見せていた。

「あ…いえ、そういう意味では…」

ルースの台詞にオペレーターが焦りだす。

「構わんさ。全て俺の実力不足だ」

「しかし、それにしてもマクミラン少尉の技量とその成長には目を見張るものがあります」

互いに接敵してから五分が経過しようとしているが、三対二の数的不利な状況にも関わらずＢ分隊は決定的な一撃を受けてはいない。ニ対一の状況で善戦しているレオンスはもちろんだが、《ダガー》の搭乗時間が圧倒的に少ないウォルトがリーと互角というのはある種、異常なパイロットセンスと言えた。

「もはや天賦の才というやつですね」

「人並み外れた才能か…それとも努力か。いずれにせよアイツ等がこの演習をどう乗り切るのか見物だな」

メインモニターではウォルトの１０４号機がリーの機体目掛けて突進。リーの１０２号機もそれを迎え撃つべく身構えた。

エドワーズ基地　第８演習区域

ウォルトの《ダガー》はスラスター全開でリーの機体目掛けて突っ込みサーベルを袈裟懸けに振り下ろした。
リーは機体を巧みに操りその斬撃から逃れる。しかしウォルトは反撃の手を緩めず、返す刀でサーベルを薙ぎ払う。二の太刀を回避することができずリーの《ダガー》もサーベルでそれを受け止めた。
（くそッ！隙がない……！）
ウォルトは舌打ちを堪えつつサーベルを振り払う。
『どうした？エリートさんよ。そんなんじゃレオンスの援護には回れないぞ』
嘲笑するような響きを含んだ台詞がヘルメットイヤフォンに流れる。リーの声とともに反撃のサーベルがウォルトを襲う。ウォルトはその斬撃をショートバックブーストで回避するがリーもすぐさま距離を詰め続けざまに斬撃を見舞う。
『大方俺を出し抜いてレオンスの援護に回る腹積もりだったんだろうがそう簡単には行かせないぜ？』
（こっちの作戦はお見通しかよッ……！）
なんとかサーベルで斬撃を弾くがレオンスの援護に回るのは困難な状況だ。
（ヴィアン中尉の援護に気を取られたりしたらこっちがやられる…。やはり、リー中尉を撃墜するしかないか…）
ウォルトはシールドをリーの１０２号機に叩きつける。スラスターの勢いを乗せたシールドが《ダガー》に直撃し大きく体勢を崩した。
ウォルトは胴体目掛けてサーベルを一閃。しかし、その一撃すらもギリギリのところで繰り出されたサーベルに阻まれてしまう。
（しぶといッ！さっさとコイツを撃破しないとヴィアン中尉が…）
二対一の状況のレオンスが撃墜されてしまってはいよいよＢ分隊に打つ手はなくなる。
「くそ……！」
ウォルトはバックブーストで距離を取りつつライフルで弾幕を張る。

１０２号機は弾幕をスラスターで大きく躱すと岩山に身を隠した。
ウォルトは機体にブーストジャンプを促し岩山を超えにかかる。頂上を超えると同時にライフルを岩山の根本に向けた。その瞬間コクピットに衝撃が走った。
ウォルトが岩山を超えるのを見計らったように１０２号機が突っ込んできたのだ。咄嗟にライフルの引き金を引くが、それより早く振るわれたサーベルで銃身が溶断されてしまう。同時に繰り出されたシールドがウォルトの《ダガー》の胸部を直撃。体勢を崩した《ダガー》は地面に叩きつけられた。
頭蓋を揺さぶるような衝撃にウォルトは呻き声を上げる。外部モニターには機体の損傷を告げる真っ赤なウィンドウが閃いた。幸い致命的な損傷はないがセンサーの一部と機体のフレームに過負荷がかかったことで機動に制限がかけられてしまう。
フットペダルを踏み込み機体を立ち上げるが反応が鈍い。
『レオンスの方に行かせるわけにはいかないんでな』
さながら獲物を追い詰めた猛獣のごとく、リーの《ダガー》が外部モニターの画面いっぱいに迫ってきた。

レオンスの１０３号機は１０６号機との格闘戦を繰り広げていた。
二機の《ダガー》がその立ち位置をもつれ合うように入れ替えながらサーベルを振るう。１０３号機が常に優勢を保ってはいるが、とどめを刺せるチャンスを１０５号機の狙撃が適格にカバーしてしまうため決着がつけられずにいるのだ。
「５号機…ハヤミか…クソッ！」
当初１０５号機に格闘戦を仕掛けたレオンスだが二機の予想以上の連携に追い詰められつつあった。そこで、二機の連携を崩すべく１０６号機に切り込んだのだがそう上手くはいかなかった。これまでの演習で常に後衛に回っていたミーリャなら格闘戦で撃墜できるとレオンスは踏んだのだが、彼女の格闘戦技術は決して低くなかった。レオンスに勝るほどではないが、その機動はケイ以上に鋭いものだったのである。さらにそこにケイの適格な狙撃がくるのだ。

「罠に嵌ったのはこっちだったか…」
このままでは自分が撃墜されるのも時間の問題だとレオンスは悟った。リーの相手をしているウォルトの方も動きは見受けられない。
打開策の思案にレオンスの頭が切り替わりかけたとき、外部モニターにウィンドウが開いた。
――――１０４号機、各部センサー及び脚部フレームに軽度の損傷、機体出力２０％低下――――
真っ赤なウィンドウはウォルト機の損傷をデータリンクを介して、レオンスに知らせていた。
それを読み取った瞬間レオンスは作戦の変更を決断した。
「悪いな、リー中尉！」
レオンスはコントロールスティックの中指と薬指の位置に配されているスイッチを同時に押し込んだ。

「もらった！」
１０３号機の一瞬の硬直をケイは見逃さなかった。すかさずライフルの引き金を引く。しかし、撃ち出された砲弾は１０３号機の腕部をわずかに掠め、後方に逸れた。
ケイが続けてライフルを放つ直前、１０３号機のシールド裏から数発の弾体が射出され、空中で炸裂した。その瞬間外部モニターを真っ白な煙が猛烈な勢いで染め上げてしまう。
「スモーク!?」
１０３号機はシールドに装備されたマルチディスペンサーから煙幕弾を射出したのだった。
「光学がだめなら、――――!?」
ケイはセンサーで敵の位置を割り出そうと試みたがモニターには無数の光点が浮かび上がっている。これではどれが１０３号機なのか区別がつかない。
「やられた、目視もセンサーも役にたたねえ…！」
スモークと同時に散布されたチャフはレオンスの姿を完全に包み

隠していた。
ビーム同士がぶつかり合う凄まじい干渉光がコクピットを照らし出す。リーのサーベルの一閃をウォルトはなんとか受け止めた。
『甘いな、マクミラン!』
リーの１０２号機はそのままサーベルを振り切った。機体出力が制限されているためウォルトの《ダガー》はサーベルに押し負けてしまう。
「しっかりしろよ!!」
無意識のうちにウォルトは自分の機体を叱咤するが、《ダガー》はそれに応えてはくれない。体勢を立て直そうと試みるが反応が鈍い。外部モニターにはリーの１０２号機が迫る。
（間に合わねぇ…!）
振り下ろされたサーベルがウォルトに届こうという刹那。その斬撃を一発の砲弾が遮った。
『なんだと!?』
リーは動揺の声とともにウォルトから距離をとる。
センサーには急速に接近する僚機の反応があった。
「ヴィアン中尉!?」
レオンスの《ダガー》がサーベルを引き抜きリーに襲い掛かる。
サーベルの一撃を何とか回避したリーだがレオンスの機動に、反応が追い付かない。レオンスは間髪いれず１０２号機の胴体を機体の膝で蹴り上げた。１０２号機は大きく体勢を崩し後ずさる。スラスターを点火しつつレオンスは追撃のサーベルを一閃。サーベルを握る１０２号機の右腕部が溶断され岩山に叩きつけられた。
しかしリーはなおも機体を立て直し、シールドを投棄。残された左腕にライフルを構える。咄嗟にシールドを構えたレオンスの１０３号機に５２ｍｍ砲弾が霰のごとくばら撒かれる。
『マクミラン!!』
レオンスの叫びがウォルトのヘルメットイヤフォンに響いた。
なんとか体勢を整えたウォルトはスロットルを解放。フットペダ

ルを蹴りつけるように一気に踏み込む。
満身創痍の《ダガー》は最後の力を振り絞るように突撃を敢行した。

※

エドワーズ基地・第6モニタールーム
モニターには演習を終え、演習開始地点まで後退する〝ラプターファングス〟所属の五機の《ダガー》が映し出されている。
模擬戦はB分隊のウォルト・マクミランがA分隊のイエンスン・リーを撃墜、二対二の状況まで持ち込むも時間一杯でドローという結果だった。しかし、二対三という不利な条件を覆した時点で、B分隊の勝利に限りなく近い結果だといえた。
「レオンス・ヴィアン中尉、それにウォルト・マクミラン少尉ですか。二人とも中々良い腕をお持ちですね」
ゆったりとした口調がリーヴスに語りかけた。
リーヴスが振り返ると、紺のスーツに身を包んだ恰幅の良い初老の男が歩み寄ってきた。にこにこと愛想は良いが目は笑っていない。
「是非とも彼らには大佐の計画に協力してほしいものですね」
モニターを眺めるスーツの男は楽しげだ。
「彼らをどのように利用すると？」
リーヴスはスーツの男に問う。
「そうですねえ。色々と試してはみたいですが競合相手は手強いにこしたことはないと思いますね」
スーツの男――――オーガスト・ノーランは、リーヴスの横に並んでモニターを注視している銀髪の少女をちらりと流し見た。

ｅｐｉｓｏｄｅ０３
第八話

北米大陸・カリフォルニア州　大西洋連邦海軍・サンディエゴ基地

澄み渡る蒼穹を、五本の飛行機雲が複雑な曲線を描きながら切り裂いてゆく。

その先頭でデルタ隊形を組む航空機の姿は、地上からのアングルでは機首の左右に張り出すカナード翼と、ぼってりとした胴体からのびる主翼しか確認できない。

（懐かしいな…、Ｆ―７（スピアヘッド）か…）

大西洋連邦を初め、地球の多くの国家が主力戦闘機として採用しているＦ―７《スピアヘッド》――――――正確には、その海軍仕様のＧ型――――――であることが、ウォルトにはそのシルエットと、この基地の存在から判別できた。

「民間向けの曲技飛行かな？あの間隔でアクロバティックかますとは良い腕してるな」

ウォルトの隣を歩くボブ・アブドゥルは、目を丸くして《スピアヘッド》の飛行を眺めている。機体間の間隔は２メートルも無いだろう。

「お前とどっちが上手いかな？」

思いついたようにウォルトに問いかけてきた。

「さあな…、編隊組んでの曲技飛行なんて訓練校じゃやらないからな」

ウォルトがパイロット訓練校で乗っていた機体も《スピアヘッド》だった。実機の搭乗時間なら《ダガー》よりも遥かに長い。そのため、その機体特性は体に染みついていた。だからこそ、あの程度の間隔でアクロバティック機動をとれるパイロットの腕の良さをウォルトにはよく理解できるのだ。

「またまた謙遜しやがって、訓練校首席がなに言ってんだよ！」

笑いながらボブはウォルトの背中を叩く。

（コイツ段々と整備班長に似てきたな…）
チヨ・アーウィン技術中尉の笑顔がウォルトの頭の中に浮かんだ。
「だいたい首席っていっても訓練校での話だろ。ベテランパイロットと一緒にするなよ」
曲技飛行隊のパイロットの名誉のためウォルトは弁明を図る。
「いやいや、お前この間の実機演習以来、かなり調子いいじゃねえか。もしかしたらヴィアン中尉に並ぶ逸材かもしれねえって整備班でも噂になってるんだぜ？」
どこかニヤついたボブの表情は、彼が真面目な話題を切り出すときのそれだった。
「パイロットセンスは別としても判断力とか状況対処能力なんかは実戦経験者のヴィアン中尉のが遥かに上だろ。オレはそれを演習で嫌と思うほど思い知らされたぜ」
「やれやれ…、我が隊の新鋭エースは謙虚だねえ」
ボブは肩をすくめてみせる。
「そんなんじゃ、東アジアの連中になめられちまうぞ？」
「調子乗って負けるよりはいいだろ」
溜息をつきつつ、ウォルトは視線を正面に映す。
物資のコンテナやそれを積み込むための大型クレーンがウォルトの目の前に広がっていた。西海岸最大の海軍基地であるサンディエゴの大規模港湾施設だ。
しかし、ウォルトの瞳はそれらを捉えてはいなかった。その港湾施設に停泊する、３５０メートルを超える巨大な艦影が、港湾施設の存在感を薄れさせてしまっている。
アイゼンハワー級航空母艦《アイゼンハワー》。アイクの名で親しまれる大西洋連邦海軍の空母だ。
「しかし、まさか俺たちが空母に乗ることになるとはなあ」
ウォルトの視線の先に気づいてかボブが話題をアイクに映す。
「モビルスーツ搭載型改修の試験航行も兼ねてるらしいぜ」
モビルスーツの大量投入によるインフラの波は、海軍にも及んでいた。陸への迅速なモビルスーツ部隊展開に、空母が有力と判断された

のだ。しかし、ザフトの水陸両用モビルスーツにより大きな打撃を受けていた海軍に、モビルスーツ専用空母を新たに建造する余裕は、予算的にも時間的にも残されてはいなかった。さらにザフトに対抗できる水陸両用モビルスーツの、開発まで迫られたのでは空母建造など出来るはずもない。

そこで既存の空母とタラワ級強襲揚陸艦をモビルスーツ搭載型に改修し、同時運用することで海上からのモビルスーツ展開を円滑に進めるという案が出された。コストは安価で済み、改修作業も比較的容易だったため、数か月で再配備することができるこの案を海軍は即採用した。その最初の空母が《アイゼンハワー》だった。

「他の艦載機はどうするんだ?」

元の飛行隊の行方をボブは気にしているようだ。

「一飛行隊だけ残して他は配置換えだとさ。モビルスーツの運用が鍵って言っても航空機はまだまだ重要な戦力だからな、全部モビルスーツに変えるわけにはいかねえだろ」

「だとしても、なんだか気が引ける話だよな…。俺たちが追い出したようなもんじゃねえか」

「追い出したのは俺たちじゃなくザフトだろ。そのパイロットたちの名誉のためにも、オレ達は無様なとこ晒すわけにはいかないんだよ」

二人の頭上を、旋回してきた曲技飛行隊の《スピアヘッド》が、白い尾を引きながらフライパスしていった。

アイゼンハワー級航空母艦《アイゼンハワー》第ニブリーフィングルーム

「〝ラプターファングス〟の諸君、ようこそ《アイゼンハワー》へ。私は、《アイゼンハワー》空母打撃群司令のグレアム・レストン少将だ」

アイク内でのブリーフィングが始まると、まず、日に焼けたスキンヘッドの男が口を開いた。

「さて、諸君らも知っての通り東アジアでの合同演習に伴い、このアイクが諸君をオキナワまで送り届けることとなった。無論、航海の安

全は我々が保障する」
ザフトが高雄を制圧したことにより、台湾の陥落は時間の問題と思われた。これに伴い、地球連合は東シナ海の防衛力強化を目的とした、大西洋連邦・東アジア共和国合同軍事演習〝パシフィックシールド〟の実施を決定。その演習に最適として選ばれたのが沖縄だった。
沖縄には東アジア共和国、大西洋連邦双方の基地が存在しており、アジア地域でも有数の大規模軍事拠点として機能していた。
「今回の演習は大きく分けて三つのプログラムからなる。まず、第一に、水上部隊による火力投射演習。第二に、飛行隊による空戦演習。そして、第三に、諸君らモビルスーツ部隊及び陸上部隊による対モビルスーツ戦演習だ。諸君は大西洋連邦の中でもトップエリートだと聞いている。その活躍には大いに期待させてもらおう」
レストンはにやりと不敵な笑みを浮かべて見せた。
「演習の詳細な説明は現地に着いてからとして、次に参加する部隊を紹介する」
ブリーフィングルーム正面のモニターが、世界地図の画面から表に切り替わる。どうやら演習に参加する部隊の羅列のようだ。
「大西洋連邦からは、我々、第3艦隊所属《アイゼンハワー》空母打撃群、そして第7艦隊所属《ワシントン》空母打撃群。さらにオキナワ基地に所属する各部隊。東アジアからは、第2艦隊及びオキナワ基地に所属する各部隊。無論これにはモビルスーツ部隊も含まれる」
「第2艦隊をまるごと投入とは相当気合い入ってるな…」
ウォルトの隣に座るケイが呟く。本来東アジア出身というだけあってケイはその方面の情報に明るかった。
「そうなのか？」
無意識に聞き返す。
「ああ。第2艦隊っていったら太平洋艦隊のなかでも精鋭だからな。太平洋の守りの要を全て参加させるってことはかなり本気だな」
「文字通り〝太平洋の盾〟ってわけか…」
ウォルトは演習の作戦名の意味をなんとなく理解した。
「続いて――――…」

レストンは淡々と説明を続けていった。

〝パシフィックシールド〟の概要とアイクの基本的な説明だけでブリーフィングは終了した。どうせやることも無かったのでウォルトはアイクの飛行甲板へと出てみることにした。

アイクのアングルドデッキは、基地の滑走路とほぼ同じだった。滑走路の脇にある駐機場には六機の《スピアヘッド》が駐機してある。違いといえば滑走路中央に、リニアカタパルトがあることぐらいで、素人臭い感想ではあるが、船の上とは思えない、とウォルトは思ってしまった。

「まさか現役の空母に乗れる日が来るとはなあ…」

ケイが満足気に飛行甲板を見渡す。

「俺だって乗る日が来るとは思わなかったよ」

ケイの方を振り返る。

「いやいや、そうじゃなくてさ。俺がいた太平洋方面軍には空母が配備されてないんだよ。だからそれ自体が縁遠いっていうかさ」

「マジかよ。今時空母を配備してない軍なんかあるのか？」

ウォルトはケイの言葉に驚きを隠せなかった。今や海軍と空母は切っても切れない関係にあると言ってもいいなかで、それを配備していない海軍があるとは思わなかったのだ。

「もちろん東アジア海軍自体は、空母を配備してるが、その太平洋方面軍は旧世紀からの通例で配備していないんだ。いわゆる政治的配慮ってやつだよ」

「なるほどな」

ウォルトも戦史の座学で、ある程度の歴史は把握している。そのため太平洋方面軍が空母を配備しない理由は、なんとなく想像できた。

ウォルトが気を取り直して甲板を見渡すと、アイランドの根本に見覚えのある人影を見つけた。

「フィーリア！」

思わずウォルトはケイを放置して、その銀髪の少女に駆け寄ってしまった。薄緑色の瞳がウォルトを見据える。

「ん?ああ、久しぶりだな。マクミラン」
振り返ったフィーリアにウォルトは語りかける。
「お前の部隊も演習に参加するのか?珍しいな、中戦群が他国との合同演習に参加するなんて」
ウォルトの言葉に反応してかフィーリアは眉をひそめた。
「詳細は機密だから話せない」
「あ…すまん…。そんなつもりじゃなかったんだが」
ウォルトは自分の軽率さを恥じた。中央作戦群自体が機密の塊だということは理解していたはずなのに。
「それより、最近は随分調子が良いようだな」
フィーリアが話題を変えてくる。
「あ、ああ…そうだな。この間の実機演習でコツを掴めてきた気がする」
ウォルトの気持ちを知ってか知らずか、話題を変えてくれたフィーリアにウォルトは内心感謝した。
「今回の演習でその成果が発揮されるといいな」
「ああ、そうだな」
フィーリアの言葉にウォルトは満足気に頷いた。

「あの野郎、女がいるなら俺たちにも紹介しろよ…」
「アイツは昔からそういうこと人に話さねえからなあ」
「フフッ…良いじゃない、仲好さそうで」
ウォルトとフィーリアの後ろ姿を静かに、あるいはニヤケながら眺める三つの陰にウォルトは気づかなかった。

第九話

太平洋上　アイゼンハワー級航空母艦《アイゼンハワー》

サンディエゴ海軍基地を出航して数時間。アイクの周りには《アイゼンハワー》空母打撃群に所属する、数隻の駆逐艦以外には果ての見えない太平洋が広がっていた。

太陽はすでに西に傾いており、海は一面茜色に染まっている。

一度は艦内に引っ込んだものの、あてがわれたベッドの狭さに慣れずウォルトは結局、飛行甲板へ出てきていた。

甲板にはウォルトの他にカタパルトオフィサーらしき下士官や、非番のパイロットなどが数人見受けられたがそれらに話しかけるような社交性をウォルトはもっていなかった。

ただ甲板の隅にどっかりと腰を下ろし、海を眺めるだけだ。もしかしたら、またフィーリアに会えるかもしれないなどと思っていたが、さすがにその姿は無かった。

「ひとりで海を眺めてるなんて悲しい奴だな」

不意に背後から声をかけられる。振り返ると、からかいを含んだその声の主はケイだった。ケイの背後にはミーリャとボブもいた。

「どうせなら彼女と眺めりゃいいじゃねえか」

ケイはにやにやしながら、ウォルトの隣にしゃがみ込む。

「うっせーな、お前みたいに友達多くないんだよ」

言い返してウォルトはケイの発した言葉に違和感を覚えた。

「彼女って？」

「港を出るとき俺を無視して女のところに行ったのを、忘れたとは言わせねえぞ！」

言うが早いかケイはヘッドロックを決めてくる。しかし、ケイの言い分には、記憶を辿るまでもなく思い当った。首の圧迫感に耐えつつウォルトはなんとか口を開く。

「ばかやろ…、フィーリアは彼女じゃねえッ！」

「この野郎、白を切るのか!?」

ケイの腕に更なる力が込められ、ウォルトの首を圧迫する。

「わ、わかったから…。この腕をどけろ……!」
声を出すのも辛くなってくる。すると、ミーリャが助け舟を出してくれた。
「まあまあ、そんな状態じゃウォルトも話せないじゃない。とりあえず放してあげたら?」
ウォルトはその意見に同意し、激しく顔を縦に振る。
(マジで息が…)
「仕方ない。仮釈放だ」
ケイの腕が離れるとウォルトは空気をめいいっぱい吸い込んだ。潮の香りを含んだ空気が肺を満たしていく。
「さて、話してもらおうか?」
いつの間にかケイの反対側には、ボブがウォルトの逃げ道をふさぐように腰を下ろしていた。むせながらもウォルトはなんとか口を開く。
「話すもなにもさっきから言ってるだろう、アイツは彼女でもなんでもねえんだよ」
「ほ〜〜、じゃああのコはなんなんだよ?」
示し合わせたようにケイが詰め寄ってくる。
「部隊の仲間をいきなり放置してまで、会いにいったあの彼女はお前とどういう関係なんだよ?」
「アイツとはエドワーズに来てから知り合っただけだよ。ただの友人だ」
「中戦群の女なんかとどこで知り合ったんだよ」
今度はボブ。
「いや…たまたま出くわしたって言うか、なんというか…」
ウォルトは言いよどむ。
「じゃあ結局、彼女ってわけじゃないのね」
黙って話を聞いていたミーリャがまとめる。
「だから、最初からそう言ってるだろ…」
うんざりしつつウォルトは肩をすくめた。
「なんだよ…つまんねえなあ」

ケイが落胆したように足を投げ出し、甲板に寝っ転がる。
「勝手に勘違いしたんだろうが…」
ウォルトは軽くツッコミをいれる。
「モテない男どものひがみだから許してあげて」
ミーリャはニコニコといつも通りの調子だ。
「畜生！いつもモテるのはウォルトばっかりだ！」
ボブが悲しげに叫ぶ。
「だから別にモテてねえって！」
そんな一行をよそに、太陽はいつも通り沈もうとしていた。

食事を終えるとウォルトは格納庫に向かった。
海軍の食事は美味いとは聞いていたが確かに、質も量も普段に比べると豪華だった。自由に出かけられない水兵にはそのくらいが楽しみなのかもしれない。
などと考えながらウォルトは自機のキーボードを操作した。
沖縄の気候はカリフォルニアに比べると湿気が多いという。ならばそれに合わせて機体のＯＳも調整しておこうと考えたのだ。できればシミュレータで動作検証もしておきたいが、このアイクにはまだ搭載されていないためデータから計算して大まかな数値を導きだすしかない。
普段なら面倒極まりない作業だが空母の上では、やることも限られているので暇つぶしには丁度よかった。少なくとも甲板で一日中ボーっとしているよりはずっといい。
「聞いたよ。アンタ彼女できたんだって？」
コクピットハッチの向こうにチヨ・アーウィン技術中尉がいた。
ウォルトは大きな溜息を吐く。
「誰から聞いたんですか？それ」
「ボブが整備班に吹聴して回ってたよ」
チヨは楽しげだ。
「あの野郎…。班長、オレとあの娘は別にそういう関係じゃないですから」

「あら、そうなのかい」
ウォルトの訂正を聞くとチヨは呑気に大笑い。
「できれば整備班にも訂正しといてください」
背伸びしつつウォルトはコクピットから這い出る。
「若いんだからそんなに気にしなけりゃいいのにね」
チヨは笑いをかみ殺すのに必死だった。話題を変えるべくウォルトは格納庫を見渡す。
すると、隣のブロックに見慣れない機体があるのに気づいた。
ダークグレーの装甲を纏ったその機体はすっきりとしたシルエットやバイザー型のカメラなど、《ダガー》に共通する意匠も見られたが、細部が違う。ウォルトの印象としては《ダガー》よりも角ばっているのだ。
「班長、あの機体は？」
やっと笑いを収めたチヨが答える。
「ああ、中戦群の機体だよ。《ロングダガー》って聞いたことないかい？」
「資料で読んだことはあります。たしか《ストライクダガー》の上位機種でしたよね」
「生産性を重視して《ストライクダガー》を選定したはずなのに、わざわざ上位互換を開発するってのもふざけた話だよねえ」
チヨは憐れみの視線をウォルトの《ダガー》に向けた。
「メーカーの利権やらなにやらが関わっているんでしょうね」
《ロングダガー》は搭載しているＯＳの関係で並みのパイロットでは扱うのが困難と言われている。そのため、操縦技術でそれをカバーすることができるベテランやエースに優先的に配備されていた。
その機体を中央作戦群が運用しているという事実が、その錬度の高さをウォルトに実感させた。同時にフィーリアもこの機体に乗っているのかもしれないと思うと、不思議と気分が高揚した。
「パーツは１０５（ダガー）と共通のはずなのに、中戦群の奴らがうるさいせいで点検が面倒でね。別な艦に乗せて運んでほしいよ」
チヨの言う通り、《ロングダガー》の周りにはアサルトライフルを肩

から下げた兵士が、数人で警備にあたっており、その上腕には中央作戦群のエンブレムが刻まれている。
同じ軍に所属する部隊とは思えない対応だ。
「あそこまで厳重にする必要があるんでしょうか？」
「さあね。でもあの部隊は一応試験部隊らしいから色々と機密があるんじゃないかい」
バルカンユニットが出っ張っているせいで、《ダガー》よりも精幹な印象を与える《ロングダガー》の頭部モジュール。そのバイザーは、静かにアイクのモビルスーツ格納庫を睥睨していた。

第十話

南西諸島・沖縄本島　東アジア共和国・太平洋方面軍・沖縄基地

机とベッドしか置いていない薄暗い殺風景な部屋が、目に飛び込んでくる。

時刻は四時五十九分。アラームをセットした丁度一分前に三隈玲央奈は目を覚ました。

身体を起こすとシーツが剥がれ落ち、適度に丸みを帯びつつも細くしなやかな裸体が露わになる。玲央奈は、手早く下着を身に着けると洗面所に向かった。

短く切りそろえられた黒髪と、切れ長の目、そしてスレンダーな身体が洗面所の鏡に映し出される。ブラの膨らみに関しては、もの悲しさすら覚える程乏しいが、玲央奈はまったく気にしていない…つもりだ。軍人としては邪魔以外の何物でもないと自分を納得させている。

冷水で顔を洗い寝癖を手櫛で整えると、玲央奈はタンクトップとスウェットを着て自室を出た。

宿舎を出ると外はまだ夜明け前だった。多くの湿気を含んだ空気が肌に纏わりつく。

それを振り払うように玲央奈は走りだした。

スニーカーが奏でる足音と、乱れの無い呼吸音がリズムよくユニゾンする。

男性と女性ではどうしても基礎体力に差が出てしまう。そして、その差が戦場では生死を分ける決定的な分かれ道となるのだ。

その差を少しでも埋めるべく、玲央奈は毎朝一時間のジョギングを初めとしたトレーニングを欠かしたことは無かった。

(そういえば大西洋連邦の部隊が到着するのは今日の午後だったな…)

極東の最前線たる沖縄基地に配属されるパイロット達は、いずれも叩き上げの精鋭揃いだ。玲央奈が所属する第６０６モビルスーツ大隊も例外ではない。しかし、玲央奈にとっては歯ごたえに欠ける相手

ばかりなのだ。
叩き上げといっても実戦を経験したパイロットはごくわずかだし、その実戦経験者もモビルスーツでの戦闘は経験が無い。
訓練兵時代からパイロットとしての優れた才能を開花させ、天才とまで呼ばれた玲央奈と互角に戦えるパイロットはここにはいなかった。
大西洋連邦との演習を楽しみにしている自分に気づき、玲央奈は軽く口元を歪め、朝日に照らされつつある滑走路を走った。

市街地を再現したダミービルの間をライトグレーとオリーブドラブのツートンに塗られた《ストライクダガー》が疾駆する。その胸部にはザフトの《ジン》を踏みつける風神をかたどった部隊章がペイントされていた。
センサーが距離１２００の地点に敵機の反応を捉える。正面のビルの陰だ。
「全部ミエミエよ…」
呟きつつ玲央奈はスラスターを点火し機体を加速させた。
彼我距離、２００。
正面のビルが目前に迫り、あと一瞬機動が遅れれば激突という瞬間。白翠の《ストライクダガー》がアスファルトを蹴って飛び上がる。
ビルの屋上を飛び越え敵機の《ストライクダガー》が外部カメラの端に写り込み、バンデット０２としてマークされる。
同時にライフルを発射。砲弾が直撃したライフルが弾け飛び、バンデット０２は初めてコチラの存在に気づいたようだ。上からの攻撃を予測していなかったバンデット０２の動揺が手に取るようにわかる。
「外したか…」
一撃で仕留めるつもりが砲弾は相手のライフルを破壊するのに留まった。
バンデット０２はすかさず背部のビームサーベルに手を伸ばす。
「遅いッ!!」

叫びつつ玲央奈は背部と脚部のスラスターを可動させ、機体を地面に叩きつけるかのように急降下させた。
ライフルを投棄しサーベルを抜く。その勢いのまま玲央奈のサーベルはバンデット０２を正中から真っ二つに溶断した。
軽く息を吐き玲央奈は投棄したライフルを左腕で拾い上げた。
『ストーム０８、突出しすぎだ！』
ストーム０１――――――――部隊長である、黒田崇継中佐から通信が入る。
『そんな位置にいたらカバーができん！後退しろ！』
怒りよりも焦りを含んだ声音だ。
「付いてこられないなら無理にカバーしなくても大丈夫です。残りは私が片付けます」
黒田は部隊のなかでも唯一ザフトとの実戦を経験したパイロットだ。それなりに信頼もしている。しかし、パイロットとしての腕は玲央奈には及ばなかった。無理に付いてこられても玲央奈にとっては足手まといなのだ。
「中佐はそこで見ていてもらえれば大丈夫です」
『見ていればって…』
黒田が言い終わる前に玲央奈は通信を切った。
「さて…」
残敵は二機。センサーによれば二機とも十時の方向、距離約２０００の地点に固まっている。だが、バンデット０２と接敵したためコチラの位置もデータリンクで相手に伝わっているはずだ。
「正面からか…。まあ、嫌いじゃないよ」
ひとりごちると玲央奈はコンピューターに侵攻ルートを割り出させる。コンマ数秒の後、外部モニターに最適と思われる侵攻ルートが示される。それを確認すると、玲央奈はスラスターを吹かしウィンドウのルートをなぞった。
彼我距離６００。正面のＴ字路の左側に敵機はいる。センサーを確認すると玲央奈はスロットルを全開に叩き込み、最大出力で機体を加速させた。この速度ではダミービルで形成されたＴ字路を曲がり

きることはできない。
交差点に突っ込む直前、玲央奈は機体を水平軸９０度回転させ右のダミービルを蹴りつけた。その反動で１８メートルの巨人が、鮮やかにＴ字路を曲がりきる。襲い掛かるＧを、玲央奈は歯を食いしばって耐えた。
正面に二機の《ストライクダガー》を確認。バンデット０３、０４だ。
推力全開のまま二機の《ストライクダガー》に吶喊する。相手もライフルの引き金を引く。玲央奈は機体の姿勢を低くすることでそれを受け流す。５２ｍｍの徹甲弾が機体の装甲を擦過するのを肌で感じるが構わない。
「当たるかぁーッ!!」
そのままバンデット０４の格闘戦領域に侵入しライフルごと右腕を溶断。同時に頭部の《イーゲルシュテルン》を斉射しバンデット０４のメインカメラを潰す。兵装とメインカメラを失ったバンデット０４が後ずさる。玲央奈は瞬時に機体を反転させバンデット０３と正対する。すかさずバンデット０３がサーベルを振るい反撃に転じる。
「甘いね」
玲央奈は機体を一歩下がらせるとバンデット０３のサーベルは、無情にも空を斬った。その隙を見逃さず、玲央奈はサーベルをバンデット０３のコクピットに突きたてた。さらに、背後のバンデット０４に左腕のライフルを発射。体勢を整える前に胸部に被弾したバンデット０４は推進剤が誘爆し、その場で爆散した。
『コマンドポストよりストーム各機。演習終了。演習開始ポイントへ後退せよ』
第２中隊の全滅を確認したコマンドポストから通信が入る。
「了解」
それだけ応えると玲央奈は指示通り演習開始ポイントへと後退を始めた。

ハッチが開くと玲央奈は《ストライクダガー》のコクピットから格納庫へ出た。全部で六機のモビルスーツを収容できる格納庫だ。左右には玲央奈の機体と同じくライトグレーとオリーブドラブのツートンで塗られた《ストライクダガー》が格納されている。

「三隈!!」

整備用のタラップを降りるといきなり怒号を浴びせられた。声の方を向くと想像通り、黒田だった。日に焼けた顔に怒りを滲ませながらツカツカと歩み寄ってくる。

身長１５８センチの玲央奈が１７５センチ以上ある黒田を見上げるかたちだが、玲央奈に気圧されている様子はない。

「なにか?」

「とぼけるな。三隈、何故後退しろという命令を無視した?」

玲央奈の反応に眉をぴくぴくと動かしながら黒田が質問する。

「私一人でも対処できる状況だと判断したため呐喊しました」

「状況を判断するのはお前じゃない。俺だ。お前は俺の指示に従っていればいいと何度言えばわかるんだ。」

怒りを抑え、諭すような口調で黒田が言う。

「お前の独断先行で味方が危険に晒されるような状況になったらお前は責任を取れるのか?」

「味方には危険が無いと判断した上での行動です。実際味方に損害は出ていません」

「だから、判断は俺がすると…」

「それ以外にないなら失礼します」

玲央奈は黒田の言葉を遮り敬礼すると、さっさと背を向けその場を後にした。背後から黒田の溜息が聞こえたが玲央奈はドレッシングルームへの歩みを止めようとはしなかった。

南西諸島近海　アイゼンハワー級航空母艦《アイゼンハワー》ＣＤＣ

アイクのＣＤＣは一般的な戦闘艦のＣＩＣと大きな差はない構成だった。

正面と左右の壁には大型のモニターが据えられ、海域情報や気象情報、レーダーなどの艦にとって重要な情報が映し出されている。
管制卓には数人のオペレーターが座り、二十四時間体勢でモニターを監視している。その中の通信担当が口を開いた。
「司令、東アジア共和国海軍・第二艦隊旗艦《ナガト》より入電」
「読め」
レストンはオペレーターに続きを促した。
「〝パシフィックシールド〟への参加のため、遠路はるばるの航海に敬意を表する。我これより貴艦隊をオキナワまで護衛させていただく。以上です」
「貴艦の心遣いに感謝する、と応えてやれ」
「了解」
水上レーダーには、二時の方角から《アイゼンハワー》空母打撃群に合流するべく接近する数隻の艦隊の姿があった。

アイクの甲板は徐々に人で賑わいつつあった。
ボブに連れられてウォルトも甲板に上がってきていた。
《アイゼンハワー》空母打撃群の周囲には東アジア共和国の艦隊が輪形陣で展開しつつある。
これを見たいがために、〝ラプターファングス〟の整備兵たちが甲板に集まっているのだった。
「あれは第二艦隊旗艦の《長門》だな」
ケイがアイクのすぐ隣を航行する艦を示して言う。
ステルス性を考慮しての設計であろうタンブルホーム船型の船体は非常にシンプルな構成で、全長は２００メートルはあるだろう。駆逐艦としてはかなり大型の部類に入るサイズだ。
「ナガト？」
ボブがケイに聞き返す。整備兵であるボブは他国の艦を目にするのは初めてだった。そのため、興味津々といった様子である。
「東アジア共和国海軍が建造した新型のミサイル駆逐艦だ。新世代のイージスシステムを搭載していて、大西洋連邦のデモイン級よりも

優れた対空戦闘能力を備えてるって言われてる」
ケイは得意げに解説を披露する。
「へえ、すげえなあ」
ボブは少しでも近くでも見ようと、手すりから身を乗り出すような体勢になっている。
「ちなみにこの《長門》は四代目で、二代目の《長門》も旧世紀に艦隊旗艦を務めてるんだぜ」
ステルス性と機能性を両立したデザインは、工業製品としては一種の芸術の域にあり、美しいとすら言えた。
ケイの解説を聞きつつ、ウォルトは緩やかな曲線と、力強い直線で構成されたライトグレーの船体を眺めた。

第十一話

南西諸島・沖縄本島　東アジア共和国・太平洋方面軍・沖縄基地

小高い丘と小規模な林が織りなす、半径数キロに及ぶ空間。それは、どこか箱庭めいた印象をもってそこにあった。

本島から海に突き出すように形成されているため、三面をコバルトブルーの海に囲まれている。しかし、その境界線は自然の海岸とは明らかに異なる様相を呈していた。

砂浜や磯といった本来海岸線に存在するはずの風景がなく、海から唐突に陸の斜面へと移行しているのだ。

その違和感が指し示す通り、この半島は人工的に海に浮かべられた陸地だった。

この地域は四方を海に囲まれ、陸地の面積が大きく限られている。しかし、軍事拠点として発展を遂げるうち、その陸地の狭さが一つの問題となっていった。

空軍に加え、陸軍、海軍の基地をも統合していくうちに、敷地が狭いことに加え、それによる周辺住民への負担が深刻な問題となって浮上してきたのだ。

そこで、埋め立て地による基地面積の拡大が計画されたが、それは周辺の自然環境の破壊に直結する危険を孕んでいた。

自然環境の保護と基地の拡大。この二つを両立する仲裁策として挙げられたのが人工浮島（メガフロート）による、敷地の確保であった。

基地の重要区画である、司令部や格納庫、滑走路などは本来の陸地に設置し、訓練区域などの比較的融通のきく施設をメガフロート上に建設したのだ。

この半島もその一つで、主に機甲部隊やモビルスーツ部隊の訓練に使われるエリアだった。

その人口の島には、遺伝子操作により成長を促進させた樹木により、いくつかの林が存在している。その一つに、ライトグレーとオリーブドラブのツートンの装甲を纏った《ストライクダガー》がしゃがみ込むようにして潜んでいた。

「ライトニング０１より各機、敵は少数だ。数を活かして一気に包囲殲滅するぞ。連邦のエリート共に吠え面をかかせてやれ！」
沖縄基地に所属する第６０７モビルスーツ部隊指揮官である倉田中佐は部下を叱咤するように指示を出した。
〝パシフィックシールド〟の開催に伴い、大西洋連邦は二つの空母打撃群に加え、モビルスーツ部隊を派遣してきた。今回の演習相手はそのモビルスーツ部隊だった。
聞けばその部隊は元々、試験部隊だったという。それが急遽、足りなくなったモビルスーツパイロットの教育を担当する教導部隊として再編成されたのだ。
元々試験部隊だったという点はいい。テストパイロットとは、操縦技術、機体の知識、共に最高レベルの能力を持った者たちだ。その意味で教導部隊との実力の差は大きくないともいえる。
だが、今回の演習においての編成、それはあまりにあからさまな挑発の意思を含んでいるように倉田は感じた。
倉田率いる第６０７モビルスーツ部隊が《ストライクダガー》十二機に対して相手は六機の《ダガー》のみだという。
《ダガー》の性能が《ストライクダガー》よりも優れていることは理解している。しかし、二倍という戦力差を埋める程の差とは到底言えなかった。だとすると、この差は第６０７モビルスーツ部隊に対するハンデに他ならないのだ。
『センサーに感あり。九時方向、距離四千』
三番機が、いち早く捉えた敵の位置を知らせる。光点は六つ。セオリー通り戦力を固めてきている。
「よし、Ａ小隊は左、Ｂ小隊は右だ。Ｃ小隊は敵の頭を押さえろ。三方から攻めて一気に押しつぶすぞ」
『了解！』
部下の返事と同時に倉田は《ストライクダガー》を立ち上がらせ、スラスターを点火した。
十一機の《ストライクダガー》がそれに続く。
「砲撃開始！」

彼我距離が二千を割ると同時に倉田は砲撃開始を支持した。
全十二門の５２ｍｍ機関砲が一斉に火を噴く。
それを皮切りに敵も密集隊形を解き散開した。その中の一機、肩部に１０４の数字をペイントしたライトグレーとオレンジの《ダガー》がこちらに接近してきた。
「いい度胸だ！」
倉田もその機体に照準を合わせるがキレのあるジグザグ機動により狙いが定まらない。
「相手をしてやろう！」
倉田は兵装をサーベルに切り替え、１０４号機に斬りかかる。
しかし、１０４号機はそれをシールドでいなす。
「ぐッ…」
倉田が体勢を崩した隙に１０４はその背後に回る。なんとか体勢を整え背後にライフルを向けたとき、倉田は１０４のライフルのマズルフラッシュを見た。

沖縄基地・第二モニタールーム
正面に据えられた大型モニターには訓練エリアの俯瞰図と無人機からの映像、そして各機体のガンカメラの映像が分けて表示されていた。
青の光点が６０７隊、赤が〝ラプターファングス〟だ。〝俯瞰図だけをみるなら６０７隊が〝ラプターファングス〟を包囲する形をとっているが、無人機から送信されてくる映像とガンカメラの映像は６０７隊の不利を表していた。
６０７隊が放つ砲弾の全てを〝ラプターファングス〟は巧みに回避し、反撃の砲弾を見舞っているのだ。
やがて俯瞰図から青の光点がポツリ、ポツリと消えていく。
「おい…あの四番機いきなり隊長機を墜としたぞ…」
「ああ。奴らの戦闘、相当速いな。６０７のカバーが追い付いて無い」
「あの数の差を手数でひっくり返しやがった…」

演習のリアルタイム映像を眺めながら６０６隊のパイロットが口々に驚嘆の声をあげる。最初十二機あった青の光点は瞬く間に八機まで減らされてしまった。対する赤はいまだ一機も損耗していない。部隊錬度の差はもはや歴然だった。

そんな隊員とは対照的に玲央奈は黙して、その映像を見ていた。

（一人辺りの錬度がまったく違う…）

戦闘開始から数分しか経っていないが、勝敗はほとんど決していた。

「面白いな…」

玲央奈は１０４号機の《ダガー》のガンカメラを眺めてぽつりと呟いた。

沖縄基地・大西洋連邦エリア・格納庫

「あぢい～～～」

格納庫の日陰でケイが呻いていた。その首筋を汗の粒が伝っていく。上着はすでに脱ぎ捨て、Ｔシャツ一枚だ。

演習終了後ウォルトたちはパイロットスーツから着替え、待機所に向かった。しかし、待機所はサウナ状態だった。どうやら空調の調子が悪いらしい。

そうして、なし崩し的にこの日陰でたむろしているのだった。

「東アジアはお前の地元じゃないのかよ？」

地面にへたり込むケイを見下ろしながらウォルトが問う。

「俺は北の方の生まれなんだよ…、今の時期にこんな気温ありえねえよ！」

「カリフォルニアも暖かかったけどこっちは湿気が強い分辛いわね」

流石のミーリャも苦笑いを浮かべている。

「待機所の空調についてはさっき担当官に報告しておいたけど修理には二、三日かかるそうよ」

「三日もコレが続くのか…」

ケイがガックリと項垂れる。

「まあ、たしかにこれなら機体のコクピットのがマシかもな」
ウォルトは《ダガー》のコクピットを思い浮かべた。
モビルスーツのコクピットは与圧されているため最低限の空調も整っているのだ。
「お前頭いいな！仕方ないからコクピットで一眠りしてくるか…」
「いいやダメだ…」
ケイが新たな可能性に気づき、立ち上がりかけたとき格納庫からボブが出てきた。
「ファングスの機体は今、点検作業中だ。コクピットで熟睡してるバカなんかがいたら邪魔でしょうがない。第一空調を使うにはジェネレーターを起動しないとだろ？そんな無駄な電力使えるか」
「あ…そうか…」
ケイが再び項垂れる。
「休憩か？」
ウォルトはボブの方を振り返った。
「ああ…。しかし、こう暑いと作業効率も上がらんなぁ…」
ボブは油と汗でベタベタになった丸顔をタオルで拭った。ボブもどうやら相当参っているらしい。
「そういえばお前も今夜の交歓会に行くか？」
ウォルトはなんとか明るい話題に路線を変更した。
「行くに決まってるだろう！このクソ暑いなか働いたんだ！酒ぐらい飲まないとやってらんねえ！」
誰が企画したのか知らないが、いつの間にか大西洋連邦と東アジアの交歓会――――要は宴会――――がセッティングされていた。両軍のパイロットのみならず、整備班まで呼ばれるという大規模なものだ。
「この機会にアジアンビューティな女の子を手に入れるぜ！」
ボブのテンションが急に高まった。
「さすがボブさん！分かってらっしゃる！俺も付き合うぜ!!」
ケイのテンションもマックスだ。さっきまでの疲れ切った態度はどこへやら、この暑いなかボブと肩を組みだした。
その光景を見てミーリャはわざとらしく肩をすくめた。

いつもならウォルトも呆れているところだが、二人が少しでも未来に希望を持てたことを喜ぶことにした。

第十二話

南西諸島・沖縄本島　東アジア共和国・太平洋方面軍・沖縄基地

色とりどりの明かりが、足元を昼間とさほど変わらないほど明るく照らし出す。

沖縄基地の一画に設置された娯楽施設エリアは、ちょっとした歓楽街と変わらない賑わいだった。見渡すと、バーなどの飲み屋や食堂の他にもゲームセンターや映画館など、一通りの室内レジャー施設が揃っているようだ。

基地に所属する兵士たちのガス抜きや周辺地区の治安維持を目的として、軍が民間委託で設置したものだった。

沖縄基地では無用の混乱を避けるため、大西洋連邦と東アジア共和国の施設は区分けされており、パスを持たない者は行き来できない仕組みになっている。しかし、このエリアに限っては両軍の兵士の自由な出入りが許されていた。

今回催された大西洋連邦と東アジア共和国の交歓会も、このエリアの店を貸し切って行われるという話だ。

「久しぶりの飲み会だ！張り切っていくぞおッ!!」

「おうよッ！今度こそ女の子をゲットするぞ!!」

ケイが高らかに宣言すると、それに続いてボブが右手を突き上げる。

二人ともすでにアルコールが入っているかのようなハイテンションだ。

日が落ちたせいで気温が昼間よりも下がり、幾分すごしやすくなっているのもその要因のようだった。

「お酒が飲めると知った途端このはしゃぎようだもの。ゲンキンよねえ」

ミーリャが半ばあきらめたように微笑みながら、前を歩く二人を眺める。

「ここに女が一人いるっていうのに、まったく興味ないのかしら…？」

不意にウォルトの二の腕の辺りに、柔らかな感触が触れる。
「え…？」
何かと思い、隣を見ると、ミーリャがもたれかかるようにウォルトに、そのしなやかな身体を寄せていた。
ミーリャの上半身は上着を脱ぎ、黒のタンクトップとなっている。そのため、Tシャツから伸びるウォルトの二の腕とミーリャの白い肩が直に触れあっていた。さらに、タンクトップの胸元では、ふくよかな双丘が深い渓谷を形成しており、身長からしてミーリャを見下ろす形のウォルトの目に飛び込んできた。
普段意識していなかった同僚の扇情的な一面を不意に見せつけられ、ウォルトは少し戸惑う。
「お、お前…、アイツ等にかまってほしかったのか？」
気を紛らわせるようにウォルトは目線をミーリャから前の二人に移す。
「あら、本気にしちゃった？」
ふふっと静かに笑うとミーリャはウォルトから身体を離した。
「まあでもエドワーズに着任してから色々と忙しくて、みんなと個人的に食事に行く機会も無かったから丁度いいんじゃないかしら？」
エドワーズにも歓楽街はあったが、〝ラプターファングス〟に着任してからというもの、他部隊の教導任務などで基地を離れることも多かったため、個人的にこの面子で集まったことは無かったのだ。
ミーリャにとっても久しぶりに『街中』を歩いていることで気分が高揚したのか普段よりはしゃいでいるように見えた。
「まあ、それもそうか…」
つかみどころの無い同僚の冗談を、本気にしてしまったのが妙に気恥ずかしく、ウォルトは話題を変えるべく辺りを見回した。
すると、北米では目にしたことが無い、変わったものがウォルトの目についた。
「なあ、あれ何か知ってるか？」
ウォルトが指さす方にあったのは、風変わりな獣の置物だった。よく見ると、この歓楽街にある店のほとんどの店先や屋根に飾ってあ

る。それぞれ多少の違いはあるが、四足で渦を巻くような毛並みと、相手を睨むような大きな目、そして牙の生えた大きな口の意匠は共通している。
「言われてみれば、何かしらね？ほとんどのお店にあるようだけど…」
「なんだか、カバかライオンの出来損ないみたいだな」
その置物の感想をウォルトが率直に述べると、ミーリャがなにやら引きつった笑いを浮かべ、「そうかしら…」とそれを凝視した。
未知の獣像の前で立ち止まる二人に、ケイとボブが気づく。
「なにやってんだ？」
二人が歩み寄ってくる。
「いや、なんか見慣れない置物があったからさ」
「ウォルトがこれをライオンかカバなんて言うんだもの…」
ミーリャが困惑するように像を指さす。
「はぁ…？なに言ってんだウォルト。これはどう見ても犬だろ」
ボブが呆れたように獣像を眺める。
「いやいや、犬はこんな目つき悪くないだろ！」
ボブの見解に負けじと反論する。すると横合いからケイが割り込んできた。
「まあどっちも正解っちゃ正解かな…」
「え？」
ウォルトとボブは同時にケイの方を見た。
ケイは顎に指をあてながら続ける。
「こいつはシーサーって言ってな、沖縄の伝統的な守り神らしい」
「へえ、そうなの」
ミーリャが納得したように頷くがウォルトとボブはまだ納得いかない。
「んで、それがどうして犬やらライオンやらになるんだよ」
ボブの問いにケイは「まあ聞けって」と二人を窘めた。
「シーサーはずっと昔に中国から伝わってきたものなんだ。そして、そのモデルとなったのがライオンらしい。もちろん、今も昔も中

国にライオンなんか生息してないから、おそらく噂に聞くライオンのイメージが年月を経てこの形になったんだろう。同時に犬がモデルって説もあってはっきりとはしていない」
ケイはドヤ顔でシーサーの説明を終了した。
「なるほど、あくまでイメージだったのか」
ボブはシーサーをまじまじと眺めた。
「まあ、カバっていう説は聞いたこともないがな！」
ケイはウォルトを見て大笑い。
「いや…でも、この口の辺りとかカバっぽくないか!?」
ウォルトは必死に『シーサー、カバ説』を説いたが、それが聞き受けられることは無かった。

『交歓会』が開催されるバーは一般的な酒場と同じ作りだった。灯りに照らされた看板には《ＩＺＡＫＡＹＡ》と書いてあった。
百～二百は入れる広いホールにテーブルと椅子が並べられ、それぞれのテーブルには数種類のつまみが置かれている。店の奥にはカウンター席もあった。
しかし、席は特に決まっていないためどちらかという立食パーティという雰囲気だ。酒はウェイトレスがトレーで運んでいる物をもらうか、カウンターで直接注文するかのどちらかである。
ウォルトたちがバーに到着したときには、『交歓会』はすでに始まっていた。客観的に見たら、なにかのサークルの打ち上げと変わらない雰囲気だ。
「ラプター０５、作戦を開始する。各機続け！」
「了解!!」
メイド服と和服を合わせたような特徴的な恰好をしたウェイトレスから酒を受け取ると、ケイとボブはたちまち人ごみの中に消えていった。
「思ったよりにぎやかにやってるわねえ」
ミーリャもウェイトレスからジン・オレンジを受け取ると店の中を見回した。

「両軍のパイロットと整備兵まで呼ばれてるからな。まあ強制ではないみたいだが」
ウォルトはミーリャと一緒に受け取ったジン・オレンジを一口呷る。オレンジの爽やかな酸味と微かなアルコールの風味が口内に広がった。
「君が〝ラプターファングス〟の１０４号機のパイロットかね？」
自分の機体番号を呼ばれ、ウォルトは咄嗟に振り返った。
そこには、中背だががっしりした体型の赤ら顔のアジア人がいた。羽織っているオリーブドラブのフライトジャケットの階級章は中佐だ。
（こんな指揮官クラスまでいるのかよ!?）
内心驚きながらもウォルトは赤ら顔の中佐に敬礼した。
「大西洋連邦・技術研究開発局・特別評価試験部隊所属のウォルト・マクミラン少尉であります」
「同じく、ミーリャ・シャロノワ少尉であります」
隣でミーリャも同じく敬礼する。二人とも酒を片手にしているため、なにやら不自然な光景だ。
赤ら顔の中佐はさっと答礼すると再び口を開いた。
「東アジア共和国・太平洋方面軍・沖縄基地所属・第６０７モビルスーツ部隊の倉田だ」
倉田と名乗った中佐は敬礼を解く。
「酒の席だ楽にして構わん」
「はっ」
楽にしろと言われたが普段関わりの無い中佐という階級の上官相手では無理な相談だった。
「それより、さっきはよくもこてんぱんにしてくれたな」
「え…？」
倉田の言葉にウォルトの背中を冷たい汗がつたった。
「先ほどの演習で君が最初に撃墜した《ストライクダガー》。あれに乗っていたのは私だ」
（やっぱり…）

嫌な予感が当たり、ウォルトは内心うんざりした。
他部隊の教導任務をしていると、演習後に絡まれることはよくあった。しかし、それが上官だったことは無かったのだ。特にこの倉田中佐の表情は、怒っている訳でもなく穏やかな表情だ。それが逆に怖い。しかも、その赤ら顔から漂ってくるアルコール臭から察するに、すでに結構な量の酒を摂取しているようだ。
「あの…、そのですね…」
ウォルトが何か言おうと四苦八苦していると倉田が不意にガハハと笑いだした。
「そんなに緊張するなと言ったろう、マクミラン君！俺はむしろ君に感謝してるんだ」
倉田が少尉ではなく『君』と呼んだことでこの中佐は本当にプライベートのつもりなんだなとウォルトは理解した。
「我が隊は正直言って、今の部隊錬度でもザフトのモビルスーツ隊と互角以上に戦えると思っていた。しかし、戦場ではその慢心が、死へと直結するということを君たちに改めて思い知らされた。ありがとう」
そう言うと倉田は、かなり深い角度で頭を下げた。
倉田の急な礼に、ウォルトは先ほどとは違う意味で焦った。ミーリャも流石に戸惑っているらしい。
「あ、あの中佐、頭を上げてください！自分たちはべつにそんなつもりでは…」
「そ、そうです中佐。それにあれは演習です。実戦に出る前に気づくことができたのならそれでいいじゃありませんか」
倉田は頭を上げると二人の顔を見た。
「いや、しかし、お前たちは良いパイロットになるぞ。そんな君たちに教えを乞うことができたのだから光栄の至りだよ」
酒のせいもあるのだろう。倉田はやたらと上機嫌だ。
「お前たちとはもう少し話をしたい。どうだ？あの辺りの席で」
倉田は左の隅のテーブルを指し示す。
「ぜ、是非…」

ウォルトとミーリャは、倉田に促されるまま、その席に腰を下ろした。

「あぁ…疲れた…」

ウォルトはバーテンダーにモヒートを注文すると、カウンター席にもたれかかるように座り込んだ。

あれから小一時間ほど倉田中佐の訓練兵時代の武勇伝やら、指揮官の心構えやらを一方的に語られた。やがて倉田は酒がまわったのか、満足したのか、そのテーブルに突っ伏していびきをかき始めた。

倉田の隊の整備班だという下士官に後を任せると、ウォルトとミーリャはそのテーブルから静かに離れたのだった。

ミーリャは少し離れたところで、東アジアの女性士官となにやら談笑している。

これがコミュニケーション能力の差というやつか、とウォルトは思った。

ウォルトは倉田の話を聞いているだけで疲れてしまい、これ以上誰かと話したりするのが億劫になっていた。

「あんたが１０４号機のパイロット？」

注文したモヒートを中年のバーテンダーから受け取ると隣から声がした。

またか、と思いつつそちら見やると、透明な液体の注がれたグラスを片手に、ショートカットのアジア系の女が座っていた。羽織ったフライトジャケットの胸でパイロット徽章がキラリと光る。

ウォルトはその女の切れ長の黒い瞳から感情を読み取ろうとしたが、好奇の感情しか読み取ることはできなかった。

第十三話

南西諸島・沖縄本島　東アジア共和国・太平洋方面軍・沖縄基地

「あんたが１０４号機のパイロット？」

隣の席からの呼びかけにウォルトはまたか、と思いつつ振り返った。そこには切れ長の目が特徴的な、ショートカットのアジア系の女が座っていた。フライトジャケットの胸には、少尉の階級章とパイロット徽章。二の腕のワッペンには６０６の数字と共にザフトの《ジン》を踏みつける風神が象られている。

ウォルトには、その風神がなんなのか分からなかったが、部隊番号とパイロット徽章から彼女がモビルスーツパイロットであることは読み取ることができた。

「そうだが、君は？」

ウォルトが聞き返すと、ショートカットの女はこちらをちらりと流し見た。その目線には微かな好機の感情が宿っている。

「見ての通り。第６０６モビルスーツ隊の三隈玲央奈少尉よ」

それだけ言うと、彼女は手元のグラスに注がれた透明な液体をぐいと呷る。

「オレは大西洋連邦・特別評価試験部隊のウォルト・マクミラン少尉だ」

ウォルトも名乗るが、玲央奈は目線を虚空に戻し「ふぅん」とだけ言った。玲央奈の方から声をかけてきた割に態度が素っ気ない。

「特別評価試験部隊ってユーラシアと東アジアからの出向も多いらしいけど、あんたもそれ？」

「いや、俺の所属は元々大西洋連邦だ」

「結構いい動きしてたけど、実戦経験あるの？」

態度の割に玲央奈は饒舌だ。やはり、興味があるらしい。

「残念ながら実戦経験はゼロだ。訓練校を卒業して、そのまま特別評価試験部隊（ファングス）に入隊した」

ウォルトは大人しく質問に答えることにした。事実のみを淡々と述べる。

「そう…、じゃあおあいこね」
「え…？」
ウォルトは玲央奈の言う意味が分からず反射的に聞き返す。しかし、その答えは返ってこなかった。突然の乱入者が現れたのだ。
「この野郎、ウォルト！・またお前は抜け駆けしやがって！」
玲央奈とウォルトの間にケイが割り込んでくる。顔はすでに耳まで赤く染まり、強烈なアルコール臭が漂ってくる。
「あ、マスター、俺にも彼女と同じのを！」
玲央奈のグラスを示してケイが注文する。ケイの反対側にはボブが陣取る。ケイと同じく、ひどいアルコール臭だ。またも、二人に挟まれることになったウォルトは、玲央奈との会話を完全に諦めていた。
「君、東アジアのパイロットだろ？・俺も東アジアなんだけどさぁ……」
ショートカットの女パイロットにケイが話しかけるが、その顔を見ると弱々しく「あ…」と声を漏らした。
「おまえ…、なんでここに…」
ケイの表情が凍り付く。
「久しぶりね。速水慧」
玲央奈はケイの方を見もしないでそれだけ呟いた。ケイの凍り付いた表情が徐々にほぐれていき、戸惑いの表情へとかわっていく。
「おまえ、沖縄に配属されていたのか…」
「知り合いなのか？」
ウォルトはケイの表情が戸惑いと、なにか別の感情に支配されていく様が気になった。
「同じ訓練校の同期よ」
言葉に詰まるケイに代わって、玲央奈がウォルトの問いに答えた。
「訓練校時代は私の隊の二番機だったわ」
ウォルトはケイが訓練小隊において二番機という事実を意外に思った。これまでケイとは幾度となく演習を繰り返してきたが、彼の腕も〝ラプターファングス〟の例外に漏れず、相当なものだった。そ

のケイが訓練校では二番機。つまり、次席だったのだ。
「悪かったな、万年二番機で」
ケイがやっといつもの調子を取り戻し玲央奈に言い返すが、どこか頼りない。
「別に万年とは言ってないけど…」
玲央奈はすぐに視線をウォルトに移す。ケイにはもはや興味が無いようだ。
「実戦経験無しで、あの部隊であれだけやれるなんてあんた中々やるわね」
どうやらウォルトの操縦技術に興味があるようだった。ケイはばつが悪そうにその場を退散していった。そのままミーリャと談笑している女性に話しかける辺り色々と諦めてはいないようだ。ボブは二人の会話を黙って聞いている。
「教導任務をやれって言われたら、中途半端な技量じゃマズいだろ？それは演習相手の死にも直結しかねない」
「まあエリートを選んだんだから当然よね」
ウォルトは先ほどのケイと玲央奈の話を思い出し一つの疑問が浮かんだ。
「アイツが二番機ってことは一番機は…」
「私ね」
玲央奈が当然のように答える。
「選考理由は詳しくは知らないが、操縦技術で選んだのだとしたらどうして君じゃなくケイだったんだ？ケイが弱いというわけじゃないが…」
〝ラプターファングス〟のパイロットには、それぞれ各国トップクラスのパイロットが集められている。エースと言っても差支えない者ばかりだ。その部隊でやっていくためには、訓練校首席であるウォルトですら苦労したほどである。だとしたら、ウォルトと同じく訓練校首席卒業の玲央奈を指名してもおかしくないのではないか、と思ったのだった。
「一応言っておくと私にも転属要請が来ていたわ。でもあくまでも

『要請』だったからね。断った」
「理由を聞いてもいいか？」
「訓練校を卒業して、すぐに試験部隊に配属されたあんたならわかるでしょ？共に訓練していた仲間たちが戦場に送られるなかで、後方に配属される者の気持ちが…」
玲央奈の声のトーンが少し低くなった。
「私の同期たちは皆、大陸の前線に配属されたわ。もちろん、慧もね。そのなかで私だけは、この沖縄に配属された」
ウォルトは同期が前線の部隊に配属されるなかで、ひとり、基地に残されたときの苛立ちを思い出した。
玲央奈は続ける。
「今にして思えば、ここに《ストライクダガー》が先行配備されるから優秀なパイロットを置いておきたかったんでしょうね」
沖縄は極東の最前線ではあるが、アジア全体でみれば後方と言えた。しかし、東アジアの工業インフラを支える日本列島は、軍事的に見ても重要な拠点である。そのため、台湾から海路で北上してくるザフトに対しての、最後の砦として機能しているのが沖縄基地なのであった。
「でも、そのときは納得できなかったわ。『命令』だったから従っただけ…」
そこまで聞いてウォルトは先ほどの『おあいこ』の意味が理解できた。彼女もまた、同期からつまはじきにされ、前線から遠ざけられたのだ。
「これ以上実戦から離れて、北米なんかに行きたくなかったのよ」
相変わらず素っ気ない表情。だがその声には微かな嫌悪感が感じられた。だがそれが、前線を離れ、〝ラプターファングス〟に所属することを選んだケイに対してなのか、それともいまだに戦場に立てていない玲央奈自信によるものなのか、ウォルトには判別できなかった。
「つまんないこと愚痴ったわね。少し酔ったかも」
見ると彼女のグラスは空だ。少し日に焼けていて分かりづらいが、

顔色は会った瞬間と変わっていない。
おもむろに玲央奈は席を立つ。
「もう行くのか？」
交歓会はまだ続いている。周りの兵士たちもそれぞれ酒を片手に盛り上がっている。
「ホントは来る気無かったんだけどね。強制参加だったから…」
玲央奈はぼそりと呟く。
「奇遇だな。俺もこういう雰囲気はあまり得意じゃない」
「気が合うわね。次は演習で会いましょ」
「ああ、俺も全力でいかせてもらうよ」
「言っとくけど負けないよ？」
それだけ言うとショートカットの女パイロットは、しっかりとした足取りでバーの出口へと歩いていった。
ウォルトはその背中を黙って見送った。
「ひとそれぞれ、色んな悩みがあるよなあ」
黙って隣に座っていたボブがしみじみと呟く。
「お前もなんか悩んでるのか？なんかあるなら聞くぜ？」
「そうだな…。強いて言うなら親友の凄腕パイロットばかりが女にモテることかな…」
「結局それかよ!!」
ウォルトは反射的に親友の凄腕整備兵に突っ込んだ。

北米カリフォルニア州　地球連合軍・大西洋連邦北方軍エドワーズ基地　中央作戦群占有エリア
ギリアン・ダレル大佐の執務室のソファには、仕立ての良いスーツに身を包んだ初老の男が座っていた。そのスーツと恰幅のいい体型から、軍人でないことは明らかだ。
執務机の革張りチェアに座るダレルと、ソファに座る男の前には、こうばしい香り共に湯気をたてるコーヒーが置かれている。軍の支給品ではなく、ダレルが個人的に購入した高級品だ。
「宇宙では第八艦隊が壊滅し、アフリカではビクトリアが陥落。連合

も随分と追い詰められましたな」
　ダレルの執務机の差し向かいのソファに腰かける男――――オーガスト・ノーランが口を開いた。
「追い詰められたという割に、君はあまり危機感を感じていないようだな？」
　ダレルの言葉通り、ノーランの表情に、焦りを感じさせるものは無い。
「たしかに第八艦隊を失ったのは痛手でしたが、彼らはその代償として例の新型艦を無事、地上に送り届けてくれた。あの艦が蓄積しているデータは第八艦隊の犠牲に十分見合うものだと思いますよ」
　ノーランは細い目をさらに細める。
「おまけに、あの艦が『砂漠の虎』を叩いてくれたおかげで、ビクトリア奪還もそう難しくはないでしょう。無論、《ストライクダガー》の配備が予定通り進めばですが」
「《アークエンジェル》…。デュエイン・ハルバートンの切り札か」
　大西洋連邦宇宙軍・第八艦隊司令、デュエイン・ハルバートン少将。この男こそ、地球連合軍における兵器体系のあり方を最初に憂慮し、モビルスーツの開発を推し進めた人物である。その結果、開発されたのが、大西洋連邦製モビルスーツの原点であるＧＡＴシリーズと、その母艦として設計された強襲機動特装艦《アークエンジェル》だった。
「彼が第八艦隊と運命を共にしたのが、我々にとっては最大の痛手でしたな…」
　ここにきて、ノーランの表情が初めて曇った。
「彼が戦死したことにより、大西洋連邦議会はブルーコスモスへと傾いていくでしょう」
　大西洋連邦におけるモビルスーツの父たるハルバートンは『Ｇ兵器開発計画』を推し進めた張本人ではあるが、ブルーコスモスではなかった。その彼が戦死したことにより、大西洋連邦軍部と、その背後にある連邦議会では、ブルーコスモス派の発言権が急速に増大しているのだった。
「うむ。ところでノーラン君。今回の我が隊の演習への参加は君の案

だと聞いたが、その真意を問いたい」
ダレルはノーランを呼びつけた本題へと話を戻した。ノーランの表情が再び和らぐ。
「はい。他国のモビルスーツ部隊との演習など、滅多に無い機会ですからね。データ収集にはもってこいかと。それと、ユーラシアでも連合内部での発言権の獲得を狙って、モビルスーツの開発に着手する動きがみられます。アクタイオン製の機体がユーラシアに配備されるのは、コチラとしても面白くありませんからね。それに対する牽制と思ってもらえれば」
連合が主力機として採用した《ダガー》シリーズは、国防連合企業体に属する重工業企業、ＡＨＩ社が開発したものだ。しかし、そのライバル企業たるアクタイオン・インダストリーズは《ダガー》を採用した大西洋連邦に見切りをつけ、ユーラシアを新たな顧客に選んだのだった。《ダガー》シリーズをユーラシアへ売り込んでいる最中のＡＨＩとしても、それは阻止せねばならない事態だ。
自国のモビルスーツを輸出することで連合内での発言権を確たるものにしたい大西洋連邦と、自社の《商品》を売り込むことで利益を得たいＡＨＩの利害は一致していると言えた。そこで、東アジアとの合同演習を通じて、その性能を他国に示そうというのだ。
「しかし、ハルバートン少将の戦死を受けて、おそらくブルーコスモスは大佐の計画に対する圧力を強めてくるでしょう。だからこそ、Ｐ計画には『今』目に見える結果が必要なのです。たとえそれがユーラシアに対してだとしても…」
ノーランはコーヒーを口に運び口内を湿らせた。ダレルが無言のまま続きを促す。
「今回の演習は、開戦以前から、大西洋連邦の潜在的な仮想敵であったユーラシアに大西洋連邦製の兵器の有用性と、その武力を見せつけるチャンスです。大佐のＰ計画の結実たる〝ラーミナ〟には造作もないことでありましょう？そして、それは彼の部隊と参加することで更なる意味を持つ」
「〝ラプターファングス〟か…」

ダレルはオレンジ色の《ダガー》を有し、自分たちと同じくエドワーズを拠点とする精鋭部隊の名を口にした。
「はい、彼らと同じ戦場で戦うことで〝ラーミナ〟の戦闘力は確たるものとなるはず。所詮政治家は戦争を数字の上でしか知らない。我々の計画が〝ラプターファングス〟を超える力を持っていると知れば、議会はいずれそれを無視できなくなるはずです」
ノーランの表情に余裕が浮かぶ。
「演習の結果を見れば、今は日和見の派閥も我々につくでしょう」
「そう上手くいけばいいのだがな…」
ダレルはコーヒーを口に含んだ。
「そのためのXナンバーです。既に最終調整に取りかかっております。オキナワでの演習が終了する頃には、エドワーズに搬入できるかと…」
ノーランはおもむろに立ち上がると、ダレルにタブレット端末を手渡す。
「ふん…」
ダレルが受け取ったタブレット端末。そこにはモビルスーツのものらしき略図と、数字の羅列が並ぶ。どうやら、モビルスーツのスペック表のようだ。機体型式番号の項目にはＧＡＴ―Ｘ１３２とある。その数値は、いずれも〝ラーミナ〟が運用してきた機体のスペックを大きく凌駕していた。

第十四話

東シナ海某所　ザフト地上攻撃軍・第１１潜水隊群・第２潜水隊
ボズゴロフ級潜水母艦《ペテルソン》

プラントが地球連合との開戦をするにあたって最大の問題となったのが、その戦力差だった。技術力と優秀な人員でその差を覆そうとしたものの、資源にはどうしても限りがある。そのため、ザフトは連合との無駄な戦闘を極力回避した。

この戦略は地球においても同じであり、要衝となるマスドライバー施設や資源採掘基地などを除いた無駄な領土拡大をしなかった。

これに基づき、ザフトが地球の海上戦力の主力としたのが、通常の艦艇に比して圧倒的な隠密性を誇る潜水艦であった。さらに潜水艦に水陸両用モビルスーツを配備することで、対モビルスーツ戦において大きく遅れをとっていた地球連合海軍を、ザフトは最低限の資源と人員で封じ込めることに成功した。その立役者となった艦が、このボズゴロフ級潜水母艦である。

宇宙艦における艦橋の内部スペースはその大きさに比例して広く設計されている。ザフト艦の多くは宇宙で建造されたため、その通例に則っている場合がほとんどだが、このボズゴロフ級潜水母艦は数少ない例外だった。

潜水艦という特殊な艦種においては、そのスペースを大きく制限されるため、発令所も最低限の広さしか確保されていない。そのため、宇宙艦から潜水艦に乗り込むクルーたちはまずその狭さに驚くのだという。

そんな省スペースの発令所に、ザフト地上攻撃軍の第一種軍装である半袖の緑服に身を包む長身の男が入ってきた。体つきもがっしりとしていて、半袖から除く腕の筋肉は逞しく隆起している。年齢は三十代後半の刈り上げた髪と無精髭が特徴的な目の鋭い男だ。

無精髭の男――――ダニエル・ラバッジに通信担当の女性オペレーターが一枚の紙片を手渡す。送られてきた暗号を解読したものだ。

「司令部から電文です」

ラバッジは紙片を受け取るとその内容に目を通す。
数瞬の後、ラバッジは紙片を艦長席に座る男に手渡した。
「隊長、これは…」
紙片の内容を理解した艦長がラバッジを振り返る。
「久々に面白いのが来たな」
ラバッジの口元が不敵に吊り上がる。一歩前に出ると声のトーンを一段階上げて命じた。
「全艦に達する。これより我が隊は、南西諸島方面へと出撃。オキナワで演習中の部隊に対して威力偵察を行う。ナチュラル共のモビルスーツとその母艦の性能を丸裸にしてやるんだ」
「了解」の唱和が《ペテルソン》の発令所に響き渡った。

南西諸島・沖縄本島　東アジア共和国・太平洋方面軍・沖縄基地
大西洋連邦エリア・第5ブリーフィングルーム
「――以上が次の対モビルスーツ戦演習の概要だ。質問のあるものはいるか？」
〝ラプターファングス〟に割り振られたブリーフィングルームの檀上でルースが隊員たちを見渡す。隊員たちは沈黙をもってそれに答えた。
「では次に作戦に参加する部隊についてだ」
ブリーフィングルーム正面のモニターが演習場のマップから部隊の羅列へと変更される。
「これについては予定にない変更点がある。当初は我々〝ラプターファングス〟と東アジア側の第６０６モビルスーツ大隊による計十八機による演習を予定していたが、前回の６０７隊との演習結果を鑑み、６０６隊側に６０７隊の《ストライクダガー》が六機加わることとなった」
６０７隊との演習は、その錬度不足から〝ラプターファングス〟の圧勝だった。しかし、あまりに一方的な展開だったため、パイロットの錬度向上に繋がったかどうかは疑問が残った。そのため、東アジア側は自軍の面子を潰してでもこの演習からパイロット教育の情報を

得ようと必死なのだ。
「これにより、我々と相手との戦力比は一対三となる訳だが、これについて大西洋連邦側からも要請があった。東アジア側の戦力増強を条件に、こちら側にもモビルスーツを一機増やすというものだ」
ルースの説明にウォルトは疑問を持った。今の〝ラプターファングス〟にはモビルスーツ、パイロット共に余剰戦力は一切ない。にもかかわらず、もう一機増やすというのだ。
（隊長はどうするつもりなんだ…？）
隊員の疑問がブリーフィングルーム全体に伝播しかけたときルースの横から声がした。
「それについては私から説明しよう」
ルースに代わって檀上に上がってきたのは見慣れない大西洋連邦の士官だった。少なくとも隊内では見かけたことはない。肉の削げ落ちた頬と高い鼻が特徴的な男だ。
「〝ラプターファングス〟の諸君、私は中央作戦群・第３０５特務試験小隊のディック・リーヴス大尉だ」
（中央作戦群…？）
ウォルトは予想外の部隊の介入に、動揺を隠せなかった。脳裏にあの銀髪の少女が浮かぶ。
「〝ラプターファングス〟にこれ以上の余剰戦力はない。そこで我が隊のモビルスーツとパイロットを貸与しようと思う。入れ」
リーヴスはブリーフィングルームの入り口に声をかけた。
扉が開き一人の兵士が入室する。すらりとした、スタイルの良い身体と透き通るような銀髪。そして、感情を感じさせない表情は、まぎれもなくウォルトが脳裏に思い描いていたものだった。
「紹介しよう、第３０５特務試験小隊所属のテストパイロット。フィーリア・ブラウン少尉だ」
「フィーリア・ブラウン少尉だ。よろしく頼む」
薄緑の瞳が一瞬ウォルトを捉えるが、最初にあったときと同じ硬質な印象だ。
（マジかよ…）

ウォルトの動揺をよそにリーヴスは説明を続ける。
「しかし、演習までの短期間で彼女との連携を醸成するのは、いくら精鋭揃いの貴官等でも難しいと思う。そこで、彼女は、〝ラプターファングス〟の戦闘には積極的に関与しない。指揮権は基本的にルース大尉にあるが、ブラウン少尉は独自に判断して行動する。ルース大尉、構いませんな？」
「はっ」
ルースは当然のごとくリーヴスに答える。通常部隊と中央作戦群の縮図が、このブリーフィングルームの中で成立していた。

沖縄基地　〝ラプターファングス〟待機所
「まさかあの娘が中戦群のパイロットだったとはねえ…」
ミーリャとなにやら話しているフィーリアを眺めてケイが呟く。普段話さない人物であるためかフィーリアは戸惑っているように見える。
共に演習に参加する者として交流を深めておけと、フィーリアはリーヴスに命じられたらしい。
「お前知ってたのか？」
ケイがウォルトを振り返る。
「アイクに中戦群所属の《ロングダガー》が積んであったからもしかしてとは思ってたがな…」
「まあ、開発部隊っていうんだから実験機扱いなのかもしれないしな」
「機密に関わることを聞いちまうとアイツ露骨に嫌な顔するから、あんまり突っ込むなよ」
ウォルトはケイにくぎを刺す。
「あんな秘密主義の部隊にいるんだから、そうなるのも当然か」
そこで珍しく神妙な面もちだったケイの表情が崩れる。
「それより良かったじゃねえかウォルトくん。彼女と仲良くなる許可をもらえて」
ウォルトにはケイがこの手の話題を振ってくるタイミングが徐々

に予測できるようになっていた。
「ああ、そうだな。交流を深めさせてもらうよ」
務めて冷静に返す。
「ボブがまたキレそうだな…」
ボブもフィーリアと話すのを楽しみにしていたが、演習に向けた機体のオーバーホールの予定が重なり、引っ張られるようにして整備班長に連れていかれてしまったのだった。
「そういや、フィーリアの機体は《ロングダガー》だったな。俺らの《ダガー》とはどう違うんだ？」
「俺も資料を読んだだけだから詳しくは知らんが、ＳＰＳ（ストライカーパックシステム）をオミットされてるって点は《ストライクダガー》と同じだ。《ストライクダガー》との最大の違いは白兵戦用、この場合は対モビルスーツ戦に適した設計が施されてるってところか。装甲の簡略化による運動性の向上なんかがそれに当たるな」
ウォルトはエドワーズに来る前にランドルフで呼んだ資料の内容を頭に呼び起こした。
「運動性がいいのか？」
「ああ、データを見る限りじゃ運動性は《ダガー》より高いな。あ、それとこれはボブから聞いた話だが、ＯＳは《ストライクダガー》より古い物を使ってるらしい。まあそこは操縦技術次第でなんとかなるらしいが」
ボブは整備兵であると同時に重度のモビルスーツオタクでもあった。本人が言うには、その異常な知識量のおかげで〝ラプターファングス〟の整備兵に引き抜かれたらしい。
「だとするとフィーリアはかなりの腕前なんじゃないか？」
「ああ、次の演習が楽しみだぜ」
「気合いを入れるのは構わんが玲央奈には気をつけろよ」
ケイの目線が隣接した格納庫を覗ける窓に向かう。窓の向こうでは装甲を外され、内部がむき出しになった《ダガー》が整備されている。
「交歓会であった女パイロットか？」

ウォルトはオリーブドラブに身を包んだショートカットの女パイロットを思い浮かべた。
「ああ、俺はアイツが空戦で負けるところを見たことが無い。他の東アジアのパイロットと同じに考えない方がいいぜ」
「強い相手なら大歓迎だ。だったら俺がお前に彼女が負けるところを見せてやるよ」
ウォルトは不敵に笑ってみせた。
「頼りにしてるぜえ、エースパイロット君！」
ケイはウォルトの背中を叩くと屈託のない笑みを浮かべた。

第十五話

南西諸島・沖縄本島　東アジア共和国・太平洋方面軍・沖縄基地
大西洋連邦エリア・格納庫

第６０６モビルスーツ大隊との演習のため、ウォルトとケイはパイロットスーツを身に着けると、ドレッシングルームから格納庫への廊下を歩いた。ミーリャとフィーリアは女性用のドレッシングルームのため一緒ではない。

ケイの後ろを歩いているとウォルトは大事なことを忘れていることに気づいた。

「なあ、ケイ」

ウォルトは歩く速度を少し早めケイの横に並んだ。

「なんだ？」

ケイがウォルトの呼びかけに反応する。いつも通りの砕けた雰囲気だ。だからこそ、ウォルトは大事な気掛かりを確認することを一瞬ためらった。

「なんだよ、お前から話しかけてきたんだろ？」

言いよどむウォルトに気づいてケイが続きを促す。ウォルトは意を決した。

「今更聞くのもどうかと思うが、今回の演習お前はどう思ってるんだ？演習とはいえ相手はお前が本来所属してるはずの軍だろ？おまけに今回は同期まで相手にしなきゃならない」

おまけとは言ったがウォルトとしては三隈玲央奈の存在が一番気掛かりだった。負け続きだったとはいえ、訓練校で凌ぎを削った同期と、仮にも別な軍として戦うということがケイになにかしらの影響を及ぼすのではないかと思ったのだ。

ウォルトの言わんとしていることを理解したのか、ケイは驚くように目を丸くした。続いて堪え切れないといった様子で吹き出す。

「ウォルト、お前意外と繊細な奴だな！」

ケイが必至に笑いをかみ殺して出た言葉がそれだった。

「は…？」

ケイの意外な反応に今度はウォルトが動揺する。
「いや、わりい。お前がそんなこと考えてるなんて思わなかったから」
ケイは尚も笑いをかみ殺すのに必死だ。
「仲間と戦わなきゃいけないってなったら普通、動揺したりしないか？」
「逆に聞くがウォルト。お前は訓練校で模擬空戦をするとき相手を意識したか？」
ケイの質問を受けてウォルトは訓練兵時代を思い返す。いや、思い返す間もなく答えに辿り着いた。
「訓練の一環だったから別に…」
実機搭乗で行う模擬空戦は気を抜けば死ぬ可能性だってある。だから、集中力を欠くことは許されない。そして、その集中力自体も空戦の相手で揺らいだりはしなかった。つまり、相手が仲間であるということを理解した上で、ウォルトは模擬空戦に臨み、そして勝利してきたのだ。
だからこそウォルトは今、此処（ラプターファングス）にいる。
「それと一緒だよ。俺が今所属しているのが大西洋連邦だろうがなんだろうが、演習相手で動揺したりしない。それに俺だっていつまでも玲央奈の後塵を拝するのは嫌だ。だから今回の演習は願ったり叶ったりさ」
軽い調子でそう語ったケイは先ほどと変わらずいつも通りだ。
「まあ玲央奈は俺よりお前に興味があるらしいから、いざとなったらアイツの相手はお前に任せるけどな」
そう言って笑うケイを見て、ウォルトは自分の心配が取り越し苦労だったことをやっと理解した。
「俺にアイツが負けるところを見せてやるって言ったのはお前だからな。頼むぜウォルト」
「ああ、そうだったな」
ウォルトはケイに肩をすくめてみせた。
※

「フィーリアは今まで何に乗ってきたの？よかったら教えてくれないかしら」
パイロットスーツへの換装を終え、格納庫に到着するとミーリャがフィーリアに問いかけた。三日前からフィーリアは〝ラプターファングス〟と行動を共にしているが、ミーリャは特にフィーリアを気にかけているようだった。少なくとも、他人の好意に疎いフィーリアでもそれを察することができるくらいには、だ。それが、どうしてなのかまではわからなかったが、〝ラプターファングス〟に彼女以外女性がいないのも関係しているのだろうか、とフィーリアは思った。
「機密に触れるので詳しくは言えないがＦ―７に乗っていた時期もあった」
フィーリアは部外者に言っても差支えない情報のみを選択して質問に答えた。正直なところ、隊外の者と話すときに一番気を使うのがこの作業だ。己の不注意で隊の機密情報を漏らしてしまったら、どんなことになるか分からない。フィーリア自身が罰せられるのは構わない。だが、その影響で〝ラーミナ〟や計画そのものに影響が出るのがフィーリアは許せなかった。
「へえ、私もユーラシアにいたころは《スピアヘッド》だったわ。Ｃ型だけどね。大西洋連邦ならやっぱりＥ型が主流かしら？」
ミーリャは自虐的に微笑んだ。
今や地球の多くの国家が主力戦闘機として採用している《スピアヘッド》だが、元は大西洋連邦に属する企業であるＰ・Ｍ・Ｐ社が開発したものだ。そのため、一般的な近代化改修タイプであるＣ／Ｄ型を、より先進的な技術で改修したＥ／Ｆ型に大西洋連邦は更新をはじめていた。アビオニクスと火器管制レーダーの刷新に加え、ＡＧＭ―１２４《ドラッヘ》、ＡＩＭ―１８《ヴェルガー》といった新型の対地、対空ミサイルの運用能力を付与することで元々高かったマルチロール性を、更に底上げしたＥ／Ｆ型を大西洋連邦軍部は高く評価。他国のＣ／Ｄ型に性能で差をつけるべく配備を急いだのだった。
「Ｆ―７は扱いやすい機体だが、特にＥ型のアビオニクスは優秀だった」

フィーリアは過去にE型で試験飛行に臨んだ時の記憶を呼び起こし、ミーリャに語って聞かせた。

※

ウォルトとケイが格納庫にたどり着くと、ミーリャとフィーリアはすでに機体の前で待機していた。ミーリャの優れたコミュニケーション能力のおかげか、フィーリアは随分彼女と親しくなったように見える。はたから見ると姉妹のようだ。

「ミーリャは流石だな」

その光景を見るとケイが呟いた。

「俺なんか『お前と話す必要性を感じない』なんて言われたぜ…」

「お前はどうせナンパでもするような言葉をかけたんだろ…？」

ウォルトは呆れ気味にケイを流し見る。

「ナンパではない！コミュニケーションの一環だ！」

「はいはい…」

そんなやりとりをしていると、機体の陰から整備用の繋ぎを着た丸いネグロイドの男が現れた。

「お、やっと来たなお二人さん！」

顔の汗をタオルで拭いながらボブが歩み寄ってくる。

「よう、ボブ。機体の点検は万全か？」

ケイは自分の《ダガー》を見上げながら言った。

「もちろんだ。それよりお前らはあの娘と随分仲よくやってたみたいじゃねえか！」

オーバーホールで機体に付きっきりだったボブは、フィーリアが気になってしょうがないらしい。

「安心しろ、ボブ。ケイはフィーリアに嫌われた。ミーリャが彼女と仲良くしてるのを見たんだろうが、お前が思ってるほど彼女は俺たちを信用してないよ」

「結局俺とケイは余りものか…」

ウォルトの慰めもむなしく、ボブは肩を落とす。

「俺を余りもの呼ばわりはやめろ！」

ケイの突っ込みが格納庫に木霊した。

※

ＧＡＴ―０１Ｄ《ロングダガー》のコクピットに、フィーリアは滑り込むように着座した。実機への搭乗はこれが初めてだ。慣熟も終わっていない。しかし《ダガー》シリーズのコクピットは共通規格のため、操作に戸惑うということはなかった。エドワーズで乗っていた《ストライクダガー》に比べて機動特性に若干の差はあるが、すでにシュミレーターで確認済みだ。十分に戦える自信がフィーリアにはある。

ＯＳの立ち上げが終わると〝ラーミナ〟の管制室との秘匿通信が繋がった。通信用モニターにリーヴスが現れる。

『いいか、ブラウン少尉。先日も通達したが、今回の演習に我々は積極的に関与しない。こちらの指示があるまでは相手から機体を隠して待機だ。まずは〝ラプターファングス〟に華を持たせろ』

抑揚を感じさせない声でリーヴスはフィーリアに命じた。

「了解」

「これ以降は〝ラプターファングス〟の管制指示に従え。いいな」

「はっ」

フィーリアが短く答えると通信は切られた。代わりに〝ラプターファングス〟のオペレーターがモニターに現れる。

『ラーミナ０１、準備はいいか？』

「問題ない」

『では〝ラプターファングス〟に続いて演習区域へ移動せよ』

「了解」

オペレーターとの互いに無機質な会話を終えると、機体がガントリーから解放される。

同時に格納庫のゲートが開き、沖縄の陽光が外部モニター越しにフィーリアのヘルメットを照らした。

第十六話

南西諸島・沖縄本島　東アジア共和国・太平洋方面軍・沖縄基地
第三演習区域

統合データリンクにより、戦域マップに映し出されていた青色の光点がまた一つ掻き消える。理屈の上では友軍機から発せられていた信号が途絶えたに過ぎないが、それはつまりその機体が撃墜判定を受けたことを意味している。

『ストーム01より各機、戦力をまとめろ。数の有利はこちらにある。焦って突出すれば敵の思惑にはまることになるぞ』

黒田の声がヘルメットイヤフォンに響く。部隊唯一の実戦経験者というだけあって、その声は冷静だ。

この演習に東アジア側の《ストライクダガー》は全部で十八機参加していた。しかし、すでに二機が撃墜されており、そこにたった今戦域マップから掻き消えた光点も含めると残存機は十五機となる。攻めては引いていく、相手のヒットアンドアウェイに翻弄される形だ。

その状況に対して玲央奈は内心舌打ちした。

（これだけの数を揃えておいて…）

相手の〝ラプターファングス〟は七機。本来なら、単純計算で三倍近い戦力を有しているこちら側が、圧倒的に有利なはずなのだ。しかし、606隊が三機失っているのに対して、〝ラプターファングス〟はいまだ一機の損害も出していない。その上、〝ラプターファングス〟が『助っ人』として他部隊から借り受けたという機体は、今のところ姿を現していない。

（私たちを相手取るのに助っ人なんかいらないってこと…？）

その事実は、玲央奈の静かな苛立ちをさらに加速させた。

その苛立ちに急かされるように、玲央奈は操縦桿に備えられている通信機のスイッチを押し込んだ。

「ストーム08よりストーム01、意見具申」

これ以上防戦を続けても戦力を削られて終わる。そう思った玲央奈は黒田に通信を繋いだ。

『なんだストーム０８』
普段自分を厄介な跳ねっ返りとしか見ていない黒田が、珍しくまともに答えた。てっきり無視されるかと思っていた玲央奈は、拍子抜けしたように一瞬沈黙する。
『意見とはなんだ。早く言え』
黒田に急かされ、はっと我に帰る。玲央奈は口を開いた。
「このままでは戦力を削られてジリ貧です。数的優位がこちらにあるうちに、部隊を二分するべきと愚行します」
『この状況で戦力の分散を図る理由はなんだ？』
「錬度に差がある以上全機で攻勢に出るのは危険です。ならば囮となり防戦に徹する隊と、攻勢に徹する隊に分けた方が勝機はあると考えます。どちらかに専念すればそう易々とやられることはない位には訓練しているつもりですが」
モニターの向こうの黒田はこちらをじっと見据えたまま黙り込む。
今攻めることが出来なければ勝ちはない。黒田もそれは分かっているはずだと玲央奈は信じたかった。もしも分からないなら、黒田はどうしようもない無能だとも同時に思った。
『わかった。攻勢部隊の指揮を貴様に任せる』
黒田の決断に玲央奈は安堵した。少なくとも自分はどうしようもない無能の下にいるわけではない。
「了解。ありがとうございます」
玲央奈は黒田に対して初めて心から礼を言ったような気がした。
『ストーム０１より各機、これより隊を二分する。ストーム０８は攻勢に移り、奴らの連携を分断しろ。誰を連れていくかは貴様に任せる。残りは防戦に徹して敵をつり上げる。鶏（チキン）共にこのまま負けたら俺たちはどうしようもない腰抜けだと世界に喧伝されることになるぞ。気合いを入れてかかれ！』
「了解」
玲央奈は共に攻勢をかける仲間を指名すると、口角が吊り上がるのを自覚しつつスロットルを開放。フットペダルを踏み込んだ。
※

『接近する機影あり。数3、小隊規模です』
敵機の接近をいち早くセンサーで捉えたミーリャが報告する。
今回の演習区域は市街地戦を想定しているため、モビルスーツの背丈を超える巨大なビル群が林立している。センサーでは捕捉できても、ダミービルに阻まれて敵機を目視できないのだ。しかし、その狭い視界は数的不利である〝ラプターファングス〟の味方として働いていた。センサーでは捕捉できても、目視で捉えられなければそれは欺瞞の可能性もある。少数の〝ラプターファングス〟が敵の死角を突き接近を図るにはもってこいのフィールドだと言えた。
だが、その状況が常に確定しているわけではないことにケイは気づかされた。
ミーリャにより更新されたデータによれば、接近する敵影は三つ。606隊はこちらよりさらに少数に隊を分け、接近を図ろうとしている。追い詰められた状況での戦力の分散は愚策だが、そう断じてしまうのは危険だとケイは感じた。単なる勘ではなく、これまでの実戦と演習の経験から導き出された教訓だ。ケイが今の段階で玲央奈に勝っているものは、大陸の最前線で培われた実戦経験のみなのだ。
『やっと仕掛ける気になったか…？』
ミーリャに続いてリーのぼやきがイヤフォンに流れた。
『流石に痺れを切らしたか。相手の誘いに乗る必要はない。本隊に狙いを定めるぞ。続け！』
ルースの1番機が隊に先んじて、スラスターを点火。推進力を得た《ダガー》が、滑走を始め、ビル群に飛び込んだ。それに味方の《ダガー》が追随し、ケイも遅れまいとフットペダルをミリタリー推力で踏み込んだ。背後からはウォルト機の4番機が追随してくる。隊の殿を守る形だ。
そのウォルトが不意に通信ウィンドに現れた。
『なあ、ケイ。玲央奈少尉はどっちにいると思う？』
「どっちって？」
ケイは質問の意図を問い返す。
『相手の本隊と、別動隊。彼女はどっちに付くだろうか…』

ケイが忠告した通り、ウォルトは玲央奈の居場所を警戒しているようだ。
「玲央奈の性格からして本隊にはいないと思うが…」
ケイは玲央奈の性格を思い浮かべる。彼女は一見クールで冷静なように見えるが、演習となると積極的に攻めたがる。そのため、演習での行動や言動だけ見ると、好戦的な人物に見えがちだ。しかし、それは直情的な行動ではなく具体的な勝利への計算を元にして行われたものだった。だからこそ、ケイは玲央奈の位置を本隊から分かれた小隊だと断じるのは怖かった。彼女は本当にそこまで単純だったか。この状況に対する違和感をケイは拭えないでいる。
『やはり別動隊か？』
言いよどむケイに焦れたようにウォルトが問い返してきた。
「アイツなら――っ！」
ケイが玲央奈の居場所の予想をウォルトに告げたようとしたとき、それは起きた。
〝ラプターファングス〟は６０６隊の本隊に接近を図るべく別動隊の侵攻ルートを迂回し、大回りで本隊に接近しつつあった。その途上、モビルスーツ一機をやっと隠せそうな細い道路に差し掛かった瞬間である。ケイの《ダガー》がそのＴ字路を通過しようとする直前。オレンジに焼けついた曳光弾が撓る鞭の如く左側の角から襲い掛かってきたのだ。それを見てから機体を制御したのでは、ケイの《ダガー》は５２ｍｍ徹甲弾の奔流に突っ込んでいただろう。しかし、Ｔ字路の直前で、《ダガー》の多目的センサーが僅かな振動を捉えていた。ケイは反射的に背部、脚部のスラスターを可動させ、スラストリバースに切り替えた。背中から圧し掛かるような強烈なＧが、ケイの身体を押さえつけ、交差点の数メートル手前に《ダガー》が着地する。角から放たれた砲弾は反対側のビル群を薙ぎ、窓ガラスとコンクリート片を飛散させた。ケイの違和感が確信に変わる。
ウォルト機はそれに一瞬動揺したようだが、ケイの機動に倣い、スラストリバースで急減速し、ケイとの激突を回避した。
『流石にパッシブセンサーだけじゃ精度が落ちるか…』

割り込んできた女の声音と同時に、角からライトグレーとオリーブドラブの装甲を纏った《ストライクダガー》が躍り出る。左腕にはシールドと共にサーベルが保持されており、近接格闘戦の意思が伝わってきた。その《ストライクダガー》はビルの壁面を蹴りつけることで、直角機動を決め、ケイの上方から襲い掛かってきた。
サーベルを抜くのが間に合わず、シールドでその斬撃を受け止める。
「メインジェネレーターを落として潜んでやがったな！」
ケイの咄嗟の叫びに《ストライクダガー》のパイロットが応える。
『アンブッシュは戦術の基本でしょ？』
ケイを何も知らない子供のように扱うその声音は、紛れもなく三隈玲央奈のものだった。
『０５！大丈夫か!?』
ルースの１番機が振り返る。それに呼応して部隊そのものの進行速度が落ちた。
「０５問題ありません！コイツは押さえます！先に言ってください!!」
『本隊を全て平らげても文句を言うなよ？』
それだけ言うとルースは三機の《ダガー》を率いて侵攻を再開した。
ケイはサーベルを受け止めたシールドを押し返し、弾かれたように《ストライクダガー》から距離を取る。その隙に兵装選択をＧＡＵ８Ｍ２　５２ｍｍ機関砲から、ＥＳ０１ビームサーベルへと切り替えた。オリーブドラブとオレンジの二機が睨みあう。
「０４、お前も先に行け」
背後でライフルを構えるウォルトに再び通信を繋ぐ。
『悪いな０５、俺も彼女の腕には興味あるんだ』
ウィンドに映し出されたウォルトの表情は楽しげだ。こうなったらコイツは考えを変えないとケイも理解していた。
「お前との一騎打ちを望んでた玲央奈には悪いが、二機で仕留めてさっさと合流するぞ！」
『０４、了解』

ケイの《ダガー》が駆け出し、一気に距離を詰める。《ストライクダガー》はライフルを腰にマウントしサーベルを右腕に持ち替えると、ケイが振り下ろしたサーベルを受け止めた。ミラージュコロイド粒子によって形成されたビームの刃がぶつかり、稲妻のような干渉光が外部モニターを染め上げる。それでもケイは玲央奈の《ストライクダガー》から目を逸らさなかった。

『私に挑むとは、アンタも少しは腕を上げたのかしら?それとも、単なる無謀?』

相変わらず玲央奈はケイを見下したままだ。

「前者だと言いたいが、０４が支援に回ってくれるのも心強いな」

『だったらさっさと交代しなさい。私は今更アンタなんかに興味ないの』

「なら俺を墜としてみせろよ!」

ケイの《ダガー》が一歩踏み込み、サーベルを振り切る。《ストライクダガー》はその衝撃を半歩後方にさがることでいなし、すぐさま次の斬撃を繰り出してきた。

深緑と橙。二機のダガータイプがぶつかり合う光景をウォルトは外部モニター越しに見とどけた。

第十七話

東シナ海某所　ザフト地上攻撃軍・第１１潜水隊群・第２潜水隊

ボズゴロフ級潜水母艦《ペテルソン》

いつものように艦長席の横の定位置に立ち、ダニエル・ラバッジは手元の紙片に目を落とした。

そこには、沖縄基地で行われている合同軍事演習の内容が事細かに記されている。プラント本国の諜報部が予め潜入させたスリーパー（工作員）がもたらした貴重な情報だ。

それによれば、どうやら現在は対モビルスーツ戦演習が行われているらしい。基地敷地内での演習となっては、モビルスーツ運用能力を有するこのボズゴロフ級潜水母艦といえどもそう易々と手は出せない。そもそも、ラバッジ隊に与えられた任務はモビルスーツ隊の相手ではなく、モビルスーツ搭載型空母の情報収集だ。空母がそこにいないのでは意味がない。だからこそ、ラバッジの視線は今日の演習内容ではなく、その数日後の項目に注がれていた。

「それにしても、我々のみで大西洋連邦の空母打撃群を相手にしろとは司令部も無茶をいいますな」

艦長席に座る面長の男が口を開いた。歳はラバッジより一回りほど上だが、そのことをこの艦長は気にしていないようだった。実力主義のコーディネイターならではの割り切りとも言える。

「せめて新型の《ゾノ》を回してくれれば…」

ザフトの潜水隊は二隻からなり、作戦行動はそれ以上の数を揃えて行われる。本来の潜水艦運用は少数での隠密行動が好ましいが、電子機器の使用が制限されたニュートロンジャマー影響下で単独で行動するのは、リスクが高い。その上、人的資源の限られたザフトでは潜水艦一隻沈められただけでも重大な損失となる。そのような事態を避けるため、データリンクによる情報共有を重要視した集団戦術がザフトで発展していったのだった。

しかし、今回の任務に指名されたのはラバッジ隊、ただ一隊だけだった。僚艦であるボズゴロフ級《ストンメル》と、この《ペテルソ

ン》の二隻のみだ。その二隻のみで大西洋連邦の空母打撃群を相手取るのは、集団戦術を基本戦略としてきたザフト潜水艦隊としては異例の作戦と言えた。
「そうぼやくな艦長。大方、〝スピットブレイク〟の戦力抽出に忙しいんだろうよ」
主要な宇宙港やマスドライバーを占領し、地球軍を地上に封じ込めるべく立案されたオペレーション〝ウロボロス〟。その仕上げとしてパナマ宇宙港の攻略を目標とした作戦が〝スピットブレイク〟だ。その発動に備えて太平洋方面の部隊の多くがカーペンタリアに集結中であり、高雄を拠点とする東アジア方面軍も例外ではなかった。
「そもそも《ゾノ》は格闘戦と陸戦を重視した機体だ。対艦戦がメインになるだろうこの任務には不向きだよ」
「そうかもしれませんが…」
艦長はまだ納得できていないようだ。
「連合がモビルスーツの配備を始めた以上、その運用能力を調べるのはザフトにとって急務だ。この任務は難しいが、失敗は許されん」
そう締めくくるとラバッジは気持ちを入れ替えた。
「チャンスが無いわけでもないしな」
モビルスーツ戦演習の次の項目。それは水上部隊による火力投射演習とその艦載機の展開演習だった。
南西諸島・沖縄本島　東アジア共和国・太平洋方面軍・沖縄基地
第三演習区域

オレンジの装甲に身を包んだ《ダガー》とオリーブドラブの《ストライクダガー》がもつれ合うような高速機動でサーベルをぶつけ合う。《ストライクダガー》が《ダガー》の斬撃をサーベルで受け止めつつ、残った左腕に保持されたライフルでこちらに狙いをつける。その銃口から５２ｍｍ徹甲弾が撃ち出され、ウォルトに殺到した。
「クソッ…」
砲弾が放たれる直前に踏み込んだフットペダルが、やっと反応し機体を後ろ上方へ跳び上がらせる。一瞬前までウォルト機が陣取って

いた位置のアスファルトが粉々に砕け、砂塵を舞い上がらせた。
ケイの援護をしようとウォルトはトリガーに指をかけるが、高機動格闘戦の最中ではＩＦＦが邪魔で狙えない。さらに、玲央奈はその戦闘の最中、こちらに牽制射撃を見舞ってくる。
（操縦技術も相当だが視野が広すぎる）
三隈玲央奈は本隊から分かれた攻勢部隊すら囮として、〝ラプターファングス〟の懐に入り込み、その戦力を分散させたのだ。その上、攻勢部隊を自分自身を除く三機とすることで、モビルスーツ部隊における小隊単位と思わせ、こちらの読みに説得力を持たせてきた。
（おまけに頭もキレるとは…。最高にやり辛い相手だ…）
当初は互角に見えたケイと玲央奈の戦闘も徐々に玲央奈がケイの機動を読み始めており、ケイが押され気味となりつつある。
次の瞬間、玲央奈の機体の踏み込みが変わった。ケイの繰り出したサーベルを斬り払うと、その遠心力を利用して左脚部を蹴り上げたのだ。
『クッソッ!』
ケイの呻きがヘルメットイヤフォンに流れる。不意に繰り出された前蹴りに対応できず、ケイの《ダガー》のサーベルが弾き飛ばされた。すかさず返す刀で玲央奈の斬撃が《ダガー》に迫る。援護射撃も間に合わない速さだ。《ダガー》はスラスターを全開で吹かすと同時に、機体をわずかに左に傾けた。《ダガー》の胴体部を狙っていたサーベルが逸れ、右腕部を捉える。ビーム粒子で構成された高熱の刃が《ダガー》の肘から下を斬り飛ばした。
右腕を犠牲に、ケイは《ストライクダガー》から大きく距離を取る。
「０５…!!」
ウォルトは思わず叫んだ。
『心配するな０４。今の蹴りでマニュピレーターがイカレた。デッドウェイトになるならくれてやった方がマシだろ?』
ケイの機体のデータを見る限り、右腕部以外に致命的な損傷はない。しかし、腕が一本になるということは手数も半分になるということだ。今の状態で玲央奈との格闘戦を続けても勝機はない。

『アンタには興味ないって言ったでしょ!!』
オープン回線で玲央奈の声が響くと、間髪いれず《ストライクダガー》が駆け出し、ケイの《ダガー》に急接近を図る。ケイはライフルを引き抜くと《ストライクダガー》に指向し、引き金を引き絞った。
しかし、その砲弾が玲央奈機を捉えることはなかった。
スラスターを最大推力で吹かした玲央奈機は主脚の勢いも借りて上方へ逃れたのだ。さらに、玲央奈は巧みな姿勢制御でスラスターの向きを変え、ケイの《ダガー》に迫った。
ケイは反射的に左腕で機体を庇うが、玲央奈の狙いはそこにあった。
無防備に掲げられたライフルを、玲央奈は踏みつけるように足蹴にする。ライフルの銃身がぐにゃりと変形し、ただの鉄塊と化す。折れ曲がったライフルを軸に、《ストライクダガー》はさらに一歩踏み込むように、ケイの《ダガー》の後頭部を踏みつけた。
「ケイッ!」
またしてもウォルトは声を上げていた。しかし、今度はケイからの応答はない。代わりに、悔しげな呻きがイヤフォンに流れる。
背後上方からの過重に耐え切れず《ダガー》はつんのめるようにして、うつぶせに倒れ込んだ。
《ダガー》を踏みつけた反動を利用し、玲央奈はなおも動きを緩めずそのままこちらに突っ込んでくる。
「マジかよッ!?」
ウォルトは咄嗟にシールドを構え、《ストライクダガー》のサーベルを受け止めた。
『さあ、アンタの腕を見せてみなさいよ』
玲央奈の余裕に満ちた声がウォルトの精神を逆なでする。
「なめやがってッ!」
ウォルトはシールドを力任せに押し返すと、右腕でサーベルを抜刀した。抜刀と同時に繰り出された斬撃を、玲央奈機はクルリと機体を回転させ回避する。先ほどの荒々しい機動とは打って変わって、ダンスを踊るような美しい動きだった。

その回転力を利用し、玲央奈機も横薙ぎの斬撃を見舞ってきた。回避は間に合わない。ウォルトはサーベルでその一撃を受け止めるしかなかった。

真っ赤なダイアログが外部モニターに立ち上がり、関節部に過負荷がかかっていることを示す。

しかし、機体の負荷に構っている余裕はウォルトにはない。

過負荷の表示を無視しつつ、操縦桿のトリガーを引き絞る。《ダガー》の両側頭部に配された〈イーゲルシュテルンⅡ〉が咆哮し、無数の砲弾を玲央奈機に浴びせかける。《ストライクダガー》は一瞬怯むが、すぐさまシールドを掲げ、それを弾いた。

『その程度なの?ウォルト・クミラン!!』

《ストライクダガー》の膝が蹴り上げられ、ウォルト機の胸部を捉える。

パイロットスーツの耐G機能でも和らげることのできない衝撃がコクピットを襲った。シートを伝ってくる衝撃に揺さぶられながら、ウォルトは食いしばった歯の間から呻きが漏れるのを知覚した。

(コイツとの格闘戦は不利だ…)

なんとか体勢を整えるが、玲央奈の猛攻をサーベルとシールドで受けるのが精一杯で反撃に移ることも、その隙を見つけることもできない。

悔しいが彼女の格闘戦技術には叶わない。それがウォルトの出した結論だった。

その結論に従いウォルトはフットペダルを踏み込むと、機体を全力後退させビルの陰に滑り込ませた。そのまま幾つかの交差点を越え、玲央奈機から距離を取るとジェネレーター、スラスター共にアイドル状態まで絞り、機体を静穏モードに切り替えた。

センサーの反応を見る限り上手く撒けたようだ。

「悪いが、馬鹿正直に一騎打ちをする怖さは身に染みてるんでね…」

エドワーズに着任したての頃の、演習の苦い記憶がウォルトの脳裏に浮かんだ。

ウォルト機からでは直接センサーで玲央奈機を捉えることはでき

ないが、ケイとのデータリンクにより位置は把握できていた。マップに表示されたラプター０５の位置は先ほど倒れた位置から動いていない。あの衝撃で駆動系に障害がでたのか、あるいはケイが意図的に動かないのかは判別できないが、いずれにしろウォルトにとっては有り難かった。

ウォルトは戦術マップから玲央奈機を一方的に狙撃できる位置を割り出すと、慎重に移動を開始した。

開けた大きな交差点を狙えるビルの陰に機体を屈ませ、玲央奈機がそこに現れるのを待つ。

「格闘戦ばかりがモビルスーツ戦じゃないってことを教えてやるよ…」

センサーを確認すると玲央奈機は真っ直ぐにその交差点へ向かってくる。

接敵まで四秒。――三秒。――二秒。――一秒。

外部モニターのレティクルに、オリーブドラブの装甲が入り込む。同時に、ウォルトは引き金を引いた。セミオートに設定されたＧＡＵ８Ｍ２の銃口から、５２ｍｍ徹甲弾が吐き出され、玲央奈機にまっすぐ猪突する。

やった、とウォルトは思った。しかし、直撃コースにあったその弾道は、《ストライクダガー》のシールドによって無情にも明後日の方向に逸らされた。

「何ッ!?」

《ストライクダガー》の的確な動きにウォルトは動揺する。

しかも、今の砲撃でこちらの位置が玲央奈にバレた。《ストライクダガー》はスラスターに点火すると、獲物を見つけた猛獣の如くウォルト機に迫った。彼我距離２０００――。

咄嗟にライフルを連射するが、《ストライクダガー》は複雑なジグザグ機動をとっており、捉えられない。

「くそッ!自動照準なんて使ってられるか!」

ウォルトはコンソールからＦＣＳの設定画面を呼び出し、照準の設定をオートから、マニュアルへ切り替えた。

右腕に構えられたライフルが操縦桿の動きに連動し、迫りくる《ストライクダガー》に再び狙いを定める。ウォルトの全神経がライフルを制御する右の操縦桿に注がれた。

「悪いな玲央奈少尉、リード射撃は得意なんだよ‼」

《ストライクダガー》が照準用レティクルの中心に入り込む直前。ウォルトは操縦桿のトリガーを引き絞った。

第十八話

南西諸島・沖縄本島　東アジア共和国・太平洋方面軍・沖縄基地
第三演習区域

二十世紀後半、ミサイルの性能向上やデータリンクの登場により戦闘機同士による空対空戦闘は、機関砲による直接照準から火器管制レーダーによるロックオンへと移り変わっていった。

これにより、近距離で敵機の後方位置を占位すべく行うドッグファイトは、次第に衰退していくこととなる。しかし、実戦でドッグファイトが発生しなくなった後も、予期せぬ遭遇戦などへの対応策として機関砲は装備され続け、その訓練は継続されていた。

そして、Ｃ．Ｅ．７０。ザフトにより地球に散布されたニュートロンジャマーは、原子炉の核分裂反応を阻害すると同時に、長距離レーダーや通信機器を初めとした電子機器をも機能不全に陥れる副次効果を発揮。

これにより、地球圏における戦闘は、長距離ミサイルを初めとした電子戦から近距離における有視界戦闘の時代へと遡ることとなる。

ドッグファイトが行われなくなって久しい今となっては、その訓練は半ば形骸化し、戦闘機パイロットの必修技能というよりは、クリアすべき科目の一つとなり下がっていた。

こうした状況に対応すべく、訓練校の教育は大きく転換され、ドッグファイトでの勝率が良い者に高い評価を下すようになっていった。

ウォルトもそんな者たちの一人であり、中でもリード射撃の命中率は教導官さえ驚愕させる数字を叩きだしていた。

ウォルトの脳裏には、その当時の訓練でＨＵＤの向こう側に捉えた、アグレッサー機のエンジンノズルが去来していた。

外部モニターには鋭角の機動を取りつつ、こちらへ距離を詰めてくる《ストライクダガー》。それを確実に狙撃するのは、自動照準では不可能だ。ウォルトは操縦桿のスイッチで照準方法をオートからマニュアルへ切り替えると、ライフルのトリガーに意識を集中させた。この状態からでは咄嗟の回避機動は取れない。一か八かの賭けだ。

これまでの玲央奈の機動から、次の予測を立てる。コンピューターの補正は一切ない。自分自身のトリガータイミングが全てを決める。

（来たッ……）▪

ピタリと狙い定めた照準用レティクル。そこに玲央奈機が滑り込むコンマ三秒前。ウォルトはＧＡＵ８Ｍ２のトリガーを引き絞った。

ウォルトが握る操縦桿から、電子信号が機体を通じてライフルに伝わり、５２ｍｍ徹甲弾が発射される。その一瞬のタイムラグも計算済み。弾道は狙った通り、玲央奈機へと真っ直ぐ伸びていく。間違いなく胸部への直撃コースだ。

（今度こそ…！）

直撃コースと悟ったのか、《ストライクダガー》の動揺をウォルトは外部モニターを越しに感じ取った。動揺が機動に現れたのではない。純粋にウォルトはそれを感じたのだ。

それと同時に《ストライクダガー》は左腕にライフルを構えると、こちらに指向し、砲弾をばら撒く。狙いを定める間は無かった。

次の瞬間、《ストライクダガー》の胸部装甲を５２ｍｍ徹甲弾が突き破る。しかし、その狙いは僅かに甘く、胸部左側に命中した砲弾は、左主腕の駆動系とスラスターエンジンを悉く破壊したが、それは致命的損傷には至らなかった

だが、ウォルトにそれを確認する間は無かった。玲央奈が撃ち散らした砲弾の一発がウォルト機のコクピットに命中。外部モニターに撃墜判定のダイアログが閃いた。

※

「やってくれるわね…ッ!!」

玲央奈は呻くように吐き捨てた。外部モニターに損傷箇所を知らせる機体ステータスが表示される。

――――左主腕駆動系及びスラスター制御系に重大な損傷――――。

左腕とスラスターはもはや使用不能だった。

咄嗟に撃ったライフルが、偶々１０４号機のコクピットを捉えたのが幸いだった。もしも次の一撃があったなら確実に撃墜判定を受け

ていただろう。もっとも、今の状態ですら満身創痍と言える酷い状態だ。
「ウォルト・マクミラン…、やっぱり良い腕してるわね。さてと…、――!?」
玲央奈の意識が分かれた本隊に傾きかけたとき、接近警報がコクピット内を支配した。センサーに目を向ける。
「バンデット０５…速水！」
機体を振り向かせると右腕を失ったオレンジ色の《ダガー》が、スラスターを焚き外部モニター一杯に迫ってきていた。残された左腕にはサーベルが握られている。
玲央奈はしまった、と思った。《ダガー》のサーベルは、《ストライクダガー》より一本多く装備されていることを失念していたのだ。ウォルトとの戦闘に気を取られすぎていた。せめてケイにとどめを刺しておけば、という後悔が押し寄せるがもう遅い。
右腕に残されたサーベルで１０５号機の斬撃を受け止める。
『迂闊だったな、玲央奈』
余裕を感じさせるケイの声がヘルメットイヤフォンに流れた。
「なんで…、身動き取れなかったんじゃ…？」
『あの状況で食い下がっても、お前相手じゃ勝てそうになかったからな』
「相変わらず汚い奴…！」
『なんとでも言えよ』
１０５号機は一旦距離を取ると、スラスターを使い玲央奈の背後に回り込んだ。スラスターが使えない今の状態では、その機動に追い付けない。
振り向きざま、やけくそでサーベルを振るったが、それがケイを捉えることは無く虚しく空を斬るだけだった。代わりに、《ダガー》が横薙ぎに繰り出したサーベルが《ストライクダガー》のコクピットを捉え、外部モニターに撃墜判定のダイアログが表示される。
「くそ…」
そう小さく呟いた玲央奈の口元には、微かな笑みが浮かんでいた。

※

外部モニターの明かりと、微かなハムノイズに支配された《ロングダガー》のコクピットで、フィーリアはセンサー画面に眼を向けていた。

〝ラプターファングス〟からデータリンクを介して送られてくる情報で、演習の推移は詳細に知ることができている。しかし、だからこそフィーリアはもどかしさに身じろぎした。

ウォルトの１０４号機は致命的損傷を受けて行動不能。撃墜のタイミングから察するに、恐らくは敵の８番機とほぼ相打ちの状況だったのだろう。１０５号機も右手腕を損失している。別行動の本隊は敵部隊と交戦中。しかし、四機では流石に分が悪いらしい。徐々に押し込まれつつあった。

フィーリアが操縦桿を握りなおした瞬間。待ちわびた通信ウィンドウが開いた。

『ラーミナ０１、準備はいいか？』

秘匿通信画面に現れたリーヴスが無感情に問いかける。

「問題ありません。いつでもいけます」

リーヴスは無言で頷きもせず命令を達した。

『ラーミナ０１はこれよりメインジェネレーターを起動。〝ラプターファングス〟の戦闘に介入、敵機を殲滅せよ』

「了解。メインジェネレーターを起動します」

フィーリアの復唱を確認すると秘匿通信は唐突に途切れる。同時に機体のメインジェネレーターに火を入れた。それに呼応し、起動したジェネレーターの微かな振動を、フィーリアはシート越しに感じ取る。ゆっくりと立ち上がる《ロングダガー》の頭部センサーシールドが怪しく閃いた。

※

「ラプター０６よりラプター０１。ラプター０４のマーカーロスト、ラプター０５、中程度の損傷あり」

ラプター０１の側面から接近を図る敵に牽制射撃を見舞いつつ、ミーリャは分かれたウォルトとケイの状況を報告した。

『０４がやられたか…、あの８番機、ただの跳ねっ返りかと思えばかなりの腕のようだな…。０５の合流までどのくらいかかる？』
ルースの《ダガー》はスラスターを巧みに使い、敵との距離を保ちつつ砲撃を続ける。
「順調にいけば二百秒。ですが、その途中６０６隊の別動隊が待ち構えている可能性があります」
ミーリャは左腕一本でコンソールを操作し、戦術マップとケイの現在地から合流までの時間を割り出した。しかし戦術マップ上では、ラプター０５の頭を抑えるように６０６の別動隊を示すマーカーが、ケイの最短合流ルートに被さるように移動しつつある。
「現在の損傷状態でこれを突破するのは難しいと思われます」
ミーリャもケイの腕は認めている。しかし、片腕にサーベル一本の状態で三機を相手にするのはいくらなんでも無茶がすぎる。
『合流は難しいか。かといってこちらから合流したとしても、敵の本隊に背を向けることになる…』
「そうなった場合、挟撃の恐れもあります…」
なにか思案するようにルースが黙り込んだ。その間も敵はこちらの戦線を崩そうと圧力を強めてくる。
『０３より０６！作戦会議は結構だがコッチの支援も忘れないでくれよ！』
リーが割り込むように通信ウィンドウに現れる。はっと我に返りミーリャの瞳は外部モニターの精査を再開した。
リーの砲撃の間隙を縫って、レオンスに接近する敵機に狙いを定めトリガーを引き絞る。敵機は正確にコクピットを貫かれ、爆散すらせず地面に伏した。
それをミーリャが確認したのと、レオンスの声がイヤフォンに響いたのはほぼ同時だった。
『０６！後ろだッ！』
パイロットスーツに覆われた肌がぞわりと粟立つ。一瞬の隙を突いて、一機の《ストライクダガー》がミーリャの背後に回り込んでいたのだ。同時に正面から別の《ストライクダガー》がサーベルを構え

て距離を詰めてくる。
（挟まれた…!?）
背後からの砲撃を、反射的に機体を横滑りさせて回避するが、肩部装甲に浅い角度で直撃した砲弾がライトグレーの塗料を剥ぎ取った。致命的な一撃は避けたものの、無理な急回避を図ったせいで姿勢回復が間に合わない。機体の反応の遅さに歯噛みしつつ、ミーリャは外部モニターに迫る光刃を見据えることしかできなかった。
その瞬間。ビームサーベルの光に染め上げられようとしていた外部モニターが、暗い影に覆われた。その影は、ミーリャと《ストライクダガー》の間に割り込むと、サーベルが振り下ろされるより数瞬早く、右腕に握ったサーベルを下からすくい上げる。運動エネルギーで勝るはずの、《ストライクダガー》を超える神速で繰り出された斬撃は、その胴体部を斜めに両断。胸部が生き別れた《ストライクダガー》はその場に崩れ落ちるように擱座し、一瞬後、推進剤の誘爆により爆散した。
予想外の機体の乱入に〝ラプターファングス〟、６０６隊の動きが鈍る。
爆炎を背後に立つダークグレーの機体――ＧＡＴ―０１Ｄ《ロングダガー》の姿をミーリャは見据える。運動性向上を図るため、装甲の簡略化を推し進めたそのボディは、一切の無駄を削ぎ落としてなお、剣のような鋭さを持った特殊部隊員の肉体のようだ。見る者に畏怖を与えるその立ち姿からは、それに乗っているはずの少女の印象は感じられなかった。
次の瞬間、《ロングダガー》は恐るべき瞬発力でもって、ミーリャを背後から狙っていた《ストライクダガー》に肉薄。《ストライクダガー》はその機動に反応すらできずに立ち竦むばかりだ。コンマ数秒で《ストライクダガー》との彼我距離を無に帰した暗い影の如き機体は、その左腕に保持するＧＡＵ８Ｍ２を敵機のコクピットに押し付け接射。一瞬でコクピット部を蜂の巣にされた《ストライクダガー》のセンサーシールドからは、生気を失ったように光が消え失せる。それを確認する間もなく、《ロングダガー》はスラスターを点火。次の《ス

トライクダガー》の一群に急接近を図る。
『バカな…！《ダガー》タイプであんな機動を!?』
６０６隊のパイロットの悲鳴のような声がオープン回線で流れた。
迫りくる未知の敵に《ストライクダガー》がライフルで応戦するが、その砲弾は《ロングダガー》に掠りもしない。《ロングダガー》は弾道が全て見えているかのように、メインスラスター、姿勢制御スラスターをそれぞれ小刻みに吹かすことでその全てを鮮やかに躱していく。無論、弾道を『見る』など常人には不可能な話だ。ミーリャには、彼女がどのようにして敵の砲撃を避けているのか見当もつかない。
『ふざけやがってッ!!』
業を煮やした別小隊が《ロングダガー》の側方に回り込み砲撃を浴びせる。《ロングダガー》は左腕のライフルのみをそちらに向けて、牽制射撃を開始。それでもなお速度は衰えていない。
なんの抵抗もなかったかのように《ストライクダガー》の小隊と距離を詰めた《ロングダガー》は、慌てて兵装を切り替えようとする一機をサーベルの一閃で屠る。同時にもう一機の至近距離からの砲撃をシールドで弾き、そのままシールドを叩きつけた。その衝撃にバランスを崩した隙を狙い、胸部を横に薙ぎ払う。超高熱の刃が、コクピットブロックを正確に抉り取り敵機を動かぬ骸へと変えた。
二機の僚機を一瞬で失った小隊最後の《ストライクダガー》は、自らの恐怖に支配された砲弾を《ロングダガー》へ浴びせる。
しかし、《ロングダガー》は左腕のシールドとライフルを投棄すると、空いた左主腕で腰部アーマーに残されたもう一本のサーベルを引き抜く。重量を軽くすることで、先ほど以上に疾さを増した《ロングダガー》は、両主腕に光刃を携えスラスターを吹かした。
瞬間的に全開で焚かれたスラスターの推進力により、《ロングダガー》の１８メートルの巨体が、鮮やかな後方宙返りの軌道を描く。《ストライクダガー》の砲撃はそれを追い切れていない。
宙返りで瞬時に背後に占位した《ロングダガー》を、《ストライクダガー》がやっとのことで火器管制レーダーに捉えたとき、その胸部は二本のビームサーベルにより、十文字に両断されていた。

『ラプター01より各機、ラーミナ01を援護するぞ。このまま一気に押し切る！』

《ロングダガー》の圧倒的な機動に気を取られていたミーリャの意識を、ルースの声が現実に引き戻す。だが、その声は動揺を隠しきれていない。

《ダガー》にライフルを構えさせつつも、ミーリャは援護射撃の必要性を感じていなかった。《ロングダガー》の影のようなダークグレーの装甲には、未だ掠り傷一つない。

「これが…あなたの力なの…？――――フィーリア…」

ミーリャは我知らず、眼前で乱舞する《ロングダガー》を駆る少女の名を呟いた。

※

撃墜判定を受けてから、ウォルト機のコクピットの外部モニターは、自動的に観戦モードへと移行。演習のリアルタイム映像が流されていた。その映像の中ではダークグレーに塗り固められた《ロングダガー》が圧倒的な機動で606隊を翻弄していた。玲央奈の機動制御を目の当たりにしたウォルトからしても、その機動は玲央奈を超えていると確信できる。いや、恐らくはこの演習に参加している、全てのパイロットを凌駕しているだろう。

「これが…中戦群の実力なのか…？」

フィーリアが乗っているであろう《ロングダガー》はフレームや基本設計は《ストライクダガー》と共通のはずだ。対モビルスーツ戦能力の向上のため、装甲を一部簡略化しており、それにより運動性を初めとした総合性能は《ストライクダガー》より高いと聞いている。

しかし、今ウォルトの目の前で《ストライクダガー》を次々と屠っていくダークグレーの機体は、設計を流用した機体とは思えない瞬発力と運動性を発揮している。

恐らくは各所に大幅なチューンが加えられていることは、誰の目にも明らかだ。だが、その機動は、恐らくは機体の性能に依るだけのものではないだろう。

あれほどの反応速度を示す機体は並みのパイロットでは、まともに

扱うことすら難しいはずだ。そんな危険なバランスで調整された機体で、あの超絶機動をやってのけるということが、パイロットの技術の高さを如実に物語っていた。
ウォルトの口角が我知らず吊り上がる。
ウォルトは玲央奈が自分に興味を持った意味を改めて理解した。

演習終了後、簡易的な機体点検を行うため、各部隊は演習区域に併設された仮設ハンガーへ機体を収容した。
ジェネレーターの火が落ちるのを確認するとウォルトはハッチを開放、コクピットから這い出るようにキャットウォークへ降りた。
脳裏には、先ほどのフィーリアの戦闘機動がこびりつくように再生を繰り返していた。
「まさかお前でも敵わないとはなあ」
左からの声にウォルトはそちらを振り返る。隣のガントリーからキャットウォークを伝って歩み寄ってくるケイだった。その向こうにはミーリャの姿もある。
「ああ、レオナ少尉の操縦技術には見習うべき点が多かったよ」
「あれを見越し射撃で狙撃できるお前も相当ヤバいけどな」
ケイの表情が引きつった笑いに変わった。
「でもウォルトが撃墜されるのなんて、部隊内演習以外で初めてじゃない？」
ミーリャも会話に加わる。
「そもそもファングスは教導任務では被撃墜ゼロだったからな」
ウォルトはこれまでの演習を脳内に思い浮かべた。他部隊との演習でも負け知らずだった〝ラプターファングス〟は、これまで一機も撃墜判定を受けたことはなかった。そのため、今回の演習が初めての被撃墜記録となる。
「それどころか、フィーリアが動いてくれなかったら勝敗すら危うかったんじゃないか？」
ケイもまさか、玲央奈一人にここまで目算を狂わされるとは思わなかったらしい。

「三倍近い数が相手とはいえ、教導隊としての立場を考えると今回の演習は私たちの完敗ね」
ミーリャの表情が少しだけ曇る。
「どう見ても、あれだけの数で囲ってコテンパンにされた私たちの負けでしょ」
不意に割り込んでくる女の声。三人が声の方向を振り向くと、スレンダーな身体をパイロットスーツで覆ったショートカットの女が歩み寄ってきていた。
玲央奈はケイとミーリャをスルーすると、ウォルトの前で立ち止まった。
「狙撃を当てられたのなんか今回が初めてよ。マクミラン少尉、やっぱりあなた良い腕してるわね」
相変わらずぶっきらぼうな口調ではあるが、その声音からは素直な感心が感じられた。ウォルトは直接対決から逃げるような手段をとったはずなのに、それも一つの戦術として彼女は見ているのかもしれない。
「ウォルトでいいよ、レオナ少尉。俺も君の機動制御からは多くを学ばせてもらった」
「そう？じゃあウォルト、今度は共闘してみたいものね」
そう言って玲央奈は右手をさしだしてきた。
「ああ、そうだな」
ウォルトも玲央奈の手を握り返す。
「それじゃ、またね」
それだけ言うと玲央奈は早々に踵を返し去っていく。
「あ、そうだ。慧。」
少し遠ざかったところで玲央奈は思い出したように立ち止まった。
「――その――、次は負けないわよ」
背中越しに玲央奈がケイを見据える。
玲央奈とケイの視線が交錯したのは、一秒に満たない時間だったかもしれない。次の瞬間には玲央奈はスタスタとその場を去っていった。

呆気にとられるケイの肩をウォルトは軽く叩いてやる。
「次は『負けない』ってよ」
ミーリャが玲央奈の言葉を繰り返す。その意味を理解したのか、ケイは小さく、ああ、と頷くだけだった。

外部モニターを切っているため、コンソールの液晶ディスプレイにだけ照らされた暗いコクピット。フィーリアはまだそこに着座したままだった。
機体ステータスを確認すると、各所に過負荷による不具合がみられる。
「追従性は大分よくなった、でも…」
フィーリアはディスプレイの表示を見据える。その表情には不満の色が大きく表れていた。

ｅｐｉｓｏｄｅ０４
第十九話

南西諸島・沖縄本島　東アジア共和国・太平洋方面軍・沖縄基地
大西洋連邦エリア　第八通信室

通信用モニターの青白い光がその男の尖った鼻さきと、肉の削げ落ちた頬を照らし出し、深い影を形成する。

「は…、結論から申し上げると、今回の演習結果は我が軍の勝利です」

ディック・リーヴスはモニターに映し出される初老の男に告げた。映像は北米からのレーザー通信を、衛星で中継して送られてくるリアルタイム映像だ。

「スコアは我が軍の損害が一機に対して、東アジア側は全機撃墜。内、九機をブラウン少尉が撃墜しております。数の上では〝ラプターファングス〟と同数ですが、単機のスコアであることを鑑みると十分な戦果ではないかと。詳細は送信したログをご確認下さい」

リーヴスの言葉にモニター内のギリアン・ダレルは、ふん、と鼻を鳴らした。

『当然の結果だな』

「は、ですがユーラシアへのプレゼンとしては成功と見てよろしいのではないでしょうか。同時に、〝ラプターファングス〟の敗北もあり得たあの状況を単機で覆したことは、国防省、ひいては連邦議会も無視できない判断材料になったと思われます。全ては大佐の見事な采配の賜物です」

『今回の演習への我が隊の派遣はノーランの提案だ。貴様も知っているはずだが？』

感情を吹き消した表情でダレルは問いかけてくる。

「しかし、その最終的な決定をなされたのは大佐です。それは誇ってもよろしいかと」

我ながら白々しい持ち上げ方だと思ったが、リーヴスはあくまでセ

オリー通りの会話を突きとおした。
「しかし、今回の演習により我が隊の０１Ｄに不具合が生じております。これにより明日の洋上展開演習には参加不可能と判断いたしました」
ラーミナが運用している《ロングダガー》は計画専用の実証機として改修を受けた特別仕様だ。その上、フィーリア・ブラウンの操縦技能は、その性能すらも軽く凌駕する反応を求めてくる。独自改修機故に予備機が存在しない以上、機体の稼働率の低さは否めなかった。
『構わん。今回の演習で我々の目的は達成したと言っていい。残りの指揮は引き続き貴様に一任する』
「了解いたしました」
リーヴスの返事を聞くと通信は唐突に切れた。モニターが真っ黒に染まるのを確認するとリーヴスは通信室の席を静かに立った。

沖縄基地・大西洋連邦軍港エリア　アイゼンハワー級航空母艦《アイゼンハワー》
アイクのフライトデッキ――――モビルスーツ用のカタパルトも存在するので厳密には違う――――は南国の照りつけるような日差しに照らされていた。格納庫から上がってきたウォルトは、その日差しをもろに浴びて、その淡い青の瞳を眇めた。
明日の火力投射演習及び洋上戦力展開演習に備え、〝ラプターファングス〟の《ダガー》は再びアイクの格納庫へと搬入されていた。
その作業が予定より早く終わってしまったため、時間を持て余した挙句ここにたどり着いたのだった。暇になったとき、開けた場所に来たがるのは自分の癖らしいとウォルトも自覚し始めている。
デッキを軽く見渡すと、駐機上に並べられた四機の《スピアヘッド》が目についた。青で縁取られた一枚の垂直尾翼には、アイク所属を示すＮＣのテールコードとグリフォンのシルエットがペイントされている。主翼を折りたたんでいる姿は、訓練校で空軍仕様のＤ型にしか乗ったことのないウォルトには珍しいものとして映った。
主翼を折りたたみそこにある姿は、滑らかに尖った機首も相まっ

て、翼を休める大鷲のようだ。周りに誰もいないことを確認すると、ウォルトはその中の端の一機。カナードの根本に１０３の機体番号を刻まれた機体に歩み寄った。なにか後ろめたいことがあるわけではないが、わざわざ整備兵やパイロットに断って機体に近づくのが面倒だったのだ。

近づいてみると、Ｄ型との違いは思ったよりも多かった。複座のＤ型に対して、このＧ型は単座のため風防周りはコンパクトにまとめられている。折りたたまれた主翼は安定性を重視しての設計か、大型化されていた。他にもランディングギアや、主翼の分割ラインなど差異は多い。

そんな間違い探しのようなことをしつつ、ウォルトはその機首から左右に張り出したカナードを撫でるように触れてみた。

「やっぱりモビルスーツパイロットには珍しいか？」

突然の声に心臓が飛び跳ねる。ウォルトがなんとか平静を装い振り返ると、青と紺の迷彩ＮＷＵに身を包んだ欧米人の男が歩み寄ってきていた。顔にはレイバンのサングラス。歳は二十代後半くらいだろうか。開け放たれた上着の左胸にはパイロット徽章。アイク所属のパイロットだとすぐに分かった。階級章は中尉だ。慌てて敬礼の構えをとる。

「失礼しました！　特別評価試験部隊のウォルト・マクミラン少尉であります！」

機体に勝手に触れたことを謝罪し、礼儀として所属も明かしたが長身の海軍パイロットは軽く答礼し、けらけらと笑うだけだった。

「そんな畏まらないでくれ。第１４３統合戦闘飛行隊のフレッド・ウォレス中尉だ」

フレッドと名乗ったパイロットはさっさと敬礼を解く。

「で、どうなんだ？《シースピア》が珍しいのか？」

フレッドは自分の愛機である１０３号機を見上げる。レイバンが陽光を反射してキラリと光った。

「《シースピア》……ですか？」

ウォルトは聞きなれない単語を繰り返していた。

「ああ、世間では《スピアヘッド》だったな」
思い出したようにフレッドが視線をウォルトに戻す。そこまで聞いて、ウォルトはやっと《シースピア》がG型の海軍における愛称であることを理解した。G型が海軍に本格配備され始めたのは、ここ一年足らずのことだ。その短期間にあっては、海軍内での愛称が外に出回らないのは無理からぬことと言える。メカニックオタクの整備兵など特殊な事例を除いてのことだが。
「ああ、なるほど。《シースピア》は海軍のペットネームだったんですね」
納得した様子のウォルトを見てフレッドは無言で頷く。
「たしかに自分は空軍機しか間近で見たことがないので珍しいですね」
ウォルトはフレッドに振られた本題へと話を戻した。
「けど、懐かしくもあります。自分はD型で訓練を積んできたので」
海軍仕様とはいえ、F―7を見るとランドルフの訓練空域を飛び回った記憶が蘇る。
「なんだ、お前。空軍の出だったのか？」
フレッドが意外そうな声をあげる。
《ストライクダガー》の量産が始まった今でこそ、モビルスーツパイロットは専門の教育を受けた者が配属されているが、ウォルトが〝ラプターファングス〟への配属を命令された当初は、大西洋連邦におけるモビルスーツの存在はごく限られていた。故にそのパイロットは空軍のファイターパイロットから選抜するのが通例だったのだが、そんな事情を海軍パイロットが知っているはずも無かった。
「そうですね、他部隊に先駆けてモビルスーツを運用してきたウチのパイロットは全員空軍出身です」
言ってから隊の連中の身の上を勝手に話してしまってよかったのかと不安になったが、別に機密でもなければ誰も気にしていないようだから構わないだろうと、自分を納得させた。
「連合の最精鋭モビルスーツ隊が全員空軍出身ってのは何かの皮肉かね…」

フレッドは肩を竦めて苦笑い。サングラスのせいで表情は分かりにくいが、その声にはどこか寂しげな雰囲気がある。
この大戦で突如、航空戦力と並ぶ重要なファクターとなったモビルスーツのパイロット。しかも、そのトップたる〝ラプターファングス〟が、全員ファイターパイロットの出身だということが可笑しいようだった。
アイクの航空機運用能力の一部をモビルスーツに割いたことも、その一因のようにウォルトには思える。
「航空支援がなければモビルスーツといえども十分には戦えませんよ。少なくとも連合のモビルスーツ運用はそれを前提にしています」
「それもいつまで続くのかねえ……」
戦闘のほとんどをモビルスーツに依存しているザフトを見ると、フレッドの危惧もあながち間違いではないのかもしれない。いつか、戦闘機は空から消えるのではないか――と。
「まあ、とりあえず明日の演習はモビルスーツと飛行隊の連携展開がキモでもある。そこんとこよろしく頼むよ」
フレッドは再び《シースピア》へと視線を移す。ウォルトもそれに倣い、甲板で翼を休める鷲のような機体を見上げた。

南西諸島近海　ザフト地上攻撃軍・第11潜水隊群・第2潜水隊
ボズゴロフ級潜水母艦《ペテルソン》
ボズゴロフ級潜水母艦のモビルスーツデッキは四か所に分かれており、各二機ずつ計八機のモビルスーツが搭載可能だ。しかし、〝スピットブレイク〟にモビルスーツ戦力の一部を提供した今となっては、《ペテルソン》に六機。僚艦の《ストンメル》には四機のモビルスーツしか残されていなかった。
今にして考えれば、司令部はこの任務のために自分の隊を残したのではないかとラバッジは感じた。しかし、モビルスーツ搭載型空母の能力を図る威力偵察任務に限定するのであれば、この戦力で十分やれる自信もある。その自信に背中を押されるようにして、ラバッジは《ペテルソン》の第一デッキに降り立った。すでに緑服からパイロッ

トスーツに換装済みだ。
円筒状の格納庫を見渡すと向かい合う形で二機のモビルスーツがガントリーに納められている。
ザフトの現主力モビルスーツたる《ジン》に比べ、大幅に細身のシルエット。しかし、頭部メインカメラは《ジン》と同じく単眼を思わせるデザインで、同じくザフト製のモビルスーツであるということを見る者に印象づける。
ＡＭＦ―１０１《ディン》。ザフトが地球侵攻に備えて開発した大気圏内用モビルスーツであり、航空戦力の要とも言える機体だ。その最大の特徴はモビルスーツとしては初となる大気圏内単独飛行能力を持っていることであり、ザフトは戦域の制空権確保や航空支援にこの機体の能力を最大限活かした。
機体のシルエットが細身であることも、飛行性能を重視しての軽量化であり、ガントリーに格納されている状態では確認できないが背部には三枚一対の可変翼を備えている。それらが作用しあうことで、《ディン》は従来の戦闘機には不可能な高運動性を獲得していた。
この格納庫にある二機のうち一機は、航空迷彩を意識した紫の一般的なカラーリングだが、もう一機は航空戦を主眼においた機体としては異才を放っていた。一般機と向かい合う機体の細身のシルエットは、空では確実に目立つであろう赤銅色に身を包んでおり、そのカラーリングのせいか独特の圧力を放っているように感じられる。
ラバッジはキャットウォークを伝い、赤銅色の《ディン》のコクピットへと向かう。
機体の前に到着すると、愛機のコクピットから着付き長の整備兵が這い出てきた。少年という形容がぴったりの着付き長は、二十歳とラバッジからみたら若いが腕はいい。安心して機体を任せられる男だった。
ラバッジに気づくと、着付き長は敬礼で迎えた。
「機体の整備は万全です。安心して暴れて来てください」
童顔の着付き長はにこやかにそう告げた。
「まるで俺が戦闘狂のような言い方だな？」

「コイツをわざわざこんな目立つ色で塗るなんて、戦闘狂じゃなかったらなんだって言うんです？」
相変わらずの軽口だ。
「エースにはポリシーってのがあるんだよ」
他の部隊で隊長に対してこのやりとりをしたならば、ただでは済まないかもしれない。しかし、ラバッジは同じく軽口を返すことで受け流す。
「自分でエースを名乗れる度胸は尊敬しますよ」
着付き長の追い打ちに乾いた笑いと共に、「ぬかせ」と返すとラバッジは赤銅色の《ディン》のコクピットに着座した。
「ご武運を」
コクピットを覗き込むようにして着付き長が言う。その顔は相変わらずニヤけたままだ。
「俺を誰だと思ってる」
それだけ言うとラバッジはコクピットハッチを閉じた。
サブジェネレーターを起動すると、コンソールのディスプレイに光が灯り、続いて外部モニターがモビルスーツデッキの全景を映し出す。機体の起動が完了すると、示し合わせたように発令所との回線が開いた。
『本艦、《ストンメル》の両モビルスーツ隊、全機発進準備完了です』
通信モニターに映し出された艦長が報告する。
「了解した。予定通り《グーン》を先発させる。俺たちはその後だ」
計器の確認をしつつ艦長に指示を下す。
『はっ！《ストンメル》にも伝えます』
「あとの指揮は任せる」
『了解いたしました。ご武運を』
「ああ」
そう短く答えるとラバッジは回線を切った。
その表情に先ほどまでの軽いノリは無い。ラバッジの眼は冷え切った光を湛え、外部モニターを見据えるのみだ。
ラバッジの眼光とは対照的に、赤銅色に身を包んだ《ディン》の単

眼がギラリと閃いた。

第二十話

南西諸島・沖縄沖　アイゼンハワー級航空母艦《アイゼンハワー》モビルスーツ格納庫

「なんでお前がここにいるんだよ！」

演習を目前に控えたアイクのモビルスーツ格納庫は、普段以上の喧噪に包まれている。その喧噪の中にあっても、ケイの叫びは格納庫に大きく響き渡った。

その相手はオリーブドラブのフライトジャケットに身を包んだ女パイロット。黒髪にショートボブ。アジア人特有の童顔は、ウォルトから見るとまだ十代の少女に見える。しかし、ケイと同期ということを考えると、立派な成人女性のはずだった。

「私の隊も演習に参加するからに決まってるでしょ。いちいち喚かないでくれる」

東アジアの女パイロット――――三隈玲央奈は鬱陶しそうにケイを横目で睨みつける。

「だからなんで、その代表がお前なんだよ？」

数日前のブリーフィングで、東アジアの《ストライクダガー》が二機、アイクのカタパルトを用いた展開演習に参加することになっている旨は伝達された。しかし、その《ストライクダガー》のパイロットの名前までは知らされていなかったのだ。

「大体、空母のカタパルトから発艦できるチャンスなんて東アジアにいたら無いかもしれないでしょ？こんな絶好のチャンスを逃すわけないじゃない」

ケイ曰く、東アジアの太平洋方面軍には空母が配備されていない。ケイ自身もアイクに乗艦できることを喜んでいた。だとすると玲央奈の言い分も理解できた。

「なんであの二人はあんなに馬があわないんだろうな」

格納庫の喧噪をよそに、言い合う二人の日本人男女を遠巻きに眺めつつ、ウォルトは隣に立っているミーリャに問いかけた。

肩まである栗色の髪をハーフアップでまとめたミーリャは、いつも

の人好きのする笑顔を浮かべる。しかし、その表情には苦笑するようなニュアンスが隠れているように、ウォルトには思えた。
「ケイの性格をから考えると、あんなに頑なになることは無いと思うんだけどね」
人とわけ隔てなく親しくなれるケイの性格は、ともすればミーリャ以上に協調性に秀でていると言える。しかし、そんなケイが何故か玲央奈とだけ、いがみ合うのが分からない。
最初に会ったときの態度から想像すると、玲央奈がケイに『何か』言ったのかもしれないと、ウォルトは勝手に推察していた。
「今回は一緒に組むわけだから、トラブルを起こさないでくれるといいわね……」
「まあ、二人とも一流のパイロットだ。任務に私情は挟まないだろ――と信じたいな」
ウォルトはどこか諦観の念をもって、二人から視線を外した。
格納庫を見上げると、オレンジの《ダガー》とオリーブドラブの《ストライクダガー》が、睨み合うように向かい合わせのガントリーに収まっていた。
《アイゼンハワー》フライトデッキ
格納庫からエレベーターでフライトデッキに上げられた、翼を休める荒鷲の如きシルエット。カタパルト横の駐機上に、Ｆ―７Ｇが六機並べられている。一枚の垂直尾翼には翼獅子を象ったマーキング。折りたたんだ主翼の翼端灯は、いずれも強烈な陽光を反射してキラキラと煌いて見えた。
その中の一機。１０３号機の射出座席にフレッドが滑り込むと、後から整備班がラダーを上ってきた。
「中尉、今回の装備ですがＡＩＭ―１８がウェポンベイに二発、ＡＧＭ―１２４が主翼のパイロンに四発です」
ショルダーハーネスの固定を手伝いながら、整備班の男が兵装の確認を始める。
今回の演習でのフレッドたちの役割は、モビルスーツ部隊の上陸を上空から支援し無事に陸まで送り届けることだ。そのため、地対空兵

装を潰すためＡＧＭ―１２４を四発装備している。対して対空ミサイルであるＡＩＭ―１８は二発。
「それと、５００ガロン増槽も積んでいるので運動性は制限されます。注意してください」
「対地攻撃が任務なら運動性より滞空時間をとるってか？」
ヘルメットを被りつつ、フレッドは整備班のその後に続くであろう言葉を紡いでやった。
「そういうことです。それでは、ご無事で」
それだけ言うと整備班はラダーを降りて、駆け足で機体から離れていく。
それを確認すると、フレッドは機体のキャノピーを閉じた。プシュっと空気の抜ける音がしてコクピットが与圧される。
キャノピーの外に見える風景は、アイクのフライトデッキのすぐ外側にコバルトブルーの海が広がっている。天気は快晴。その景色は、フレッドがアイクから発艦するたびに眺めてきたものと大きな違いはない。一つ違いがあるとすれば、海の色が少し明るい程度だ。普段アイクが航行している海域にくらべ、今は沖縄基地から数キロしか離れていない浅い海だからだろうか。
そんなことを考えつつ、フレッドはカタパルトの発艦位置でブレーキを踏みこんだ。
アイクの航空機用カタパルトは、並列する形で二基配置されている。右側の第２カタパルトの位置で、僚機であるＦ―７Ｇが停止した。
足元でガチャリと何かがロックされる音。カタパルトの射出機が機体の前脚を固定したのだ。カタパルトのロックをセンサーが感知し、カタパルト固定確認装置の表示が赤から緑に切り替わる。
それを確認すると、フレッドは通信回線を開いた。
「Ｐ（ピューキンドッグ）Ｄ０３よりＣＡＴＣＣ。発艦準備完了」
ややあって、空母航空管制センターから女性オペレーターの涼やかな声がヘルメットイヤフォンに届く。
『ＣＡＴＣＣよりＰ（ピューキンドッグ）Ｄ０３、進路クリア。発艦どうぞ』

フレッドは顎を引き艦首の先にある水平線を見据える。今回は沖縄本島へ向かっての出撃のため、その視線の先には沖縄基地の演習エリアが広がっている。

スロットルをアイドルからミリタリー推力へ。

「Ｐ（ピューキンドッグ）Ｄ０３、出るぞ」

カタパルトのロックを解除すると、凄まじいＧが正面から襲い掛かりフレッドをシートに叩きつける。視界が吹っ飛び、一瞬にして周りの風景が海だけになった。

南西諸島・沖縄沖　海上

アイクから弾き出されて数秒。すでにＨＵＤの速度スケールは１８０ノットまで加速している。アイクは遥か後方だ。海面の波頭が足元に消えていく。

スロットルレバーを少し前へ。高度を取るべくフレッドは操縦桿を僅かに手前に引き寄せた。機首が上がり、Ｆ―７Ｇが高度を上げていく。視界から海面が消え、青い空で染め上げられた。

後方を振り返ると、すぐ右後ろにフレッドの直後に発艦したであろう僚機のＦ―７Ｇが浮かんでいる。

僚機の存在を確認すると、フレッドは操縦桿を元の位置に戻し機体を水平飛行に入れた。続いて、左に首を巡らせると、彼方に先に発艦した第１小隊の編隊が目に入る。フレッドは編隊に合流すべく、緩やかなバンクでＦ―７Ｇを旋回させた。水平線は傾いているが、下向きのＧがかかっているため、体感としては水平とさほど変わらない。僚機もその機動にピタリと追随してくる。

『Ｐ（ピューキンドッグ）Ｄ０１より各機。今回はモビルスーツ部隊が陸に上がるまでの支援が俺たちの任務だ』

やがて、野太い声がヘルメットイヤフォンに流れる。第１小隊を率いる〝ピューキンドッグス〟の飛行隊長の声だ。

『奴らが無事にステージに上がれるよう、しっかりエスコートしてやれ。いいな？』

フレッドの「了解」は仲間たちの唱和に紛れて、ヘルメットイヤフォンに流れていった。

『あ、それと』
隊長の思い出したような声。
『コクピットにぶちまけたテメェのゲロはテメェで始末しろよ。整備班長からの伝言だ。でなきゃ、戦場に出る前に整備班に殺されるぞ。分かったな？ゲロ犬ども』
毎度の隊長の下品なジョークに、隊員たちのまばらな笑いが起きる。
隊内の他愛のない会話を聞きつつ、フレッドのＦ―７Ｇは南西諸島の蒼空を滑るように飛んだ。
《アイゼンハワー》ＣＤＣ
「第１４３統合戦闘飛行隊、第１、第３小隊発艦完了。モビルスーツ部隊の発艦に備え、上空待機中です」
アイクにおける戦闘指揮の中枢であるＣＤＣ。約１５メートル四方の薄暗い空間に、大小無数の液晶モニターが並ぶ。その空間に十数席ある管制卓につく女性オペレーターの一人が、たった今発艦を終えた〝ピューキンドッグス〟の状況を報告してくる。
《アイゼンハワー》空母打撃群司令のグレアム・レストンは、その報告に無言で頷く。幕僚長がレストンの意思をくみ取り、次の指示をオペレーターに伝える。
「第１４３統合戦闘飛行隊に続き、モビルスーツ部隊の発艦準備」
幕僚長の指示を受けて、オペレーターが各所に命令を伝達していく。しかし、その声に覆いかぶせるように新たな報告がＣＤＣに響き渡った。
「対空レーダーに感あり！」
声を上げたのは対空レーダー網を担当していたオペレーターだ。
「南西諸島を哨戒中の東アジアのＡＷＡＣＳからのデータリンク情報です。当海域に高速で接近する所属不明機あり、数四。速度から推測するに、ＡＭＦ―１０１《ディン》と思われます」
ザフトの新型空戦モモビルスーツである《ディン》を使っている時点で、民間機であることを疑う必要はない。
「やはり来ましたな」

幕僚長が小声でレストンに告げる。
「ああ、飛行小隊を待機させておいて正解だったな。レッドアラートだ。１４３飛行隊、第２小隊を直ちに発艦準備。兵装はＡＩＭ―１８を四発にＡＩＭ―４４を二発だ。ＡＷＡＣＳの中間誘導があれば中距離ミサイルも使えるはずだ。念のため増槽もつけてやれ」
「了解、モビルスーツ部隊の発艦中止。第２小隊を迎撃に上げろ。撃墜する必要はない。時間が稼げればいい。それと、全部隊に厳命しろ。これは演習ではない、と」
幕僚長が新たな命令をオペレーターに伝える。
「敵の母艦の位置は？」
レストンは幕僚長の命令を横に聞きつつ、索敵担当のオペレーターに尋ねる。
「今のところＡＷＡＣＳのセンサー有効範囲内に艦影無し」
オペレーターの報告にレストンは眉を顰めた。
「妙ですな」
伝達を終えた幕僚長がいつの間にか隣に立つ。
「《ディン》の航続距離では警戒機の有効範囲外からの長距離侵攻は不可能なはずです。帰りの推進剤が保ちません」
モビルスーツのような空力を無視した物体を飛ばすには、スラスターを焚いて得た推進力で強引に持ち上げるしかない。単独飛行可能なディンといえど、その翼が揚力を得るほどの速度を出すには、ジェットエンジンでは出力が足りないためロケットエンジンを用いたスラスターを使っている。
しかし、それは戦闘機で表現するならば、アフターバーナーを常に焚いているようなものであり、航空機に比べ航続距離は大幅に制限されるのだ。
レストンはメインモニターに映し出される複合センサー画面を睨みつけた。
「敵は何を隠している…？」
考えられるのは、何かしらの方法で《ディン》の航続距離を伸ばしているか、ＡＷＡＣＳの影響範囲内に母艦を隠しているかのどちらか

だ。しかし、《ディン》には軽量化のため増槽を装備するハードポイントの類は無いと聞く。だとしたら、可能性が高いのは後者か。あるいは、航続距離延長のための改修でも施しているのか。
しかしレストンの思考は、突如ＣＤＣに響き渡ったアラートによって遮られた。
「ＡＳＷＬＳに感あり、ＳＣＴです！　本艦への直撃コース！」
「ミッチャーからの迎撃間に合いません！　着弾まで二十秒！」
「対潜戦闘システム起動、オート迎撃開始急げ！」
火器管制担当が、矢継ぎ早に支持を飛ばしていく。
「水中戦用モビルスーツまで用意していたか…」
「ウォータージェット推進の《グーン》なら航続距離も長大です。当然の流れですな」
アクティブソナーとＡＳＷＬＳによって捉えられた水中に潜む敵が、複合センサーに表示される。数は六機。
ＡＳＷＬＳは音波の代わりに光波を用いることで、より迅速に水中の状態を知ることができる新型の索敵システムだ。亜音速を誇るＳＣＴや、隠密性に優れる水中用モビルスーツを捉えることができる数少ないセンサーでもある。
「東アジア第２艦隊の位置は？」
レストンは水上レーダー画面に視線を移す。
「本艦より沖合十四キロメートルの位置で火力投射に備え待機中」
レストンの問いに水上レーダー担当がすかさず答える。
「そちらには見向きもせず、こちらを狙ってくるか」
「どうやら連中は我々が思っていた以上に、この艦に興味を抱いているようですな」
幕僚長も水上レーダーの液晶モニターに目を向ける。
「そのようだな。全艦に通達、対空及び対潜戦闘用意。モビルスーツ部隊には兵装の電子封印を解いておけと伝えろ」
レストンは通信担当のオペレーターを振り返る。
「火器の使用もあり得る、とな――――」
《アイゼンハワー》モビルスーツ格納庫

不意に襲ってきた振動が、《ダガー》のコクピットに着座するウォルトを揺さぶった。大きな揺れではなかったが、反射的に機体のセンサーを確認する。しかし、艦内にあってはその揺れが何によるものなのか、判別できなかった。しかし、３５０メートルを超えるこの巨艦は、高波程度ではビクともしない。それが身体で感じられるほどに、揺れたということは、何かしらの非常事態に晒されているということを意味していた。

数分前に敵機接近を告げるアラートが鳴ってから、艦内は一機に慌ただしさをましている。演習時の比ではない。

その影響なのか、演習に備えてコクピットで待機中だった〝ラプターファングス〟に対しては未だこの状況において、なんの説明も無かった。

ルースの声がイヤフォンに流れたのはそんなときだった。

『なんだと？　演習ではないのか中尉』

モビルスーツ部隊以外の誰かと交信しているらしい。やがて、了解した、と交信を終えると、ルースは通信を隊内へと戻した。

『アーウィン技術中尉からの情報だ。この海域に複数のモビルスーツが接近中。艦の外ではすでに戦端が開かれているらしい』

ルースの言葉に、隊内に動揺が広がる。ウォルトも例外ではない。やはり先ほどの揺れは、戦闘のものだったらしい。

『よって、アイクＣＤＣから我々に命令が下った。直ちに兵装の電子封印を解除。場合によってはデッキに上がっての迎撃もあり得る』

（マジかよ――）

突如、始まった戦闘。ウォルトにとっては初めての経験だ。これまで演習は幾度となくこなしてきたが、実戦経験はまったくのゼロである。それが、このような偶発的な戦闘で初陣を迎えることになるのは、ウォルトにとって不安要素しか存在しなかった。

しかし、通信ウィンドに映し出されるウォルト以外の隊員の表情は、普段とさほど変わらないように見える。最初こそ動揺の色が伺いしれたが、それも一瞬のことだった。

ルースは迎撃と言ったが、フライトデッキからではたかがしれてい

る。対空砲火が多少増える程度で、水中用モビルスーツがいる場合は一切対応できない。機動力と運動性が売りのモビルスーツを固定砲台として使ったところで、大した意味があるとは思えなかった。

（これじゃ何もできないまま……）

最悪の想像が脳裏を過る。

『大丈夫かウォルト？顔色が悪いぜ？』

ケイの声がヘルメットイヤフォンに届く。

『そんなに焦らなくても大丈夫よ。アイクの周りはダニロフ級が固めてるから、そう簡単に敵は近づけないわ』

ケイに続いてミーリャも心配そうな眼差しをウォルトに向けてくる。どうやら相当顔に出ていたらしい。

「そうか、お前らは実戦経験者だったな」

ウォルトは務めて明るく振る舞う。これ以上みっともない姿を仲間に晒すわけにはいかない。

『こんな急な実戦じゃあ、ビビるのも仕方ないわな』

普段ウォルトたちの会話に入ってこないリーが口を開く。

「別にビビってた訳では――――」

『無理すんなって。初陣はみんなそんなもんだ。小便漏らさなないだけマシだぜ？　あ、もしかして、もう漏らしちまったか？』

「なッ!?　自分は漏らしてなど――――！」

リーの冗談でイヤフォンが笑いで満たされる。彼なりの気遣いなのだろうが、ウォルトとしてはあまり思わしくない展開だった。自分のイメージが失禁野郎になってしまうことは、なんとしても避けなくてはならない。

『ムキになると余計怪しいぜ？』

ケイがニヤニヤしながら疑いの視線を向けてくる。ミーリャもいつもとは違う悪戯っぽい笑みを浮かべている。

「お前ら、後で覚えとけよ……」

言いながらも、ウォルトは内心の恐怖が和らいでいることに気付いていた。

第二十一話

南西諸島・沖縄沖　海上

南洋の陽射しに照らされた、群青の海原。天候は晴れで、風も強くないため、波も穏やかだ。

戦争とは無縁な景色に見える南国の海面を、四つの人型がフィンガーチップ隊形で白波を後に引きながら切り裂いていく。その高度は人型の爪先が、波頭を擦るギリギリの低空。航空機に比べ、低空での安定性が高いモビルスーツならではの超ＮＯＥだった。

自然のままの海をバックにしているため分かり辛いが、その人型のサイズは１８メートルを超える。上空では航空迷彩、海上では洋上迷彩として機能するパープルブルーのカラーリングに包まれた手足は、鋭角で構成されており非常にスリムな印象だ。背部に展開する三枚一対の翼は、薄い強化カーボン複合材で構築されており、翼というよりは羽虫の翅といった方がしっくりとくる。頭部は空力補助のためのエアロシェルがすっぽりと覆っており、背部の翅と相まって、ボディの人型とは対照的な異形の雰囲気だった。

その中の一機。編隊のトップに位置する機体は、他の三機とは対照的な赤銅色のカラーリング。海と空を背景に飛ぶには、あまりに目立ちすぎる色だ。

レーダーを警戒してのＮＯＥを敢行しつつも、目視で見つけてくださいと言わんばかりの赤銅色の《ディン》のコクピットで、ダニエル・ラバッジはレーダー警報受信機の照射警報を聞いた。

『レグルス０２よりレグルスリード、上空より火器管制レーダーの照射を受けています』

《ディン》２番機のパイロットが、特に焦りもせず照射源の特定を始める。しかし、ニュートロンジャマー影響下にあっては、わざわざレーダー波を解析せずとも、おおよその予測は立てることができる。レーダーの使用可能範囲が大きく狭められた今となっては、目視外距離から直接火器管制レーダーでロックできるほどの性能を持つ機体は、ＡＷＡＣＳを初めとした偵察機の類しかない。

「ＡＷＡＣＳに捕捉されたか……」
ラバッジの呟きに間髪いれず、２番機の報告がヘルメットイヤフォンに流れる。
『接近する高速飛翔体を探知、数八！』
「レグルスリードより各機、中距離ミサイル来るぞ！　散開！」
センサー画面には、こちらに向かってじりじりと接近する高速飛翔体の光点。
「中距離ミサイルは運動性が高くない。距離を保ちつつ直角機動で一気に躱せ」
センサー画面に映る赤い矢印型の光点が、二発ずつに分かれる。一機の《ディン》につき、二発ずつ追尾してくる形だ。
ラバッジはスロットルを全開に叩き込み、機体を一気に上昇させた。正面から圧し掛かるプラスＧにより、身体がシートに縛り付けられたような感覚に陥る。赤銅色の異形の人型は、海面十数メートルから三千メートルまでフルスロットルで一気に翔けあがった。
高度が三千五百を超えた辺りで、コクピットが先ほどのレーダー警報とは違う、けたたましいアラームで包まれる。自機を追尾してきた二発のＡＩＭ―４４《ストーク》中距離空対空ミサイルが相対距離二千メートルの位置に占位したのだ。
もはや、センサー画面を確認するまでもない。背後から迫る《ストーク》から照射されるレーダー波で、後頭部がじりじりと焼かれているような独特の感覚。その感覚だけで、ラバッジは背後の《ストーク》の位置を推し測った。
高度が四千に迫り、《ストーク》との相対距離が千五百を切ろうという瞬間。ラバッジは踏み込んだペダルを緩め、左右の操縦桿を手前に限界まで引き寄せた。垂直上昇を続けていた赤銅色の《ディン》が、風に嬲られる木の葉の如くヒラリと向きを変え、真下へと降下を開始する。フットペダルを蹴る勢いで踏み込み、スラスター出力を全開へ。プラスＧが一瞬にしてマイナスＧへと変わり、血液が頭部に集中する。
垂直上昇から瞬時にパワーダイブへとその機動を変えた《ディン》

への反応が遅れ、追尾する《ストーク》の旋回半径が僅かに膨らんだ。
その一瞬で、ラバッジは《ストーク》より下の位置へと潜り込み、そのまま海面へと一気に降下。群青の海面が外部モニターいっぱいに広がり、その波間の飛沫さえ目視で確認できるような距離まで迫ったところで、ラバッジはスロットルをミリタリー推力へと絞る。同時に操縦桿を引き、機体を引き起こした。脚部のスラスターの勢いを借りて、《ディン》は海面ギリギリの高度で踏みとどまり、水平飛行へと戻っていく。
しかし、それを追尾する《ストーク》は、揚力に支配された存在だ。スラスターで姿勢制御を図る《ディン》のように、急な方向転換はできない。
次の瞬間、ラバッジが狙った通り《ストーク》は、《ディン》の機動を追い切れず海面へと突っ込み、真っ白な飛沫を高々と上げた。
しかし、その飛沫を突き破るようにして、もう一発の《ストーク》が波間に躍り出る光景をラバッジは後部カメラ越しで目視した。タイミングをずらして後から発射されたのか。
すかさず、反転。左主腕のＭＭＩ―Ｍ１００１　９０ｍｍ対空散弾銃のトリガーを引く。マズルフラッシュと共に吐き出された９０ｍｍ対空榴散弾が近接芯管を発動させ、無数の弾子を放射状にばら撒いた。
弾け飛ぶ鉛玉の奔流へと真っ直ぐ突っ込んだ《ストーク》は、一瞬で誘爆し、火球へと転じた。
ＡＷＡＣＳに捕捉されたということは、これ以上対空レーダーを気にする必要はない。高度をＮＯＥから二千メートルまで上昇させ、再び巡航速度で安定させる。やがて、それぞれミサイルをやり過ごした四機の《ディン》が、再び編隊を組んでラバッジの周りに集結した。
「レグルスリードより各機、すぐに要撃機が追い付いてくるはずだ。手厚く歓迎してやれ」
『了解』
僚機の返答を聞きつつセンサー画面を見ると、十二時の方向。今まさに、ラバッジ達が向かっている方向から四つの熱源が接近中だっ

た。
ラバッジの口角が我知らず吊り上がり、狩人の笑みを浮かべる。獲物を狙う猛獣の如き表情とは対照的な無機質な眼は、センサー画面の赤い光点に向けられていた。
南西諸島・沖縄沖　アイゼンハワー級航空母艦《アイゼンハワー》ＣＤＣ
「第１４３飛行隊、第１小隊最終アプローチに入ります」
ＣＡＴＣＣからの報告を受けたオペレーターが、目線は対空レーダーに据えたままに報告をあげてくる。
「要撃機から《ドラッヘ》を降ろして、《ヴェルガー》と《ストーク》に換装。第２小隊と同様の装備だ」
先ほどまでの演習と打って変わって、レストンが自ら飛行隊の指揮をとる。レストンの声音と実戦の緊張感で、ＣＤＣの空気はぴんと張り詰めていた。
「ＡＩＭ―４４、全弾命中せず……、敵機は依然全機健在です！」
ＡＷＡＣＳから送信されてくるデータリンク情報を統合した戦術マップを監視していたオペレーターが、引きつった声を上げる。ＣＤＣのメインモニターの一つに戦術マップが映し出された。
「中距離ミサイルで追い払えると思うほど、楽観していた訳ではないが一発も命中せずとは……。なかなか腕の良い連中を揃えてきたようですな」
幕僚長が戦術マップの敵性目標を示す赤い矢印を睨みつける。
「第２小隊が間もなく敵機をＡＩＭ―１８の射程に捉えます」
メインモニターの液晶画面では、接近する所属不明機とそれを迎撃する〝ピューキンドッグス〟第２小隊を意味する矢印型の光点が、その先端を突き合わそうとしていた。
幕僚長と同じく戦術マップに目線を移したレストンは、静かに口を開いた。
「第１小隊の着艦を中止。第１、第３小隊を直ちに第２小隊の援護に向けろ」
レストンの言葉を聞いた幕僚長が目を剥いて、戦術マップからレス

トンを振り向く。
「司令、今の彼等の装備は対地支援用です！対空目標の迎撃は――」
しかし、幕僚長はその主張を最後まで言い終えることが出来なかった。
「司令、第２小隊のＦ―７Ｇが接敵！ですが、接敵と同時にＰ（ピューキンドッグ）Ｄ０７のシグナルロスト！残存機は三機です！」
明らかに焦りを含んだオペレーターの声の通り、戦術マップ上で赤い矢印の光点ともつれ合う緑の光点は三つに減っていた。
「一個小隊で《ディン》相手に時間を稼げると侮ったのが間違いだ。これ以上は戦力の逐次投入になりかねなん」
その間にも友軍を示す緑の光点が、また一つ戦術マップ上から消えていく。そんな光景を目の当たりにしては、幕僚長もレストンに対して押し黙るしかなかった。
「第１、・第３小隊をフルアフターバーナーで戦域に向かわせろ。急げ」
部下の手前、平静を装ったレストンだったが焦りを隠しきれていないことは自分でもわかっている。しかし、司令としてこのＣＤＣに立っている以上、職責は果たさねばならない。
「東アジア海軍、第２艦隊に救援を要請。モビルスーツ部隊は実弾装填後フライトデッキに上げろ」
「了解！」
オペレーターの返事はなお動揺で震えているように、レストンには感じられた。無理もない。モビルスーツをフライトデッキに上げるということは、敵との直接の戦闘の可能性を示している。それはつまり、このアイクが戦場の只中となることと同義だった。
南西諸島・沖縄沖　海上
機体を捻るようにして脚部のスラスターを展開し、赤銅色の《ディン》が急速方向転換を図る。直角機動で進行方向を変えた《ディン》に追随できず、ＡＩＭ―１８《ヴェルガー》空対空ミサイルは明後日の方向へと飛び去っていった。

センサーを確認すると一つの光点が自機に纏わりついてくる。
ラバッジは再び機体を反転。外部モニターの中心で、《スピアヘッド》の涙滴型キャノピーがきらりと光った。
ＦＣＳが《スピアヘッド》を捕捉し、外部モニターの機影がターゲットボックスで囲われる。
互いに直進しているため、その相対距離は一瞬で縮まった。外部モニター正面で《スピアヘッド》の鋭角のシルエットが大きくなる。機影がターゲットボックスの標示からはみ出ようとした瞬間、ラバッジは機体を捻りその軸線を僅かにずらした。
同時に視界の端を二筋のオレンジ色の火花が擦過していく。それが、対向した《スピアヘッド》が放った２０ｍｍ機関砲の曳光弾だとラバッジが認識する前に外部モニターの全面にその機影が一杯に映し出される。その一瞬前より、ラバッジは右主腕に構えるＭＭＩ―Ｍ７Ｓ　７６ｍｍ重突撃機銃のトリガーを引き絞っていた。
すれ違いざまの一瞬で、《スピアヘッド》に向けられた砲口から７６ｍｍ徹甲弾が続けざまに吐き出され、そのキャノピーと垂直尾翼の間に叩き込まれる。
ほぼ接射の距離で７６ｍｍ徹甲弾をもろに食らった《スピアヘッド》は、一瞬で分解。無数のパーツに分かれた直後爆散し、火焔と黒煙に飲み込まれた。
その中に、パイロットスーツの人影があったことをラバッジの優れた動体視力は認識していたが、それ自体は意識の外だった。
今の《スピアヘッド》で二機撃墜した。残存機は二機。センサーを確認すると、さらに八つの光点がこちらに接近してきている。
「切りがないな……」
先行させたグーンの位置に敵の空母がいるとしたら、まだ僅かに距離がある。せめて、肉眼で捉えられるぐらいまで接近しなければ威力偵察という任務は達成できない。
「レグルスリードより各機、要撃機の相手は後回しだ。奴らにミサイルはもう無い。今のうちに敵母艦との距離を詰め、第二次攻撃に備える」

部隊各機の了解の唱和を聞きつつ、ラバッジはスロットルを開放。スラスターを吹かし、機体を加速させた。

※

『Ｐ（ピューキンドッグ）Ｄ０１より各機、間もなく敵部隊と接敵。マスターアームをオンに切り替えろ。モビルスーツの運動性は《シースピア》の比ではない。増槽を投棄し、格闘戦も視野にいれた近距離戦に備えろ』

フルアフターバーナーでの第２小隊救援を命じられて数分。ヘルメットイヤフォンにＰ（ピューキンドッグ）Ｄ０１の声が流れる。

『敵をＡＩＭ―１８の射程に捉え次第、第１小隊は発射ポジションを確保。ミサイルでの攻撃に移る。第３小隊は援護だ。敵にこちらのケツを取らせるな』

「了解」

フレッドはＰ（ピューキンドッグ）Ｄ０１の命令に当然の如く答える。

「０３より第３小隊各機、聞いたな？第１小隊の射点確保を援護する。１０は俺と０１、０４をカバー。１１、１２は０５、０６につけ」

『了解』

アフターバーナー点火直前に対地ミサイルである《ドラッヘ》を投棄しているため、増槽を捨てれば機体の重量はかなり軽くなるはずだ。

フレッドはスロットルレバーのスイッチを押し込み、主翼付け根に左右一基ずつマウントされた増槽をパージした。軽くなった分機体がふわりと浮き上がるのを、操縦桿を強く握り抑え込む。

やがて、ＦＣＳが敵機の反応を捉えた。こちらで捉えたということは、第１小隊も敵機を射程におさめたはずだ。

ＨＵＤの向こうには距離を取りつつ横隊で接近する四つの機影。正面からは横隊に見えるが、センサーを確認するとフィンガーチップ隊形をとっている。目視警戒とミサイルによる狙い撃ちを警戒しての隊形だ。

「来るぞ、散開！」

フレッドはアフターバーナーを切り、操縦桿を右に傾けた。《シースピア》がすぐさま反応し視界が傾く。それに追随し、すぐ背後を飛

行する僚機も機体を右に旋回させた。

※

『レグルス０２よりレグルスリード、《スピアヘッド》八機、来ます！』

レグルス０２からの報告通り、外部モニターに八つの点が浮かぶ。先ほどやり過ごした要撃機の倍の数だ。

「相変わらず数を揃えるしか能がねえな……」

とはいえ数を相手にしつつ、それを突破するというのはそれなりに面倒だ。運動性ではモビルスーツに利があるといっても、機動性で劣る以上《スピアヘッド》を完全に振り切るのは不可能だ。それ故、ラバッジの言葉にはウンザリとした響きがあった。

「レグルスリードより各機、奴らを抜けば空母は目の前だ。敵の右翼側面から肉薄しつつ戦力を削り取り、そのまま敵母艦に接近を図る。いいか、今回の任務は敵空母の性能を推し測るのが目的だ。無理をして沈める必要はない。各機続け!!」

ラバッジはスロットルを解放し、機体を加速させ右に旋回。後方の三機の《ディン》も了解の返事とともにそれに続く。

外部モニターでは敵機の編隊が二つに分かれてゆく。

「奴ら回り込んでこっちをミサイルで狙い撃つ気だ。一個小隊はカバーだろう。回り込んでくる敵は俺と０２でやる。０３、０４は残りの敵の側面を突き戦力を分断しろ」

『了解』

「俺は先頭の一機を狙う。０２はカバーだ」

ラバッジは左側面から接近を図ろうとする部隊を睨みつけると、先頭の機体を目掛けて《ディン》を旋回させた。

相手の《スピアヘッド》もそれに気付いたのか、こちらの背後に回ろうと旋回半径を狭めてくる。

こちらはスロットルを全開まで開放しているが、《スピアヘッド》には追い付けない。やはり、速度では航空機が有利だ。

《スピアヘッド》はその速度を活かし、大回りでラバッジの背後を占位した。

ロックオン警報がコクピット内を満たす。
しかし、ラバッジは焦りもせずにスラスターをスラストリバースに切り替えた。脚部と背部のメインスラスターが逆噴射に切り替わり、機体を急減速させる。
その一瞬の減速で、背後に迫っていた《スピアヘッド》との距離があわや激突かという距離まで一気に詰まる。それに焦ったのか、《スピアヘッド》もエアブレーキを展開し、《ディン》の後方約二十メートルで踏みとどまった。
依然《スピアヘッド》には背後を取られたままだが、この距離ではミサイルの安全発射距離を大きく割っている。もしも、この状態でミサイルを撃ったならば直撃した敵機の爆風や破片を《スピアヘッド》自らが正面から食らうこととなる。おそらく、《スピアヘッド》のパイロットはＦＣＳのロックがかかり、なんとか正面の《ディン》から距離を取ろうと必死なはずだ。
それこそがラバッジの狙いだった。ラバッジはスラストリバースの急減速そのままに、機体を引き起こしループ機動にいれる。しかし、そのループは《ディン》の全身のスラスターを使って姿勢制御をしているため非常にコンパクトだ。
ものの、二秒でラバッジは外部モニターの正面に《スピアヘッド》のエンジンノズルを捉えた。一瞬前までエアブレーキを展開していたため、《スピアヘッド》は《ディン》を引き離すことができない。
ガンクロスを《スピアヘッド》のエンジンノズルに定め、トリガーを引く。しかし、《スピアヘッド》は一瞬早く機体を傾け、左に旋回。７６ｍｍ徹甲弾の火線から辛うじて逃れた。
「教本通りだな」
ラバッジは相手の機動を完全に予測し、その旋回方向に９０ｍｍ対空榴散弾を二発見舞った。
弾体に内蔵された近接芯管が、《スピアヘッド》の存在を探知し二発の榴散弾が続けざまに弾け、無数の弾子を空中にまき散らす。
《スピアヘッド》は機体表面とキャノピーに数十か所の黒い穴を穿たれ、一瞬後爆炎に包まれる。

その光景を外部モニター越しに見たラバッジの眼は、尚も無機質にそれを捉えていた。

第二十二話

南西諸島・沖縄沖　海上

航空機が開発され、兵器として使用され始めた時代。フレッド・ウォレス中尉には想像すらできない遥か昔から、『戦闘機パイロットは目を鍛えろ』――――と言われてきた。

レーダーをはじめとした電子機器が存在しなかった頃、戦闘機パイロットが敵機の存在を知る方法は自分自身の目だけだった。敵機の存在を誰よりも先に見つけることができる目を手に入れることが、生き残るための重要な手段の一つだったのだ。今回演習の舞台として選ばれたこの極東の地域には、真昼の空に星を見ることができるほどの驚異的な視力を持ったパイロットが存在したと聞く。

それから半世紀が過ぎた、二十世紀後半。航空戦の索敵の主役は完全にレーダーが取って代わった。それでも、相手を先に見つけ、先に撃ち、先に撃墜する――――大西洋連邦の前身であるアメリカ合衆国ではファストルック・ファストショット・ファストキルと呼ばれる戦術論は変わらなかった。むしろ、ミサイルならばより一方的な攻撃が可能なため、その重要度はより増したとも言える。

レーダーの発展により、パイロット自身の目の重要度はレーダーに取って代わられたかに見えたが、その状況は再び一転することとなる。二十一世紀初頭、レーダーを初めとした電子センサーから身を隠すステルス技術の開発に、世界各国が躍起になって取り組んだ。これによりレーダーに捉えることができない航空機が実戦に投入され始めた。必然的にステルス機同士が敵として遭遇する場面もあった。しかし、ステルス機同士は互いにレーダーに映らない。これにより、ステルス機の航空戦はそれまでの遠・中距離でのミサイル戦ではなく、近距離での短距離ミサイルあるいは機関砲によるドッグファイトにもつれ込む事態が多発した。

本来、スタンドオフ攻撃により相手を一方的に撃墜するためのステルス能力が、その特性故に戦闘可能範囲を狭めたのはまさに皮肉と言えよう。

こうして、一時は索敵の主役をレーダーに奪われつつあったパイロットの目は、再び最も優れた索敵センサーとして返り咲いたのだ。
その後、赤外線探知技術の向上により機体形状や電波吸収材を用いたパッシブステルスの優位性は揺らぐこととなるが、アクティブステルスと呼ばれる電子戦技術の登場により最終的な識別判断はパイロットの目に頼ることが多かった。
こうした経緯から、戦闘の形態が長距離ミサイルをはじめとした電子戦に移行した後も、パイロットの目は重要な索敵センサーのひとつとして認知され続けていた。
海軍ファイターパイロットであるフレッドもその例に漏れず、2.0の視力を維持している。
そのフレッドの視界に、オレンジ色の爆炎が飛び込んできた。ほぼ同時にセンサー画面の緑色の光点が掻き消える。消えた光点の表示はPD01。それは飛行隊長機の撃墜を意味していた。
「――隊長……？」
無意識に口からこぼれた単語がそれだった。
『アイクCDCよりP（ピューキンドッグ）D03。P（ピューキンドッグ）D01、のシグナルロスト。以降は貴機が隊の指揮を取れ』
ほどなくしてアイクからの女性オペレーターの通信がヘルメットイヤフォンに流れる。その間にも分散した二機の《ディン》がこちらへ距離を詰めてくる。
「P（ピューキンドッグ）D03よりCDC。P（ピューキンドッグ）D02はどうした！　まだ合流できないのか！」
フレッドは反射的に第2編隊長の状況を問いただす。隊長機が撃墜された場合、規定では次席指揮官である第2編隊長が隊長の任にあたるはずだ。
『第2編隊は弾薬の損耗が激しく、これ以上の戦闘継続は不可能と判断した。そのため一旦アイクに戻す。弾薬と燃料の補給が済み次第直ちに発艦させるのでその間の指揮を貴官に任せたい』
先ほどの通信とは別な声がイヤフォンから流れてきた。今度は男だ。その声の主を理解しフレッドは息を飲む。

「レストン司令!?　どうして司令が……」
『話は後だ。今は敵の接近を食い止めるのが最優先だ。時間稼ぎでも構わない。奴らの進行速度が鈍ればいい』
フレッドは唇を噛んだ。フレッドは編隊長としての資格はもっているが、飛行隊長となると話が別だ。指揮をする機体の数が、今の倍以上に膨れ上がることとなる。しかし、レストンが命令を直接通達してくる時点で、今の自分たちがどれだけ追い詰められているかは理解できている。選択肢は無かった。
「Ｐ（ピューキンドッグ）Ｄ０３了解。これより第１、第３編隊を掌握。敵機の足止めを試みます」
『ウォレス中尉、頼んだぞ』
「任せてください」
フレッドの返事を聞くとレストンとの通信は切れた。
代わりに隊内への通信を開く。
『Ｐ（ピューキンドッグ）Ｄ０３よりＰ（ピューキンドッグ）Ｄ各機！ＰＤ０１の撃墜に伴い、ここからは俺が指揮をとる。無理に撃墜しようとしなくていい。ミサイルのロックオンで牽制しつつ敵の連携を分断しろ。僚機とのエレメントを崩すなよ』
『了解！』
フレッドを除く六機の《シースピア》から、はっきりとした返事が返ってくる。
同時にフレッドは操縦桿を倒し、機体を右九十度旋回。傾いた視界で頭上を仰ぐ。
フレッドはＰ（ピューキンドッグ）Ｄ０１を撃墜した赤黒い《ディン》を睨み据えた。
南西諸島・沖縄沖　アインゼンハワー級航空母艦《アインゼンハワー》モビルスーツ格納庫
『実弾への換装作業及び兵装の電子封印解除完了。いつでもいけるよ！』
通信ウィンドに現れたチヨ・アーウィン技術中尉が元気よく告げる。
『了解した。まだ何があるかわからん。整備班は即応態勢で待機、

以上だ』
ルースの応答にチヨは「了解！」、と返すと通信は閉じられた。
同時に有線の隊内通信が開く。
『今回の演習に実弾使用プログラムが含まれてて幸いでしたねえ』
チヨに代わってウィンドに現れたのはリーだった。
『それとも大西洋連邦側は元々これを見越していたんでしょうか？
タイミングが良すぎやしませんかね』
リーの言葉を聞き、言われてみればそうだとウォルトは思った。配備が始まったばかりのモビルスーツによる演習と、それを運用する母艦。ザフトからしたらこれ以上ない興味の対象と言える。だとすれば、演習の実行を決定した上層部は、あらかじめザフトの動きも察知していた可能性はある。
むしろ、ザフトを意図的に誘い込んだとすら考えられる。予め東アジア共和国がＡＷＡＣＳを飛ばして警戒にあたらせていたのもその証左なのではないか。
もっとも、先ほど実弾装填の命令が降りてきた際にアイクとのデータリンクがようやく接続できたが、その情報をみる限りＡＷＡＣＳはあまり有効に機能していないらしい。コーディネイターという存在はやはり馬鹿ではないようだ。少数とはいえ、それを補う策を講じてきている。
「考えすぎか――――」
そこまで考えて、ウォルトは自嘲気味に呟いた。
『なんか言ったか、マクミラン？』
「いえ、なんでもありません」
リーが眉を顰める。
そもそも、少数の偵察部隊を誘い込んだところで、戦局にはなんら影響はない。むしろ、連合のモビルスーツと母艦の性能がザフトに露見することの方が危険だ。
実戦の緊張を紛らわせようとくだらない思考を巡らせている自分に気づき、ウォルトはまたも自分が情けなくなった。
リーの怪訝な表情に被さるように新たな通信ウィンドが開く。

液晶画面に映し出されたのは、ウェーブのかかった柔らかそうなブロンドのミディアムヘアの女性だ。顔立ちは大人びているが青い大きな瞳は、快活なイメージを見る者に与える。〝ラプターファングス〟所属のオペレーター――――デリア・コークウェル軍曹だ。アイク艦上ではＣＤＣから〝ラプターファングス〟の管制を担当している。

デリアは感情を抑えた表情で口を開いた。

『アイクＣＤＣよりラプター、及びストーム各機、ガントリーロック解除。兵装受領確認後ラプター０１より順次エレベーターへと移動。フライトデッキへ展開せよ』

『ラプター０１、了解。各機聞いたな、お喋りはそこまでだ。これより我が隊はアイク・フライトデッキに展開。敵部隊の迎撃にあたる』

「了解」

ウォルトの返事と同時に〝ラプターファングス〟の声がヘルメットイヤフォンに流れる。

『クロダ中佐、指揮系統の混乱を避けるため、アイク艦上では私の指揮に従ってもらうことになりますがよろしいか？』

ルースの目が第６０６モビルスーツ隊の黒田中佐へと向けられる。

『構わん。ストーム各機は貴隊の指揮下に入る』

黒田は淀みなく答える。

『協力に感謝します。部隊各機、移動を開始する』

軽い振動と共に、《ダガー》がガントリーから解放される。ウォルトは己が愛機にアイク格納庫への一歩を踏み出させた。

アイゼンハワー級航空母艦《アイク》ＣＤＣ

「第１４３飛行隊、第２編隊着艦します」

「第２編隊着艦後は、アングルドデッキにモビルスーツ部隊を展開、敵部隊の迎撃にあたらせろ！第２編隊は燃料の補給と対空兵装の再装備後ただちに発艦させ第１、第３編隊の援護だ！」

幕僚長がモビルスーツ部隊と第２編隊への指示を飛ばす。

「いや、待て」

幕僚長の指示をオペレーターが整備班に伝達する前にレストンが制止する。

「この海域の地形データを出せるか？」
レストンの突然の言葉に幕僚長は目を丸くする。オペレーターは待ってください、とキーボードを叩き始める。数秒の後、ＣＤＣのサブモニターの一つに、現在アイクが展開している沖縄沖の地形データが映し出された。
レストンは地形データをしばし見つめると、幕僚長を振り返った。
「幕僚長、君がザフトの指揮官だとしたらこの海域に潜水母艦を展開するか？」
突然の問いに幕僚長は戸惑う素振りを見せるも、モニターの地形データに視線を移し少し考え込んだ後口を開いた。
「いえ、この海域の水深ではボズゴロフ級で潜伏するのは難しいかと――」
幕僚長の言葉通り、沖縄本島から数キロしか離れていないこの海域の水深は、１０００メートルに及ばない。深いところで、５００から６００メートルといった程度だ。全長２７０メートルに及ぶ大型の潜水母艦であるボズゴロフ級でこの海域に侵入し、敵の索敵を誤魔化すのは困難と言える。
「加えて、船体を隠せるような起伏に富んだ地形でもないことを鑑みると、より水深の深い海域を選んで部隊を展開させます」
幕僚長は当然のごとく回答した。
「しかし、その位置からでは《ディン》の航続距離が足りず航空支援が受けられない。そうなると、侵攻した水中用モビルスーツが単独でアスロックの飽和攻撃にさらされる恐れがあるが？」
レストンは新たな問題を提示し、幕僚長に問い返す。
「航空戦力が不可欠だとするなら、被発見のリスクを冒してでも、我が艦に比較的近いポイントから部隊を出撃させるしかありません」
「うむ、私も同じ考えだ」
レストンは幕僚長の模範的な回答に深く頷いてみせる。
「だが、今のところＡＷＡＣＳはこの海域に潜水艦の類はいないと報告を上げてきている。実際、受信したデータリンク情報を解析してもそれらしい反応は存在しなかった」

レストンの言葉を聞いて幕僚長はやっと彼の言わんとしていることを理解した。
「敵部隊はＡＷＡＣＳの索敵圏外から飛来したと……？しかし、《ディン》の航続距離の問題はまだ――」
「それこそが、盲点だったのだ」
レストンは自嘲的な表情で制帽を被りなおす。
「《ディン》が空戦モビルスーツであるという事実こそが敵が我々に仕掛けた罠だったのだよ」
「空戦モビルスーツ……」
レストンの言わんとしていることを幕僚長は再び見失う。
「ザフトのモビルスーツを海上で運用する場合、その機動力を支えているのはなんだったか忘れたか？」
ザフトが運用する兵器群を顧みて、やっと幕僚長はその存在に気づいた。
「《グゥル》――ですか」
《ディン》を初めとした局地戦モビルスーツの登場以前。ザフトは《グゥル》と呼ばれる遠隔操作可能な支援空中飛翔体を用いることで、モビルスーツによる空戦を可能とした。
《グゥル》はモビルスーツを機体上部に搭載しての飛行が可能な、一種のサブフライトシステムであり、地上におけるモビルスーツの機動力向上に大きく貢献していた。
「単独飛行可能なモビルスーツと《グゥル》の存在を無意識に切り離してしまうとは――」
幕僚長が歯噛みする気配を脇に感じつつ、レストンはオペレーターの隣に立つ。
「第２編隊の装備を対空からアスロックと対潜索敵装備に換装だ。《ディン》の侵攻ルートを遡って索敵させろ。《グゥル》を使ったとしても推進剤には限りがある。侵攻ルートを誤魔化すほどの迂回は出来ないはずだ」
レストンの指示を受けてオペレーターが第２編隊と整備班に命令を伝達していく。

「こちらが、敵艦を見つけ攻撃するのが先か、敵が防衛線を突破して本艦を攻めるのが先か。時間が勝負ですな」
レストンは戦術マップ上の赤と緑の光点が、ゆっくりと絡み合うように動く様を見つめる。
《ディン》と《シースピア》が空戦を繰り広げているであろう空域は、すでにアイクの目と鼻の先に迫りつつある。
その間にも、友軍を示す緑の光点がまた一つマップ上から掻き消えた。

第二十三話

南西諸島・沖縄沖　アイゼンハワー級航空母艦《アイゼンハワー》発艦用エレベーター

格納庫からフライトデッキへつながるエレベーターのゲートを、ライトグレーとオレンジの《ダガー》が主脚歩行でゆっくりとくぐる。

アイクのモビルスーツ格納庫には、このエレベーターが左右二基ずつ存在し、一度に四機のモビルスーツをフライトデッキへと上げることが可能な構造になっている。その中の一基。右舷後方に位置する第４エレベーターのゲートをウォルトは《ダガー》にくぐらせた。ゲートの先には1ブロック分の空間があり、その床面がそのままスライドして機体を野外エレベーターへと運ぶ構造になっている。その空間でガントリーアームが兵装を機体に装備させ、そのままフライトデッキへと上げるのだ。

兵装受領ブロックに《ダガー》を停止させたタイミングで、通信ウィンドが開いた。

『現在アイクに接近中の航空戦力は《ディン》が四機だ。これに伴い、打撃群司令部から我が隊にストライカーパックの使用許可が下りた』

ルースの発した言葉にウォルトは息を飲んだ。

ストライカーパック――、大西洋連邦がモビルスーツの汎用性向上を目的として開発した、独自の兵装換装システムだ。地球連合におけるモビルスーツの原点たるＧＡＴ―Ｘ１０５《ストライク》に初めて実装され、それをベースとした《ダガー》にもストライカーパック接続用のマウントプラグが各所に存在する。

《ダガー》のマニュアルやボブの説明で存在を知ってはいたが、今日までウォルトはそれを運用したことがなかった。

（使えるのか――？）

初の実戦に加え、運用したことのない未知の装備の存在を知らされ、ウォルトは内心自問した。

『もっとも、今回の演習に持ち出せたのは予備を合わせて二機のＸ０１と実弾射撃演習用のＸ０３一機だったため、一小隊分のみだ。

よって、ストライカーパック使用機は三機、残りの機体はＧＡＵ８Ｍ２にてアイクの対空防御』
『それで、編成は？』
リーが焦れたようにルースにパックの割り振りを問いかける。
『まず高機動戦闘用のＸ０１は、機体の滞空時間を大幅に延伸できるため《ディン》との直接的な戦闘となる。さらに、モビルスーツでの空中戦機動は高度な技術を有するためストライカーパックの開発試験を担当していたヴィアン中尉に任せる。もう一機は隊内でも機動制御技術に長けたマクミラン少尉に』
ウォルトは自分の耳を疑った。二機のＸ０１をウォルトとレオンスで装備するとしたら、その二機は僚機という扱いになる。その場合二機の相互連携が戦闘の重要なウェイトを占めることになるが、ウォルトはエドワーズでの隊内実機演習以来レオンスとは組んでいない。実戦経験の皆無に運用実績の無い装備、さらには僚機との連携にすら不安を覚える有様。
ウォルトは自分自身の経験不足に歯噛みするしかなかった。ヘルメットイヤフォンにケイの声が流れたのはそんなときだった。
『上申を許可願います』
ルースはケイに「許可する」、と続きを促す。
『今回の作戦ですが、マクミラン少尉にＸ０１を任せるのは荷が重いと考えます』
ウォルトはケイの意図が読めず、ウィンドに映し出されるその表情を伺った。しかしケイはウォルトの視線に構わず続ける。
『マクミラン少尉は未だ実戦経験がありません。それに加えて、運用実績の皆無のＸ―０１を装備しての敵との高機動格闘戦はリスクが高すぎます』
ルースは黙ったままケイの上申を聞いている。その表情からは、ケイの上申に対する思考は読めない。
『そこでまずＸ０１の運用ですが、自分に任せていただけないでしょうか』
ケイの言葉に微かな動揺が隊内に広がるのを、ウォルトは通信ウィ

ンド越しに感じ取った。玲央奈と黒田中佐もケイの言葉に疑念を隠せていない。ルースだけが表情を変えずにケイの言葉を聞いていた。
『その結論に至った理由はなんだ？ハヤミ少尉』
『データリンク情報をみる限り、敵の航空戦力は四機。対して準航空戦力として我が隊が使用できるＸ０１は二機のみ。１４３飛行隊との連携を考慮しても、戦力的には我が方が劣っていると言わざるを得ません。この状況を打開するには、Ｘ０１を装備した二機の連携が不可欠です』
『貴様はヴィアンとの連携をマクミランより上手くこなせると言うのか？』
『いえ、自分もヴィアン中尉と組んだ経験は多くないため、連携面ではマクミラン少尉と差はありません。そのため、相互連携を考慮し、僚機として６０６隊の三隈玲央奈少尉を指名します』
ケイのあまりに予想外の提案にウォルトは息を飲んだ。出向扱いとは言え、大西洋連邦所属のパイロットが他国のパイロットを僚機として指名するなど、前代未聞だ。
『ちょっと待てよハヤミ。お前と三隈少尉の連携がどんなものかは知らないが、彼女の機体にストライカーパックシステムは搭載されてないだろ。それでどうやって連携するっていうんだよ』
堪え切れないといった様子で真っ先に口を開いたのはリーだった。玲央奈と黒田の《ストライクダガー》にはコスト圧縮や整備性向上のため、ストライカーパックシステムは搭載されていない。リーの指摘はもっともと言える。
『ですから、三隈少尉に我が隊の《ダガー》の貸与を許可願います』
僚機としてだけでなく、モビルスーツの貸与をも要求する。ケイの立て続けの無茶な提案に、その場の誰もが閉口した。
『ば、馬鹿かお前は！他国のパイロットに機体を貸すって――――』
リーは衝撃に引きつった表情でケイの提案に反対するが、その言葉はケイに遮られた。
『リー中尉も東アジアからの出向ならお分かりのはずです。《ダガー》が基礎技術研究の名目で、我が国の試験部隊にも極少数ではり

ますが配備されている事実を。であるなら、中尉が危惧する機密漏洩の問題はないと愚考します』
ケイが口にした、『我が国』という単語。それが、大西洋連邦ではなくケイとリーの本来の所属である、東アジア共和国を示していることは言うまでも無かった。
『機密が問題ないとしても、一体だれの機体を貸すんだよ。ファングスに予備機は無いんだぞ』
ケイとリーの問答に耐え切れずウォルトは咄嗟に口を開いていた。
「じ、自分の機体を使ってくださいッ！」
不意にウォルトの口を突いて出た言葉がそれだった。
実戦という予期せぬ事態を前に怯え、ウォルトの思考はいつの間にか停止していた。それに対して、ケイは不利な状況を打開するための思考をやめていなかった。その事実を前に、ウォルトはケイとリーの会話を黙って聞いていることが我慢できなかったのだ。自分が衝動的に動いていることも、行動原理が自己満足であることも理解している。だが、それでもウォルトはケイが何かを為そうとするなら、その力になってやりたかった。それが、初陣を前に動揺していた自分を気遣ってくれた、仲間たちへの礼儀だとウォルトは思った。
『ダメだ。ウォルトには《ダガー》に乗ってもらう』
しかし、ケイの返答はあまりに呆気ないものだった。
「待てよ、ケイ！それじゃあ――――」
『お前にはＸ０３を使ってもらう』
「え、Ｘ０３――――？」
ウォルトは我知らず問い返していた。
『それが貴様の案かハヤミ』
これまで黙って聞いていたルースが口を開く。
『一つ聞かせてくれハヤミ。お前が、Ｘ０３にマクミランを推す理由はなんだ？』
ルースの問いはウォルトも疑問に思っていたものだった。
『先日の６０６隊の演習で、マクミラン少尉は三隈少尉の《ストライクダガー》を狙撃しました。回避機動中の相手を見越し射撃で仕留め

るのは簡単なことではありません。それを一撃で為すことが出来る彼なら、Ｘ―０３を用いた長距離火力支援に最適と判断しました』
ケイの返答を聞くとルースはしばし瞑目し、それからゆっくりと口を開いた。
『ハヤミ少尉の案を採用する。クロダ中佐、ミクマ少尉を借りることになりますがよろしいですか？』
『構いません。やれるな？三隈』
黒田の問いに玲央奈は淀みなく答えた。
『無論です』
『では、ミクマ少尉の《ダガー》だが――――』
『隊長、その役は自分に任せていただけませんか？』
ルースの言葉を遮ったのはリーだった。
『今は大西洋連邦所属とはいえ、同郷の部下たちが前衛を買って出ている状況で、俺だけ何もしないってんじゃ恰好がつかないんでね』
先ほどまで、ケイに反対していたリーが機体を提供することは、ウォルトも予想外だった。
『いいだろう、リーとミクマ少尉は直ちに機体を乗り換えろ。聞いていたな、アーウィン中尉。１０２、１０５号機はＸ０１、１０４号機はＸ０３に換装だ』
『了解だよ！』
威勢のいい返答がヘルメットイヤフォンに響く。
『コールサインはリー、ミクマ少尉ともに現在のままで固定。コークウェル軍曹、ＣＤＣにこの旨を通達』
『もうやってます』
ウィンドに現れたデリアが得意げにウィンクしてみせる。
『よろしい』
ルースが不敵な笑みを浮かべてみせる。
『各機、装備の換装が済み次第フライトデッキへ展開。敵部隊を迎撃する。これ以上ザフトの好きにさせるな!!』
アイゼンハワー級航空母艦《アイゼンハワー》ＣＤＣ
「ＰＤ０４シグナルロスト！残存機は四機です！」

オペレーターが焦りも露わに報告をあげてくる。
「直援艦はなにをやってる！」
「ミッチャー、ハワード、ベンフォールド共に《グーン》との戦闘中。魚雷によりＦＣＳが飽和させられています」
オペレーターの報告通り、海上レーダーに映し出される直援のデモイン級は、六機の《グーン》に囲まれている。さらに、魚雷を回避しつつ応戦しているため、アイクとの距離も徐々に開きつつあった。
「〝ラプターファングス〟全機兵装受領完了、これよりフライトデッキに展開、迎撃を開始します！」
オペレーター席に座るブロンドの女性――――〝ラプターファングス〟所属のデリア・コークウェル軍曹がレストンを振り返る。
「よし、ラプター０５、ストーム０８発艦に続いて対潜索敵装備の１４３飛行隊、第２編隊を発艦だ。〝ラプターファングス〟の展開を急がせろ」
「了解」
レストンの命令を聞き、デリアは再びコンソールに向かい合った。
アイゼンハワー級航空母艦《アインゼンハワー》フライトデッキ僅かな振動と共に、外部モニターに映し出されたアイク内部壁面が上から下へ流れてゆく。やがて、暗い壁面は唐突に途切れ、スカイブルーの空と群青の海原、そして灰色のフライトデッキが外部モニターを埋め尽くした。
高さ約１８メートルのモビルスーツの視界からみると、アイクのフライトデッキは狭く感じる。当初ウォルトが生身で立った時とは印象が大分違った。同時に、この限られたスペースにピンポイントで着艦できる海軍パイロットの力量に、ウォルトは空軍パイロットとしての本能から感心を覚える。
エレベーターが上昇しきり、ウォルトの《ダガー》が甲板上に上がると、電子音と共に外部モニター上の十時方向の空が拡大表示される。データリンクが、戦闘中の部隊の様子をオートで映し出したのだ。
拡大ウィンドには、赤黒いカラーリングの不気味な《ディン》と一

機の《シースピア》がその軌道を絡め合うように交錯し、相手の背後を占位しようと機動する様子が映し出される。
『ラプター01より部隊各機、これよりラプター05、ストーム08がカタパルトにて発艦、続いて第143飛行隊・第2編隊が発艦し敵母艦の索敵にあたる。現在敵部隊と交戦中の第1、3編隊は第2編隊の直援にあたるためこの艦の防衛任務は我々に一任されることになる。ラプター04はラプター05、ストーム08の発艦を援護しろ。残りは本艦に接近する《ディン》を牽制するだけでいい。迎撃は対空ミサイルが行う』
「ラプター04、了解」
ウォルトは兵装選択画面からAQM／E—X03《ランチャーストライカー》の主兵装である320mm超高インパルス砲《アグニ》を選択。FCSが近距離モードからオートで長距離射撃モードに切り替わり、《ダガー》のバックパック左側面にマウントされた《アグニ》が機体の脇の下を通って前方に展開した。
オリーブドラブに塗り固められた《アグニ》は、高さ18メートルの《ダガー》を超える長銃身大口径の大型砲だ。そのため、左主腕を軸に右主腕で銃身を支える構えをとる。動作プログラムとして記録された動きで、《ダガー》が《アグニ》を両腕で構えた。
「ラプター04、エネルギーコンジット接続。射撃準備完了」
『ラプター05、発艦準備完了いつでもいけます！』
『ストーム08、同じく』
ウォルトが展開する着艦用デッキに対し、十度の角度で二基並列して設置されたモビルスーツ用カタパルトに二機の《ダガー》が立つ。
その背部には大型のスラスターユニット——AQM／E—X01《エールストライカー》を背負っている。大推力の四基のスラスターと、空力を考慮したウィングバインダーにより、そのシルエットは普段の《ダガー》と大きく異なっている。
「ケイ、その——、ありがとな」
ウォルトは液晶モニター越しのケイに呟いていた。
ケイはウォルトの唐突な礼に目を丸くする。一瞬後、顔を引きつら

せた。
『なんだ、いきなり。気持ちわりぃな』
「なんでもねぇよ……」
『なんだか最近あなた達仲いいわよね。羨ましいわ』
ミーリャがにこやかに顔を覗き込んでくる。ウィンド越しのはずなのに、内心を探られるような気恥ずかしさにウォルトは顔を俯けた。

※

『一応私も初陣なんだけどね……』
玲央奈の顔がウィンドに映し出されたと思ったら、唐突にそう呟いてきた。ウィンドの下部には「秘匿通信」の表示。他の隊員には聞かせたくないらしい。
「悪いな、ウォルトはああ見えて色々と気にしすぎる奴なんだ」
ケイは同期の女パイロットにとりあえず詫びを入れた。
『別に構わないけど。エールを装備した《ダガー》でカタパルトを使えるなんて滅多にないしね』
「お前の腕ならコイツを使いこなせるだろ？」
『私を誰だと思ってる？』
「可愛げのねぇ奴――――」
『あんたに可愛いと思ってもらう必要ないし』
それだけ言うと、満足したのか玲央奈は秘匿通信を切った。入れ替わりでデリアが通信ウィンドに現れる。
『打撃群司令部からの命令を伝えるわ。ラプター０５、ストーム０８の両機は発艦後、敵と交戦中の第１４３飛行隊・第１、第３編隊を援護。その後発艦する第２編隊の突破口を開いた後、アイクの直援に付いてもらうわ。それと、鉄錆色の《ディン》には注意して。すでに〝ピューキンドッグス〟のＦ―７Ｇがあの機体に五機墜されているわ』
「エースってやつか――――」
『教導隊とエースパイロットの戦闘とか面白いじゃない』
玲央奈が攻撃的な笑みを浮かべる。ケイはこの表情をした後の玲

央奈が負けたところを見たことが無かった。
『発艦タイミングはそちらに委譲するわ。気をつけてね』
「了解」
ケイと玲央奈の応答を確認するとデリアとの通信は切れた。
「玲央奈、準備はいいか？」
『いつでも』
玲央奈の視線は真っ直ぐ前だけを見据えている。
ケイはスロットルをアイドルからミリタリー推力へと上げる。低く唸るエンジン音が徐々に甲高くなっていき、《エールストライカー》の強大な推力が振動となってシートに伝わってきた。
「ラプター０５、ブラストオフ!!」
爆発的なＧが正面からケイをシートに叩きつける。発艦コールを一度してみたかったんだよな、などというケイの思考は外部モニターの視界と共に後方へ吹っ飛んでいってしまった。

第二十四話

南西諸島・沖縄沖　海上

操縦桿を右に傾けると、フライバイワイヤが機敏に反応し、機体をバンクさせた。そのまま手前に引きつけると、《シースピア》は右旋回の機動を始める。

正面から圧し掛かるＧに耐えつつ、フレッド・ウォレスはキャノピーの内側に据えられたバックミラーをちらと確認する。そこには、自機の背後正面を占位しようと付きまとう、赤黒い《ディン》の姿。何年も雨風に晒されてきた鉄くずのような色合いの割に、その機動は他の三機よりも鋭く厄介だ。

モビルスーツといえど、空戦機動中の相手に砲撃を当てるのは容易ではない。そのため、結局は戦闘機同士の格闘戦と変わらない背後の取り会い、ドッグファイトと同じ状態へともつれ込むのだ。

今はまだ、右旋回で軸線を僅かにずらしているが、《ディン》の運動性を考慮すると、背後を取られ、砲撃を食らうのは時間の問題だ。

《シースピア》が空戦において《ディン》に勝る能力は速度だが、下手に距離を取れば多目的ランチャーの空対空ミサイルで仕留められる。

「だったら……！」

フレッドは右手前に引いていた操縦桿に、さらに力を込める。次の瞬間、《シースピア》は旋回半径をさらに狭めた。代償として、先ほどまでとは比べものにならないＧがフレッドを襲う。

操縦桿に込められた力をフライバイワイヤが感知し、ベクタードノズルを可動させたのだ。パイロットスーツの酸素供給システムが、自動的に加圧モードに変更されるが、それでも息ができない。

《シースピア》は最大１３Ｇまで耐えられると言われているが、人間の肉体は一般的には９Ｇが限界だ。フレッドは今、それを瞬間的に超える機動を行っている。

呻くことすらままならないＧに耐えること数秒。フレッドは操縦桿に込める力を緩めた。ノズルが水平位置へと復帰し、呼吸ができる

程度のＧへとゆるやかに戻っていく。
耐Ｇ呼吸法など忘れたかの如く、空気を目一杯肺に送り込みつつ首を巡らせると、鉄錆色の《ディン》は斜め上方向へと移動している。
「散々追い回しやがって、今度はこっちの番だ!!」
《ディン》の位置を確認すると、フレッドはバンク角を緩め操縦桿を引く。《シースピア》が緩やかな旋回を続けつつ、上昇を始める。
《ディン》の姿が機首に隠れる寸前、フレッドは操縦桿を一杯に倒した。視界がぐるりと回転し、天地が逆さまになる。鮮やかに背面姿勢に移行した《シースピア》のキャノピーやや上方には、無防備に背中を晒す鉄錆色。
操縦桿を手前に引きつけ機首を下げると、《シースピア》は高度を速度エネルギーへと変換し、獲物に迫る荒鷲の如く鉄錆色の《ディン》に食らいついた。同時に、ロール機動をとっていた機体が一回転し、再び空が頭上に戻ってくると、フレッドは倒していた操縦桿への力を緩める。水平に復帰した視界の正面には鉄錆色の背中。
フレッドは、すかさずスロットルレバー側面の兵装選択スイッチを操作し、短距離ミサイルを選択。機体下部のウェポンベイが展開し、ＡＩＭ―１８《ヴェルガー》空対空短距離ミサイルが頭を出す。コンマ数秒の後、《ヴェルガー》の弾頭に搭載された赤外線シーカーが、《ディン》の熱源を捕捉し、敵機としてロック。
二段階ある操縦桿の発射トリガーの一段階目を押し込み、ガンカメラが起動する。
「Ｐ（ピューキンドッグ）Ｄ０３、ＦＯＸ――――」
そのままミサイル発射の二段階目を押し込もうとした瞬間、《シースピア》のコクピットがロックオン警報で満たされる。フレッドの注意が、瞬間的にコンソールの中心に位置する多機能ディスプレイに注がれた。ディスプレイには『後方より赤外線照射を探知』の表示。
『Ｐ（ピューキンドッグ）Ｄ０３！敵がそっちに!!』
ヘルメットイヤフォンからは悲鳴のような僚機の声。
「いつの間に……!!」
反射的にスロットルのスイッチを操作し、フレア放出。同時に操縦

桿を左一杯に傾けた。
《シースピア》の機体下部から強烈な光を放出するマグネシウム片がばら撒かれ、左急旋回に入る。
《シースピア》はベクタードノズルを機体上方に可動させ、やっと解放されたはずの９Ｇ旋回に再び舞い戻る。
悪態の一つもついてやりたいが、口を開けるような余裕は、今のフレッドには無かった。
フレッドが鉄錆色の《ディン》に食らいつこうと必死に機動している最中。僚機との連携の間隙を縫って接近してきたもう一機の《ディン》は、赤外線センサーでフレッドをロック。胸部左右に装備された多目的ランチャーから、短距離ＡＡＭを発射したのだ。
一昔前のミサイルなら、デコイを放出しブレイクすることで、やり過ごすことは十分可能だった。しかし、《ディン》に装備されたＡＡＭはコーディネイター共が作った最新型だ。フレアの存在を探知すると、瞬時に誘導方式が変更され、画像追尾モードへと切り替わる。
案の定、《ディン》のミサイルは、フレアに惑わされることなく追尾を継続し、《シースピア》に迫る。
逃げきれない。
押しつぶされそうなＧの最中。フレッドは覚悟を決めた。スロットルレバーと操縦桿を放し、射出座席の中央にあるハンドルに両手を伸ばす。射出ハンドルを掴みかけた瞬間、後方から連続した爆発の衝撃がフレッドを襲った。
ベイルアウトが間に合わなかったか、と思わずバックミラーを見るが、そこに映るエンジンは正常に稼働している。
その代わり、機体の後方数百メートルの位置で、数個の爆炎が広がっていた。
はっとしてフレッドはレーダーを見やるが、先ほどまで自機を追尾していた、ミサイルの光点も消えている。
「何が……？」
状況を理解できないフレッドは、小さく呟くしかなかった。
『ラプター０５よりＰ（ピューキンドッグ）　Ｄ　０３！援護します!!』

直後、ヘルメットイヤフォンに耳慣れない声。
『アイクの直援は我々が引き継ぎます。貴隊は第２編隊と合流の後、敵母艦の索敵を願います』
ヘルメットイヤフォンの声と共に、フレッドの耳には《シースピア》とは違う力強いエンジン音が届いていた。
キャノピーの外を見回すと、それは真横にぬっとせり上がるように現れた。
額の左右にせり出す、角か触覚を思わせるブレードセンサーが特徴的な頭部。それは、《シースピア》から徐々に距離を取っていき、フレッドにもその全景が明らかになる。
力強い直線で構成された巨大な人型は、ライトグレーを基調とし、オレンジのラインが入れられた特徴的なツートンカラーだ。背部には黒と赤で塗り固められた巨大なスラスターユニットを背負っている。
「《ダガー》……!?」
フレッドは我知らずそのモビルスーツの名を口に出していた。
『Ｐ（ピューキンドッグ）Ｄ０３？ウォレス中尉、大丈夫ですか？』
《ダガー》のパイロット――ラプター０５の声が再びヘルメットイヤフォンに流れる。その声を聞いて、フレッドはやっと状況を理解した。
「Ｐ（ピューキンドッグ）Ｄ０３よりラプター０５。了解した、我が隊は第２編隊と合流、敵母艦の索敵にあたる。アイクを頼むぞ」
『お任せください！』
《ダガー》のパイロットからの返事を聞くと、フレッドは操縦桿を傾け、機体を緩旋回に入れた。
南西諸島・沖縄沖　アイゼンハワー級航空母艦《アイゼンハワー》フライトデッキ
『ラプター０１より部隊各機。第１４３飛行隊、第２編隊が発艦体勢に入った。第２編隊は発艦後、第１、第３編隊と合流。モビルスーツ部隊の包囲を突破し、敵母艦の索敵行動にあたる。彼等に《ディン》を一機たりとも近づけさせるな。我々をここまで運んでくれたアイ

クに借りを返すぞ。モビルスーツがただのお荷物じゃないということを証明してやれ』
通信ウィンドに現れたルースは、毅然と言い放つ。直後、了解の唱和がウォルトのヘルメットイヤフォンを支配した。
『第2編隊発艦します!』
ＣＤＣで第2編隊の発艦タイミングをモニターしていたデリアから、その発艦が告げられる。
アイクのフライトデッキから勢いよく射出された二機のＦ―７Ｇは、瞬く間に速度と高度を上げ遠ざかっていく。
しかし、今まで第1、第3編隊、そしてエールストライカーを装備したケイたちの《ダガー》と交戦中だった四機の《ディン》のうち一機が、戦闘エリアから抜け出そうとする第2編隊に、その不気味な単眼をじろりと向けた。狼が新たな獲物を見つけたかのように、《ディン》は第2編隊の進行方向へと先回りすべくスラスターを吹かした。
「ラプター０４よりラプター０５、一機が第2編隊に気づいた!至急援護を!」
ウォルトは反射的に叫んだ。
『０５より０４、スマン!こっちも鉄錆色の相手で他に手が回らん!お前の《アグニ》でなんとかならないか!?』
ケイの言葉を聞き、ウォルトは、はっとＦＣＳを確認する。〝ピューキンドッグス〟とケイたちの戦闘をモニターするのに夢中になって、ランチャーストライカーの存在を失念していたことに気づく。やはり、普段より頭が回っていない。だが今は実戦への焦りから、思考力が低下している自分を卑下している場合じゃない。
ウォルトは、すぐさま《アグニ》の照準を第2編隊に接近中の《ディン》へと向ける。《アグニ》の砲身から、同軸で照射される長距離火器管制レーダーが、《ディン》の存在を捕捉。
《ディン》のコクピットでは、火器管制レーダーでロックされていることを知らせる警報が鳴り響いているはずだが、回避機動に入る気配はない。
「アイクの対空ミサイルだとでも思ってやがるのか……？　舐めや

がって！」
機動中とはいえ、回避機動をとらないのならば、狙うのは簡単だ。ＦＣＳが敵機の機動データを統合し、未来位置をリアルタイムで提供してくれる。あとは、直撃可能なタイミングを図り、トリガーを引くだけでいい。
《ディン》が姿勢制御スラスターを吹かし、僅かに機動修正を図った瞬間を、ウォルトは見逃さなかった。
「食らいやがれッ!!」
迷いなく操縦桿のトリガーを引き絞る。操縦桿から走った電子信号が《アグニ》へと達し、その巨大な砲口から真紅の光が迸った。《アグニ》から放たれたプラズマエネルギーの奔流は、太い光の束となって空間を貫いていく。
その衝撃を《ダガー》は全身の関節を使って受け止めるが、それでも強度保障ギリギリの反動が発生し、警告ダイアログが外部モニターに立ちあがる。
真紅のプラズマエネルギーの塊は数ミリ秒の後、《ディン》へと達し、その左主腕を９０ｍｍ対空散弾銃ごと溶解させ、一瞬後には跡形もなくもぎ取っていく。
予想以上の衝撃に照準補正が間に合わず、狙いが逸れたにもかかわらず、その砲撃は《ディン》の側面を掠めただけで主腕を奪い去ってしまった。文字通り戦艦の主砲並みの威力に、腕を奪われた《ディン》も惑う挙動を見せ後退していく。
「これがモビルスーツに搭載する火力かよ……」
一瞬とはいえ、関節強度保障を脅かすほどの反動を発生させる《アグニ》の威力を目の当たりにし、ウォルトは開発コンセプトが間違っているのではないかという錯覚に捕らわれた。
南西諸島・沖縄沖　海上
地球連合軍の航空母艦《アイゼンハワー》のアングルドデッキから、突如太い真紅の光が屹立したかと思うと、それはレグルス０３に真っ直ぐ伸びその左主腕を奪い去っていった。
「ビームだとッ!?」

ラバッジはその光の正体を瞬時に見抜いたが、彼がこれまで見てきたビームとは、威力が段違いだった。その圧倒的な光景に、味方の《ディン》はおろか、新たに戦闘に加わったオレンジ色のモビルスーツの動きすら、一瞬緩慢になったように見えた。

「レグルスリードよりレグルス０３、損傷は？」

まずはレグルス０３の損害把握に努める。

『レグルス０３よりレグルスリード、左主腕及び左主翼の一部を持っていかれました。また、主翼の駆動部が熱により融解。機動が制限されています』

平静を装ってはいるが、レグルス０３の声は僅かに上ずっている。

直撃を免れたはずの主翼付け根の駆動部すら、ビームから発せられる熱の影響で融解したのか。なんという熱量だ。ザフトが実戦投入している数少ないビーム兵器である、Ｍ６９《バルルス改》特化重粒子砲ですらあれほどの威力はない。エネルギーの収束率が《バルルス改》とは比較にならなかった。

ラバッジたちの動揺を見て取ったのか、オレンジ色の機体がここぞとばかりに攻勢を強めてきた。二機がその位置を常に変えつつも、十字砲火を形成しながら、自機を含めた三機の《ディン》を砲弾の檻に封じ込めてくる。一切の狂いを感じさせない見事な連携だ。その隙を突いて、四機の《スピアヘッド》が《ディン》との交戦エリアから離脱していく。

「レグルスリードより各機、フォーメーションを変えるぞ。レグルス０３は一時後退。レグルス０２、０４は０３をカバーしつつオレンジの新手を引きつけろ」

『隊長はどうなさるおつもりですか？』

敵機の砲撃を躱し、７６ｍｍ弾を応射しつつレグルス０２が問いかけてくる。

「敵空母の甲板からあの威力の砲撃をされたら、データ収集どころではないだろう」

ラバッジの口角が吊り上がり、好戦的な笑みを形成する。

「あのビームをぶっ放してる機体を潰して、空母の具体的なデータ

を収集。《スピアヘッド》の飛行隊を追撃するぞ。ここからはスピードが勝負だ。《スピアヘッド》に《ペテルソン》が発見されたら終わりだぞ。気合い入れてかかれ！」

『了解!!』

部下たちの応答を聞きつつ、ラバッジはスロットルを全開へ。フットペダルを踏み込み、《アイゼンハワー》へと機体を加速させた。

「どんなに威力の高いビームも当たらなければ……!!」

《アイゼンハワー》のアングルドデッキに展開するオレンジの機体を見据え、赤銅色の《ディン》の単眼が獰猛にぎらりと閃いた。

第二十五話

南西諸島・沖縄沖　アイゼンハワー級航空母艦《アイゼンハワー》
フライトデッキ

《アグニ》の砲撃により腕部を失った《ディン》がフォーメーションの後ろに下がると、代わりに鉄錆色の《ディン》が突出し、アイクへと接近する挙動を見せた。

ウォルトはすかさず《アグニ》の照準を鉄錆色に向ける。

一射目の凄まじい反動を考慮しつつ、照準補正。

コンソールに照準補正データを打ち込み、トリガーを引き絞る。

臨界状態のプラズマエネルギーが《アグニ》の砲口から溢れ出し、一瞬遅れて凄まじい反動がコクピットを揺るがす。反動を打ち消すべく、動作プログラムがオートで背部と脚部のスラスターを吹かした。

《アグニ》から放出された真紅の光芒は、真っ直ぐに鉄錆色の進行方向へと殺到する。一瞬後には臨界状態のプラズマエネルギーの塊が、その正面装甲を焼き、跡形も無く蒸発させるかに思えた。

しかし、外部モニターに映される光景は、ウォルトの予想を大きく裏切った。鉄錆色の《ディン》は大きくバンクをとり、機体を捻ることで急速方向転換。《アグニ》の射線から逃れたのだ。

「ウソだろ……!?」

鉄錆色の一瞬の機動にウォルトは目を見張る。あれほどの機動を空中でこなしたとなれば、パイロットにかかる瞬間的なGは凄まじいレベルに達するはずだ。失神程度では済まないほどの負担がパイロットを襲ったはずだが、鉄錆色はなおもアイクへと接近する速度を緩めない。

「野郎ッ……!!」

ウォルトは続けざまに《アグニ》のトリガーを引き絞る。二発、三発と真紅の光芒が南洋の空を焼くが、鉄錆色はその悉くを巧みな急速旋回機動で回避。外部モニターに映る鉄錆色の姿が、拡大ウィンドを通さずとも徐々に明瞭に捉えられていく。

ウォルトは鉄錆色の《ディン》の単眼が、自分を睨め付けているか

のような錯覚に捕らわれた。
南西諸島・沖縄沖　洋上
ビームの熱が機体の装甲表面を焼くほどの近距離を擦過する。しかし、それは愛機である《ディン》の機動を害する損傷を与えるか否かの、ギリギリの距離。
「単調な砲撃で……!!」
襲いくるGに堪えつつ、ラバッジは吐き捨てる。砲撃の狙いは悪くない。だが、砲撃タイミングが単調なため、エネルギー充填速度を逆算することで、どのタイミングで回避機動をとれば躱せるかラバッジは感覚的に理解していた。
腕はいいが経験が足りていない。それが、ラバッジがアイクの甲板上からこちらを狙ってくる機体のパイロットに下した評価だった。
アイゼンハワー級航空母艦《アイゼンハワー》　ＣＤＣ
「鉄錆色の《ディン》が突出、本艦へと接近!方位、３―１―５」
対空レーダーを監視していたオペレーターが焦りに満ちた声を上げた。
「左舷ＶＬＳ、《ヘルダート》装填。ＦＣＳをデータリンクに接続」
「《ヘルダート》装填、防御システムをデータリンクへ接続します!」
火器管制官がアイクの対空防御システムを接近中の《ディン》へと向ける。
データリンクを通じて《ディン》を捕捉したアイクのＦＣＳはＶＬＳに装填された艦対空ミサイル《ヘルダート》を発射した。
南西諸島・沖縄沖　洋上
彼我距離１２００メートルまで迫った敵空母甲板の左舷後部から、白煙が吹き出す。直後、白煙を突き破るようにして、二発の対空ミサイルが上空へと飛翔。対空ミサイルは外部モニターの中で、その矛先をこちらへと向け、真っ直ぐ向かってくる。
レーダー警報受信機はレーダー照射警報を煩いくらいに鳴らし続けているが、ラバッジに焦る様子は無かった。
「たかが二発で……」
互いにヘッドオンで接近しているため、ミサイルとの距離はあっと

いう間に縮まった。すかさず操縦桿を右に薙ぎ倒し、左のフットペダルを踏み込む。機体が右ロールを開始し、さらに左脚部のスラスターが機体の向きを強引に変更する。

「俺を墜とせると思ったかッ!!」

直撃寸前の強引な機動にミサイルは反応できず、そのまま後方へと排気煙の尾を引きながら飛び去っていった。

アイクとの彼我距離は８００を切っている。外部モニターには、甲板に展開する敵モビルスーツ部隊が、明瞭に視認できるほどのサイズで映し出されていた。四機は後方で部下たちと交戦中の機体と同じ、ライトグレーとオレンジのツートン。残りの二機はライトグレーとオリーブドラブのツートンだ。

その中の一機、左腕部に大型砲を構えるオレンジの機体――――恐らく先ほど砲撃を加えてきた機体だろう――――をラバッジはまず標的に定めた。

距離を詰めたせいか、大型砲の機体からビームが飛んでくることはない。代わりに、周囲の機体と、アイクのＣＩＷＳからは機関砲弾が弾幕を張ってくる。

しかし、ラバッジは機関砲の火線を、ベクタードスラストを用い機体を小刻みに振ることで掻い潜る。モビルスーツが人型故の、戦闘機には不可能な機動だ。

ラバッジが火線を掻い潜り、アイクとの距離をさらに縮めると、大型砲の機体は右肩部の追加ユニットと思しきオリーブドラブの装備から、小型のミサイルを二発立て続けに発射。距離が近すぎるため、回避は間に合わない。

しかし、ラバッジは焦りもせず左の操縦桿のトリガーを引く。左腕に装備された９０ｍｍ対空散弾銃がマズルフラッシュと共に、榴散弾を吐き出した。直撃コースにあったミサイルを捉えた９０ｍｍ対空榴散弾は近接芯管を作動させ、無数の弾子をばら撒く。その中に突っ込んだ二発の近接防御ミサイルは、誘爆を起こし、爆炎へとその姿を変えた。

目前にミサイルの爆炎が迫るも、ラバッジは構わず突き進む。直

後、外部モニターが、真っ黒い煙と微かな炎に染め上げられた。
アイゼンハワー級航空母艦《アイゼンハワー》フライトデッキ
アイクから約４００メートルの上空で、爆炎が広がる。
「当たった……のか？」
センサーに敵機の反応は無い。しかし、爆炎の影響で熱源センサーがダウンしている可能性もある以上油断はできなかった。
次の瞬間、何かが爆炎を突き破る。真っ黒の爆炎とは対照的な白い排気煙は六筋。
（ミサイル……!!）
ウォルトは反射的に、トリガーを引き絞る。右肩部のウェポンポッドの１２０ｍｍ機関砲と頭部の４５ｍｍ《イーゲルシュテルンⅡ》が咆哮を上げ、それぞれから劣化ウラン弾がばら撒かれ、弾幕を展開した。
六発中、四発は辛うじて空中での迎撃に成功したが、二発は迎撃が間に合わない。直後、ウォルトの左右フライトデッキに一発ずつ、ミサイルが直撃。機体への直撃は避けられたものの、爆音と炎、そして《アグニ》のそれを超える衝撃がウォルトを襲った。
シートに伝わる衝撃に呻きつつ、ウォルトは顔を上げる。
外部モニターには、三枚一対の翼を広げた鉄錆色の異形のモビルスーツ。その両主腕に構えられた散弾銃と機関砲は、冷え切った砲口をこちらにピタリと向けている。
やられる。
ウォルトの思考はどこか冷めた調子で、そう確信していた。
ウォルトが死を直視したその瞬間。鉄錆色の《ディン》が、左腕に構える散弾銃が閃光を放った。
しかし、その閃光はマズルフラッシュではない。銃身内部から溢れ出るかのようなその閃光は、散弾銃そのもの誘爆の光だ。
突然の状況に戸惑ったように鉄錆色は散弾銃を手放し、後退。誘爆から逃れるための後退だろうが、アイクとの距離がわずかに開く。
「な、なんだ……？」
突発的な状況を理解できず、ウォルトは外部モニターとセンサー画

面を走査する。
外部モニターからセンサー画面に目を移したとき、ウォルトは異変に気づいた。
センサーには北西からこちらに迫る複数の高速飛翔体の光点。それは、真っ直ぐに鉄錆色に迫る。
外部モニターに視線を戻すと、鉄錆色に四発のミサイルが排気煙を引いて殺到していた。迫るミサイルを鉄錆色は辛うじて回避するが、その動きは先ほどよりも鈍く、精彩に欠けている。
センサー画面には、ケイと玲央奈が戦闘中の三機の《ディン》に向けて、新たなミサイルが迫る光景が映し出されていた。そして、データリンクにより共有された水上レーダーのディスプレイには、北西４キロの海上に友軍を示す緑色の光点。その傍らには『ＤＤＧ―１８８ＮＧＴ』の表示。
「――《ナガト》……？」
水上レーダーに示された略号が意味する艦の名が、ウォルトの口からこぼれた。
東アジア共和国海軍・太平洋方面第２艦隊・第３戦隊旗艦　長門型ミサイル駆逐艦《長門》
東シナ海の鮮やかな青に白い波頭を刻みつつ、ライトグレーの装甲に覆われた、タンブルホームタイプの大型の船体が進む。直線を多用した船体前部甲板には２５０ｍｍ単装速射砲が一門。さらに、２５ｍｍ対空機関砲がそこから一段高くなった位置に一基と、船体後部に二基。船体左右には六基の多目的発射管。前部、後部甲板には、無数のＶＬＳハッチが並んでいる。その、前部甲板ＶＬＳからは、白煙と共に新たな艦対空ミサイルが六発飛翔していった。
東アジア共和国海軍・太平洋方面第２艦隊・第３戦隊旗艦《長門》。それが、船体表面を無数の火器群で武装した、明灰色の針山の名だった。
「あの程度の戦力でここまで侵攻されるとは、我々も舐められたものだな」
あらゆるデータが集約される《長門》の中枢たるＣＩＣ。その中央

に立つ男――第３戦隊司令の少将――が、対空レーダーとＡＳＷＬＳの統合表示ディスプレイに目を向けながら口を開いた。
「この演習では我が軍と、大西洋連邦の次世代兵器群が一堂に会するのです。ザフトが興味を抱かないという方がおかしいでしょう。それを理解していながら、対応措置を怠った司令部の怠慢だと私は考えますがね」
少将の言葉に首席幕僚の大佐が、己の愚痴を踏まえて答えた。
「演習プログラムに含まれていなかったモビルスーツの換装パーツを用意していたあたり、アイクの連中は少なからずこの状況を警戒していたようだがな」
「我が軍だけが準備を怠った、あるいは知らされていなかったとは考えたくありませんな」
大佐が軍帽を深く被りなおしつつ、視線を海上レーダーに映し出されるアイクへと向けた。
「ともあれ、ここは未だ我が軍の領海だ。恥知らずのコーディネイター共に、この海が誰の物なのか、思い知らせてやろうじゃないか」
戦隊司令――築城雄二少将は、温和な声音に、微かな凄みを含めて大佐を振り返った。
「了解であります。アイゼンハワー空母打撃郡を援護するぞ！右舷多目的発射管、ＳＣＴ装填。ＦＣＳをＡＳＷＬＳにリンク！我が軍の領海で、これ以上ザフトに好き勝手させるな!!」
大佐の命令を受け、《長門》のＣＩＣ要員の動きが一気に活発化する。それに呼応し、《長門》は、本格的にザフトとの戦闘態勢へと移行した。

第二十六話

南西諸島・沖縄沖　洋上

『ソノブイに感あり！波形照合――――ボズゴロフ級です！』

ヘルメットイヤフォンに響く僚機の声。

対潜装備の第２編隊を護衛しつつ、敵母艦が潜伏すると推測される海域の捜索を初めて数分。結果は直ぐに上がってきた。僚機が投下したソノブイが捉えた音響パターンが、データリンクを通じて、正面の多目的ディスプレイに表示される。コンピューターが自動解析を開始するが、その結果はザフトのボズゴロフ級潜水母艦で間違いなかった。

「確認した」

フレッドは僚機からの報告に短く答えると、通信をＰＤ０２に絞る

「Ｐ（ピューキンドッグ）Ｄ０３よりＰ（ピューキンドッグ）Ｄ０２、敵母艦を発見。艦級はボズゴロフ級潜水母艦。位置はデータリンクにて確認されたし」

『Ｐ（ピューキンドッグ）Ｄ０２了解。これよりアスロックによる攻撃に移る』

第２編隊長の低い応答を聞きつつ、フレッドは操縦桿を左に傾ける。キャノピーの景色が左に傾き、機体が旋回を始めた。

南西諸島・沖縄沖　アイゼンハワー級航空母艦《アイゼンハワー》近海

空と海。二つの異なる蒼の狭間を、二筋の橙が蒼炎の尾を引き、翔ける。一機はベクタードスラストをフルで活用した強引な旋回機動で、劣化ウランの霰を掻い潜り、敵機へと肉薄。その右主腕に握られた光刃を振るう。相対する《ディン》は機体を旋回させ、斬撃を躱そうと試みるが、代償として左主腕の肘から下を斬り飛ばされた。

もう一機の橙は僚機の戦闘から、残る敵機を遠ざけるべく、ＧＡＵ８Ｍ２の砲撃で弾幕を形成し牽制。同時に、《ディン》の死角へと回り込み、その機動を制限する。

長い間、共に戦い続けた者たちだけが成し得る熟練の連携を、二機の《ダガー》は見事にやってのけていた。

「ッ――――玲央奈！上ッ!!」

弾幕をやり過ごした《ディン》が、僚機の直上を占位しようと上昇機動に入る。舌打ちと共に慧は叫んだ。

『カバーもまともに出来ないのッ!?』

ヘルメットイヤフォンからは、吐き捨てるような玲央奈の声。同時に、外部モニター上の《ダガー》がエールストライカーのロケットエンジンに点火し、急加速。先ほど、腕を斬り落とされ、よろよろと後退しかけていた《ディン》へと再び急接近を図る。エールストライカーの大推力に推し出される玲央奈の《ダガー》の瞬発力に、《ディン》は対応しきれていない。玲央奈は、恐怖に立ち竦むかのような《ディン》を右主脚で蹴りつけると、その反動を、高度へと転化。上方に占位していた、もう一機の《ディン》と同高度へと一瞬で翔け上がる。

《ディン》は一瞬惑う挙動を見せるが、すかさず両主腕の散弾銃と機関砲を玲央奈に向ける。しかし、その一瞬の判断の遅れが命取りだった。コクピットからの電子信号が、兵装へと届く前に、玲央奈のサーベルが、両主腕を兵装ごと切断。返す刀で繰り出された斬撃で、コクピットを抉られた《ディン》は、糸の切れた操り人形の如く体勢を崩すと、海面へと墜ちていった。

そんな玲央奈の一瞬の戦闘が上空で繰り広げられる中、慧は玲央奈に蹴りを入れられ、体勢を崩す《ディン》を狙撃。５２ｍｍＨＶＡＰ（高速徹甲弾）を胸部に受けた、手負いの《ディン》は、推進剤を誘爆させ爆炎の中へと姿を消す。

慧と玲央奈。二機の《ダガー》は、わずか数秒の攻防で、二機の《ディン》を撃墜。対空レーダーに映る赤い光点は、残り二つにまで減っていた。

※

「やってくれるッ！」

新たに戦闘に加わった東アジアの水上艦から飛来する対空ミサイルを、目前にて散弾獣で迎撃しつつ、ラバッジは苦々しげに吐き捨てた。センサーから一瞬にして消失した二つの友軍マーカーに意識を傾けるラバッジの表情を、外部モニターの爆炎が紅く照らし出す。掘りの深い精悍な顔立ちの眉間に、さらに深い皺が刻まれた。

「潮時か……ッ！」
複合センサーディスプレイに映し出される、海中の《グーン》の数も、六機から四機に減少している。直前までは六機健在だったことを鑑みると、東アジアの水上艦から放たれたアスロックにやられたようだ。一隻にどれ程の火力を搭載しているのか。
ラバッジは、センサーディスプレイに現れた赤いマーカーを睨み据える。しかし、一瞬の感情の揺らめきの後、ラバッジの中で指揮官としてのスイッチが切り替わった。
「レグルスリードよりレグルス０３、退くぞ。敵の増援が厄介だ」
『レグルス０３、了解……』
左主腕を失ったレグルス０３から、すぐさま返事が返ってくるが、その声音には隠しきれない悔しさがにじみ出ている。無理もない。これまで、連合相手に連戦連勝を繰り返してきたにも関わらず、この戦闘で四人もの仲間を失ったのだ。自機が被弾したこと以上に、この事実がレグルス０３に与えるショックは大きい筈だ。
「連中の母艦と、モビルスーツの性能のモニターには成功した。生きてりゃ、仇を取る機会も巡ってくるさ」
Ｆ―７の巡航速度なら、そろそろ《ペテルソン》が潜む海域に到達している頃だ。これ以上の長居はできない。
「エルナトへ撤退信号を送れ。殿は俺だ」
『了解』
海中のグーン隊へ撤退信号を送りつつ、レグルス０３はラバッジの前に出る。追撃の意思は無いのか、オレンジのモビルスーツはラバッジが後退の挙動を見せると、それ以上追っては来なかった。
《アイゼンハワー》のアングルドデッキに展開するオレンジ色の機体。その中で、左腕に大型砲を構えた機体を、ラバッジは後方カメラのウィンドで呼びだした。
「次に会う時は、成長した姿を見せてくれよ……」
一人ごちると、ラバッジはスロットルを開放。母艦へと向かう愛機のエンジンの唸りを、シートを通して感じ取った。
南西諸島・沖縄沖　アイゼンハワー級航空母艦《アイゼンハワー》Ｃ

ＤＣ
アイクＣＤＣのメインモニター。そこに表示される複合センサー画面には、アイクのシンボルを中心に、対空・水上レーダー、ＡＳＷＬＳ、そして友軍機から得られたデータリンク情報が解析され、敵味方の位置情報が一つの画面上に統合されている。その中で、上空の敵機を意味する赤い二等辺三角形が、その先端を翻し、ゆっくりとアイクから遠ざかってゆく。
「敵モビルスーツ部隊、本艦より距離を取っていきます。海中の《グーン》も後退を開始する模様」
センサーディスプレイを監視していたオペレーターが、視線はディスプレイに向けたまま報告を上げてくる。
「撤退するのか……？」
幕僚長が、メインモニターを注視しつつ呟く。
「敵母艦への攻撃中止。飛行隊を直ちに帰艦させろ」
レストンは飛行隊の管制を担当しているオペレーターに指示を飛ばす。
「すでに攻撃態勢に入っているとのことですが、よろしいのですか？」
敵母艦を叩くチャンスだが、逃がしていいのか。オペレーターはそうレストンに問いかけていた。
「我が艦の飛行隊は、既に実質壊滅状態だ。これ以上の被害は看過できん。直ちに下がらせろ」
「了解」
「それと、飛行隊には、迂回して戻るよう指示しろ。燃料にはまだ余裕がある筈だ」
オペレーターは、「はっ」と短く答えると〝ピューキンドッグス〟への通信を開始した。
「撤退中の《ディン》と鉢合わせしたらかなわないからな……」
レストンは小さく呟き、息を吐く。
「《ナガト》に助けられたな」
レストンはメインモニターの、アイクから北西にやや離れた位置に

映し出される、緑のシンボルに視線を移す。シンボルの傍らの表示は、『ＤＤＧ―１８８　ＮＧＴ』。東アジア共和国海軍・第２艦隊旗艦《長門》だ。

「《ナガト》へ打電」

「なんと打ちますか？」

通信担当のオペレーターがレストンを振り返る。

「『救援を感謝する。東アジア海軍・太平洋艦隊の精強さ、これ以上無い席で見せていただいた』と」

「了解」

オペレーターは直ちにキーボードを叩き始める。安堵の空気が広がるＣＤＣに、キーボードのタイピング音がやけに大きく伝播した。

第二十七話

南西諸島・沖縄本島　東アジア共和国・太平洋方面軍・沖縄基地

宿舎の扉を開けると、いつも通りの湿った空気がタンクトップから覗く健康的な小麦色の素肌に纏わりついた。玲央奈が沖縄に着任して、じきに一年と三か月。沖縄本島には、玲央奈にとって二度目の夏が、日本列島に先駆けて訪れようとしている。湿気が多いため、体感的にはすでに夏ではあるのだが。

そんな湿気を気にする素振りもなく、玲央奈はいつも通り、基地の滑走路外縁を走りだした。有刺鉄線の張られたフェンスの内側を、玲央奈は一定のペースを保ちながら走る。呼吸に乱れは無い。

走りだして数分が経とうとした頃。フェンスの向こう側に、大西洋連邦の占有エリアが現れた。大西洋連邦側には、格納庫群が広がっている。正確な数は把握していなかったが、恐らく東アジアの格納庫の倍近い数があるように見える。守るべき東アジア共和国との力の差を見せつけられているようで、玲央奈はここを走るのは好きではなかったが、避けるのもまた逃げるようで癪だった。だから、この格納庫の前。六百メートル近い直線は、少しペースを上げて走る。

三つめの格納庫を過ぎようとした頃。背後から追いすがってくる、スニーカーの軽やかな靴音があることに玲央奈は気づいた。着任して以来、このコースを走り続けているが、ここで誰かと出会うのは初めてだ。しかも、その足音は徐々に玲央奈との距離を詰めてきている。やがて、その足音の主がすぐ横に並ぶのを、玲央奈は知覚した。

興味本位から、玲央奈は大西洋連邦側のフェンスに視線を向ける。

「――――あ……」

思わず声が漏れる。東アジア共和国と大西洋連邦のエリアを分けるフェンスの向こう。そこにいたのは、玲央奈が見知った人物だった

「お前、まだこんなことしてたのか」

グレーのジャージに身を包んだ、速水慧が視線をこちらに向けた。

「なんでアンタがいるのよ」

予想外の人物との遭遇。しかし、玲央奈の内心にジワリと滲んだの

は、その意外性ではなく、慧への苛立ちだった。玲央奈の知っている限り、この男はカリキュラム以上の基礎トレーニングはしていない。それにも関わらず、慧の呼吸に乱れは感じられない。後から自分に追い付いてきたということは、慧は玲央奈よりも早いペースで走っていたはずだ。おまけにトレーニングの質も量も、自分の方が上のはずなのに、だ。

性別という自身にはどうしようもない壁に隔てられ、基礎体力の面で差をつけられるのが、玲央奈は許せなかった。だからこそ、訓練兵だった頃から、同期たちが趣味やら異性との交流やらに費やす僅かな自由時間を、体力トレーニングに充ててきたのに。その差を慧は、いとも簡単に飛び越えて見せるのだ。玲央奈にしてみれば面白い訳がない。

「アンタが起きるの、いつも起床時間ギリギリだったじゃない。どういう風の吹き回しよ？」

自分自身に端を発する勝手な苛立ちと分かっていても、玲央奈は慧への八つ当たりに近い問いかけを止めることは出来なかった。思えば訓練兵だった頃は、慧が点呼に現れなかったことにより、連帯責任として訓練小隊全員でよく基地の外縁を走らされたものだ。そのときも慧は、何食わぬ顔で規定のコースを走破していた。

「俺だって目が覚めちまうことぐらいあるさ」

玲央奈の苛立ちを内包した問い掛けを、慧はサラリと受け流す。その態度は、玲央奈の苛立ちに更なる拍車をかけた。

「だったら二度寝でもしてればいいじゃない。起床ラッパを物ともしないくせに」

「そうカリカリすんなよ。ちゃんと話すのは訓練校を除隊して以来だろ」

慧に己の苛立ちを指摘されたのは気に食わない。だが、この男がこういう態度をとるときは、付き合ってやらない限りいつまでもついてくることを、玲央奈は理解していた。

「用があるなら、この直線が終わるまでにお願い。ペース崩したくないから」

「あと４００メートル無いじゃねえか！」
「あと３６０メートル」
無情にも近づいてくる直線の終わりに追い立てられながら、慧はやれやれといった様子で言葉を紡いだ。
「お前、〝ラプターファングス〟への転属を蹴ってここに残ったらしいな」
先ほどとは打って変わって、真剣な声のトーン。
「それが？」
「お前、焦ってるだろ？焦って、苛立ってる」
「そんなこと、なんでアンタに分かるのよ」
「エドワーズに着任してすぐの頃、ウォルトもそうだったよ」
慧の口から、意外な人物の名前が出る。先日の交歓会で話した、〝ラプターファングス〟の新鋭。噂のエリートパイロット。そして、自分と似た境遇に置かれた者。
「演習の結果が思うようにいかなくて、一人で抱え込んだり、シュミレーター―に籠ったり。とにかく、焦ってるのが丸わかりだった」
玲央奈は無言のまま続きを促す。
「今のお前はあの頃のアイツとよく似てるんだよ。大方、前線に配属された奴らのことが、気になってしょうがないんだろ」
確かに慧の言う通りだ。玲央奈は、この一年間、後方に配属された自分の立場に、納得できていなかった。
「そう言うあんたはどうなのよ？前線を目の当たりにして、どんな地獄を見たのかは知らないけど、どうしてそこにいることに納得できたの？」
最前線がどれだけ過酷な状況かぐらい、玲央奈にも想像はつく。しかし、如何に過酷な状況と言えど、速水慧という男は仲間を見捨てて自分だけ後方にさがるような奴ではない。それが分かる程度には、同じ時間を過ごしたつもりだった。
「たしかに、前線は地獄だったよ。補給線を寸断されれば、物資は足りなくなるし、味方も毎日のように死んでいく」
慧の声音が一段低くなり、表情に僅かな陰りが見える。いつしか、

二人は立ち止まり、互いにフェンスを挟んで向かい合っていた。
「F―7で《ジン》の相手をするのは容易じゃない。対地ミサイルをブチ込んでやろうとしても、奴らの運動性には追い付けない。かといって対空ミサイルじゃ奴らのバイタルパートを抜くには威力不足だ。だが、奴らは《キャットウス》に対空弾頭を装填しやがる。まともにやりあって勝てる訳がねえんだ」
慧の声音には、玲央奈がこれまで感じたことの無い苛立ちが滲んでいた。
「俺に〝ラプターファングス〟への転属要請が来たのはそんな時だった。任務の詳細は明かされなかったが、連合がモビルスーツの開発に着手しているってことは分かった。それだけで、俺は確信したよ。この任務は必ず東アジアの、地球の益になるってな。だから、俺はこの部隊へ来た」
慧の黒い瞳が、真っ直ぐに玲央奈を見据える。
「ウォルトがファングスで強くなろうと焦るのも、同じなんだと思う。前線に一機でも多くのモビルスーツを配備して、味方の損害を一人でも減らそうと足掻いてたんだよ。お前が焦るのも、前線の奴らへの後ろめたさなんて、後ろ向きな理由じゃないだろ？」
慧の問いに、玲央奈は答えられなかった。
玲央奈は後方に配属された自分に納得できていなかった。前線へと送られる仲間たちがいる中で、自分だけ安全な場所にいるのが気に入らなかったから。だがそれは、所詮玲央奈自信の自己満足でしかない。玲央奈は、前線に身を置く将兵の存在を慮る己の態度に、落としどころ探していたに過ぎないのだ。それを、慧の言葉で気づかされた。だからこそ、その問いに返す言葉が見つからない。
「けどさ、お前が思ってるほど前線の奴らは、後方の部隊を疎んじてはいなかったぜ？」
玲央奈の返答を待たずに、慧は続ける。
「もちろん、文句を言う奴が全くいないわけじゃない。けど、アイツ等が本当に守りたいものは、後方にあるはずなんだ。だから、お前はその後詰めとして、胸張ってここを守っててくれよ」

そこまで言うと、慧の口角が僅かに上がる。
「その代わり、前線への戦力投入は俺たち戦技研究部隊が請け負うからさ」
玲央奈は何か言おうと口を開きかけたが、慧はその返答を待つことなく再び駆け出した。
水平線から顔を出した太陽が、慧の姿をくっきりと縁取った。
沖縄基地・大西洋連邦占有エリア・第5ブリーフィングルーム
宛がわれたブリーフィングルームの扉を開くと、ウォルトとルース以外の〝ラプターファングス〟のパイロットたちは既に席についていた。ルースがまだ来ていないことに安堵しつつ、等間隔で並べられた椅子の間を通り、慧の隣の席に腰を下ろす。慧を挟んだ反対側には、ミーリャが腕を組んで座っていた。
「お前何か聞いてるか？」
慧に小声で問い掛ける。
「さあな。けど、何かしら起きないかぎり非常呼集なんてかけない筈だが」
神妙な面持ちで慧が応える。緊張した様子は無いが、いつものちゃらけた態度はなりを潜めている。
先日の実戦に伴う機体の整備とチェックの為、〝ラプターファングス〟の格納庫にいたのが数分前。ウォルトはそこで、基地内アナウンスによる〝ラプターファングス〟所属のパイロットへの非常呼集を聞き、ブリーフィングルームまで走ったのだ。格納庫とブリーフィングルームはそれぞれ別の棟であるため、たどり着くのに若干の時間を要した。
慧の言う通り、わざわざ非常呼集をかけるとなるとただごとではない。またもザフトの潜水艦隊でも攻めてきたのかとも思ったが、それならブリーフィングルームで悠長にしている場合ではない筈だ。
この事態についてウォルトが思考を巡らせていると、不意に扉が開きデリアを伴ったルースが姿を現した。ルースの姿を認めると、隊員たちは一斉に起立。統制のとれた敬礼の構えをとる。ルースはさっと答礼すると、敬礼を解いた右手で「座れ」と制した。

「まずは状況を説明する」
ルースが口を開くと同時に、その背後のモニターをデリアが操作した。大西洋連邦のエンブレムを映し出していたモニターが、荒い画像に切り替わる。ノイズ混じりの画像は、灰色の大地にぽっかりと穿たれた穴。海水が流れ込んだものだろうか。穴の中心では、黒い水面が光を反射している。ウォルトは、子供の頃に観光で訪れた、アリゾナのバリンガークレーターを思い出した。そんなウォルトの回想をよそに、ルースはブリーフィングを開始した。
「今から約四十分前、大西洋連邦統合参謀本部がアラスカ基地の陥落を発表した」
（は――？）
ルースは今なんと言った？
ウォルトは、自分の耳を疑った。しかし、動揺しているのはウォルトだけでは無かった。慧とミーリャも、身を乗り出している。先任は最前列のため、その表情を伺い知ることはできない。
「モニターは、十六分前に衛星が捉えたアラスカ基地の映像だ」
（――これが、アラスカ……？）
隊員たちの動揺をよそに、ルースは説明を続ける。
「大西洋連邦航空宇宙防衛司令部は、八日前から軌道上へのザフト軍軌道降下部隊の集結を探知していた。これにより、アラスカ統合最高司令部（JOSHUA）は兼ねてより懸念されていた、パナマ宇宙港への攻撃を警戒。周辺基地からの戦力抽出を含めた防衛戦力の強化を決定。そして、今から約16時間前。軌道上のザフト軍部隊が降下を開始した」
ザフトの地球侵攻作戦は、常に軌道降下部隊を主軸として立案されている。軌道上への戦力集結から、司令部がザフトの動きを逆算するのは当然の帰結だった。
「しかしながら、ザフトの降下ルートは想定を大きく外れており、降下ルートから予測された目標ポイントは、パナマではなく、アラスカだった。諸君らも知っての通り、アラスカ基地の地下にはアラスカ統合最高司令部（JOSHUA）が置かれている。つまりは、今回のザフトの

真の攻撃目標は地球連合軍総司令部だったのだ。アラスカ基地は、駐留部隊の一部をパナマへ派遣済みであり、防衛戦力が低下している。そこへ、軌道降下部隊を含む、多数のモビルスーツ部隊が雪崩れ込むこととなった」

パナマ防衛に守備隊の一部を派遣している今の状態では、モビルスーツ戦力を有していないアラスカが、ザフトの攻撃に抗しきれるはずも無い。

「現時点では未確認の情報ですが、グランド・ホロー内部に侵攻したザフトが、何らかの大量破壊兵器を起動したとの情報もあります。詳細は現在確認中です」

デリアがルースの説明に捕捉を加える。アラスカ基地は再構築戦争時に大西洋連邦の礎となったアメリカ合衆国が築いたものだ。そのため、基地施設の多くはグランド・ホローと呼ばれる広大な地下空間に存在し、完全な対爆構造となっている。しかし、映像を見る限り、グランド・ホローを含めたアラスカ基地の全ては、大地に穿たれた巨大なクレーターとなり果てている。核の直撃にも耐えうる対爆構造の基地をこうも跡形も無く消し去るには、通常兵器では不可能と言えた。

「これに伴い、アイゼンハワー空母打撃群へ即応待機命令が下された。我が隊にも、司令部より即時撤収命令が下されている。よって、〝パシフィックシールド〟は中止。我々もアイクと共に、サンディエゴへと帰還する。何か質問は」

隊員たちは沈黙でルースの問いに答えた。

「アイクは物資の搬入が終わり次第、サンディエゴへ出航する。各員、身辺整理は速やかに済ませておけ。以上だ。解散」

統率の取れた敬礼。しかし、その敬礼とは対照的に、ウォルトの内心は動揺に満たされていた。

北米大陸カリフォルニア州　大西洋連邦北方軍エドワーズ基地

中央作戦群占有エリア

「ザフトの大量破壊兵器でアラスカが陥落ですか――――」

ギリアン・ダレルの執務室の、応接ソファに腰かけるオーガスト・

ノーランは、ひとりごちた。手元には大西洋連邦が数十分前に発表した、「アラスカ基地陥落の顛末」が表示されたタブレット端末。無論、その内容は民間であるノーランが知りえても、問題ない域の情報に限られている。

「我が社の一部から上がってきた情報によると、アラスカに残留していた守備隊のほとんどがユーラシア連邦所属だったようですが」

相変わらず、余裕を湛えた表情のノーランは、己が独自のルートを用いて得た情報と、大西洋連邦政府が発表した情報をすり合わせ、ダレルをちらりと流し見た。その目には、微かな悪戯心が現れている。

「不用意な憶測は、君の寿命を縮めるぞ」

執務机のダレルがノーランを見向きもせず、くぎを刺してくる。

「やれやれ。より、確度の高い情報に基づいた、状況の整理にすぎませんよ」

ノーランは、ダレルの忠告を笑って受け流した。

「とはいえ、そのお言葉は胆に銘じねばなりませんな」

ノーランは端末を閉じると、テーブルで湯気をたてるコーヒーに手を伸ばした。

「そうしてくれ。私も優秀な協力者を、くだらない嫌疑で失いたくはない」

本題に移ろう、とダレルはやっとノーランに視線を移す。

「Ｘナンバーの搬入は順調なのか？」

「予定通り、機体は予備パーツを含め、格納庫への搬入を完了しております。ＯＳをはじめとした、操縦系のチェックが済めば、いつでも稼働できる状態です」

ノーランは自信たっぷりに告げた。

「アラスカの陥落を受けて、連合も黙ってはいないだろう。遠からず、大規模反攻作戦が立案されるはずだ。その作戦の主軸はモビルスーツ戦力となる」

ノーランは、ダレルの言わんとしていることを理解し、先を紡いだ。

「舞台は整ったという訳ですな。連合の運命を決する作戦の旗頭を、彼の《ストライク》の直系たるＸナンバーが担う。マスコミが飛

びつきそうな、大衆向けのシナリオですな」
ノーランはソファから立ち上がると、ダレルの正面に立った。
「ご安心ください。その大役に見合う性能が、あの機体には秘められています。大佐の期待以上の活躍を、お約束致しましょう」
ノーランは、ダレルの背後にある窓の向こう。中央作戦群専用格納庫へと目を向けた。
東アジアとの合同演習に伴い、そこに本来あった機体は現在出払っている。そのため、格納庫内のガントリーは、ほとんどが空席となっていた。
しかし、格納庫の一番奥。この格納庫が建造されて以来、一度もモビルスーツが置かれていなかったため、人気の無かったガントリーに、今は人の姿が見られる。ガントリーには、《ダガー》系列に比べ、一回り大型の機体が固定されていた。全身に纏ったフラットブラックの装甲は、力強い直線で構成されているが、そのデザインラインは、地球連合に属するどのモビルスーツとも合致しない。カリフォルニアの陽光さえも吸収してしまうかのような闇色の装甲の各所には、コバルトブルーのラインが走っており、異形の悪魔の全身に走る血管を想起させた。頭部には、特徴的なV字のブレードアンテナ。その下に位置するセンサーシールドのデザインは、人の双眸を思わせるデュアルアイ。
光の落とされた純黒の機体の双眸は、主の帰りを待ちわびるかのように、虚空に向けられていた。

ｅｐｉｓｏｄｅ０５
第二十八話

北米大陸・カリフォルニア州　大西洋連邦・サンディエゴ海軍基地
アイゼンハワー級航空母艦《アイゼンハワー》　モビルスーツ格納庫

鼻孔の奥にツンとした独特の臭気が突き刺さる。
アイクのガントリーの一画を覆う鈍色の防塵シート。その周りを、整備班が忙しなく、だが統制のとれた動きで走り回る。外装塗料独特の臭気を鼻孔の奥に感じつつ、ウォルトはその光景を眺めていた
「相変わらずひっでえ匂いだな……」
背後から聞きなれた声。
「整備班でもないのに、お前よくこんなところにいられるな」
振り返ると、鼻の頭をつまんで眉を顰めるケイ・ハヤミの姿があった。
「人を中毒者みたいに言うな」
すかさずケイの言葉に訂正を入れる。
「そろそろ終わる頃かと思ってな」
ウォルトは防塵シートに覆われた愛機に視線を戻した。
「まさか部隊まるごと配置換えとはねえ――――」
ケイが肩を竦めてみせる。
「ああ」

数時間前

「総員、傾注！」
サンディエゴへと入港するなり、〝ラプターファングス〟はブリーフィングルームに集められた。程なくして、ルースが入室し、大西洋連邦の軍服に身を包んだ見慣れない士官がそれに続く。大西洋連邦の白い第一種軍装に身を包む体躯は長身。軍帽の下の顔立ちは整った細面で、俳優のような雰囲気を醸し出している。見るからに文官タイプの風情だ。

ウォルトはいつも通り、ルースがブリーフィングルームの檀上に上がると思っていたが、ルースはモニターを横切り、その脇で居住まいを正した。代わりに、見慣れない士官が壇上に上がる。

「敬礼！」

ルースの号令一下、ブリーフィングルームの全員が挙手敬礼の構えをとる。

「即応打撃軍・第３軍団・第１騎兵師団特務参謀。エドガー・レッドフォード中佐だ。〝ラプターファングス〟の諸君、多国籍部隊でありながら、同時に地球連合きっての精鋭である諸君の活躍は常々耳にしている。先の東アジアでの合同演習の際は、ザフトの強襲という不足の事態にも関わらず、よくアイクを守ってくれた」

エドガー・レッドフォードと名乗る士官は、答礼を解くと同時に、俳優然とした見た目通りの、滑らかな口調で言った。

「さて、私がここにいることを疑問に思う者もいるだろうが、まずは地球連合の現状を説明しておく。数日前に発表されたので、恐らく知っていることとは思うが、今から六日前、パナマがザフトの攻撃を受け陥落した」

従来のシャトルに比べ、遥かに多くの物資を一度に宇宙に打ち上げることが可能なマスドライバー。それは、地球連合宇宙軍にとっての大動脈であり、同時に生命線でもあった。元々物量で劣るザフトは連合の最重要施設であるマスドライバーを攻撃。地球と宇宙の分断を図る。地球に存在するマスドライバーが次々と攻略されていく中で、連合に唯一残されたマスドライバーが、パナマ基地に存在する『ポルタ・パナマ』だった。

「パナマからの物資が絶たれた今の状態では、月が干上がるのも時間の問題だ。この危機的状況を打開するため、地球連合軍暫定最高司令部は六月八日、０８００をもって〝オペレーション・デルタアロー〟の発動を決定。これは、大西洋連邦、ユーラシア連邦、東アジア共和国を中心とした地球連合軍統合任務部隊による大規模反攻作戦だ。作戦の目標は、地球に打ち込まれた楔であるビクトリア、ジブラルタル、カーペンタリアの迅速な攻略。中でも、現在も使用可能な状態の

マスドライバーを有するビクトリアは、最重要攻略目標となる」
レッドフォードの背後のモニターが切り替わり、ビクトリアに存在するマスドライバー『ハビリス』が映し出される。
「さて、ここからが本題だが、統合参謀本部が諸君等〝ラプターファングス〟のビクトリア攻略作戦への参加を下命してきた」
レッドフォードの言葉にブリーフィングルームがざわめく。ウォルトも例外ではなく、レッドフォードの言葉を無意識に反芻した。ビクトリア攻略作戦への参加。〝ラプターファングス〟を実戦に投入するとでも言うのだろうか。
「これに伴い、〝ラプターファングス〟の所属を技術研究開発局・資材開発軍団から、即応打撃軍・第3軍団・第1騎兵師団司令部付き即応MS中隊へと変更。これが、私がここ（ラプターファングス）に来た理由だ。もっとも、所属こそ第1騎兵師団となるが、これは諸君を実戦に投入するための建前だ。現時点で部隊の拠点となるのは、エドワーズのままであり変更は無い。よって私もエドワーズに常駐することとなるが、司令部との連絡役程度と捉えてもらって構わない」
「質問よろしいですか？」
ウォルトの前に座る、リーが唐突に右手を挙げる。
「許可する」
「試験部隊である我々を、わざわざ転属させてまで実戦に投入する意味はなんでありますか？」
ここにいる誰もが疑問に思う、至極真っ当な意見だった。
「今次作戦が決定した安保会議の場で、我が国は地球に存在するもう一つのマスドライバー、『カグヤ』を有するオーブの開放を提案した。もっとも、開放と一口に言っても、その実は武力を背景とした恫喝に近いものだ」
レッドフォードの声音に僅かな陰りが見える。しかし、その陰りは一瞬でなりを顰めた。
現実問題として、今やザフトの重要拠点となっているビクトリアを攻めるより、オーブのマスドライバーを無血にて接収できれば、最終的な被害を少なくすることもできる。

「ユーラシア連邦と東アジア共和国はそれに反対の立場だったが、大西洋連邦側も退く気は無かった。そこで、折衷案としてビクトリア攻略はユーラシア連邦を主力とした部隊が担当。オーブ開放は大西洋連邦が担当することとなった。現時点で投入可能な大西洋連邦のモビルスーツ戦力は、そのほとんどがオーブへ投入される見通しとなっている。捕捉だが、東アジア共和国は、マスドライバー確保後の作戦を見越した後詰として温存だ。しかし、我が国の国防省では、ビクトリア攻略を優先すべきとの意見も多かった。ここからは私の推察と断っておくが、恐らく国防省はオーブが失敗した場合の連合内部の立場を見越した保険を欲したのだろう。最精鋭たる諸君をビクトリアへ投入したという事実が重要なのだ」

「国防省の政治的判断ってやつですか」

リーは憮然とした様子で腕を組んだ。

「平たく言ってしまえばその通りだ。納得する答えは得られたか？」

リーはわざとらしく背筋を伸ばして見せた。

「了解であります」

リーの応えを聞くと、レッドフォードは再びブリーフィングルーム全体に目を向けた。

「では続ける。諸君は機体の実戦仕様への換装と作戦の発動を待って空路でアフリカのマリンディへ向かう。そこからは陸路でユーラシアが築いた橋頭保を目指す。作戦の詳細だが――」

「よう！待ちきれなかったか？」

肩を叩かれた衝撃に、ウォルトの回想は唐突に途切れた。

黒い丸顔がウォルトの顔を覗き込んでくる。

「リペイントは終わったぜ。見てみな」

ボブは防塵シートに覆われたガントリーを右手で示す。やがて、防塵シートが上から剥がされていき、隠されていた機体が露わになった。

機体のフォルムは見慣れた《ダガー》そのものだが、カラーリング

は、数日前とは大きく異なっている。鮮やかなオレンジだった部分は、低視認性を重視したダークグレーで塗りつぶされており、ライトグレーの部分と合わせて濃淡のコントラストを織りなしていた。そのカラーリングは、航空機のロービジ迷彩を想起させる。

「一色変えるだけで大分引き締まったな」

ウォルトは素直な感想をボブに述べた。

「元々、派手だったからな。抑え目な色に変えてやりゃ印象も変わるさ」

ボブは得意げに頷いてみせる。

「空軍出身の俺たちにとっては、この方がしっくりくるな」

ケイも満足気に機体を見上げる。

「見かけないと思ったら、ここにいたのね」

いつの間にか、格納庫にはミーリャの姿もあった。

「オキナワでの戦闘は急だったけど、ウォルトも大丈夫？」

ミーリャの優しい眼差しがウォルトを捉える。未だに新兵扱いされるのが歯痒くもあったが、同時に彼女の心遣いに感謝した。

「ああ。むしろ、やっと戦力として数えてもらえたような気がして、ほっとしてるよ」

ロービジの実戦塗装に身を包んだ《ダガー》を目の当たりして、ウォルトは改めて実戦が近いことを認識した。むしろ、それを確かめるために、愛機の姿を目に焼きつけたかったのかもしれない。

「気合い入れるのは結構だが、今回ほどの大規模作戦となれば沖縄みたいにはいかないぞ。なんせ敵のど真ん中に放り込まれる訳だからな」

ウォルトの高揚を見抜いたケイが、くぎを刺す。

「もちろん、敵を舐めたりしねえよ。お前らに比べたら俺はまだまだ新兵も同然だってことも理解してる」

「お前がしおらしいと気色悪いな。こっちの調子が狂うぜ……」

ケイが顔を引きつらせつつ、ウォルトから距離をとる。

「だから、お前は俺をなんだと思ってるんだ……」

呆れ顔のウォルトを囲む仲間たちの笑いが、格納庫に響いた。

ユーラシア大陸・スペイン・アンダルシア州セビリア県　ユーラシア連邦・モロン空軍基地　第３格納庫
光の落とされた外部モニターがせり上がり、格納庫のＬＥＤ照明の明かりがコクピット内に流れ込んでくる。コクピットハッチが開き切るのを待って、エルナン・ベルムード中尉は這いだすようにして、ガントリーのキャットウォークに降り立った。
ヘルメットを脱ぐと、堀の深いラテン系の顔が露わになる。整えられた顎髭は彼の重要なチャームポイントだ。
モロンに配属されたのは二年前。今年で二十四歳になる。配属から二年で中尉へ昇進するのは相当早いペースだが、ザフトとの最前線であるユーラシア・欧州方面ではよくあることだった。中でも、このモロン空軍基地はジブラルタルと接する最前線基地であり、ユーラシア連邦の最重要拠点でもある。直属の上官が戦死するなど、珍しいことでは無かった。
「どうです中尉、Ｄ１の乗り心地は？」
エルナンの姿を認めた機付き整備兵が、駆け寄ってくる。まだ十代の若い整備兵だ。
「ちょっと振り回してみたが、運動性は大分高いみたいだ。エンジン出力が高い割に燃費も悪くない。ゼロワン（ストライクダガー）と比べると若干の癖はあるが、慣れりゃ問題ないだろ」
エルナンは背後の先ほど降りた、ライトグレーベースにスカーレットのアクセントが光る機体を見上げる。無駄の無い直線的なラインで構成された精悍なデザインラインは、《ストライクダガー》と比べるとよりシャープな印象を受ける。数日前に、モロンに三機搬入された、ＧＡＴ―０１Ｄ１《デュエルダガー》だ。
「噂で聞いた話ですが、大西洋連邦はコイツにコーディネイターを乗せるつもりで設計したらしいです。そんな機体をナチュラルの中尉も問題なく乗れてるってことは、ＯＳの換装は上手くいったってことなんすかね」
「俺の腕前って言いたいところだが、まあＯＳが完成してることは

認めざるを得ない事実だ。懸念されてたような、厄介なシロモノって訳じゃあ無いみたいだな」
「ならいいのですが。ＯＳばかりは乗って検証してみないと、ボクらでは――――おっと」
整備兵が何かに気付き、急に背筋を伸ばし挙手敬礼。エルナンも整備兵の視線の先に目を向ける。そこには、ラテン系特有の波打つ長い黒髪を揺らしながらこちらへ歩いてくる女性士官の姿。大きな黒い瞳に、高い鼻梁。そして、厚めの桜色の唇。キャットウォークを歩く姿は、まるで有名なモデルのようだ。
「新型の稼働試験ご苦労様、ベルムード中尉」
ゆったりとした艶のある声で、労いの言葉をかける女性士官。ＢＤＵを着用してはいるが、上着のボタンは全て外され、中のタンクトップが丸見えだ。特に、自己主張の非常に激しい胸元からは、健康的な小麦色の肌が覗き、深い渓谷を形成している。最近ご無沙汰のエルナンとしても、目のやり場に困る。エルナンの傍らの整備兵に至っては、柔肌のグランドキャニオンをガン見だ。エルナンも、許されるならもう少しこの眺めを堪能していたかったが、上官が労いの言葉をかけているいのに、その胸元ばかり見ている訳にもいかない。とりあえず敬礼。
「ありがとうございます。マルティーニ中佐」
周りの男にどう見られているのか分かってやっているのか、このロベルタ・マルティーニという女性は、エルナンが所属する第４３２騎兵大隊〝スコルピウス〟の隊長に他ならない。
「楽にしていいわ。それで、新型の調子はどう？」
答礼を解きつつ、マルティーニが《デュエルダガー》を見上げる。
「はっ、機動力、運動性、反応速度、稼働時間。いずれも高い水準にあります。懸念されていたＯＳにも、目立った問題は確認出来ませんでした。中佐の新たな乗機とするに相応しい機体と考えます」
「そう、ならＤ１のうち二機は私とルーベンで乗るわ。その機体はあなたの好きになさい」
「はっ、え？」

今、機体は好きにしろと言ったか？
「よろしいのですか中佐、自分が新型を頂戴して」
マルティーニは意外そうな顔でエルナンを見返す。
「あら、慣熟ついでの稼働試験のつもりだったのだけど。何か不満？」
「い、いえ！では、謹んで受領いたします」
「さて、ここからが本題よ」
マルティーニの視線が厳しくなる。声のトーンも若干低い。
「司令部から我が隊に、出撃命令が降った。攻撃目標はアフリカ、ビクトリア。のろまな大西洋連邦に先んじて、我が隊が楔となり一気に攻略する」
ビクトリアの攻略。それを聞いて、エルナンはようやくか、という気分になった。ジブラルタルを抑えられてからというもの、思うように増援を送れないユーラシア連邦は、アフリカで大敗続きだった。その象徴たるビクトリアの攻略は、ユーラシア連邦の悲願でもあり、同時に地球連合の運命を左右する戦いでもある。それを前にしてエルナンの士気は嫌でも高まった。
「もちろん、今回の作戦の主力は我が軍よ。大西洋連邦はオーブの懐柔で忙しいらしい」
マルティーニが溜息混じりに続ける。
「大隊に急に新型が搬入されたのも、その辺のことが絡んでいるみたいね」
「アラスカで見殺しにしたくせに……。戦力は提供するから、自分のケツは自分で拭けってことですか」
「その通りよ。だからこそ、今宇宙への切符を手に入れて恩を売ってやれば、それが戦後の重要なカードになる。ユーラシア連邦の首脳部はそう考えてるわ」
「了解です。どっちにしろ、我々にはそれしか道はありませんしね」
「そういうこと。出発は二日後、０８００。詳細はブリーフィングで伝達するわ」
「はっ」

「あ、そうそう」
踵を返しかけたマルティーニが、再びこちらへ振り向く。
「たしか大西洋連邦からモビルスーツ部隊が一隊だけ派遣されるって話だったわね。たしかラプターなんたらって言ったかしら」
マルティーニの声音は既にいつもの調子に戻っていた。
「ラプターなんたら――――ですか？」
「精鋭って話だけど、どの程度のものなのか興味ない？」
「本当に精鋭だと言うのなら、気にはなりますが」
「大西洋連邦のお手並み拝見といこうじゃない」
声音は明るいが、マルティーニの艶っぽい口元には、攻撃的な笑みが浮かんでいた。

第二十九話

アフリカ大陸・旧タンザニア　南アフリカ統一機構・Ｅ０６前哨基地より北東４４０ｍ地点

緑色のモノクロームで構成された視界の中に、角柱を横倒しにしたかのような建造物が四棟浮かび上がる。それは、あたかも緑色のＬＥＤに世界が照らされたかのように錯覚する映像だ。しかし、実際は闇夜に存在はしても、人間の目には感知できない僅かな可視光線を電子的に増幅して構成された代物にすぎない。

「左から二番目をマークしろ」

事前に知らされた情報と、自らの偵察によって得た情報を照らし合わせ、ロバート・ホプキンス一曹は左から数えて二番目の角柱を目標として指示した。

ロバートの右側に匍匐姿勢で控えるシモンズ伍長は、「了解」と短く答えると、小型の双眼鏡を思わせる、レーザー目標指示装置を覗き込んだ。

あと少しで、この任務も終わる。そんな油断を集中力と精神力で押し込めつつ、ロバートはアサルトカービンの銃把を握りなおし、目前のザフト軍前哨基地を睨み据えた。

今次作戦でロバートら、第１統合特殊作戦部隊・チーム３に下された命令は、『偵察』と『攻撃の統制』だった。六日前に、１４０キロ後方でヘリを降りたロバートたちは、ザフトの哨戒モビルスーツに発見されるのを防ぐため、夜間行軍を命じられた。おまけに、ＧＰＳの類は赤外線や電波を探知される恐れがあるため、使用はおろか携行すら許されなかった。携行を許可された電子機器は、夜間行軍に必須の暗視ゴーグルと作戦最終段階でのみ使用を許されたレーザー目標指示装置（ＬＬＤＲ）とビーコン、そして通信機のみ。おかげで、目的地までは地図とコンパスのみを頼りに進むしか無い。その工程は、サバイバルナイフとコンパス、それに僅かな飲料水のみを渡され、南米のジャングルに放り込まれた特殊作戦軍の訓練課程をロバートに想起させた。もっとも、火器の携行を許された今回の方が、幾分マシと言

えるかもしれない。
「目標をマーク」
シモンズがＬＬＤＲを覗き込んだまま、報告を上げてくる。左腕のＧ―ＳＨＯＣＫを確認しつつ、ロバートは無言で通信機のスイッチを入れた。予めセットされた周波数に対し、送信ボタンを押し込む。
「レイス１２よりウラヌス。聞こえていたら応答しろ」
ウラヌス――――天空神の名をコールサインに戴く通信相手は、ロバート達の遥か上空で待機しているであろうＡＷＡＣＳ。作戦通りなら今頃、ロバート達と同じく夜間徒歩行軍でこの基地まで接近してきた別動隊のレイス１１が、基地の対空レーダーの配線を切断し、ダミー映像を流している筈だ。基地のオペレーターたちが、レーダー・ディスプレイに映し出される偽りの情報を眺めているとしたら、じきにウラヌスから返信が来る。それ自体が、作戦は順調に推移していることを示す証左と言えた。もし返信が来なかったとしたら、レイス１１かウラヌス、そのどちらかに問題が発生したということになる。その場合は、この基地全域に対地ミサイルによる飽和攻撃が加えられ、基地もろともロバートたちの班も面制圧に巻き込まれ、塵と化すだろう。乾いた口中を、水筒の水で洗い流したい衝動に駆られながらも、ロバートはウラヌスからの返信を待った。
数瞬の後、通信機から返信が帰ってきた。
『ウラヌスよりレイス１２、感度良好。聞こえている』
最初の関門にして、最大の難所を乗り越えたことに安堵しつつ、ロバートは口を開いた。
「星屑は流星に変わった。繰り返す、星屑は流星に変わった」
規定に従い、暗号の符丁を二度繰り返すと、ウラヌスはすぐに返信してきた。
『こちらウラヌス。じきに『流星』が降る。巻き込まれたくなきゃビーコンのスイッチを入れろ』
状況に反して軽い応答を返してくるウラヌス。しかし、それはこちらの疲労と緊張を労わってのものだということを、ロバートはよく理解していた。だからこそ、こちらも軽口で、それに答えた。

「間違っても俺たちに当ててくれるなよ。破片の一つでも飛んで来たら、お前の玉をちょん切ってスピーク湾に放り込んでやるから覚悟しとけ」
『どうやら貴官のコールサインはレイスよりクロノスが相応しいようだ』
互いに乾いた笑いを交換した後、ウラヌスの「通信終わる」の言葉と共に通信は切られた。
程なくして、南東方向を警戒していた部下が声を上げる。
「ホプキンス一曹、来ました」
部下の声に反応し、ロバートが後方を振り返る。緑色の視界の僅かに上方。何もない深緑の空間に、白く塗りつぶされた点が四つ現れる。その点がそれぞれ発する光はみるみるうちに大きくなり、やがて一つの塊になった。光の正体は、接近してくるミサイルに内蔵されたラムジェットエンジンのスラスター光。それを目視してようやっとミサイルの存在に気づいたのか、基地のけたたましい警報がロバートの耳朶を叩いた。さきほどまで闇に紛れていた基地の誘導路がぱっと明かりで照らされ、複数の人影が走り回る。遠目にも、基地の慌ただしさが伝わってくる光景だ。
超音速で低空を飛翔する対地ミサイルは、たった数分でロバート達が五日間かけて進んできた距離を稼ぎ、その頭上を追い越していった。直後、四発の対地ミサイルは、まるで磁石に吸い寄せられるように基地の第２格納庫へと吸い込まれ、連続した爆発を巻き起こす。ミサイルの爆炎と、推進剤の誘爆により引き起こされた爆風は、格納庫の骨組みをひしゃげさせ、屋根を吹き飛ばした。一瞬にして真っ黒い煙と炎に包まれた建造物は、もはや格納庫としての用を為さない。内部に存在したはずのモビルスーツも、原型を留めていないだろうことは目視で確認するまでも無かった。
炎上する第２格納庫の炎は、４００メートル以上離れた茂みに身を隠すロバート達の周囲をぼんやりと照らす程だったが、隣接する三つの格納庫は外壁を除けばほぼ無傷だった。
ロバートは作戦の第３段階の完遂にひとまず安堵しつつ、暗視ゴー

グルをヘルメットの上に跳ね上げる。と同時に、ロバートの周囲に突き刺すような光が降り注いだ。ロバートは反射的に頭上を仰ぐ。サーチライトの鮮烈な光に目を眇めつつ、ロバートはその向こうにある物体を捉えた。

三枚一対の翼と細身の手足。そして、ぼんやりとピンク色の光でこちらを睥睨する単眼。今回の作戦で最も警戒すべき相手。ザフトの空戦用モビルスーツ《ディン》だ。基地に配備されていた《ディン》は、今頃ミサイルの餌食となった第２格納庫の中の筈だ。稼働する機体は無いだろう。だとすると、この機体は事態を把握して戻ってきた哨戒機か。

「走れッ!!」

状況を整理しきる前に、ロバートは叫んだ。周囲を警戒していた部下たちは、ロバートの声とほぼ同時に走りだす。匍匐姿勢だったシモンズも、バネ仕掛けの人形のような機敏な動きで立ち上がると、即座に駆け出した。シモンズのすぐ後ろをロバートは追いかける。後ろは振り向かない。振り向く余裕も無い。背後から迫るエンジン音と、機関砲の砲声がロバートの鼓膜を暴力的に叩く。直後、足元の地面がＨＶＡＰによって抉られ、ロバートの身体は数メートルの距離を吹き飛ばされる。乾燥した草がクッションになった為、身体にさほどのダメージは無かったが、体勢を立て直すのにコンマ数秒を要した。しかし、そのコンマ数秒は、《ディン》がロバートに狙いを定めるには十分すぎる時間だった。

逃げきれない。

退避が不可能と判断したロバートは、次に優先度の高い行動に移った。考えて行動した訳ではない。普段の反復訓練が、ロバートの身体を半ば意思から切り離して動かしていた。メインウェポンとして携行していたアサルトカービンは、先ほどの衝撃で手元を離れてしまった。ならば、とロバートはレッグホルスターの拳銃を引き抜き、自分を狙う《ディン》に照準を定める。

《ディン》のＭＭＩ―Ｍ７Ｓ　７６ｍｍ重突撃機銃の砲口が、ロバートを睨めつける。拳銃の９ｍｍパラベラム弾など、モビルスーツ相手

には豆鉄砲以下の代物でしかない。そんなことは、ロバートも分かっている。しかし、情けなく地面に這いつくばったまま、敵に蹂躙されるなどという、ふざけた現実に甘んじるつもりも無かった。

そんな矮小なプライドに任せて、拳銃の引き金を引こうとした刹那。緑色のぶつ切りの光軸が、目前の《ディン》の背後に降り注いだ。機関砲の曳光弾を想起させるそれは、《ディン》の主翼付け根を引き裂き、右の三枚の主翼を捩ぎ取った。空力と重量バランスが急激に崩れた《ディン》は、バランサーの補正が間に合わず、ぐるりと一回転してロバートの数十メートル後方に墜落した。

『無事か？レイス１２』

出し抜けに、ヘルメットイヤフォンに流れる艶のある女の声。ロバートは、拳銃を仕舞いつつ、先ほどまで《ディン》が占位していた上空を見上げる。

「助かったよ、スコルピウス０１。危うく７６ｍｍにミンチにされるところだった」

ロバートの視線の先には、青白いスラスター光を背に、ゆっくりと降下してくる全長１８メートルの人型。ライトグレーに赤を散りばめたカラーリングのその機体は、右主腕にサブマシンガンを思わせる兵装、左主腕には連合共通規格のシールドを保持している。さらに、右肩部にはリニアキャノン、左肩部にミサイルポッドを備えており、全身に纏った増加装甲も相まって、重装備且つ厳ついイメージをロバートに与えた。連合が《ストライクダガー》に続いて実戦配備を進めている、白兵戦用モビルスーツ――ＧＡＴ―Ｘ０１Ｄ１《デュエルダガー》だ。

『なんなら、おしめも代えてあげましょうか？』

他愛もない冗談を口にしつつ、《デュエルダガー》は墜落した《ディン》から十数メートルの位置にランディング。なんとか機体を立ち上げようともがく《ディン》は、咄嗟に目前の突如降下してきた連合軍機へ右主腕のマシンガンを向ける。《ディン》の交戦の意思を確認した《デュエルダガー》――スコルピウス０１は、右手腕に握るビームサブマシンガン〈スティグマト〉の銃身上部から、ピンク色の光刃

を発振。その重装備に似つかわしくないスピードで、ビームサブマシンガン（ＢＳＧ）を一閃した。掲げられた《ディン》の７６ｍｍ重突撃機銃が、ＢＳＧの銃身に埋め込まれたビームナイフによって溶断される。続いてスコルピウス０１は、《ディン》に反撃の隙を与えず、〈スティグマト〉の光弾をその胸部に三発見舞い、息の根を止めた。

スコルピウス０１の鮮やかな手際に感心しつつ、ロバートは数百メートル離れたザフト軍前哨基地へ視線を投げる。

「せっかくだが遠慮するよ。アンタにはあっちの面倒を見てもらいたいんだ」

ロバートの視線の先、基地に残された格納庫のゲートから、這い出るようにして複数の《ジン》が姿を現す。

『あなた達のおかげで、我が隊の格納庫（ねぐら）も確保できたし、恩は返させてもらうわ。聞こえていたわね？』

『自分も一度は中佐に世話を焼かれてみたいものですなぁ』

スコルピウス０１の問い掛けに、下卑た男の声が応じ、同じカラーリングの《デュエルダガー》が一機、ゆっくりとランディングしてきた。

『相手にしてほしかったら、もう少し真面目に任務に励むことね』

二機の《デュエルダガー》のやり取りに、ヘルメットイヤフォンをまばらな笑いが満たしていく。

ロバートが再び上空を見渡すと、計十個のスラスター光が、サバンナの夜空を明るく照らし出しながら、降下してくるところだ。

『輸送機の長旅で凝り固まった肩を解すには、丁度いい相手ね。大隊各機、続け!!』

スコルピウス０１――――ロベルタ・マルティーニの号令一下、第４３２騎兵大隊に所属する九機の《ストライクダガー》と、三機の《デュエルダガー》は、目前のザフト軍前哨基地へと、スラスターを点火した。

After the mission

ボブの夏休み

極東日本は、四季折々の風情が特徴だ。季節ごとにがらりと顔色を変える気候は長期に滞在する外国人観光客の楽しみの一つと言って良い。春になれば咲く桜の華は日本の象徴だ。あと飯が美味い。夏は汗ばむ気候で、日本特有の夏祭りは賑わいを見せる。あと飯が美味い。秋は旺盛な夏の後と言うこともあって物悲しい気候だが、その物寂しさもまた日本に根付く、古風な味わいの風采であろう。「わびさび」の概念を打ち立てたのは、茶の湯で名高い千利休であるわけだが、その始原は脈絡と続く日本神道と仏教の厳かな交わりにあるのではなかろうか、と思う。あと飯が美味い。冬は冬で寒さ厳しい季節だが、深々と降り積もる冷たい雪の鳴き声もまた趣深いことこの上ない。日本ではないが、エスキモーたちは雪を表現する言葉を１００以上持っているとか。どのようなものにせよ、妙趣というものはあるのだろう。あと、飯が美味い。

――ともあれ、日本の気候というのは素晴らしいものである。特に、ボブ・アブドゥルは夏以外の季節が好きだった。その理由はいたって単純で、暑くないからである。デブにとって、というか世界中の養分の肥えた人間たちにとって、暑い季節というのは地獄以外の何物でもなく、ただ存在しているだけで滝のように身体中から汗が噴き出すという見苦しさには自分自身で不愉快になるほどだ。そして何より、そうして汗まみれになることで余計に女の子が遠ざかることが残念でならなかった。痩せろという指摘は論外である。できぬものはできぬ。

そんなボブにとって、この沖縄という日本の地方は最悪だった。何せ暑い。日本の本州はまだ春で、やや熱気を持ち始めたとはいえ麗らかな天気と穏やかな風に満たされている筈なのに、沖縄はもう摂氏２０度後半を優に超していた。阿呆か。

ぽたぽたと路面に滴が垂れ落ちる。デフォルメされたアニメキャ

ラクターのTシャツは、もう汗で滲んで黒い染みを作っていた。というかもう染みそれ自体である。汗まみれの腕で顔を拭ったボブは、タブレット端末と周囲の市街の建物を見比べながら、とあるビルの前に立ち尽くした。

顔を上げる。恨めしいほどに晴天の空には雲一つも無いだが、もちろんボブの視線はそんな自然の様子にあるわけでもなく、7階ほどの小さなビルの6階に向けられていた。

青い看板に何かのキャラクターがでかでかと描かれたそれこそ、ボブにとって沖縄という地獄に射した一筋の光に他ならない――――のだが。

意気揚々とエレベーターに乗り込もうとして、そうしてエレベーターの看板の工事中の張り紙に絶句し、そうして一瞥した階段の急さにげんなりした。

「ったくよー、もう今日はいいこと無しだ」

所々塗料が剥げた狭い階段をひーこら言いながら登りつつ、2階の踊場で壁に寄りかかったボブがぽつり呟く。観上げた天上は知らない天井だが白いなんてことは無く煤けていた。

Tシャツで顔を拭いつつ、ボブは溜息を吐く。黒人の巨漢の脳裏に過るのは、沖縄国際通りに繰り出す前の友人たちとのやり取りだった。

例1：あ？　いいよ面倒くせぇ。あぁ？　だから彼女じゃねーって言ってんだろ！（腹パンの音）　殴るぞ！（カナダ生まれの旧友　22歳）

例2：アニメぇ？　俺は遠慮しとくよ。そっちは趣味じゃないんでね。（最近できた日本の友人　23歳）

例3：え？　えーとまぁ行ってもいいけど……え？　街に？　あ、ごめんなさいね、ちょっとオペレーターの子たちと街に行くことになっちゃって。ごめんね。（ユーラシアが生んだ清楚系ナイスバディ。　23歳）

例4：なんだそれは？……お前は何を言っているんだ？

いや、何を言っているのかよくわからなかったのだが。そうか、なん

でもないか。（フランスのやさぐれ系クールなイケメンこの野郎　２６歳）

　畢竟、全部断られたのである。なんて薄情な連中なのだろう。（※ミーリャはいい人だったと注釈しておく）

　重力に叛逆し、己の位置エネルギーを高める作業をすること数分。なおのこと汗の量を増やし、膝が軋んだ悲鳴を上げ始めた時に、ボブはようやく目的の階へとたどり着いた。

　広さで言えば、ボブを含めてあと人が一人か二人ほどしか居られないであろう狭い踊場に差し込む電光。修理中の張り紙が無表情に佇むエレベーターの入り口も、この際置いておこう。心を鷹揚に保つことも大事なのである。

「おぉ、これが……」

　両腰に手をついて、感歎の一言。ボブ・アブドゥルの視線の先には、ボブ一人が通れるかほどの入り口を挟んで、只管に漫画だけを陳列した本棚が当然のように存在していた。店頭には最近発売されたばかりと思われるサブカルチャーの――――正確にはアニメのみを取り扱った――――雑誌が積まれ、つい先日発売の新刊の漫画の表紙がずらりとボブを見返す。店の奥を眺めれば同人誌を販売しているコーナーがあり、左の方を向けばレジスターとともに何かしらのアニメのグッズを陳列されている。店は決して広くはない。奥行は６ｍと無いし、通路は人がすれ違うだけで精一杯だ。だが、広さなど全き些末な問題である。広かろうが、狭かろうが、どちらにせよボブにとってこの狭い空間は天国であることに異論を挟む余地は欠片も無い。

　Ｃ．Ｅという新たな世紀を迎えて既に７０年。それでも尚、極東日本の地はアニメオタクにとって聖地である。なるほど確かにアニメ文化は地球を超え、プラントにまで広がりを見せている。だがそれでも、祖なるものに対して尊敬の念を込めた崇拝を持つのは当然だ。かつてのキリスト教が、仏教が、イスラームが開祖を神聖視したのと左程の質的差異は無い……と思う。多分。

　イケてはいないがニューヨーカーでもあるボブにとって、日本のアニメや漫画の商品販売店という存在は遠い存在なのだ。ボブの黒々

とした瞳には、イデアの如き眩しさを放つ商品の形がありありと刻み込まれている。
まぁ、専門的なことはともかくとして、ボブははしゃいでいるのである。デカい図体を揺すぶりながら店に入って店内を見回してみると、流石に日本人客がほとんどだが、今更にボブの姿に驚くといった様子も無いようだった。
知らず、口角が上がる。右を見ても左を見てもサブカルチャーしか目に入らぬこの位相をユートピアと言わずなんと言うのか。惜しむらくは、ボブ独りだけという点である。そりゃ独りだって楽しめる。だが仲間がいてこそ、友人がいてこそ楽しみはより深まる筈ではないか。アリストテレスの言葉を引くのは大仰であろうが、人はポリティカルな動物なのである。
「ウォルトみてーに彼女でも出来りゃいいんだがな。友人でもいいけど」
漫画の背表紙を眺めながら虚しく呟く。溜息交じりに下に目を落とせば、何やら蟹のような髪型の漫画のキャラクターの笑みがボブを見返した。ボブの知らない漫画だった。
……漫然と、ボブがその漫画に手を伸ばして――。
ボブの真っ黒な腕とは別な、浅黒い肌の腕が伸びて、ぐいとその漫画を引っ張った。
「ん？」
顔を上げる。
目が逢った。
ネフライトの瞳はどこまでも透けるようだ。浅黒い肌と対比されるような純銀のロングヘアーに、切れ上がった目尻は勝気というよりどこか気品を感じさせた。
モスグリーンのタンクトップに黒のショートパンツといった出で立ちで、腰に巻いたゴツい白無垢のベルトが目を引く。真黒のサイハイソックスに包まれた足はすらりと長く、にもかかわらず程よい肉質の、黒い嫦娥の匂い立つ妖艶が露出した太股と肩口と腹部と、そうして胸元から覗いていた。

全てを純白に染め上げる純白のイデー、存在の煌めきが全を無化していくようだ。わがままボディ。
――なにはともあれ、おしつけがましい、けしからんおっぱいだ、ということはボブの貧困なボキャブラリーでも理解し得た。なんともポエティッシュである。もちろん22歳と彼女いない歴がイコールの記号で結びつけられてしまいボブにとってそんな女性が眼前に居るだけで視姦――じゃなくて、つい見惚れてしまうのは当然だが、ボブがついその姿をまじまじと見つめたのは、その顔つきと雰囲気が誰かに似ている気がしたからだった。そう、この形は――。
「む、なんだ?」
眼前の褐色肌の女性が眉を微かに顰める。漫画から手を離した女性は、ぱっちりしているがキツそうな目もとを細めた
「何をさっきからそんなにじろじろ見ているんだ?」
あぁ、いや、申し訳ないです。慌てて漫画から手を離して身を縮めた。ずれた漫画が本棚から迫り出したためにそれを直しながら、ボブは変に汗が出始めたのを意識して、愛想笑いを浮かべた。
「他意はないのですが――」全く嘘である。「最近知り合った人に良く似ておられまして。ついその人かと思っただけですよ」
「ふーん?」
怪訝そうな顔つきのまま、腕組みした女性は思案気に腕組みして、その翡翠の瞳でボブを見返した。腕組みで強調されたナニが気になったのは当為である。
「なるほど、私は理解したぞ」
腕組みしたまま、にやりと奇妙な微笑を浮かべる。銀髪の女性は、どこぞの髭の名探偵が緑色の瞳を光らせるがごとくに得意げに微笑と共に瞳を閃かせた。
「君は今、私に古典主義的なナンパのテクネーを行使しわけだな?」
ボブの顔面に勢いよく指を突き出して、満面のどや顔で言い放つ。
「――――……はい?」
「簡単な推理だ。男という生物は綺麗な異性に見惚れるものであろう。君の行動を分析すれば、まず出会ったばかりの私をガン見するこ

とから始まったわけだ。私は美人だからな。見惚れるのも無理はない。まぁそれはいいか、そうして、その言い訳に使ったのが『最近の知り合いに似ていて』というものだな。所謂ナンパの古典的な手法として、まず獲物に話しかける切っ掛けとして用いられた『昔どこかで会ったことあります？』法があるわけだ。君の使った手法はその応用編と言える。どうだ？」

「えぇー……」

「私にナンパしようとはいい心意気だな。普段なら断るところだが、今日は気分が良いし暇だから受けてやろう」

「――――――……はい？」

この目の前の生き物は何を言っているのだろう。ただでさえ思考能力が若干鈍くなっている気がするのに、そう難しいことを言われては何が何だかよくわからない。

自信満々な様子の女性の顔をまじまじと見返した。天井から酷く冷たい人工の光が降っているのに、やけに身体が熱かった。

彼女の言うことをとにかく頭に並べる。

取りあえず、彼女は自分がナンパしたと思っているらしい。もちろんした覚えはないが。というか人生で一度もナンパしたことなど無い。悲しい。

それで勝手にナンパと理解したこの女性は、なんだかよくわからないがそれを快諾していた。まるで意味が解らない。

「なんだ、全然嬉しそうじゃないな。こんな美人が君の誘いを受けると言っているのだぞ？　もっと喜ぶのが筋というものだろう」

呆れたように肩を落とす眼前の女性。

「今日は夜に用事があるんだがそれまで暇なんだ。それまでどう過ごしたものかと思っていたのだが」

「それで、その相手が俺だと」

「そうだが。だって君、その英語の喋り方からしてアメリカの人間だろう？　ここの人間じゃないのか？」

もちろんボブは沖縄に来たのは人生で初めてのニューヨーカーなの。だが、どちにせよこれは好機ではなかろうか。わけがわからない

展開になっているが、単純に考えてこれは人生初の異性との初デートになるのではなかろーか。
ボブは改めて眼前の異性を目にする。
――――――何も異論はない。というかスペック高すぎ問題。
「いや、僕も最近ここに来たばかりなんですけど」
ボブは愛想笑いを絶やさなかった。照れるように後頭部を右手の人差し指と中指と薬指で掻き、爪の間にゴミが溜まるのを感じながら、彼は己の脳内ＦＣＳを起動させ、この戦場に適する最優の武装をなんとかひっぱりだそうとした。そうして、自分の経験のなさに呆れた。
「でもまぁ行きたい場所なんかは結構計画練ってきたんで、良かったら一緒に行きませんか」
「いいな。じゃあ、早速行こうか」
女性がどこか無邪気に破顔する。大人びているだけに、その子どもっぽい笑みがなんとも言えなかった。無論、いい意味で。
「そう言えば名前はなんていうんでしょう。僕はボブ・アブドゥルって言います」
「私か？」
彼女は何か言いかけた後、咳払いした。噎せでもしたのだろう。人間とはよく噎せる生き物である。ほら、向こうのレジでもやはり店員が噎せている。この店に来てよかったと思った。エアコンが涼しい。
「私はジェーンだ。ジェーン・メント。素敵な名前だろう？」
※
「あまりこういう所に来ないんだが」しっかり握りしめた飴色の缶を呑込む。昼下がりの国際通りでは祭りのようなものをやっており、「こう、観光というのはどういうところに行けばいいのだろうか」
「さぁ。俺も縁遠い人間なもんで」
ボブも右手に握った缶ジュースをいつもの習慣で口に運びかけ、口についた瞬間に中身の液体を体内に流し込むのを停止した。缶の口に少しだけ付着した真っ白の液が舌に着き、杏仁豆腐のような薬のような奇怪な味が舌を痺れさせ、思わず身体を震わせた。

おずおずと飴色の――――というかまだ成体になっていないゴキブリみたいな色の缶を視線の高さまで掲げる。白い文字で、でかでかと「ＤＯＣＴＯＲＳＡＬＴ」と描かれていた。
これの何が美味しいのだろう。ボブには全く理解不能だ。
「うーん、流石はＤＯＣＴＯＲＳＡＬＴだ。香りが違う。そうだろ？」
「え？　あ、そうですね」
うんうん感動したように唸りながら、右手の飴色の缶を呑込んでは、左手のコンビーフをむしゃむしゃ食べるジェーン。どう見ても食べ合わせが良いとは思えないのだが。というか、なんで観光に来てコンビニで物を買って食べているのだろうか。国際通りの両側をふと眺めれば、それなりに食事処はあるようにも見受けられるのだが。むしろ、ボブ・アブドゥルという存在様式からして、観光に来たら何か美味しい物を食べるというのが常識なはずである。ほら、ちょうど３００ｍ先には美味しそうなオムライスのお店があるじゃないのさ。
渋々自分の手許を見る。右手にはゴキブリ――――じゃなくて銅色の缶に、左手にはチョコでコーティングされたドーナッツが。
眉毛同士が悩まし気に相談しながらも、ボブは隣を見た。
「これこれ、これだよ。やっぱり私の知っているコンビーフは馬肉入りだ」
ほくほくと笑みを浮かべながら、コンビーフ２つ目を食べ始める彼女の顔は、その暴力的な肉体と鋭い目つきに反して幸せそうだ。目つきは鋭いが。
「まぁ、いっか」
ドーナッツにかぶりつく。コンビニの癖に、結構おいしいではないか。
それにしても、いつまでも通りをぶらぶら歩いているだけというのは如何なものか。そろそろ何か観光らしい観光をだ。
２口目でドーナッツを食い切り、ティッシュで口元を拭きながら周囲を見回す。隣では、ジェーンが指先を舐めてはジュースを飲んでいた。ボブもジュースを口にし、そうして噎せた。

「どうした？」
「いや……」
「そうか？　しかしこの素晴らしい香り、流石は私の見こんだ清涼飲料水だ。のど越しも――――」
滔々と己の愛するジュースの熱弁を振るう姿を、複雑な気分で眺める。やっぱり、ボブにはその良さはさっぱりだった。
「あ！」ジェーンが奇声を挙げる。拍子に、彼女が握っていた缶がぐしゃぐしゃに潰れる。「なぁ、あそこに入ってみないか？」
ジェーンが指さす先を見る。
ゲームセンター。看板ではネオン光がやかましいくらいに光を燈らせていた。明らかに周囲の雰囲気とズレているようにしか見えないが、見ていれば結構人が出入りしている。自分の予定には無かったが、まぁ、リゾームにスケジュールを消化するのも観光の醍醐味だろう。いや、出入りする人の具合を分析すれば、それ以上のことがわかる。まず、案外老人が多いこと。これは関係ないからいい。次に、敢然と独りで突入していく人がぱらぱらいること。これはゲーマーであるため除外する。ちなみに、ボブは普段この第二グループに該当する。大事なのは、三つ目だ。キャッキャウフフしてそうな雰囲気を纏った異性あるいは同性の連れが中に入っていく組み合わせである。
ボブは、戦慄と共に催促するかの如く小首を傾げるジェーンを見た。
勝ち組への光指す道が啓けている。朧な光に照らされながら、確かな軌跡が未来へと続いているはずである。
「行きましょう！」
「あぁ！」
共に不敵な笑みを浮かべる。堅く手を握り合うや、そのままゲームセンターへと向かっていく。途中、手を繋いでいることに気が付いたボブは、子どもみたいな単なる変態みたいな奇怪で愉快な笑みを浮かべていた。未来はやはり明るそうである。
「何？　金を入れればいいのではないのか？」
「まずコインに替えるんですよ」

小さい、赤いバケツのようなものに入った銀色のコインを興味深げに眺めては、ジェーンはコインを手に取って天上のライトに翳してたり、親指で弾いたりしている。エキゾチックな茶褐色の肌、鼻筋の通った聡明な顔立ち、容赦なく生命を懐悩の坩堝に叩き込む女性的なる肉体に反しての、その無邪気そうな仕草がチグハグで、むしろ反則級だ。

ボブは優越の眼差しを周囲に向けた。なるほど、女づれの野郎が居る。背のデカい野郎は大したことが無い。女の子は――――くそう、結構カワイイぞ。あの野郎……。

虚しいことを感じるも、ボブはすぐにドクサを打ち消した。明らかに、あのちんちくりんよりも今ボブの身近に居る方が上位種である。

「ねー、これもう一回やりたいな」

「えっと、良いですよ。飽きるまでやってください。金はありますし」

「やったー」

大男に抱き付くジュニアハイスクールくらいの女の子――――羨ましくなんかない。絶対に。

そう言えば、肝心のジェーンはどこに居るのだろう。既にボブの隣りに彼女の影は無く、きょろきょろと視線を動かしてみる。すぐその姿は見つかった。

何をやっているのだろう。ジェーンのもとに行こうとした時、不意にジェーンが拳を振り上げるや、「Ｄａｍｍ　ｉｔ！」の罵声を挙げながら台を殴りつけた。そうして、赤いバケツみたいな入れ物からコインを取り出しては投入口に叩き込む。「あ〝あ〝あ〝!?」

「ど、どうしました」慌てて駆け寄る最中にも、再び台を痛めつけていた。

「なんてクソッタレなマシーンなんだ」がんがんと台を叩いては涙目を浮かべて、再びコインを投入していた。

クレーンが上の方でゆらゆらと揺れている。そうして、彼女が狙っているであろう戦車のぬいぐるみを掴まんと下に降りていく。クレーンゲームという奴だ。巧妙に操作されたクレーンは、丁度戦車のぬいぐるみの真上から下降し、しっかりと加え込む。ジェーンが嬉々

とした表情とともにガッツポーズを取る――――が、戦車のぬいぐるみが宙に浮き、大きく揺れた拍子にぬいぐるみは元の位置に綺麗に落ちていった。というか、最初の位置より取りづらい位置になっているような……。
「がおー！」
　ぐしゃぐしゃと髪の毛を掻き毟り、一睨みで生物を死滅させられるほどに睨みつける。まぁ、その気持ちはよくわかるなぁ、とジェーンとクレーンゲームを交互に見比べた。コイン入れの中を見れば、もう後3枚しかないではないか。
「あうー……」沈鬱な面持でコイン入れに目を落として、大きく肩を落としていた。入って早々、ゲームセンターに入ったことを後悔し始めているようにすら見えるではないか。
　これでは、彼女が嫌な気分になって終わってしまう。それは断じて否。拒否しなければならないことである。そうして、危機の時にこそその危機を活用して最大のチャンスとしなければならない。
「ジェーン」
「なんだ」ジェーンはむすっとしたまま、翡翠色のジト目で観上げる
　守ったら負けるのである。ここは果敢に攻める時だ。
「ちょっと僕に任せてくださいよ」
「何？　お前はこういうのが得意なのか？」
　にやりと口角を挙げて、サムズアップを見せつける。沈鬱な表情から一転、期待に目を輝かせるジェーンにいい気分になりつつ、自分のコイン入れから一枚コインを投入する。狙いは、二本の棒の上に鎮座するパンツァー一機。？るるに足らない雑魚だ。
　つらつらとクレーンが移動し、ぬいぐるみを掴む。緩慢な動作で持ち上がる最中、クレーンから外れた深緑色のぬいぐるみが地面に接触して大きくバウンドする。
「ダメじゃないか」ぷー、と頬を丸く膨らませて、非難するように腕組みする。
「慌てるのはまだ早い」
「ど、どういうことだ？」

「あれを」中を指さす。目を凝らしたジェーンの顔が、ボブのすぐ隣に依る。良い匂いですありがとうございました。
「……そうか。クレーンゲームは一見単純なゲームに見えて、戦略的なゲームというわけだな？」
「えぇ。敵を一撃で撃沈せずとも良い。波状攻撃でじわじわ追い詰めて、最後に仕留めるんですよ。ほら、隣の人を」
ボブとジェーンの隣では、壮年の厳つい顔をしたスーツ姿の男がクレーンゲームに臨んでいるところだった。ジェーンのやっているタイプと違って、大きいぬいぐるみがあってそれを下に落とすのではなく、小さいぬいぐるみが床に大量に散らばっており、手前のスペースに落とすというものだった。大工の棟梁か軍で部隊指揮でもしているんじゃないかと思う程に厳めしい面持で、男が投入口にコインを入れる。
手前には小さめのぬいぐるみの山。男の戦術予報には寸分の狂いも無い。迅速且つ的確なクレーンのオペレーションでクレーンはその山の中に突入し、黄色い蜂蜜好きなクマのぬいぐるみの群れを一息に持ち上げる。途中、クレーンからぼろぼろと擬音語みたいな名前のクマが零れていくが、最終的に落とし口には3つほどが落ちていった。
今度は奥の方の、やや大きめのぬいぐるみへ。やはり男の操作に迷いはない。素早くクレーンを蜂蜜のツボを抱えたクマの頭上に移動させる。下に降りたクレーンはぬいぐるみではなく、空を掠る。だがそれで終わりではない。クマの頭についた白い紐をつかみ取ると、ぶらぶらと揺れながらもしっかりとクマが飛翔した。
「流石はジャパニーズサラリーマン。卓越した名人芸だ」
「じゃあこっちも速攻で仕留めましょうか」
もう一度、ボブは自分の――――ではなく、ジェーンの獲物をしっかりと眼差した。あと2回――――いや、1回で轟沈させる。判断するより早くコインを突っ込む。人を馬鹿にしたような音を鳴らして、クレーンが頭上を彷徨う。
まず一撃目でタンクにずらしを行った。どうやらアームの力が弱

いようで、一発で紐通しをしても取れそうにはなかった。だが、もう下準備は整った。後は華麗な手腕でアームを紐を通せばいい。ゲーマー：ボブ・アブドゥルにしてみれば児戯に等しい。クレーンを止める。降下ポイントはジャストフィット、後は己の戦術予報が如何にパーフェクトであったかをじっくり観想するまでだ。

「おお！」

クレーンは当然に戦車のマズルブレーキに取り付けられた紐を潜る。ジェーンが無垢そうな笑みを浮かべて透明なプラスチックに張り付いて、その事の行方をきらきらした目で見つめていた。大丈夫だ、問題ない。きっと彼女の渇いた胸の内を癒すことはできる。

クレーンに紐がひっかかり、ゆっくりと抱えるほどもある戦車が上昇していく。だが、そのまま順調にいかないことは十分に承知している。なぜなら、クレーンのアームがぴったりくっついているわけではないからだ。このままでは、紐は隙間から抜けていくだろう。

丁度戦車が宙づりになったところで、輪っかがクレーンのアームからすっぽ抜ける。ジェーンの失望にも似た悲鳴があがるのも今は気にせず、内心のハラハラもやはり気にせず、ボブは口を噤んだまま、大きく弧を描きながら戦車が落下していく姿を血眼で凝視した。

戦車が二本の棒の上で大きくバウンドする。勢いのまま戦車はもう一度小さくバウンドし、後方が棒の支えを失う。尻から墜落していくように、巨大な戦車は下の落下口に落ちていった。

まるで自動販売機で買うみたいに、下の口から戦車のぬいぐるみを取り出す。大柄なボブでようやく抱えて持つくらいにデカい。いや、そんなことよりも、戦車のぬいぐるみというのは何なのだろう。誰に売れるのだこれは。いやまぁ、事実自分の隣に居る人はこれを欲しているわけだけれども。

「はい、取れましたよ」言って、旧時代の見た目の戦車を渡そうとした時だった。

どすん、という鈍い振動が身体の前面を叩いた。

「すごいぞボブ！　本当に嬉しいぞ！」

耳元で、嫌に大きく聞こえる彼女の声。なんだか身体に柔らかい物

体の感触が――――。
――――もう、説明するまでもあるまい。ボブ・アブドゥルは、人生で最も幸福な、穏やかな笑みを浮かべた。死んでもいい。いや、むしろ殺してください。
※
「あの、僕、初めてで……」
「私だって初めてだ。何事も初めての時があるだろう」
「でも……僕恥ずかしいですよ」
「あーもう、いいから！　速く中に」
「――――まさか人生でプリクラに入ることがあるなんて」
※
ゲームセンターから出たのは、結果として5時間後だった。空には夜の帳がかかりはじめ、瑠璃色と茜色が混在する黄昏の時間だ。流石沖縄と言うべきか、夕暮れだというのにまだ肌に熱がまとわりついている。ボブは途中のコンビニで買ったミネラルウォーターのペットボトルを呷った。ジェーンはカツサンドを頬張っていた。脇には、例の戦車が大事そうに抱えられていた。
「よく食べますね」ペットボトルのキャップを締める。ジェーンはカツサンドの一切れを口の中に入れて、もう一つを手に取っているところだった。
「今日は腹がペコちゃんなんだ」
もう一切れのカツサンドをつまみながら、ゴミをコンビニの袋に入れて別なものを取り出していた。こんなことなら、やっぱりしっかりしたところで何か食べるんだったか。というか、ただゲーセンに行くだけって観光か？　微かに疑問を浮かべたが、至極ジェーンは楽しそうだったから、問題はないだろう。
「そうだ」思い出したように呟く。「ちょっと待っていてくれ」カツサンドを丸呑みしたジェーンが、不意に道沿いの店に入っていく。
なんだろう。追うべきなんだろうか。だが待っていろと言っていたし。
やっぱり行った方が良いかなぁ、と腕時計を見始めた頃に、彼女が

店から顔を出した。ずいと紙袋を差し出す。ジェーンから受け取って、中を見れば白い箱が入っていた。
「これ、貰ってしまったからな。受け取ってくれよ」
「そんな、悪いですよ。大したものでもないのに」
「私は、嬉しかったから」腰に手を当てて、ジェーンは少しの頓着も無い少年のような笑みを浮かべた。
「今日は、楽しかったよ」風が吹く。ジェーンが前髪をかき上げた。
「今日一日、お前と一緒で良かった」
はっきりと響きながらも、じっとりと輪郭が熔解していき頭蓋の中で何度も反復される高級和牛のような言葉が肌を撫でていく。
――あ。やばい。ボブはその瞬間、確かに何かが胸の奥で凝るのを感じた。暴力的で、それでも何故か大切にしたくなるような、心地よい疼きの拘束感。
夜の到来、神々の到来を前にした一瞬の陽の煌めき。黄金の風を孕んだジェーンの髪がふわりと夢幻に広がり、彼女のさらさらした甘い匂いが一直線に鼻孔を貫き、身体中の隅々を吹き抜けていく。ボブを見つめるエメラルドグリーンの影は、どこか鬼神のような妖艶を指し示している。顔のない黄金の趣味を惹起させる、匂い香る日本人風の存在と時間の結合点の古代の想念。ニューヨーク育ちのヤンキーの胸の中に震えたのは、荘厳な古典の甘いドキドキのイデアだった。突如遭ったばかりの相手だ。だが、一目見て運命の人だと悟ることも巷には溢れているらしい。この胸のキュンキュンの名前を、自分は知っている。これって。これって。
「ジェーン!」何から言えばいい？　ここでいきなり？　いや、最初は連絡先？
「なんだ？」逆光のせいで、ジェーンの顔はよく見えない。
「あの、僕……いや、俺は!」
「あ」
――俄かに、酷く間延びしたジェーンの呟きが耳朶を打った。
「おーい、ジェーン!」
遠くの方で、やっぱり気の抜けたような、奇妙な男の声がする。戦

慄とともに背後を見れば、酷く目つきの悪い男が手を振っていた。
「よお、待ったか？」
「いや、全然」
ジェーンと気さくに――――ではなくどこかぎこちないが、それでも自然に会話する不健康そうな男が目を合わせる。目つきがとにかく悪い。睨まれている。あまり暴力沙汰が好きでもないボブにしてみれば、その淀んだ一瞥だけで十分震えあがってしまった。
「だれだ？」男が眉間に皺を寄せる。
「今日お前が来るまでの時間一緒に居た奴だ。イイ奴だぞ」
「そ、そうか」動揺したように、安堵したように肯いていた。
「えーっと、その人は？」
「言っていただろう。人と待ち合わせてるって」言いながら、ジェーンは男を指さす。指の先の男は、とんでもなく深い皺を眉間に刻みながら、何故か動揺しているという奇妙な相貌を返していた。
「今日は本当楽しかったよ。じゃあな、ボブ」
踵を返して、ジェーンが通りを進んでいく。待ち人だという男も、一度指すような視線をボブに投げつけた後、慌ててジェーンの背中を負った。
国際通りには人通りが多い。そのやかましいはずの喧騒が、何故か遥か彼方で起きているかのようだ。
「ねー、今度はオムライスたべたいな」
「えぇ、良いですよ。今日は、君のための日だから」
「ほんと？　やたー」
イチャコラしてる野郎と女の声だけはやたらと鼓膜を突き刺していく。
ぽつねんと、騒音に包まれた孤独の中、ボブは右手に握っていた紙袋の存在に気が付いた。赤銅色の外見で、中身はモダンな土色の、小ぶりな紙袋である。紙袋の中には、何故か無ではなく白い箱が存在していた。放心したまま、紙袋の白い箱の蓋を開けてみた。
「鏡？」
手のひらサイズの、小さな四角い鏡だった。蓋を開ければ、この世

界に存在する意味を半分削り取られて、奇妙に歪んだ、肥満の黒人の、冴えない面が映っている――――。
「――――うわあああぁぁぁぁぁあん!!」
野太い悲鳴が、逢魔に浸された妙趣の空に破裂した。
※
「なぁ、本当になんでもないのか？」
「いい加減しつこい。ボブは単に知り合った男で、時間を潰すのに付き合ってくれていた優しい紳士だ。予定の時間に遅れてくるような、どっかの誰かとは大違いのな」
左手につけた腕時計の時計盤をありありと見せつける。目もとにくまが出来ている細身の男は、委縮したように身を縮めてはぶつぶつと独り言を言っていた。「あんなデカくて恐そうな奴が……」
ジェーンはそんな湿っぽい話には一切耳を傾けず、いや、存在していることすら認知せずに、一人で大きく伸びをした。沖縄は気温が高いとは言うが、流石にお腹が寒い。晩御飯は、温かい汁ものの料理でも胃に入れたいところだ。きょろきょろと通りを見回すと、丁度ラーメン屋のおどろおどろしい英語の看板が目に入る。ソーキそばなんていいかもしれない。
「お腹が空いたのだが、あの店に行かないか」ジェーンが指で示す。念仏を唱えるみたいにぶつくさ言っていた男が慌てたように身体を震わせて顔を上げた。
「えー。麺類？」
「問題か？」
「いや、なんでもない。じゃあ、行くか」
くたびれた様子で、カットソーのポケットに手を入れて歩き出す疲労気味の男。ジェーンを名乗る女は、釣り目気味の目つきを穏やかに緩ませる。
「言っておくが、お前の奢りだからな。Ｓｈｏｗ　ｍｕｓｔ　ｇｏｏｎ！」
「えぇ……」
気の抜けたような悲鳴は、麗らかな雑踏に呑まれて、掻き消えて

いった。